トライアングル・スクランブル

楽生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
トライアングル・スクランブル

【Ｎコード】
Ｎ４８８３Ｘ

【作者名】
楽生

【あらすじ】
高校一年の少女と、向かいの家に住む少々強引な幼馴染。
この二人の様子を中心に、様々な人間関係と恋愛が交錯してゆく青春群像系物語

人物紹介

◇倉沢　桃乃◇
カノンに通う高校一年生。
性格は幼い頃引っ込み思案だったせいか、今もどちらかというとおとなしめ。
向かいに住む冬馬とは幼稚園時代からの幼馴染。黒髪と大きな黒い瞳の少女。

◆西脇　冬馬◆
カノンに通う高校一年生。
性格はどちらかというと単純で熱血系。運動神経に非常に優れており、
バスケが得意。身長１７８センチ。スッキリとした顔立ちの少年。

―――――――――――――――――――――――――――――――

≪カノンの生徒≫

◇南　沙羅◇
桃乃のクラスメイト。
父が日本人で母がイギリス人のハーフ。性格は落ち込むことを知らない元気少女。

◆柴門　要◆

冬馬のクラスメイト。
表面上はクールを装っているが実は寂しがり屋な性格。少々ナルシストな面もある。

◇笹目　梨絵◇
桃乃のクラスメイト。
なぜか入学してから一度も体育に出席せず、その為に学審会にかけられそうになる。

≪カノンの教師≫

◇柳川　緑◇
カノンで一年英語を担当するグラマラスな女教師で冬馬や要のクラス担任。

◆矢貫　誠吾◆
カノンで一年体育を担当する教師。桃乃や沙羅のクラス担任。

◆黒岩　秀樹◆
カノン慈愛学園理事長。規則第一主義者。

≪家族・その他≫

◆西脇　裕人◆

冬馬と5歳違いの兄で大学生。

長身に甘いマスク、人当たりの良さで幅広い層の女性達に好かれる。

弟思いな所があり、冬馬の恋が成就するように立ち回ることがある。

◇倉沢　葉月◇

桃乃の4歳下の妹で現在小学6年生。

ませているため恋愛関係の空気を読むのが早い。向かいに住む裕人が大好きで

夢は裕人のお嫁さんになること。

◆倉沢　雅治◆

桃乃の父親。娘二人の父親のせいか少々心配性。

◇倉沢　千鶴◇

桃乃の母親。おっとりとした優しい性格。

◆西脇　啓一郎◆

冬馬の父親。真面目で堅物。

◇西脇　麻知子◇

冬馬の母親。ボーイッシュ&アクティブな性格。

◆加賀美　孝太郎◆

裕人と同じ大学仲間で無二の悪友。

大学内にとどまらずプライベートでもよく行動を共にしている。

◇安部　桜子◇

衍人と同じ大学で一つ年下。性格はかなりきつめで超強気。社交的な性格なので交友関係はかなり広い。

◇楠木　真里菜◇

衍人と同じ大学で一つ年下。性格は行儀が良く、深窓のお嬢様タイプ。

中高一貫で女子校だったため男性に対して少々身構えてしまうところがある。

※この作品は自サイトにも掲載中です

プロローグ

緑に囲まれた小高い丘の一角に建つ『カノン慈愛学園』。

その丘の下に小さな港を一望できる抜群のロケーションと、まるでヨーロッパの建物のようなモダンな外観で人気の私立高校だ。学生には「カノン」という通り名で親しまれている。

カノンの意味は『規範』。

この高校はその学園名がすべての特徴を物語っており、校則がかなり厳しいことで有名な高校だ。

共学高校ではあるが、クラスは男子と女子に完全に分けられており、尚且つ校舎も広い敷地内に大きく離されてそれぞれ建てられている。

しかもグラウンドまでも男子専用グラウンドと女子専用グラウンドが用意されていて、同じ学園内にいても昼食時以外はお互い異性の姿を見かけることはほとんどなかった。

クラスは男女共に一学年六クラス、各クラス二十名足らずの小人数制。

それに加え、徹底しているこの学園の規律の厳しさが、我が子の学力向上と異性関係を心配する父兄達の絶大なる支持を集め続けている大きな要因の一つでもあった。

この学園は慈愛、博愛をモットーとするスクールカラーが売りの一つでもある。

そのため、入学前の個人審査で本人や親がボランティア活動などを行っているかを学園側は必ず問う。

だがそれまで特にそれらの活動に携わる経験が無かったとしても、学力と素行、それに家庭環境に特に大きな問題が無ければ学園への入学は許可されることが多い。

――が、是が非でも我が子をカノンへ入れたいと真剣に願う親の中には面接前に熱心にボランティア活動に従事し、その活動の詳細を面接で得々と語る者まで現れるらしい。

この学園が保護者にとって魅力の高い高校だということがそこからも容易に伺うことができた。

昨日は新入生の親も来校しての入学式が厳粛に執り行われ、新入生にとっては今日が初めての登校日だ。桜の蕾が少しずつ芽吹き始めるこの季節、丘の上に建つ白亜の高校に向かって歩く少女が一人。

少女の名は倉沢桃乃（くらさわももの）。

肩を少し越したセミロングの濡れるような黒髪と、同じように大きな黒い瞳が特徴の、細身で比較的おとなしい性格の少女だ。

学力は現時点では中の上。

上位ベストランクには入っていないが下位ランクで目立つこともない、ごく普通の学力だ。

しかしそれはあくまでカノンの中のランクであって、カノンの偏差値は他の近隣の私立高校よりも高水準のため、桃乃の学力は決して低いものでは無かった。

憧れのカノンの制服を身に着けられた嬉しさで、桃乃はウキウキしながら歩いていた。長い黒髪がその度に大きく揺れる。

カノン女子の制服は有名なデザイナーブランドの一つで、群青色のジャケットにネクタイ、そして膝上十センチのブラウンチェックタイプのスクールスカートだ。

男子も上のジャケットとネクタイは女子と同じ物で、ボトムは濃いグレーで一番細いスケータータイプ。靴は男女とも黒のローファーだ。

ここの制服で特に桃乃の一番のお気に入りは、今自分の胸元で鈍く光っている青いネクタイだ。

深い海のような鮮やかな色のジャケットの胸元を引き締めるネクタイは、ブルーにほんの少しの光沢が入っていて太陽光の当たる角度によって鈍く輝く。

「あ、あの子カノンの生徒よ」

今朝の電車内に差し込む光でそのネクタイがわずかに光り、それに気付いた他高の生徒がヒソヒソと後ろで噂していたのがたまらなく快感だった。

嬉しさのあまり今にもスキップしそうな歩き方をしていた桃乃の小さな頭に、突然、ポンッと大きな何かが乗せられる。

「きゃっ！？」

頭頂部に感じるゴツゴツした感触。誰かの大きな掌のようだ。

驚いた桃乃は身を翻して後ろを振り返る。

「……なぁ桃太郎、お前なに朝からそんなに浮かれているワケ？」

長身で肩幅のある男子が、うっすらと両目にかかる長い前髪を空いている片手で邪魔そうにかきあげ、桃乃を見下ろしている。

桃乃は一瞬息を呑んだ後、その少年に向かって怒りをぶつけた。

「とっ冬馬……！　もう、いきなりなにするのよ！　ビックリしたじゃない！」

桃乃に「冬馬」と呼ばれた少年、西脇冬馬（にしわきとうま）は桃乃の頭を軽く叩いた大きな右手を広げながらへへッと屈託の無い笑顔を見せた。

「だってよ、お前今にも踊り出しそうな歩き方してたぜ？　公衆の面前で恥かかないように俺が止めてやったんじゃねぇか。感謝してほしいね」

「か、感謝……？」

いきなり驚かせて謝るどころか感謝しろ、と言い出す冬馬に桃乃は唖然とする。

「なぁそれよりよ、なんでお前今朝さっさと一人で行っちまうんだよ？　一緒に行こうと思って朝お前んちに寄ったんだぜ？」

「なっなんで私が冬馬と一緒に登校しなきゃいけないのよ？」

「なんでって……同じガッコじゃねぇか。家だって真ん前だしよ」

桃乃の家と冬馬の家は昔からお向かい同士のご近所さんで二人は幼馴染の間柄だ。

「あっ、わーかったっ！　俺、分かっちゃったよ！」

身長百七十八センチの冬馬は急に相好を崩すと、すかさず長身を折り曲げて二十センチ下にいる桃乃の顔をグイッと覗き込む。

その拍子に冬馬の前髪が自分の前髪に微かに触れ、反射的に桃乃は半歩身を引いた。

「お前さー、嬉しさのあまり恥ずかしいんだろ？　この俺と歩くのがさ」

「バッ、バッカじゃないの！？」

桃乃はそう言い放つとプイと顔を背け、さっさと先に歩き出した。

普段はおとなしい桃乃だが、幼馴染の冬馬の前では最近よくこんな態度になってしまう。

後方から冬馬の大声が響く。

「おーい桃太郎〜。図星だからってそんなにむくれるなよ〜！」

桃乃はなんとかこの幼馴染を振り切ろうと足を早めた。

が、今の二人の歩幅は約倍ほども違うので、すぐにあっさりと追いついてきた冬馬は桃乃の横に並ぶとさりげなく自分のペースを落す。

しかし歩幅を合わせてもらっていることに気付いていない桃乃は、右斜め上の冬馬の顔を見上げて一旦足を止め、再び強い口調で切り出す。

「冬馬っ、いいかげんに私のこと桃太郎って呼ぶのは止めて！」

「は？　だって桃太郎じゃん？」

「だから止めてってば！」

――　幼い時は桃乃のことを「ももちゃん」と呼んでいた冬馬だが、成長するにつれて小学校高学年になってからは「桃乃」、そして中学二年以降はなぜか「桃太郎」と呼ぶようになっていたのだ。

「ま、そんな細かいことにイチイチこだわるなって。どーせどっちも大して変わんねぇじゃん？」

冬馬は桃乃から視線を外し、前方を見たままでハハハッと快活な笑い声を上げた。

そんな冬馬を横目にまた歩き出した桃乃は、（昔はこんな奴じゃなかったのに……）とイライラしてくる気持ちを心の中だけでなんとか抑えることに腐心する。

幼い頃は桃乃より背が低く、「モモちゃん、大きくなったらボクのお嫁さんになってよね」なんて可愛らしいことを言っていた冬馬だったのに、気が付けばいつのまにか背もこんなに大きく追い抜かれて桃乃はさっきみたいに「桃太郎」と呼ばれ、いつもからかわれ

るようになってしまっていたのだ。

カノンに近づくにつれ通学する生徒の数も少しずつ増え出し、桃乃はできるだけ冬馬と並ばないように歩こうと必死に努力を続けた。

だが元凶の冬馬が「なぁなぁ桃太郎。この間のさ……」などとあれこれと話し掛けてくるため、結局その努力はすべて無駄に終わってしまっていた。

よって今の桃乃に残されたせめてもの抵抗は、冬馬の呼びかけに一切返事をせず、二度と右側に顔を向けないで競歩のようなスピードでスタスタと歩くことだけだった。

ようやくカノンの正門が見えてくる。門柱横に一人の若い女性が立っていた。

グラマラスな体を黒いスーツで包んだ魅惑的な容姿のその女性は、桃乃達の方にゆっくりと視線を向ける。

「おはよう」

年は二十代半ば辺りだろうか。女性の発した声はよく通るソプラノ声だ。

「お、おはようございます」

「おはよっす」

初めて会う女性だったが、たぶんこのカノンの教師なのだろう。

その女性は開いていた名簿を一度閉じ、意味ありげに呟く。

「へぇ……新入生が初日からカップルで登校するの、久しぶりに見たわ」

毛先を柔らかくカールさせたロングヘアに唇に綺麗にひかれたパールピンクのリップが艶かしい。

「わっ、私たちそんな関係じゃありませんっ！」

桃乃は赤くなって慌てて否定をした。一方、冬馬は否定も肯定もせず、黙って突っ立っている。
「あなた達新入生ね？　名前教えてもらえるかしら？」
「は、はい。倉沢桃乃です」
「……西脇冬馬ッス」
「倉沢さんに西脇くんね……」

その女性は右手に持っていた「新入生名簿」と書かれた名簿を再び開き、パラパラとページをめくって中に二人の名前が記載されていることを確認する。

「ね、どっちでもいいけど仲良く登校はここまでよ。ウチは男女交際の規律が厳しいの知ってるわよね？　この先、女の子は左、男の子は右の校舎に行ってね」
グロスのせいで濡れたような唇の女性はそう言うとそれぞれ進む方向を指差す。
「分かりました」
桃乃はそう返事をすると冬馬の方を一切見ないまま左の校舎の方へ歩いて行く。
正門前でまだその桃乃の後ろ姿を見送っていた冬馬に女性がフフッと笑いかけた。
「ねぇねぇ君、もしかして振られちゃったの？」
感情がすぐ表情に出る性格の冬馬は途端にムッとした表情を浮かべる。
「……そんなんじゃないッスよ」
そして不機嫌な顔のまま、サッと身を翻すと右側の校舎に走り去っていった。

カノンで英語の教科を担当する女性教師、柳川緑（やなかわみどり）は好奇心の混じ

った目で冬馬の後姿をしばらく目で追った。そして唇の右端を小さく上げて笑うと、新入生名簿を再び開く。

白く細い指が名簿の上をなめらかに滑りはじめた。

やがてその指は静かにその動きを止めたが、その指がさした先は冬馬の履歴表が載っているページだった。

プロローグ　―　2　―

（まったく冬馬ったら……！）

カノン登校初日の浮かれた気分も、あの憎たらしい幼馴染のせいで一気に台無しになってしまった。

イライラした気分を抱えたまま左側の白い校舎に入る。

玄関を抜けたすぐの場所に大きなホワイトボードが設置してあるのが見えた。

ボードに大きな紙が貼られてある。

その前でキャーキャーと騒ぐ女子生徒達の大群。

どうやらクラス分けの名簿が貼られているらしい。

目の前で揺れ動き続ける大勢の人の波は一向に静まる気配が無く、身長百五十八センチの桃乃はなかなかその名簿を見ることが出来なかった。

「Ｗａｏ　！　すっごい人だかりね！」

頭頂部上空から大きな声が振ってきた。

桃乃がその声の方向をチラッと見上げると、ツインテールの亜麻色の髪がまず最初に目に飛び込んできた。

背が高く、少し青みがかった瞳に抜けるような白い肌、そして微かなそばかす顔の少女は振り返った桃乃と目があうとにこやかに笑いかけてくる。

「Ｈｉ！　あなたのクラスは？」

いきなり話し掛けてきたその人懐っこそうな少女は桃乃に向かってウィンクをする。
「えっ、まだ分からないの。……よく見えなくて」
「じゃ、あたしが見てあげる！　あなた名前は？」
「倉沢桃乃だけど……」
「ＯＫ！　ちょっと待っててね！」
桃乃より頭一つ分以上は優にあるその高身長を活かし、ツインテールの少女はボードを上から順に丁寧に目で追っていった。やがて少女の口から感嘆の声が上がる。
「モモ！　あなた二組よ。あたしと一緒！」
いきなり自分の名前を略称で呼ばれて桃乃は少々戸惑ったが、同時にこの底抜けに明るそうな少女にぐいぐいと惹かれだしていた。
「ねっ、一緒に教室に行こうよ！」
少女が桃乃を誘う。桃乃は慌てて頷いた。
ボード前の喧騒から逃れると二人は並んで歩き出す。
桃乃が訊くよりも早く、その少女は自己紹介をした。
「あたし南沙羅（みなみさら）。沙羅って呼んでね！　桃乃ってちょっと呼びづらいからモモって呼んでいい？」
「うん、いいよ。ね、沙羅さん、あなたって……」
「あ！」
そう叫ぶと急に沙羅は顔の前で大きく右手を何度も横に振り、桃乃の言葉を遮る。
「モモ！　だから“　さん　”　はいらないってば！」
大振りのジャスチャーであまりにもキッパリと言われたので、桃乃は訊きたかった事を言う前にあらためて沙羅の名前をもう一度呼び直した。
「さ、沙羅」
「なに？」
「あのね、あなたって、ハーフなの？」

一瞬の沈黙。

それまでニコニコしていた沙羅の表情が固まったように見えたので桃乃は慌てて謝った。

「ご、ごめんね。もしかして訊いちゃいけなかったかな……？」

「ううん、ぜーんぜん！」

沙羅は再び大きく笑顔を見せる。

「うん、ハーフだよっ。パパは日本人でママはイギリス人なんだ」

「やっぱり。あなた色がとっても白いものね」

桃乃も幼い頃から色白な方だったが、肌の白さでは沙羅の方が明らかに上だった。

「でもさーモモ、その白さのせいでホラ見て！」

と沙羅は自分の頬を指差す。

「こんな風にそばかすが目立っちゃうのよ。結構困ってるのよね～」

大袈裟に肩を竦めると沙羅は大きくため息をついた。

そのいかにも外国人的なオーバーリアクションがおかしくてつい桃乃はクスクスと笑ってしまった。

「モモ～、ここは笑うところじゃないよ？　女の子の美容の悩み話なのに～！」

そう言いながら沙羅は腕組みをすると頬を小さく膨らませ、わざと膨れた真似をする。

「ご、ごめんなさい。沙羅のその身振りがちょっとおかしかったの」

「あーなるほどね！　うちのママが普段から大振りのジェスチャーをよくするからついうつっちゃうの！」

膨れっ面を止めた沙羅は、組んでいた両腕を外して背中に回して快活に笑う。

登校当日にこんなに明るくて楽しい女の子と友達になれてなんて嬉しいな、と思いながら桃乃は沙羅と一緒に一年二組の教室に入る。

ついさっきまであんなにイライラしていた気持ちはすでに遠くに吹き飛んで桃乃の脳裏から完璧に消え去っていた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇
◆◇◆◇◆

一方その頃、冬馬も自分が四組だということを確かめて教室に入った所だった。
教室内に一歩入ると男・男・男の光景。
例え教室内の壁は真っ白でも中学の時とはまったく違うこの男臭い空気までは変える事が出来ない。
一切の華が無いそのあまりのむさくるしさに冬馬はため息をついた。

「そこを行くのは『シラトの星』じゃないか？」

冬馬の背後からややからかい気味の声がかかる。「シラト」とは冬馬や桃乃が通っていた白杜（しらと）中学のことだ。
かかった声の方角に冬馬が目をやると、長髪ぎみでかなり細身の男が両足を机の上に上げてニヤニヤとこちらを見ていた。
「やっぱりシラトの星だ。西脇冬馬だろ？」
「……誰だお前」
腕組みをしながら薄ら笑いを浮かべて自分を見ている、この端正な顔のヤサ男が気に入らなくて冬馬はぶっきらぼうな返事をした。
「おいおい、出会い頭にそんなに睨むなよ。俺は柴門要（さいもんかなめ）。七海（ななみ）中だ」

「七海……」
七海中学は冬馬が白杜中学で所属していたバスケ部でよく対抗試合をしていた中学だ。
「白杜のバスケ部がこっちに来て練習試合をしてた時、よく見に行ってたんだ。お前、ここでもまたバスケやるのかよ？」
「あ？　別にお前には関係ないだろ」
「冷たいねぇ。これからは同じクラスメイトだぜ？　仲良くやろうや」
切れ長の目にかかり気味な前髪を掻きあげると要は挑戦的な眼で冬馬を見据え、もう一度ニヤッと笑う。
その時、廊下の奥から甲高い靴音が響いてきた。
靴音は四組の前でピタリと止まり、同時に教室の扉がガラッと開く。
そして再びハイヒールの音を高らかに響かせて一年四組の教室内に一人の女性が入ってきた。
教室内に入ってきたその女性が、今朝方、正門前に立っていた教師だったことに冬馬は気付く。
むさくるしいこの男ばかりの教室にいきなり匂い立つような色香をふりまく女性が入ってきたので教室内は一時騒然となった。
そんな男子生徒達のざわめく様子を肌で感じた緑は満足そうに微笑みながらカツカツと足音高く教壇に立つ。
「じゃあ皆とりあえず適当に座ってね。後で改めて席を決めるから」
そして緑は後ろの黒板に一旦体を向けると赤いチョークで「柳川緑」と書いた。
「ハイ、これが私の名前。柳川緑です。今日から私が君達の担任です。じゃあ一年間よろしくね」
緑がそう発言し終わった瞬間、教室の後ろの方から教壇に向かって声がかかる。

「先生は彼氏いるんですか？」

発言をしたのは要だ。

「彼氏？　今はいないわよ。一応募集中って所かしらね」

緑はあっさりとそう答え、そのノリのいい発言に即座に教室中が湧きかえる。

「先生ー！　俺と付き合ってー！」

「先生ー、美人ッ！」

「ミドリ、愛してる～！」

一年四組の男子生徒達はたちまち悪ふざけをはじめた。

「ちょっとちょっとー！」

リップと同じパールピンクの長いネイルがピンと立ち上がる。

「私、これでも結構面食いなんだからね。先生にも選ぶ権利あるわよ？」

「じゃ、俺はどうですか、先生？」

また要が口を開く。

「……そうね……」

と緑は呟き、一番後ろの席にでんと座っている要の前にまでゆっくりと歩いてきた。

黒のタイトミニからすらりと伸びる白い脚の動きに教室内の熱い視線が一斉に注がれる。

緑は要の横にまで来ると細い腰に手を当てて、その顔を上から遠慮無く眺めた。

「……ウン、悪くないかも。君、なかなかいい男じゃない」

「そりゃあどうも」

要は自分の容姿を誉められても眉ひとつ動かさずに礼を言った。

自分の容姿には相当の自信を持っているようだ。

「でもね……」

と言いながら緑は腰の手を離し、机の上に乗せたままの要の両足をグイと掴みあげると自分の手前に引き寄せ、勢いよく放した。

「!?」
ダンッと大きな音と共に要の両足が床に着き、要の顔に一瞬驚きの色が走る。
「いい男はマナーもキチンとしてないとね。残念だけどあなたはまだ二流みたいね」
要が自分をからかっていることにとっくに気付いていた緑はそう切り返す。「二流」と言われた要の顔が一瞬険しくなった。
緑はそんな顔の要を見下ろすとフフッと満足そうに小さく笑い、そして教壇に戻りがてら、冬馬の横に来ると足を止めて急に身をかがめる。

「ね、君もなかなかイイ線いってるわよ?」

いきなり耳横で話し掛けられた冬馬は驚いて椅子の上で身を引いた。緑は冬馬にしか聞こえないぐらいの声で更に囁く。
「……彼女から私に乗りかえる、なんてどうかしら?」
「ハァ!?」
たじろぐ冬馬に緑はフフッと微笑み、教壇へと戻る。再び教壇に立った緑はもう完全に教師の顔に戻っていた。
「ハイ、じゃあまず出席を取ります。その後、クラス委員を決めますからね。私は愚図愚図するのが嫌いなの。さっさとやっちゃいましょう。じゃあ、安藤卓くん……」
緑の点呼の声が一年四組の教室内に響く。冬馬は今しがた耳横で緑から言われた台詞にまだ動揺していた。

(なんなんだ　あの先生は!?)

腕組みをした要が氷のような冷たい目つきで前方を見ている。
その視線の先は冬馬の背中だった。
だが自分の背中に要の冷たい視線が突き刺さっていることをこの

時の冬馬はまだ知らなかった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

その後、最初のホームルームを無事終えた緑はいつも通りヒールの音を高らかに鳴らしながら職員室へと戻る。

入学式後最初のホームルームなので戻ってきている教師はまだ一人しかいなかった。

緑は職員室に一番に戻ってきていたその教師とは視線を合わさないようにして自分の席につく。

すると緑の左隣の席のその教師が待ちかねていたように声をかけてきた。

「お疲れ様です！　柳川先生のお戻り、俺にはすぐ分かりますよ！　ところでどうでしたか、今年の先生のクラスの新入生達は？」

隣席の一年体育担当の矢貫誠吾（やぬきせいご）は、今から二年前にこのカノンに赴任してきた教師だ。

鋭い目つきのその精悍なマスクとは反対に、あけっぴろげで気さくな性格で女生徒を中心に数多くの生徒に慕われている。

緑は左側をチラッと一瞥するとすぐに視線を手元に戻す。

「そりゃあ私の足音はうるさいですからね。矢貫先生じゃなくても誰でも分かりますわ」

「おっ、なんだか今日はご機嫌斜めのようですね？　ホームルーム

で何かあったんですか？」
　誠吾は団扇で自分に風を送りながら身を乗り出してくる。暦はまだ四月になったばかりだが、普段から暑がりの誠吾に団扇は必需品なのだ。
「あの矢貫先生、団扇をお使いになるのは結構ですけどこちらにまでばさばさと風を送らないでいただけます？」
「おお～っ、どうやら今日の緑姫は本格的にご機嫌が悪いようですね」
「……いつも言ってますわよね。そのふざけた呼び方止めていただけません？」
「はいっ、それはそれは失礼つかまつりました！」
　誠吾は顔の横でビシッと敬礼をすると、椅子に座ったまま芝居がかった口調で大仰に頭を下げる。
　これ以上相手にする気も無くなった緑は誠吾を無視して携帯用の眼鏡をかけると、さっさと次の授業の準備に入りはじめた。
　あっさりとつれない態度をとられ、まだ緑と会話をしたかった誠吾は仕方なく緑の姓を呼ぶ。
「あの～柳川先生、今年の先生の坊主クラスはどうですか？　先生をてこずらせそうな悪ガキはいますか？」
　緑の脳裏につい先ほど涼しそうな顔で自分をからかった柴門要の顔が一番に浮かぶ。
「さぁ、まだ分かりませんわ」
「反抗しそうな奴がいたら遠慮せずに俺に言って下さい！　姫をてこずらせそうな奴は俺がビシッとシメときますから！」
　また誠吾が自分のことを「姫」と呼んだので緑は手を止め、眼鏡越しにジロッと誠吾の顔を見た。
　緑に睨まれてまたうっかり「姫」と呼んでしまったことに気付き、誠吾は頭を掻く。
「す、すみません柳川先生……」
　そう謝った後、誠吾は嬉しそうな口調に戻って話を続ける。

「俺の担当クラスはお嬢の一年二組なんですけどね、皆可愛いくていい子達ばっかりですよ！」

誠吾の言う「お嬢」とは“　女子校舎　”と言う意味で、職員間での隠語のようなものだ。緑は抑揚の無い声ですかさず今の誠吾の言葉に応じる。

「良かったですわね。矢貫先生は幼くて可愛らしい子が特にお好きですものね」

「せ、先生！　ちょっと待って下さいよ！」

途端に誠吾が目をむいて反論する。

「その言い方はちょっとないんじゃないですか！？　まるで俺がロリコンみたいに聞こえますよ！？」

「あらそうでしたの？　私てっきりそうだと思っていましたけど」

団扇の動きがピタリと止まる。容赦の無い緑の言葉に誠吾が一瞬たじろいだのだ。

「……ひっ、ひどいな先生は！　あんまりですよ！　俺、今年の夏で二十七になるんですよ？　一回りも年の離れた女の子達にそんな感情持てないですよ！」

「あらそうですか。それは失礼しました」

緑は表情を変えずに冷たい声でそう答えるとまた授業の準備を始めた。

誠吾は納得のいかない顔で緑の横顔を見ていたが、やがて渋々自分の机に向き直った。

二人の間に沈黙が訪れる。

しばらくの間エアコンの作動する微かな音だけが職員室内を占領したが、誠吾は急にまた緑の方に向き直ると憤りを含んだ大声を出した。

「だっ大体ですねッ！！」

「キャッ！？」

いきなり誠吾が大声を出したので緑は驚いて持っていたボールペンを床に落としてしまった。
ボールペンは一度床で大きく跳ねた後、二人の後ろの方に転がっていく。
緑が驚いた様子を見た誠吾は憤りを腹の底に押し込んで声の音量を下げた。

「……大体、教師と生徒の恋愛はここの一番の禁止事項じゃないですかっ……！」

ありとあらゆる細かい規則があるカノンでは「職員と生徒の恋愛」は当然の如くタブー中のタブーだった。
誠吾は椅子からゆっくりと立ち上ると後ろに転がったボールペンを拾い、それをスッと差し出しながらじっと緑を見つめた。
何かを言いたそうな誠吾の様子に気付かないフリをした緑は、ボールペンを受け取ると「済みません」とだけ礼を言い、静かにまた机に向かう。
そんな緑の態度に誠吾はあらためて念を押すように言った。
「柳川先生、先生だってもちろん分かってらっしゃいますよね……！？」

しかしそれに対する返事は無く、ただサラサラと緑がボールペンを走らせる乾いた音だけが二人きりの職員室内に静かに流れ続けていた。

プロローグ　―　3　―

カノンの登校初日が無事に終了した。

「ね、モモ、途中まで一緒に帰ろうよ！」

スクールバッグを片手に沙羅が桃乃を誘う。今日半日で沙羅とだいぶ打ち解けることのできた桃乃は「うん！」と軽やかに返事をした。

「モモの家って何人家族なの？」

「うちは四人家族よ」

一緒に下校しながら二人はお互いの事や家庭の事などを色々と教えあう。

桃乃の家庭は父親と母親、そして四つ下の妹がいる四人家族だ。父親の倉沢雅治（くらさわまさはる）は出版社に勤務する編集者で、母親の千鶴（ちづる）は専業主婦。妹の葉月（はづき）は来年中学生になる。

沙羅の父親の南聡志（みなみさとし）は航海士で一年のほとんどが海の上であまり会えないため、今は母親のエリザと二人暮しなのだと沙羅は語った。

「あーあ、いいなぁ姉妹って。あたしもお姉ちゃんか妹欲しかった～」

一人っ子の沙羅は姉妹のいる桃乃のことをとても羨ましがる素振りを見せる。

「でもいたら口ゲンカばっかりになるかも。最近妹すごく生意気になっちゃって」

「だけどやっぱり羨ましいよ。ホラ、“　Ｂｌｏｏｄ　ｉｓ　ｔｈ

ｉｃｋｅｒ　ｔｈａｎ　ｗａｔｅｒ”　って言うでしょ？」
「んっと、血は水よりも濃いってことね」
「そうそう」
「沙羅、中学で英語のテストなんかいつも満点だったでしょ？」
「うん、まぁね。でも単純なスペルミスは今でもしょっちゅうだよ。話すのはいいんだけど書くのは苦手なんだよね～」
「いいなぁ、私あんまり英語得意じゃないの。でも物理よりはたぶんマシだと思うけど……」
「あっ、あたしも物理は大嫌い！　だってこの間教科書見て眩暈がしたもん！　だからきっとこの先、物理の試験前夜は徹夜で公式暗記することになりそうだよ」
「あっ、沙羅も？」
「うん！　でもあたし、一夜漬けには結構自信があるからノープロブレム！」
楽しそうに笑い会う二人の姿は今日初めて知り合ったばかりとはとても思えない。

木立の通学路を抜けると駅はすぐだ。

「モモの家はどっちの方？」
カノンがある谷内崎（やちざき）駅から東へ行くルートは呉内（くれない）で、西は中和泉（なかいずみ）になる。
「私は呉内」
「なーんだ反対かぁー。あたしは中和泉なんだ。じゃあここまでだね。また明日ね！」
沙羅は右手を振りながら明るい声を出す。
「ねぇモモ。今度私の家に遊びにおいでよ！　モモをママに紹介したいんだ。『高校に入って最初のベストフレンドだよ』って！」
「うん、今度遊びに行くねっ」
近いうちに家に遊びに行く約束をした桃乃はそこで沙羅と別れて

家路に着いた。
桃乃の降りる駒平（こまだいら）駅は谷内崎から四つ目の駅で、その駅から十分もかからない場所に桃乃の自宅はあった。通学がかなり楽なのも桃乃がカノンを目指した理由だ。

「ただいま～！」

三年前に外壁を塗り替えたばかりの家の玄関を開けると家の中から桃乃の母親、千鶴の声が聞こえてくる。
「おかえりなさい、桃乃。制服を着替えたらすぐに下にいらっしゃい」
「はーい」

桃乃が二階の自分の部屋で私服に着替えて一階に下りていくと、リビングいっぱいに甘い香りと深煎りされたコーヒー豆の香ばしい香りが混じりあって漂っていた。

「あら、ちょっと焼きすぎちゃったかも……」
専業主婦の千鶴の趣味はお菓子作りだ。今日のお菓子はココナッツをふんだんに使ったクッキーらしい。
白いフリルのエプロンにロングウェーブの髪が揺れる。
二十二で結婚しそのまま専業主婦になった千鶴は今年で三十九歳になるが、今まであまり苦労を経験していないせいもあって実際の年齢よりはるかに若々しく見える。
桃乃はダイニングテーブルの席につき、大きな器に盛られている焼きたてのココナッツクッキーを一口食べてみた。
「ううん、美味しいよ、お母さん」
「そう？　で、どうだったの、学校は？」
「うん、早速友達も一人出来たし楽しくなりそう。葉月はもう塾に行ったの？」

「ええ、ついさっき。でもよかったわねぇ」
桃乃の前にジノリのコーヒーカップが置かれる。
「ねぇ桃乃、昨日の入学式は本当に素敵だったわよね」
「もうお母さんたら卒業式でもないのに泣いてるんだもん、恥ずかしかった……。あの時泣いていたのお母さんだけだったんだからね？」
「だってカノンの制服着て座っている桃乃や冬馬くんの姿を見たらつい感動しちゃったんだもん。あぁそうだ、それで思い出したわ。あのね桃乃。今朝冬馬くんがあなたを迎えに来てくれたのよ？」
「……知ってる」

桃乃は苦々しい顔でコーヒーを啜った。

「あら、コーヒー濃く淹れすぎたかしら？」
娘の苦虫を噛み潰したような顔がコーヒーを濃く淹れたせいだと思ったのだ。
「明日から一緒にカノンに行くんでしょ？　冬馬くんと」
「だっ誰が！？」
その桃乃の剣幕に気圧され、おっとりタイプの千鶴は娘にそっくりな大きな目をパチパチとさせる。
「だ、だって冬馬くん、また明日も迎えに来るって言ってたわよ？」

「えっ、お母さん、それホントッ！？」
ソーサーに戻したコーヒーカップが勢い余ったせいでガチャンと盛大な音を立てる。
カノンへの通学路中、ずっと横で冬馬に「桃太郎」なんて呼ばれるのは真っ平ごめんだった。
明日は早く家を出よう、と思いながら桃乃が再びコーヒーを飲んでいると千鶴が自分にもコーヒーを淹れながら独り言のように呟く。

「でも冬馬くんもいつのまにかあんなに背も伸びて本当に凛々しくなったわよね。昔は“　ももちゃん一緒にあそぼ！”　って桃乃をよく誘いに来てくれたちっちゃい男の子だったのにね」
「お母さん、違うわ。凛々しくなったんじゃなくて憎たらしくなっただけよっ」
桃乃のその言い方に千鶴はクスクスとおかしそうに笑った。
「なに？　お母さん。何がおかしいの？」
「んーん、別に」
千鶴はコーヒーを一口飲むとフッと遠い目をした。
「そういえば桃乃もいつの間にかコーヒーをブラックで飲むようになってるのね……」
「え？」
「だって桃乃、前はお砂糖二杯も入れてコーヒー飲んでたじゃない？」
「だって太っちゃったら困るもん」
桃乃のその答えに千鶴は優しく笑った。
「じゃあ今日はお母さんが久しぶりにお砂糖入れて飲んでみようかな」
千鶴はシュガーポットから一杯の砂糖をすくうとそれをジノリのコーヒーカップに入れてティースプーンで掻き回した。
一口飲んでみるとさっきとは違った甘くて少しほろ苦い味が千鶴の口中にゆっくりと広がる。
「そうよね、皆いつの間にか大きくなっているんだもんね……」
今の千鶴の呟きの意味が分からなかった桃乃は、大きな目を何度も瞬きしながら不思議そうに母親の顔を見る。
「えっ？　お母さん、それどういう意味？」

「なんでもなーい。お母さんのひとり言ですっ」
娘の質問を「ひとり言」という言葉でうまくはぐらかし、暖かいコーヒーカップを両手に包んだ千鶴はゆったりと微笑んだ。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

その後、夕食を終えて入浴も済ませた桃乃は、予習をするために自室へと戻る。
明日の授業で苦手な物理の予習をしようと思った桃乃だったが、ふと机の上に置いたままのカノンの年間行事予定パンフレットが目に入ってしまった。

何気なくそのパンフレットを手に取り、中を見ると月毎に何かしらの行事が書かれている。
確認のために今月の予定行事をもう一度調べてみたが、四月は一大イベントの入学式を除いてはオリエンテーリング以外に大きな行事はなかった。
さらにパラパラとページをめくると何ページにも渡って部活の紹介ページがあった。

（そういえば部活どうしようかな……）

中学時代はテニス部にいた桃乃だったが高校では違う部活にしてもいいなと考えていた。
沙羅はどうするのか明日聞いてみよう、と思いながら次のページ

をめくる。

現れたページはバスケ部の紹介ページだった。

男子と女子でそれぞれ部があるらしく、トップの紹介写真では長身のプレイヤー達が汗を飛び散らせながらシュートをきめようとしている。

男子バスケ部紹介写真の中で背番号４をつけ、右拳を振り上げてガッツポーズをしている黒い短髪の少年の背中が映っていた。その少年を見た桃乃の脳裏に冬馬の姿がよぎる。中学三年時の冬馬が背負っていた番号も同じ番号だったのだ。

――　広い体育館で得点が動く度に湧き起こる歓声。

――　ゴールを決めた選手の名のシュプレヒコールと高らかに鳴り響くホイッスル。

――　床に立っている足に直接響いてくるドリブルの強い振動。

――　綺麗な弧を描き、ゴールに吸い込まれていくバスケットボール。

白杜中学に入学したばかりの頃、バスケ部に入部して背番号１２をもらった冬馬は当時の桃乃にこんなことを話していたことがある。

「桃乃、俺一番が好きなんだよ。特に自分が好きなものには絶対に一番になりたいんだ。今はまだ実力足りないけどさ、そのうち必ず白杜で一番の選手になってやる」

――　そして二年後、冬馬はその実力を認められ、見事キャプテンに指名されたのだ。

（アイツって昔から自分で決めたことは必ず初志貫徹するのよね……）

昔のワンシーンを思いだし、桃乃はほんの一瞬だけ心の中で冬馬のことを見直した。

しかしすぐにその気持ちを強引に頭から追い払う。

（……って私、何アイツのこと見直してんのよ！　今は私のこと「桃太郎」なんて呼んでバカにする奴なのに！　お母さんが今日あんな変なこと言い出したからね　きっと……）

桃乃はパンフレットから手を離すとベッドにバフッと倒れ込んだ。と同時に桃乃の部屋をコンコンと可愛らしくノックする音がする。

「なぁに？」

起きあがった桃乃がそう返事をするとドアがカチャリと開いて、首を覗かせたのは妹の葉月だった。

「おっ邪魔しまぁ～すっ！」

妹の葉月は現在小学六年生。でも四つ離れた姉の桃乃がいるせいかその年よりもかなり大人な思考回路を持つ。

葉月はベッドに座っている桃乃の隣に腰をかけるとキラキラした瞳で喋り出した。

「ねぇねぇお姉ちゃん、カノンはどんな感じだった？　教えて！」

まだ四年も先の話しだが葉月もカノンへの進学を夢見ているらしい。自分の希望校に桃乃が合格して以来、葉月は姉を羨望の眼差しで見ていた。

「まだ一日目だしよく分かんないわよ」
「ね、ね、カッコイイ先生いた？」
ませている葉月には同年齢の男の子は子供に見えるらしく、好きになるのは必ず年上の男性だ。
そしてそれに関しては二人の父、雅治も男親ならではの極端な心配性ぶりを発揮して妻の千鶴にいつも笑われている。
「カッコイイ先生……？」

桃乃は今日一日で出会った男性教師の顔を思い出してみた。
化学や物理、数学の教師は男性だったが全員四十歳以上と思われる風貌で、しかもどうお世辞を見繕ってもカッコイイとは言えなかった。

「二十代でね！」
と更に葉月の細かい注文がつく。
「あ、そういえば私の担任の先生って二十代の男の人だよ」
「えー、幾つ幾つ？」
「んっと、確か今は二十六歳っていってたような……」
「カッコイイ？　何教えてるの？」
「体育」
「体育の先生？　じゃスポーツマンだ！　いいカンジー！　芸能人とかでいえば顔は誰に似ているの？」
どうやらかなり興味が湧いてきたらしい。
「……そうね……顔……。どうだったかなぁ……」

桃乃は担任の矢貫誠吾の容姿を思い出そうとしたが、なぜか脳内のイメージがぼやけてしまう。
なかなか担任の容姿をはっきり思い出せない桃乃の様子を見て、葉月が面白そうに茶化した。

「ねーお姉ちゃん。あたし達ってお向かいのお兄ちゃん達をずっと見てきているからさ、他の男の人でちょっとぐらい顔が良くってもなかなかカッコイイな、って思えなくなってなーい？」

ベッドに座っている葉月はそう言った後、足を揺らしながらエヘへとおかしそうに笑う。

桃乃は葉月の言葉に内心は少し同意しながらも、引き続きなんとか誠吾の顔を思い出そうと努力した。

「……そうだ、思い出した。顔はちょっと目が鋭い感じで……うん、まぁまあカッコイイかも。体育の先生だから色黒で筋肉質体型なの。気さくな先生みたいだから男の子にも女の子に人気のある先生らしいわ」

「わぁ～さっすがカノンね！」

葉月はウットリとした顔で感嘆の声を漏らす。

「でもさ、葉月が入学する頃にはもうその先生いないかもよ？」

「あ～！　お姉ちゃん、どうしてそんなイジワル言うのよ～！」

「だって四年も後のことでしょ？　どこか違う高校に赴任しちゃってる可能性だってあるじゃない」

「う……」

葉月はグッと返答に詰まった。そんな妹を姉がさらにからかう。

「それに葉月がカノンに無事合格できるかどうかまだ分からないしね？」

「ごっ、合格するもんっゼッタイ！！」

葉月は母や姉と同じ大きな目をぱちくりさせて大声で叫ぶ。

「あたし塾に行き始めたの知ってるでしょ？　絶対、絶対、絶対合格するもーんだ！　なにさ、お姉ちゃんだって冬馬兄ちゃんと同じ学校行きたくてカノン目指したんでしょ！？　それだって不純な動機じゃん！」

今度は桃乃が大声で叫ぶ番だった。

「だっだっ誰が冬馬と一緒の学校に行きたいなんて！！」

「アレッ、違うの？」
「あったり前でしょっ！！　一体何を根拠にそんなことを思ってたのよ！？」
「だってさー、冬馬兄ちゃんってカッコイイじゃない！」

腰まである自慢のロングの黒髪を一束手に取ると、葉月はベッドに腰掛けたままで熱心に枝毛チェックを始めた。枝毛チェックをしながらも葉月の口は器用に動く。

「それに冬馬兄ちゃんってすごくモテるしねー。あ、そうだ！　あたし、お姉ちゃんにこの話してたかな？　あのね、今年のバレンタインの日に友達と家の前で遊んでたら、女の人が何人も来て冬馬兄ちゃんの家にチョコ置いていったの。そのうちの何人かはどうしても勇気出せなくて、あたしにチョコ渡すの頼んだ人もいたんだよ！」

桃乃は黙って妹の話しを聞いていた。
今年のバレンタインに冬馬にチョコを渡そうと、　学校だけではなく家にまで押しかけた女生徒達がいた事は桃乃も知っていた。
その次の日、クラスメイトが冬馬に合計幾つチョコを貰っていたかをしつこく訊ね、冬馬がそれをはぐらかしていた光景を思い出す。

葉月はふと枝毛チェックの手を止めた。

「そういえばお姉ちゃん、確か去年から冬馬兄ちゃんにチョコあげてないんだよね？　ね、どうしてなの？」

確かに桃乃は去年から義理ではあったが、冬馬にチョコを渡さなくなっていた。
それは冬馬が自分のことを急に「桃太郎」と呼ぶようになったの

でそれが嫌で仕方のない桃乃はその次の年からチョコをあげるのを止めたのだ。

「お姉ちゃんがその気ないんだったらあたしが冬馬兄ちゃん貰っちゃおうかな～？」

「ふ～ん、そうすれば？」

ややふざけ気味の葉月の挑発を桃乃は適当に流した。

「ん～、でもなぁ～……」

毛先を自分の人差し指にクルクルと巻きつけながら葉月は小さく眉をひそめる。

「冬馬兄ちゃんは優しいしー、カッコイイしー、スポーツマンだしー、確かに彼氏にするにはいいんだけどさ……」

自分が適当に打った相槌に本気で真剣に答えている十一歳の妹を見て、桃乃は笑いを堪えるのに苦労していた。

「でもちょっとまだ子供っぽい所があるからなぁ……。だからやっぱりあたし、裕人兄ちゃんがいい！」

桃乃はここで我慢できずにとうとう吹き出した。

「あ～！　なんで笑うのよお姉ちゃん！」

「だって葉月、あなたと裕兄ィ、一体何歳離れてると思ってるのよ？」

西脇裕人（にしわきゆきと）は冬馬と五歳違いの兄だ。

柔和な顔立ちでスラリと背が高く細身の裕人は、男性ファッション誌の表紙モデルを務めてもおかしくない容姿を持っている。

「たった九つしか違わないじゃん！」

と葉月が口を尖らせる。

「だって裕兄ィは今年で二十一になるのよ？　葉月みたいなまだ小さな子供を相手にするわけないでしょ」

「そんなことないもん！　だってこの間も裕人兄ちゃんさ、『葉月

ちゃんが大きくなったらお嫁さんにもらいたいな』って言ってくれたもん！」

「葉月、それはね、裕兄ィお得意のリップトークなのよ」

裕人は綺麗な女性とあらば誰彼かまわず優しくせまり声をかける、所謂プレイボーイだ。

今まで桃乃が見てきた中で、裕人の側に寄り添う女性が同じ女性だったことはほとんど無いといってもいいほど、裕人の姿を見かける度にその横にいる女性は大抵違う女性だった。

「ううん違うってば！　他の女の人にはそうだけどあたしのは違うのッ！」

しかしそう叫んだ後でなぜか葉月の声のトーンが落ちる。

「……うん……。でも確かに裕人兄ちゃんってさ、女の人に優し過ぎるよね……。そこが裕人兄ちゃんのたった一つの、最大の短所かもしれないね……」

葉月は小さな手を片頬につけ、はぁ、と小さくため息をつき、その大人びた仕草に桃乃は再び苦笑した。

その時、階下から千鶴の声が聞こえてくる。

「葉月、まだ起きているの？もう遅いから早く寝なさいね」

桃乃の部屋の壁時計の針はすでに十時半を回っている。

「いっけない！」

葉月は慌てて立ち上がり「じゃお姉ちゃんお休み～」と言いながら部屋を出ていった。

部屋に一人残った桃乃は教科書もノートもまだ用意していない机に向かい、小さく息を吐く。

もう今夜の予習をする気持ちは吹き飛んでしまっていたが、なんとか気持ちを奮い起こして物理の教科書を広げる。

（そういえば冬馬って理数系に強いから、物理って得意そう……）

ハッと我に返る。

また無意識に冬馬のことを考えてしまった桃乃は慌てて二三度頭を振って冬馬を意識の外に追いやった。

今日家に帰ってきてから頭の中に何度冬馬が出てきただろう。

しかし意識の隅へ追いやっても、桃乃の頭の中にはすぐにまた冬馬の姿が現れる。

いつも気付くとまるでそれが至極当たり前の光景のように、冬馬はいつも側にいた。

最近、ふとしたきっかけですぐに冬馬のことを考えてしまうのは“　昔からの幼馴染だから　”、そして「桃太郎」と呼ばれていることでイライラさせられているから。

きっとそのせいなんだ、と桃乃は思った。

しかし心の奥底から声にならない声がする。

……本当にそれだけ？

自分の気持ちなのになぜかよく分からなかった。

（結局、今日はお母さんのあの言葉が発端だったなぁ……）

その後約一時間机に向かって熱心に予習を続けた桃乃は、枕元の目覚ましをかけると急いでベッドにもぐり込んだ。

オレンジのクロスバイク　【前編】

カノン登校二日目の朝は昨日よりさらに快晴だった。
桃乃は一通りの身支度を済ませるとバッグを持って一階へと下りる。

「おはよう　桃乃」

フリルのついたエプロンを身につけた母の千鶴が、サラダボウルをテーブルの中央に置きながら桃乃に声をかける。その少女趣味的なエプロンは夫、雅治の好みだ。
「おはよう、お母さん。ね、お父さんなんであんなところに寝ているの？」
桃乃は父のいる場所をそっと指差した。雅治はリビングのソファーに横たわり、手足を縮めてぐっすりと眠り込んでいる。
「お父さんね、明け方に帰ってきたばかりなのよ。今仕事がすごく立てこんでいるみたい。だから今は少し寝かせてあげて」
桃乃は眠りこけている父の姿をもう一度見る。
髪はくしゃくしゃで髭も少し伸びはじめていたが普段は滅多に外さない、その眼鏡を外した父の寝顔見るのは久しぶりだった。
「ねぇお母さん、お父さんて眼鏡外すとちょっとカッコイイんじゃない？」
「あらなに言ってるの、お父さんは眼鏡かけてても充分カッコイイわよ」
「あーはいはい、そうでした……」

学生時代、大恋愛の末に結婚した雅治と千鶴は今でも超がつくぐらいのおしどり夫婦だ。

朝から親のノロケを聞かされた桃乃は少々げんなりしながらロールパンを一口頬張る。オーブンで焼き上げたばかりの熱々のパンは中はしっとりとしていてとても香ばしく、思わず頬が緩んだ。

「ん～！　やっぱり焼きたてのパンって美味しい！」

「はいこっちもどうぞ」

絶妙のタイミングでベーコンエッグの皿が桃乃の前に置かれる。ベーコンはたった今までフライパンから与えられていた熱でまだパチパチと弾ける音がしている。

「サラダもちゃんと食べるのよ？」

「分かってる。もう子供じゃないんだからいちいちそんなこと言わないで」

「フフッ、そうだったわね。桃乃は子供なんだけど実はもう子供じゃないのよね」

「……お母さん昨日からなんかヘンだよ？」

「気にしない気にしないっ。お母さんのひとり言よひとり言っ」

千鶴はそう歌うように口ずさむと、次に起きてくる葉月用のベーコンエッグを作りにキッチンへと戻っていった。

（今日は少し早く出なくっちゃ……）

桃乃はサラダを食べながら壁掛け時計を見る。家を早く出るのはもちろん玄関先で冬馬とかち合わないためだ。やがて二階からバタバタと騒々しい足音が聞こえてくる。

「あら葉月ね……。もう、お父さんが起きちゃうわ」

下の娘をたしなめようと千鶴がキッチンから急いで出てきたが、一瞬早くリビングの扉がバタンと大きな音と共に勢いよく開く。

「おっはよう～！」

いつものように元気よく朝の挨拶をしながらリビングに入ってきた葉月だったが、母と姉が自分の方を見て唇に人差し指を立てているのを見ると不思議そうに首をかしげた。
「……どうしたの？　お母さんもお姉ちゃんも」
「葉月、今お父さんが寝ているのよ。だから静かにしてね」
「え？　あ～ホントだ。お父さん、今日朝帰りしちゃったんだねっ」
「ちょっと言葉の使い方が違うような気がするけど……」
千鶴は笑いながら葉月の席の椅子を軽く引く。
「さ、早くゴハン食べなさい」
「はーい」

今の葉月が出した騒音にも雅治はほんの少し体を動かしただけで相変わらずグッスリと眠っていた。よほど疲れているらしい。
桃乃は最後のロールパンの切れ端を食べ終わるとさっさと席を立った。

「あれお姉ちゃんもう行くの？　今日は昨日より早いんじゃない？」
「そうね、今日学校で何かあるの？」
「ん、ちょっと用事があるから……」
桃乃は食べ終わった食器を台所に下げながら母と妹に適当な返事をし、洗面台に向かった。もう一度歯を磨き、唇に保湿タイプのリップクリームを薄く塗って玄関へと急ぐ。その途中でもう一度リビングに顔を出し、千鶴と葉月に小声で「行ってきます」と声をかけた。
「行ってらっしゃい」
「お姉ちゃん行ってらっしゃーい」

玄関から一歩外に出た桃乃は、急いで向かいの「西脇」と表札の

かかっている家に目をやる。
西脇家の玄関付近に冬馬の姿が無いことを確認した桃乃は安心して早足で駅へと急いだ。
駅に着き、腕時計を見る。このままだと学校に着いてもだいぶ時間が余りそうだった。一時限目の予習でもしていようかな、と思いながら電車に揺られてカノンへと向かう。

カノンのある谷内崎駅へ着く。
電車を降り、桃乃はスクールゾーンを歩き出した。
周りは緑に囲まれ小高い丘まで続くこの道は人通りが少ない。朝早くこの木立の道を歩いているのはほぼカノンの生徒か関係者だといってもいいくらいだ。そして今この道を歩いている生徒は桃乃以外見当たらない。

（う〜ん　気持ちいい……）

朝から緑でいっぱいの木々の間を歩くのはとても気持ちがよかった。気のせいか空気までもがおいしく感じられる。鳥のさえずりがたまに聞こえるこの道を時間に余裕のたっぷりある桃乃はゆっくりゆっくりと散歩気分で歩いていた。
その静かな空気の中、桃乃の後方から何かが回転している金属音のような音が微かに聞こえてきた。
なんだろう、と思った桃乃が振り返ろうと思ったその瞬間、わざとキキーッと派手な音を鳴らして一台の自転車が桃乃の前に強引に割り込んで止まる。
その自転車の主を見た桃乃が叫ぶ。

「冬馬!?　」

オレンジに輝く車体の上にはスクールバッグを背負ってニッと笑

う冬馬がいた。
「おい、なんでお前今日も先に行っちまうんだよ。なにかの用事があるみたいよ、っておばさんが言ってたけどさ、用事ってなんなんだよ？」
「別に冬馬には関係ないでしょっ」
（冬馬に会わないようにする用事よっ）と桃乃は心の中で呟く。
「せっかく今日はこれでお前を送っていこうと思ってたのによ」
口を尖らせた冬馬の額にはうっすらと汗が滲んでいた。息も少し弾んでいる。
「そういえば桃太郎は二組なんだってな。今朝おばさんに聞いたぜ」
「だからその名前やめてってば！」
「俺、四組だからな。覚えておけよ？」
「知らないっ！　冬馬が何組でも私には関係ないもん！」
自分から完全に顔を背けた桃乃の様子を見た冬馬は、さりげなく話題を変える。
「なぁ、このクロスバイク、カノンに合格したお祝いに買ってもらったんだぜ。見てみ？　すげぇカッコイイだろ？」
桃乃は横目で買ったばかりらしいそのピカピカの自転車を眺める。
確かに冬馬が乗っているこのクロスバイクは安価な量産タイプの自転車よりもデザイン性に優れ、ストレートなハンドルから車体に続くフォルムがとても綺麗な自転車だった。
だが、その車体の後ろにはなぜか鮮やかなオレンジ色のボディとはまったく違う銀色の荷台が取り付けてあり、そこに少々ちぐはぐさを感じる。
「その荷台、ついてないほうがいいんじゃない？　自転車の色と合ってなくて何かヘン」
「これは後からつけ足したからな。カッコはちょっと悪くなっちま

ったけど必要だから仕方ねぇよ」
冬馬は「ほら」と言うとその荷台にポンと片手を置く。
「え？」
「早く乗れよ」
「イ、イヤよ！　なんで私が冬馬の自転車の後ろに乗らなきゃいけないのよっ」
「いいから乗れって。これ快適過ぎてさ、全然トレーニングにならねぇんだよ。後ろに五十キロの重り乗せたら少しはトレーニングになるからさ」
「なっ……、誰が五十キロよっ！」
「桃太郎、五十キロないの？」
「ないわよっ！」
桃乃は正面の幼馴染に向かって怒鳴る。
「ふぅ～ん……」
クロスバイクに乗ったままでそう呟くと、冬馬の視線は桃乃の頭のてっぺんからつま先まで何度も往復をしはじめる。
「ちょっと、そんなにジロジロ見ないでよ……！」
上から無遠慮に自分の体をつぶさに眺められて桃乃の両頬が赤らむ。
恥ずかしさでいたたまれなくなった桃乃はクロスバイクの横を擦りぬけて先へ行こうとしたが、すかさずその細い左腕を冬馬がガシッと掴んだ。
「い、痛いってば！　離してよ冬馬！」
「いいから後ろに乗れって」
冬馬は桃乃の腕を掴んだままで続ける。
「……乗るまで離さねぇぞ？」
キッと顔を上げて桃乃は冬馬を睨んだが、自分以上に冬馬の目が真剣だったため、やがて桃乃の目から抵抗を示す強い光がゆっくり

と消えてゆく。
「の、乗ればいいんでしょ、乗れば」
「あぁ」
渋々と桃乃は後ろの荷台に横座りをして腰をかける。しかし冬馬はまだペダルに足をかけずに肩越しに桃乃を見た。
「ほらちゃんとつかまれよ」
「つかまるってどこに？」
「ここに決まってんだろ」と冬馬は自分の腰を軽く叩く。
「イ、イヤよっ」
再び自分の頬がほんのりと少し熱を帯びてきたことを感じた桃乃は冬馬から視線を逸らした。
「ここから坂道なんだぞ。つかまってねぇと危ねぇだろ」
「だっ、だってバッグあるもんっ」
「ちょっと貸せ」
冬馬は桃乃のスクールバッグを取り上げるとそれを左のハンドルと一緒に握った。
「ほらつかまれよ」

最早これ以上拒否する理由も思いつかなかった。
仕方なく桃乃は冬馬の体に遠慮がちに手を伸ばしそっと掴まる。

「いいか？」

その言葉の後、オレンジのクロスバイクは桃乃を乗せて走り出した。
風がどんどんと横に流れていく。
前を見ると冬馬の大きな背中と風になびくカノンの青いブレザーが目に入った。
桃乃はその背中を見上げながら、つい先ほど額に汗を滲ませ息を切らして自分の前に現れた冬馬の様子を思い出す。

（冬馬……もしかして私に追いつくためにあんなに必死になって飛ばしてきたのかな……？）

さっきはこの自転車に乗るのを嫌がったが、そう思うと少しだけ胸に微かな痛みを覚える。

「おっ、やっぱり後ろに重りがあるといいな！　ペダルがグンと重くなった！」

桃乃を乗せているだけではなく、上り坂のせいもあって今のペダルは相当重く感じられているはずなのになぜか冬馬の声はとても弾んでいる。

「お、重いなら下りるわよ！」

「いいんだ、それがトレーニングになる！」

冬馬は後ろを振り返り、そう叫ぶとさらにグイグイとペダルを力強く踏みしめる。

「……ヘンな冬馬」

「あ？　なにか言ったか？」

「……ううん、別に……」

浮かれた冬馬が思い切り飛ばすせいで、大して時間もかからずにカノンの正門が見えてきた。

「げっ！　またあの先生かよ……」

クロスバイクのペースが突然ガクンと落ち、冬馬はうんざりとした声を出した。

桃乃も体をひねって冬馬の影から前方を見る。すると昨日と同じように正門前に緑が立っているのが見えた。昨日は黒だったが今日は淡いピンク系のスーツを着ている。

冬馬が正門前で一旦クロスバイクを止めると桃乃は慌てて後ろの荷台から下りた。

「おはよっス」
「お、おはようございます」
「おはよう。あらあらあなた達、二日連続で一緒にご登校ね？」
その言い方は明らかに裏に何か含むような言い方だった。昨日に引き続いてのそんな態度に我慢できなくなった冬馬が緑に食ってかかる。
「一緒に登校するのが悪いってんですか！？」
「えぇ今日はね。残念ながらよくないわよ？」
緑はなぜか余裕たっぷりの表情で受け答える。
「なんでだよ！　ここの規則がかなりうるさいことは知ってるけどさ、男女が一緒に登校するのを禁止するなんて規則はないはずだ！」
憤る冬馬を眺める緑はフフッと妖艶な笑いを浮かべると、昨日とは違う色のパール系のネイルでトン、と軽く冬馬の胸を突く。
「君、本当に可愛いわね」
「いッ！？」
いきなり胸を小突かれて冬馬はおかしな奇声を上げ、桃乃は緑のその行動に驚いて口に手を当てて唖然とした。
「ねぇ西脇くん、自転車は軽車両でしょ。二人乗りは道路交通法上、立派な違反行為なのよ？」
「あっ」
冬馬はそっちの方か、という顔をする。
「今日は見逃してあげるけどもう二人乗りしちゃダメよ。分かった？」
「……うぃっす」
冬馬は仕方無さそうに頭を掻いた。緑は今度は桃乃の方を見る。
「ね、あなたも“　乗せて　”　なんてもう言っちゃダメよ」
「違います！　こいつは悪くないです！　俺が無理やり乗せたんですよ！」

冬馬は慌てて口を挟むと、「ほら」と預かっていたバッグを桃乃に返した。緑は再び冬馬のほうに視線を移す。
「この子を庇ってるの？　西脇くんって優しいのね。私ますますあなたのこと気に入りそう」
緑は冬馬の方にグイと左肩を寄せ、それと同じ距離分、冬馬は慌ててクロスバイクの上で身を仰け反らせた。
「しっ、失礼しますっ！　じゃなっ！」
冬馬は最後のセリフを桃乃に向けて言うと、あっという間にクロスバイクで男子校舎の方に去って行ってしまった。
正門前に緑と桃乃の二人だけが残される。
「し、失礼します……」
気まずい雰囲気の中で桃乃もそそくさと女子校舎の方へ行こうとすると、「ちょっとお待ちなさい」と声がかかり、緑に引き止められた。
「あなた、倉沢さんだったわよね」
「は、はい」
「ねぇ、西脇くんとはお付き合いしているの？」
「つ、付き合ってません！」
「あらっ、ふ～ん、そうなの……」
自分の質問に慌てて否定をしてきた桃乃に緑は意外そうな顔をし、一時桃乃から視線を外すと何かを考えているようだった。
「あの……、先生は毎日ここにいらっしゃるんですか？」
「えっ？」
考え事の最中に桃乃からいきなりそう訊かれ、緑は一瞬驚いた様子を見せる。
「いいえ、ここにいるのは今週だけよ。この正門には毎朝教師が一名必ず立って不審者が校内に入らないようにチェックしているので、今週は私が当番ってわけ」

緑は桃乃にそう説明すると、もう一度同じ質問を投げかける。
「それよりあなた、西脇くんとは本当にお付合いはしていないのね？」
「は、はい」
「そう」
桃乃の返事を聞いて緑は満足そうに微笑んだ。
「分かったわ。それならいいの。引き止めちゃってごめんなさいね」

「い、いえ……」
そう語尾を濁して返事をすると桃乃は再び女子校舎の方に足を向ける。正門前に緑を残し、桃乃は校舎の中に入った。自分の靴箱に外靴を片付けながら今の緑の様子を思い返す。

（あの先生、もしかして冬馬のこと……？）

なぜか心がざわついた。
そしてその日一日、パールの粒がきらきらと輝くネイルで冬馬の胸をツンと突いたあのシーンは忘れようとしても桃乃の脳裏にいつまでもこびりついて消えなかった。

オレンジのクロスバイク　【後編】

疾風の勢いで緑の前から逃げた冬馬は、校舎横に設置されてある自転車置き場へ向かった。クロスバイクの前輪を車止めに置いてチェーンをかけていると、昨日初めて教室に入った時とまったく同じように背後から声がかかる。

「よっ、色男のご登校だな」

冬馬はしゃがんだまま振り向く。そこには同じクラスの柴門要が立っていた。

「……またお前か」

この男が自分を嫌っていることを昨日初めて顔を合わせた時から薄々と感じていた冬馬は、チェーンをかけ終わると冷たい声で立ち上がる。

「今、たまたま正門の近くにいて見ていたけどよ、お前モテるんだなぁ。早速あの色気ムンムンの担任となかなかイイ雰囲気だったじゃん。なぁなぁ、お前って年上もイケるクチなわけ？」

ポケットに両手を突っ込んだままで話す要を無視し、冬馬は校舎の中に入ろうとする、だが要は素早い身のこなしですかさず冬馬の前に回りこみ、その行く手を遮った。

「……どけよ」

要より背の高い冬馬は相手を見下ろして低い声で牽制した。しかし要は威嚇混じりのその声にもまったく動じる素振りすら見せない。

「まぁ待てよ、まだお前に聞きたいことがあるんだ」

要はニヤリと笑うと今度は女子校舎の方角を顎で指し示す。
「今の女の子、お前の彼女か？」
「お前に何が関係あるんだよ」
「いや今見たらかなりの可愛い子だったなぁと思ってさ。俺、ああいう清純そうなタイプ、次の獲物で狙ってるんだ。でさ、あの子の名前とクラス、教えてくれよ？」
冬馬の目の色がはっきりと変わる。
「あいつに変な真似したらただじゃおかねぇからなっ！？」
冬馬はそう叫ぶと要の制服の胸倉を掴みあげた。しかしそれでも要はまだ平然とした態度を崩さない。それどころかその顔には嘲るような笑みさえ浮かんでいる。
冬馬が乱暴に手を離すと要は乱れたネクタイをほどきながらからかうように言った。
「やっぱあっちの方か……」
「なぁそんなに大事なのか、あの娘？」
しかし冬馬は返事をせずに無言で数秒間要を睨みつけた後、そのまま校舎の中へ入っていってしまった。薄ら笑いを浮かべてその後姿を見送った後、要はほどいていた自分のネクタイを一気に外す。

そう独り言を呟き外したネクタイを弄びながら、要は「侵入禁止」と札の置かれてある薄暗い裏道の方へ向かう。その道の途中には高さ二メートルほどの金網が張り巡らされてあった。そのフェンスに足をかけ軽々と乗り越えると、要はネクタイを結び直しながら女子校舎へと続く未知の区域に侵入し、そのまま裏道を足早に進んでいった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

◆◇◆◇◆

その頃、桃乃はまだ誰も来ていない一年二組の教室にいた。自分の席にストンと腰をかけ、バッグの中の教科書類を机の中に入れはじめる。

その時ふいに教室の後ろの扉がコンコンとノックされた。

椅子の上から後ろの方を見ると扉はもうすでに開いており、端正なその顔に小さな笑みを浮かべた要が扉に寄り掛かったままで桃乃の方をじっと見ていた。

今、この女子校舎に男子がいる事実が信じられなくて、桃乃はしばらくポカンと口を開けて要の顔を見つめる。

要は微笑みながら桃乃に向かって小さく手を上げた。

「おはよう。君、名前は？」

しかし桃乃はまだ唖然としたままでいきなり現れた要の顔を見ている。

「あ、そっか。女の子に名前聞く前にまずこっちが名乗んないとね。俺、柴門要っていうんだ」

要は扉から離れると桃乃にゆっくりと近づく。桃乃は思わず椅子から立ち上がて左側を指差した。

「こっここは女子校舎よ！？　男子校舎は反対！」

「ん？　知ってるけど？」

「エッ……」

要にあっさりとそう返されて桃乃はその先の言葉を失う。

「俺、君に用事があってきたんだ。君の名前知りたくってさ」

「あ、あなた誰？」

「だから柴門要だって。あ、クラスは一年四組ね」

（冬馬と同じクラスだ……）

と桃乃は即座に思った。

「キミさ、西脇冬馬とはどういう関係なの？」

要は矢継ぎ早に質問を続ける。

「さっき君と西脇が一緒に登校するの見てさ、西脇に“　今の女の子すごく可愛いな”　って言ったら“　じゃあ直接行って会ってこいよ”　って言われたんだ」

「えっ、冬馬が……？」

「うんそう。会ってこい、なんて言われたしさ、まさか君、西脇の彼女じゃないよね？　それとも彼女？」

「ち、違うわ」

「そっか、じゃあ俺にもまだ望みあるわけだ」

要は教室内隅々にまで響くぐらいの明快な音で指を鳴らす。

「君、すっごく可愛いから俺気に入っちゃったんだよね」

「……！」

男子から面と向かってこれだけ強烈にアプローチされた経験の無い桃乃は赤くなって俯いた。

「ね、名前教えてくれるかな？」

「……」

「あれ？　別に警戒しなくていいんだよ？　俺、これでもマナーのいい紳士なんだからさ」

ニッコリと微笑むその口元から真っ白で綺麗な歯並びがのぞく。

しかし桃乃は赤くなって黙り込むばかりだった。

返事が戻ってこないので内心舌打ちをしながら何気なく要は桃乃の机の上に目をやる。

そしてそこに自分の知りたい答えがあるのを見つけた。

「へぇ、倉沢桃乃っていうんだ？」

名前を言われた桃乃は驚いて要の視線の先を見る。
すると机の中にしまおうとしていたノートの表紙に自分の名前が書いてあるのが見えた。
「名前も可愛いじゃん！　あのさ、今度一緒にお昼でも食べない？　ここじゃ昼ぐらいしか男子と女子が顔合わせることないしさ。ね？」
だがそんな誘いの言葉をかけたくせに、要は桃乃の返事を待たずにスゥッと教室の扉の方に戻る。
「じゃ、こんなところにいるの見つかるとヤバイから俺、そろそろあっちに帰るわ。楽しみにしてるよ」
要はもう一度微笑みながら桃乃に向かって小さく手を振ると、風のように教室の外に出ていった。
桃乃はしばらく唖然としていたが、やがて要が出ていった扉に駆け寄るとそこから上半身を出して廊下を見渡す。
しかしもう要の姿はとっくに消えていた。
整った顔立ちの要からいきなり強烈なアプローチをうけ、赤く上気した頬で桃乃は要が去った廊下の先をしばらく見つめる。

（今の男の人……なんだったの？）

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

その頃、先ほどの要の態度で冬馬の頭には完全に血が昇りきった状態だった。
とりあえず教室に入ったものの、気持ちが落ち着かない。
そこで少し冷静になるべく、ホームルームが始まる時間まで校庭に設置されてあるゴールポストでシュートの練習でもしようと、教

室の備品のバスケットボールを手に冬馬は廊下に出た。するとその廊下の先から要がこちらに歩いてくるのが目に入る。
要は冬馬の姿に気付くとサッと視線を逸らした。
冬馬も苛立つ気持ちを抑えながらお互いそのまま黙ってすれ違おうとした瞬間、要が低い声でボソリと呟く。

「なにっ！？」

低く響いてきた今の言葉に、険しい表情で冬馬が振り返る。
相手の焦る気配を素早く背中で感じとった要はフッと乾いた笑みを漏らし、悠々と四組の教室内へと消えていく。たった今すれ違いざまに要に投げ捨てられたその言葉に衝撃を受けた冬馬は、廊下の中央で愕然と立ち尽くした。

「……俺、お前の大好きなあの桃乃ちゃんと今度お昼の約束しちゃったぜ？」

要の勝ち誇ったような声が何度も脳内をリフレインする。
右手の甲に青く太い静脈がくっきりと浮き上がり、バスケットボールを掴んでいる五本の指がギリギリと悲鳴のような音を立てていたことにすら気付かず、再び冬馬の頭に急激な勢いで血流が沸騰し始めていた。

すれ違った心　＜1＞

「裕人！　いつまで寝てるつもり!?　さっさと起きなさぁい！」

時刻はもうすぐ午前十時。

夜遊びが長引き、明け方に帰宅してグッスリと眠っていた裕人の頭上から大声が降ってきた。

「……母さ～ん……、頼むからもうちょっと寝かせてくれよ……。今日の授業午後からなんだからさ……」

「なーに言ってんの！　毎晩毎晩夜遊びばっかりして！　少しは冬馬を見習いなさい！」

冬馬と裕人の母、西脇麻知子（にしわきまちこ）は大声で裕人を叱ると部屋のカーテンを全部開け放った。男の子二人を育てたせいか見かけも性格もボーイッシュな所がある女性だ。

「……だから母さん、昨日は大学の授業で遅くなったんだって……」

部屋中に一気に差し込んできた朝日の容赦ない眩しさに、裕人は顔の前に手をかざして目を細める。

その返事を聞いた麻知子はベッドの側にツカツカと歩み寄ってくると、裕人の頬を一瞬だけ軽くムニッとつまみあげた。

「どこの世界に朝帰りまでする授業があるっていうの!?」

「あるよ？　今世紀に生きる人類の、深夜繁華街におけるそれぞれの行動パターンをゼミで調査しているんだ。その調査で出た傾向を詳細なレポートにまとめて……」

「いいからバカなこと言ってないでさっさと起きなさいっての！」

言い訳を諦めた裕人はベッドから一気に起きあがると、母親につ

まれた自分の頬を労わるようにさすった。
「母さん、頼むから顔つまむのはやめてくれよ。俺の顔が崩れたら何人の女の子が悲しむことか」
「あーあー、崩れなさい、崩れなさい。逆にそのほうが勉強に集中できていいんじゃないの？」
「ひどいな、母さんは……」
「冬馬を見なさい。朝は早くから起きて学校に行って、夜はちゃんと予習もやって……。桁人みたいに女の子のお尻ばっかり追っかけてないわよ？」

即座に桁人の右手が軽く上がる。

「おっと母さん、そこは異議ありだね。俺は女の子のお尻なんて追っかけてないよ？　女の子達が俺を追っかけてくるの。それにさ、女の子を追っかけているのは俺じゃなく冬馬のほうだよ？」
「えっ冬馬が？　まっさか～！」
麻知子は桁人の今の言葉を全然信用していない様子でアハハと笑う。
「あれっもしかして母さん知らなかったの？」

長身の桁人はベッドから降りるとウ～ンと大きく伸びをする。上に大きく上げられた両手はあと十センチ足らずでグリーンのクロス貼りの天井に届きそうだ。

「あいつ、桃乃ちゃんにベタ惚れなんだよ。いっつも桃乃ちゃんの後ばっか追っかけてるじゃん」
「あー……」
桃乃の名前を聞いた麻知子は何か思い当たったような表情になる。
「じゃあやっぱりそうなのね。冬馬が桃乃ちゃんの所によく行くの

は高校もまた一緒になったし、幼馴染だからかなーとも思っていたんだけど……」

「違う違う。甘いな、母さんは」

母親の鈍感さに桁人が笑う。

「あいつはね、もうずーっと昔から桃乃ちゃん一筋なんだよ」

「そういえば冬馬ってばさ、昨日の朝、倉沢さんの家に寄って桃乃ちゃんと一緒に学校に行こうとしたみたいなのよ」

「な。たぶん今朝も誘いに行ったんじゃないかな。あの新品のクロスバイクでさ」

「でも今朝は一人で乗って行ったみたいだけどね……。ね、桃乃ちゃんは冬馬のことなんとも思ってないのかしら？」

「ん～、実は俺もその辺がまだよく見極められないんだよなぁ。最近の桃乃ちゃんってどうも冬馬を避けているような感じがするしさ」

「あら、そういう事を見抜く能力しかないのに、さすがの桁人も分からないんだ？」

「……母さん、そこまで言う？」

いつもは穏やかな顔を少々崩し、心外だと言わんばかりの顔で桁人が反論する。

「確かに俺は冬馬と違って遊び人だけどね、冬馬ほどじゃなくても俺だってそこそこの学力はあるつもりだよ」

「はいはい。じゃあそれを証明するためにも少しは夜遊びを控えて勉学に励みなさいっていうの！」

「はは、そうきますか……」

母親の切り返しの早さに感心しつつも、桁人は自分に不利なこの話題を自然に変える。

「じゃあ俺がさ、今度桃乃ちゃんにさりげなく聞いてみるよ」

「えっ冬馬のことを？」

「うん。血を分けた、たった一人の可愛い弟だしな、できれば好きな娘と上手くいってほしいじゃん」
「そうね、桃乃ちゃんはいい子だしねぇ……。そうだ！　もし桃乃ちゃんがお嫁さんに来てくれたら相手のお家は倉沢さんだもの、千鶴ちゃんとは気心も知れているし、親戚付合いも肩肘張らなくていいわよね！」
「母さん、さすがにそれは気が早過ぎだって」

麻知子の発想の突拍子さに裕人は苦笑する。

「じゃ母さん、着替えるからちょっと出てってくれない？」
「なによー、別にいいじゃん。恥ずかしがる事ないでしょっ、実の親子なのに今更ー！」
「実の親子でもプライベートがあるの！」
麻知子を強引に部屋から追い出すと裕人はクローゼットを開けた。シャワーはつい数時間前にホテルで浴びてきたばかりだ。

（そろそろ本気で車の事を考えなきゃなぁ……）

女と夜遊びするにはやはり自分の車が必要だと最近の裕人は考えていた。
今日は午後からのゼミで裕人が研究発表をする番だ。今密かに狙っている娘が自分と同じゼミを受けているのであの娘に今日はいい所を見せなくっちゃな、とついつい気合も入る。
しかし真剣に服を選びながらも、器用な裕人は頭の中で同時にまったく別の事を考えていた。

（ん～桃乃ちゃんをいつ誘って訊き出そうかなぁ……）

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇
◆◇◆◇◆

裄人に部屋を追い出された麻知子は階段を下りながらもう一人の息子のことを考えていた。

(そっか……冬馬ももうそういう年頃なのねー……)

結婚してすぐに裄人を身ごもり、五年後に冬馬を産んだ麻知子は現在四十五歳。

二人の子供が段々と自分の手から離れ始めているのを最近の麻知子は特に強く感じるようになっていた。それを認めたくないせいなのか、麻知子は裄人はともかく、冬馬はまだまだ手のかかるやんちゃな男の子だと思いこもうとしていた。

だが、冬馬の桃乃に対する気持ちを裄人から聞き、いよいよどちらの我が子も自分の元から巣立っていく準備が始まっている事実を知った麻知子はほんの少しだけだが淡い寂寥感を感じずにはいられなかった。

しかし倉沢家の一家は皆とても良い人達だし、今までもいいご近所づきあいをさせてもらっている。そして向かいに住む者として倉沢家の子供達を小さい時からずっと見てきている麻知子は、自分の夫の親戚の子ども達よりも、桃乃や葉月のことを可愛く思っていた。

(桃乃ちゃんならいいわ　安心して冬馬をまかせられるもんね)

常に物事を前向きに考える麻知子はあっさりと頭の中を切り替える。そして一階に下りると、裄人に言い忘れたことを思い出して二

階に向かって叫んだ。
「裕人～！　母さん、千鶴ちゃんと婦人会の集まりに行ってくるからね～！　出かける時、ちゃんと家の鍵かけて行ってよ～？」
「了解～！」
二階から鼻歌まじりの声が聞こえてくる。
麻知子は手早く出かける支度をすると向かいの倉沢家に千鶴を迎えに行った。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

倉沢家の玄関へと入ると麻知子はインターフォンを押す。押してすぐに千鶴のおっとりとした声が聞こえてきた。
「はい。どちら様ですか？」
「私よ、千鶴ちゃん」
「あ、麻知ちゃん？　いけない、もう行く時間ね。ちょっと待っててね」
プツリ、とインターフォンが切れる。
麻知子は玄関先で千鶴が出てくるのを待ちながら倉沢家のミニガーデンを見ていた。
わずかなスペースながらも綺麗に手入れされ、季節の花が咲き誇る倉沢家の小さな花壇は花好きな千鶴の性格が如実に表れている。
（私ももうちょっと千鶴ちゃんを見習ってこういうことしなくっちゃね……）

麻知子は自分の家の玄関先を振り返りため息をついた。
自宅の玄関先はとりあえず、という感じで大きめのパキラが一鉢とリビングにポトスを二、三個置いてあるだけで、それも麻知子が花よりも観葉植物が好きだからというわけではなく、ただ単に頻繁に手入れをしなくてもなかなか枯れないから、といういささか情けない理由だ。

元来のさっぱりとした性格と子供が二人とも男の子だったせいで、どうしても麻知子は千鶴のようにフリルのエプロンをつけたり、花を愛でたりという女らしさに欠けているところがあった。
そしてそれは麻知子自身もよく自覚していて、千鶴のように髪を伸ばしてウェーブでもかけてもう少し女らしくなろう、と何度か一念発起したこともある。
しかし、いざ自分の髪が肩に届く頃になるとどうしてもそれが邪魔に感じられ、結局最後は美容室に駆け込んで思いきり明るめのブラウンのカラーを入れて元のベリーショートにして戻してしまうパターンの繰り返しだった。
自分は自分、人は人、と思っていても身近で千鶴のようなおっとりとして女らしい女性を見ると、やっぱりこれでいいのかしら、と今も麻知子は思い悩むことがある。

（たぶんウチの子達がいかにも女の子らしい子が好きなのは、きっと私の姿を見てきているからなんだろうなぁ……）

衍人がいつも連れている女性達のタイプや、千鶴によく似ている桃乃を見ると、殊更に麻知子はそう思わざるを得なかった。
そう考えた麻知子がなんとなく気分が落ち込みがちになった時、ガチャリと玄関の扉が開きかける。　千鶴が出てきたのかと思い、麻知子はふざけた口調で「もう、遅いわよ～！」と声をかけた。
しかし次の瞬間、麻知子は「あっ…！」と口を開けて絶句する。

「いやぁ～お恥ずかしい。ちょっと寝過ごしてしまいましてね、こんな時間になってしまいました」

玄関から出てきたのは千鶴ではなく雅治だったのだ。

「いっいえ！　そんなつもりで言ったんじゃないんです！　済みませんっ！」

麻知子は真っ赤になって雅治に謝った。少し遅れて千鶴も玄関先に姿を現す。

「あら、どうしたの？」

「あっ千鶴ちゃん！　わ、私千鶴ちゃんが出てきたのかとばっかり思って……！」

慌てて弁解しようとする麻知子を見て、雅治の眼鏡の奥が何かを思いついたかのようにキラリと光った。

「いえいえ、元はと言えば僕ごときが重役出勤の真似なんかするからいけないんです。……ねぇ、麻知子さん？」

「と、とんでもないですッ！」

麻知子はぶんぶんと豪快に首を横に振る。

「もう雅治さんたら、麻知ちゃんをからかうのはやめてちょうだい」

恐縮しまくる麻知子を見て千鶴は夫をたしなめた。

雅治は悪戯をし終わった少年のように満足げにニコッと笑うと、千鶴と麻知子に「行ってきます」と言い車に乗り込む。

クラクションを小さく二度、そしてマフラーの排気音を大きく鳴らしながら雅治が出かけてしまうと麻知子はフゥッと大きく息を吐いた。その安堵のため息を聞いて千鶴が申し訳なさそうに謝る。

「ごめんね麻知ちゃん。ウチの人、時々ああやってわざと人をからかったり困らせたりするところがあるの」

「ううん。間違えたとはいえ失礼なことしたのは私だし。じゃ、行きましょ！」

今日は千鶴達が住む町内の主婦を対象にした、二ヶ月に一度の婦人会が開催される日だ。千鶴と麻知子は婦人会の行われる会館へ並んで歩きがてら、早速たわいのないお喋りを始める。

「ねぇ、千鶴ちゃん、雅治さん今日どうしてこんな時間に出勤しているの？」

麻知子は千鶴より六つ年上だが、お互い子供の年も近く、この土地に同時に越してきた時からの付き合いのため、二人はいつの頃からかそれぞれお互いを下の名前で呼ぶようになっていた。

「雅治さん、明け方に帰ってきたのよ。なんでも今度新しく創刊される雑誌の準備で今、仕事が大忙しみたいなの。さっきまでリビングで仮眠取ってたのよ」

「じゃあろくに睡眠取らないでまた会社に行ったの？」

「えぇ」

「まさに企業戦士って感じね。ウチの旦那にも見習ってほしいわー。ウチなんて毎日朝八時に家を出て夜六時にきっかり帰ってくるのよ。いやんなっちゃう」

「いいじゃない。毎日きちんと同じ時間に帰ってくるなんて。羨ましいわ」

冬馬と裕人の父で、麻知子の夫でもある啓一郎（けいいちろう）は役所に勤める公務員だ。

「そういえば麻知ちゃん、今日雅治さんね、明け方帰ってくる時に家の前で裕人くんに会ったって言ってたわよ？」

「裕人の奴、今日朝帰りしたのよ」

麻知子は大袈裟にため息をついてみせる。

「大学に行くようになってからもう遊んでばっかり。ちゃんと勉強してるんだか……」

「衍人くんなら大丈夫よ。昔からやる時はちゃんとやる子だったじゃない」
「そうだといいんだけどね」
肩を竦め、そう相槌を打った麻知子はここであることをふと思い出した。
「……ねぇ千鶴ちゃん。今朝、もしかしてまた冬馬そっちにお邪魔した？」
「えぇ来たわよ。素敵な自転車に乗ってね」
「やっぱりか……」
どうやら衍人の言っていた事は本当らしいわね、と麻知子は内心で思った。
「冬馬くん、今日も桃乃を迎えに来てくれたんだけどね、桃乃なにか用事があるみたいで朝早く出ちゃってたのよ。ごめんなさいね」
「千鶴ちゃんが謝ることないわよ。ウチの息子が勝手なことしてるんだから。こっちのほうこそごめんね」
「ううん。今日桃乃が帰ってきたら言っておくわね。明日は冬馬くんと一緒に学校に行くと思うわ」
「……ん……」
今の千鶴の言葉にどう返事をすべきか迷った麻知子は曖昧な返事をしてしまった。
もし桃乃が冬馬との登校を嫌がって先に出かけていたとしたら桃乃に申し訳ないし、しかし母親として冬馬が桃乃と通学したがっているのならさせてやりたいという親心もあったせいだ。
「で、でもね千鶴ちゃん。もし桃乃ちゃんが少しでも嫌がってるみたいなら無理に言わないでね？　絶対よ？」
千鶴は何を言うの、と言わんばかりの笑顔で微笑んだ。

「桃乃が嫌がるわけないじゃない。幼馴染の冬馬くんなのに」

（そうだといいんだけど……）

麻知子は心配する気持ちを隠し、千鶴に合わせて表面上は笑顔を見せた。

すれ違った心　＜2＞

「モモ！　お昼にしようよ！」

四時限目の古文が終わり楽しい昼休みの時間だ。
桃乃は沙羅と机を合わせ、教室で一緒にお弁当を広げる。

「あ～モモのこれ何？　美味しそう　！」
「これ？　厚揚げじゃないかな」
「ね、あたしのこのマスタードチキンと一個交換しない？」
「うん、いいよ」
沙羅は桃乃と交換した厚揚げをパクッと頬張る。
「すっごく美味しい！　よく味が染みてて！」
「ウチのお母さん料理得意なの」
「へぇ～。ウチのママ、和風料理はあんまり得意じゃないんだよね。どうしても洋風に偏っちゃうのよ。あ、もちろんママの作る料理は大好きなんだけどね」
そう言うと沙羅は手元のカラフルな弁当箱に視線を落とした。
「高校生になったんだし、そろそろお弁当ぐらいは自分で作らなきゃダメかなぁ。でもあたし、朝は弱いし……、そういえばモモって朝何時頃学校に来ているの？」
「んっと、今日は七時半前だったかな」
「そんなに早く！？　まだ部活も始まってないのにどうしてそんなに早く来ているの？」

冬馬のことを知らない沙羅に、幼馴染と顔を合わせたくなくて早く家を出たことを話せるわけもなく、桃乃は無難な返事をする。

「だって満員電車嫌いだし……」
「そんなに朝早く来てたらヒマじゃない？」
「う、うん、そうなんだけど……」
と答えながら桃乃は今朝、自分の身に起きたあの出来事を思い出す。
「ねぇ沙羅」
「なに？」
「今朝ここに男子が入ってきた、って言ったら信じる……？」
「この教室に？」
「うん」
「Ｗａｏ　！　スゴーイ！　だって女子校舎に男子が入るのってこの規則では禁止されてるよね？」
「そう。だから私もビックリしちゃって……」
「その男の子と話したの？」
桃乃はもう一度頷く。
「ねっ、ねっ、どんな感じの男子だったの？　二枚目？　カッコイイ？」

沙羅の反応は昨日の葉月とまったく同じで、桃乃は思わず噴き出しそうになった。
なんとかそれを堪えて朝に出会った要の姿をもう一度思い出して見る。
どちらかというと細身で繊細な感じのする要の雰囲気は向かいに住む衛人の持つ雰囲気に近いものがあった。

「ん……カッコよかった、かも……」
「見たかった～！　……でもその人、何しにこっちに来たんだろうね？　もし先生にでも見つかったら大変なのに、こっちによっぽど大切な用事でもあったのかな」
「さ、さぁ……」

要が禁を犯してこちらの校舎に侵入してきたのは自分の名前を聞きにきたということを知っている桃乃はその沙羅の言葉を聞いて赤くなった。その赤面した顔を見て沙羅が不思議そうに尋ねる。
「なんでモモ、赤くなってるの？」
「な、なんでもない！　なんでも！」
頬の熱を冷ますために手にしていたノートで自分の顔を仰ぎ始めた時、表紙に書かれている自分の名前が目に入った。
（へぇ倉沢桃乃っていうんだ）
自分の名を呟いた要の声が頭の中で流れる。
再び顔が熱くなってきたのを感じた桃乃は、沙羅に気付かれないよう、ノートで仰ぐスピードをわずかに早めた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇
◆◇◆◇◆

その日の夜、倉沢家のインターフォンが鳴った。
いつもは雅治の帰りが遅くてなかなか一家団欒の夕食が取れない倉沢家だが、今夜はその雅治が久しぶりに早く帰ってきたので和やかな夕食がちょうど終わった時だった。
「あら、こんな時間に誰かしら」
と千鶴が呟きインターフォンの受話器を取る。
「はい、どちら様でしょうか？　……あら冬馬くん？　どうしたの

？　え、桃乃？　いるわよ、ちょっと待っててね」
千鶴は通話ボタンを切るとキッチンに食器を下げている途中の桃乃を呼ぶ。
「桃乃〜」
「なぁに、お母さん？」
キッチン入り口のビーズ暖簾を片手で避け、その隙間から桃乃が顔を出す。
「今冬馬くんが来ているのよ。桃乃にちょっとお話があるんだって。冬馬くん玄関で待っているから早く行きなさい」
「エッ、冬馬が！？」
「もしお話長くなりそうなら上がってもらいなさいね」
「い、いいわよ！」
姉に続いて食器を下げていた葉月が茶々を入れる。
「何も恥ずかしがることないのに、お姉ちゃんってばさ」
「どういう意味よそれっ」
「ほら桃乃、早く行きなさい。冬馬くん、外で待っているんだから」
千鶴の催促に桃乃は仕方なくリビングを出て玄関に向かう。
サンダルを履いて玄関に出ると、上下真っ白のジャージを着た冬馬が玄関前の階段に座っていた。
振り返った冬馬の額には玉のような汗が流れていて息も少し荒い。

「……また走ってるの？」

桃乃は座っている冬馬の後ろに立ったままでそう呟く。
「あぁ、ニ月に入ってから受験であまり運動してなかったからな。久しぶりに走ってみたら思いっきりきつくなってんの。体、メチャクチャ鈍ってる」
冬馬は再び前を向くと首にかけていたブルーのスポーツタオルで汗を乱暴に拭いた。

「部活も冬になってからほとんどやってなかったもんね」
「夏の大会が終わっちまえば三年は実質引退みたいなもんだからな」
「うん」
その後しばらく会話が途絶え、冬馬の荒い息が少しづつ収まりはじめる頃、桃乃が先に口を開いた。
「……で、用事ってなに？」
冬馬は一瞬その返事を遅らせると、桃乃に背を向けたままで訊いた。
「お前、今日柴門要って奴に名前教えたのか……？」
自分から積極的に教えたわけではないが、それをどのように説明すればいいのか分からなかった桃乃の返答が一瞬遅れる。
「教えたのか？」
冬馬が背中を向けたまま再び訊く。
「か、勝手に見たのよ。私のノートに書いてあった名前を」
「一緒に昼飯食う約束もしたんだって？」
「ちゃんと約束したわけじゃ……」
桃乃がそう言いかけると冬馬はそこでいきなり立ち上がり、階段に片足をかけると桃乃の方を振り返った。
その冬馬の形相を見て驚いた桃乃は先の言葉を失う。
冬馬は恐いくらいに真剣な顔で桃乃の顔を見つめ、激しい口調で言った。
「いいか！？　あの柴門要って奴には絶対近づくな！　分かったなッ！？」

鬼気迫る冬馬の様子に少し臆しながらも桃乃は精一杯反論する。
「ど、どうして冬馬にそんなこと命令されなきゃいけないのよ！？」
「どうしてもだ！」
「そんなの理由になんないもん！」
不意に肩に痛みが走った。
冬馬が急に凄い力で桃乃の両肩を掴んだのだ。
「お前のために言ってるんだぞ！？」
冬馬の大きな掌は桃乃の細い肩を何度も揺さぶる。
「痛い！　痛いってば！」
「分かったなッ！？」
桃乃は全身の力を入れてやっと冬馬の手を振り払った。
「冬馬のバカッ！！」
桃乃はそう叫ぶと玄関に飛び込み、扉をバタンと勢いよく閉める。
「あら桃乃、冬馬くんには上がってもらわなかったの？」
リビングから千鶴の声が聞こえてきたが、桃乃はそのまま階段を上がって自分の部屋へと戻った。
部屋に入るとゆっくりとベッドの淵に腰をかける。
掴まれた時の鈍い痛みがまだ両肩に残っているのを感じ、そっとカーディガンを脱いでみる。するとまるで淡い桜の花びらのように、うっすらと赤い痣が冬馬の指の跡の形そのままに肌の上に散っていた。
（ちくしょう、あんな風に言うつもりなかったのに……）
桃乃を怒らせてしまった冬馬はタオルで口元を覆うと黙って自宅

へと戻る。
あんな乱暴なやり取りで桃乃がちゃんと分かってくれたかどうかが冬馬には気がかりだった。
本当はもっと順序良く筋道を立てて、要のことや、要と自分の衝突を上手く桃乃に伝えるつもりだった。しかしいざ「要に名前を教えたのか」と訊いた後、冬馬は自分で自分を抑えられなくなってしまったのだ。

ふと月明かりの下で自分の大きな手を見てみる。

桃乃の肩を掴んだ時、自分のこの掌に桃乃の両肩がすっぽりと収まっていたことに今更ながら冬馬は軽い驚きを覚えていた。
見つめていた自分の掌に思いきり力を入れて握り拳に変える。
理由は分からないが、要が自分を見る眼には憎しみがこもっている。そのせいで桃乃が傷つくような事態が起こることだけはなんとしてでも避けなければならない。

冬馬はそんな暗澹とした気持ちを抱えたまま、足取り重く自宅の扉を開けた。

すれ違った心　＜3＞

一夜が明けた。

冬馬によって両肩につけられた桜色の痣はさらに薄い色に変化し、この分なら今日中にはほとんど目立たなくなるくらいにまで回復しそうだった。

部屋の壁に取り付けてある大きな姿見に映るその痣が、昨夜の冬馬の異様な様子を桃乃の記憶から呼び覚ます。しかし、真っ白いカッターシャツに袖を通し痣が完全に隠れてしまうと、昨夜の出来事は本当にあったことなのだろうかという半信半疑の気持ちに変わっていた。

（そういえばあんな冬馬の顔、初めて見た……）

壊れそうなくらいの力で桃乃の両肩を掴み、柴門要に近づくなと叫んだ冬馬の顔は、今までずっと近くにいた幼馴染の桃乃ですら見たことがない表情だった。

朝食を取り、身支度を整えた桃乃は昨日と同じように家族に出かける挨拶をして玄関の外に出る。

家を出てすぐに桃乃の顔が強張った。

玄関先の道路に冬馬がいたのだ。

「……おっす……」

今朝の冬馬の声はいつのも声とは明らかに違う、気落ちした声だった。桃乃が出てくるのを待っていたらしく、クロスバイクに乗っている。

昨夜のことは本当にあったことではないのではないかという気持

ちでいた桃乃だったが、申し訳なさそうな冬馬の視線がその気持ちを打ち砕いた。

「……おはよ」

型通りの挨拶を返し、玄関の門を開けて道路へと出る。

そのまま駅の方向へと歩き出そうした桃乃を謝罪の言葉が引き止めた。

「昨日は悪かった」

一瞬だけ足を止め、感情を押しとどめた声で答える。

「……いいの、もう」

感情の起伏がまったく感じられないその返事を聞き、冬馬の顔に浮かんでいる後悔の色がより一層濃くなる。

「あ、あのさ、駅まで送っていくよ」

「いいの。歩いていく」

「昨日の詫びの代りに……さ。な……？」

もう一度、「いいの」と冬馬の申し出を断ろうとした桃乃だったが、リビングの窓から千鶴が微笑みながら見ているのに気付くと断るのを止めた。昨日、千鶴から「明日もし冬馬くんがまた迎えに来てくれたら今度はちゃんと一緒に行きなさいね。せっかく毎日来てくれているのに」と言われていたからだ。

家の中から手を振っている千鶴に不信に思われないように作り笑いを浮かべ、一度だけ手を振り返すと桃乃は仕方なくクロスバイクの荷台に腰をかける。そして「駅までいいからね？」と小さな声で念を押した。

「……あ、あぁ」

本心はカノンまで一緒に行きたい冬馬だったがこうやって素直に後ろに乗ってくれただけでも良かったと思い直し、駅に向けてクロ

スバイクは走り出した。

二人の家から駒平の駅は自転車なら五分ほどでついてしまう距離だ。

小さな抵抗の返事を一つしただけで後はおとなしく後ろに乗った桃乃の気持ちを推し量るかのように、クロスバイクはゆっくりと低い速度で移動する。

冬馬が反省しているのは充分に分かっているのに、クロスバイクの後部で揺れに体を任せながらポツリと桃乃は呟いた。

「……冬馬、変わったよね」

思わず冬馬は荷台の方を振り返る。

「変わった……？　俺が？　どういうことだよ？」

桃乃は冬馬の問いには答えずにもう一度同じことを口にした。

「変わったよ、冬馬」

たぶん昨夜自分が取り乱してしまった事を言っていると確信した冬馬は、それ以上追求せずにまた前方に視線を戻した。

沈黙の中、クロスバイクは走り続ける。

しばらくの間二人の間に起った音らしい音といえば、クロスバイクの車輪が低速で回転する音だけだった。

やがて駒平駅の前に着くと冬馬はブレーキをかけて桃乃の願い通りに一旦クロスバイクを止める。そして桃乃が急いで荷台から降りる前にまるで宣言するように言った。

「俺は何も変わってないぜ？」

それを聞いた桃乃は肯定も否定もしない。

代りに荷台から降りて礼を言った。
「送ってくれてありがと」
桃乃からお礼を言われた冬馬はまたためらいがちな声に変わる。
「な、カノンまで乗っていかないか？」
「ううん、ここでいい」
「桃太郎はまだ怒ってるんだな……」

クロスバイクに跨っている冬馬は明らかに落胆していた。
その言葉を聞いた桃乃は、今まで聞きたくても聞けなかった事を今ここで思い切って聞くことにする。

「怒ってないけど、一つだけ教えてほしいことがあるの」
要との事をもう一度改めて説明したかった冬馬は安堵の様子を見せる。
「答えたら後ろに乗っていくか？」
「……考えてみる」
とだけ答え、正面から冬馬に向き直る。
「聞きたいことって昨日の話しのことだろ？」
「ううん、違う。冬馬、どうして私のことを桃太郎って呼ぶの？二年前まではちゃんと私の名前呼んでくれていたのに」

自分の予想とは全然違ったその質問に冬馬の顔に驚きの色が走る。

「教えて。そしたら昨日のことは忘れるから」
しかし冬馬はクロスバイクのハンドルを握ったまま微動だにせず、その質問に答えなかった。
そんな冬馬にしびれを切らした桃乃は自分の想像している答えを口に出す。
「……私のことバカにしてそう呼んでるんでしょ？」

冬馬はハンドルから手を離し、慌てたように叫んだ。
「ちっ、違うッ！」
「じゃ、どうして？」

再び冬馬は沈黙した。
黙って向かい合う二人の横を通勤や通学の人々が足早に通り過ぎていく。

「言いたくないならいい……。冬馬、もう朝に私を迎えに来ないでね？」
最後にそれだけを一方的に伝えて、桃乃は冬馬に背を向ける。そして一度も振り返らずに改札口を通り、駅構内へと消えていった。
答えを言えない以上引き止めることも出来ず、冬馬はクロスバイクに跨ったままで離れて行く桃乃の背中を見送る。
やがて揺れる艶やかな黒髪が自分の視界から完全に消えると、桃乃の知りたがっていたその答えを自分自身の胸の中だけで呟いた。

（お前を意識し過ぎていて気恥ずかしいからだよ）

この答えはどうしても言えなかった。
しかし桃乃の事を「桃太郎」と呼ぶようになってから、自分達の間にすれ違いの溝が出来ていることは間違いのない事実で、このままでは自分は桃乃から完全に嫌われてしまう、という小さな焦りの芽がこの時初めて冬馬の中で生まれる。

桃乃を乗せた電車が目の前を走り去ってゆく。
それをじっと見つめながら、冬馬は自分に決断の時が訪れているのを感じていた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

車内の窓から冬馬がこの電車を見送っているのが見える。

つり革に掴まっている桃乃の胸がチクチクと痛み出した。「カノンまで送る」という冬馬の誘いを冷たく断った自分がとても非情なように思えたからだ。

なぜ自分のことを「桃太郎」と呼ぶのか、その理由は分からなかったが、少なくとも昨夜の事に関しては冬馬はきちんと謝罪し、充分に反省している様子だった。

それなのに「明日から迎えに来ないで」などと冬馬を思いきり傷つけるような台詞まで置いてきてしまったことを考えると桃乃の胸の中に後悔の気持ちが湧き起こり始める。

もし時間を戻せるとしたら、素直にカノンのすぐ側まで冬馬に送ってもらっていただろうなと思いながら桃乃はつり革を握り直す。

その後悔の念は電車が一駅進む毎に大きくなり、は出来ることならすぐにでも先ほどの言葉を撤回し、今すぐ冬馬に謝りたくなっていた。毎朝、自分を迎えに来てくれていたことに決して他意はなく、純粋な厚意だということを桃乃自身がよく分かっていたからだ。しかしすでに走り出してしまっている電車は今の二人の距離を縮めるどころか、逆に遥か彼方に引き離してしまっている。

谷内崎駅に着くと、カノンまでの道のりを桃乃はいつも以上にゆっくりとしたペースで歩き始めた。

あのオレンジの自転車のペダルを漕ぐ持ち主が自分に追いついて

くれるように。

カノンの正門がもうすぐ見えてきてしまう。しかしまだ冬馬は現れない。

後ろを振り返ってみても通ってきた早朝の通学路には誰もいない。

またしばらくの間、ゆっくりと歩いた。そしていっそのこと、この場所で冬馬を待っていようかと思った時、やっと背後から自転車の音が聞こえてきた。

なぜその音が聞こえてきた時にすぐに振り返らなかったのだろう、そしてどうして声をかけなかったのだろう、と桃乃はすぐに後悔することになる。

冬馬の方からきっとまた声をかけてくれる、そう思っていた桃乃は、後ろからクロスバイクの車輪の回転する音が聞こえてきているのに、前を見たまま気付かぬふりをして歩き続けていたのだ。

真横を通り抜けた風に、桃乃の髪がフワリと広がる。

風を巻き起こしたクロスバイクは一瞬で桃乃を抜き去り、ペダルを漕ぐ冬馬の大きな背中がみるみる内に遠ざかってゆく。

自分に声をかけずにそのまま追い越していったその姿を呆然と見つめる中、朝日に照らされたオレンジの車体はあっというまに視界から消え去って行った。

さっきよりも大きく胸がズキンと痛み、そしてやっと桃乃は気が付く。

後ろからクロスバイクの音がどんどんと近づいているのに一度も振り返らなかった自分の背中が、冬馬から見ればそれがたぶん“無言の拒絶”に見えていたことに。

あなたを信じられない

定例会議がまもなく始まる時間だ。会議開始の合図の音楽が校内に流れ出す。

カノンでは隔週金曜日の午後四時半から教職員全員が集まってそれぞれ授業内容が予定通りに進んでいるか、何か問題を起こしそうな生徒はいないかを報告し合う会議がある。

この会議は必ず全職員が出席することが義務づけられており、欠席することは許されなかった。

定例会議はカノンの理事も出席し、理事長の黒岩秀樹（くろいわ ひでき）が毎回議長を務めている。その恰幅のある見かけ通りの威厳ある声で、第一会議室に黒岩の第一声が響いた。

「皆さんお疲れ様です。では定例会議を始めたいと思います。今学期も新入生が入学して早二週間が経過したわけですが、先生方の方で何か問題が発生していることはありませんでしょうか？」

黒岩はこの自分の発言の後、会議室全体を見渡して教師一人一人の顔を見た。

会議室はシンと静まり返り、誰一人黒岩の発言に返答するものはいない。

「……特にないようですね。ではまず一年担当の先生方から報告していただきましょう。矢貫先生、お願い致します」

「はっはいッ！」

最初に指名された誠吾はガタガタと大きな音を立て、慌てて椅子から立ち上がった。

会議室の全員の目が誠吾に向けられる。

（あーあ……、俺、どうもこの雰囲気にはいまだに馴染めないんだよな……。しかもなんでわざわざスーツを着なくちゃいけないんだよ……）

この定例会議には全員スーツ着用で出席することが義務付けられている。

いつも愛用のジャージを渋々脱いで堅苦しいスーツを着なければならないこの会議は、誠吾にとってはかなり憂鬱なことだった。

「規則」という絶対的な権力を得た縦縞のネクタイは、誠吾の首元を容赦無く力任せにグイグイと締めつけてくる。とにかく一刻も早くコイツを外したい、そう思いながら誠吾は担当教科の進捗状況を報告し始めた。

「え、え～、で、ではわたくしの一年の体育のほうですが、現在のところは特にどのクラスも授業の遅れは出ておりません。生徒の授業への参加状況も良く、ほぼ全員参加しております」

即座に黒岩の鋭い指摘が飛ぶ。

「……ほぼ？　ということは参加していない生徒が若干名いるということですね！？」

「あ！　え、その、そうですね……まぁそういうことに……ハァ……」

誠吾の隣の席に座っていた緑は、その情けない狼狽ぶりを横から見上げて小さくため息をついた。

「矢貫先生。体育の授業をボイコットしている生徒は一体何名くらいいるのですか？」

「い、いえ！　ボイコットではないです！」

誠吾は大声を出し、何度も手を振って黒岩の発言を必死に否定した。

「じ、実は一年二組の女子クラスの生徒で笹目（ささめ）梨絵（りえ）という女生徒が

いるのですが、どうやら体が弱いようで体育の授業はいつも見学しているんです」

「……当学園では入学前、事前に生徒達の健康診断を行っております。その女生徒の個人履歴書に身体上の何らかの疾患が記載されていましたか？」

誠吾は痛い所を突かれた、という表情になった。

「い、いえ、ありませんでした」

「ではその女生徒が体育の授業を受けていないのは立派なボイコットではありませんか？」

黒岩は咎めるような口調で更に誠吾を責める。

「そ、それは……」

「矢貫先生、来週の定例会議までにその生徒になぜ授業を受けないのかを問い正して下さい。場合によっては学審会にかけますので」

「ちょっ、ちょっと待って下さいッ！　まだ新学期が始まってから二週間しか経ってないんですよ？　たまたま体の調子が悪かっただけかもしれないじゃないですか！　それをいきなり学審会にかけるだなんて……！」

――「学審会」とは「学生審問会議」の略称で、授業を受ける際に著しく態度の悪い者がいた場合、その生徒を呼び出してその理由を問い質し、素行を正す会議のことだ。この学審会で注意を受けても態度を更正しない生徒には、停学や退学への最後通知を言い渡す一つ前の勧告のような意味を持つ会議でもあった。

「ですからその前に矢貫先生からアクションを起こして下さいと言っているのです。当学園は伝統と規律を重んじる学校法人です。素行に問題のある生徒がいた場合は速やかに対処し、場合によってはその危険分子を排除しなければなりません」

「きっ、危険分子だなんて……！」
誠吾の額にサッと青筋が立った。
理由もろくに確かめずに生徒を危険分子呼ばわりした黒岩に向かって怒鳴りつけようとした瞬間、誠吾のスーツの上着のすそがグッと力強く引っ張られる。
「！？」
驚いた誠吾が上着を引っ張られた左隣を見ると、シレッと素知らぬ顔で緑がわざと誠吾から視線を外した。
何かを言いかけた誠吾が結局何も発言しなかったので黒岩はそのまま言葉を続ける。
「矢貫先生、来週の定例会議でこの件についてまた報告して下さい。では次に柳川先生、お願い致します」
次に黒岩に指名された緑はスクッと立ち上がった。
誠吾は仕方なく渋々と着席する。
「では報告させて頂きます。私の英語ですが、男子の一年三組がわずかに遅れております。ですが、これは来週前半には充分追いつく範囲内です」
「柳川先生、一年三組の授業が遅れるような原因が思い当たりますか？」
緑は黒岩の質問に落ち着いて答える。
「はい。昨日の授業中に生徒の一人が腹痛を訴えた後、少量ですが教室内で嘔吐しました。生徒を保健室へ連れていった後、教室内の後始末をした為に授業に遅れがでました」
「そうですか。来週中には遅れを取り戻せるのですね？」
緑はもう一度「はい」、と自信に満ちた返事をし、続けて発言する。
「それと先週、私が正門前のチェック担当だったのですが、新入生の中で異性同士で一緒に登校してきた生徒達がいました。この学園は異性の交流に関しては厳しい規則があります。男子生徒の方は私の担当クラスの生徒でしたので、引き続き指導していきたいと思っ

ております」

この緑の発言に会議室が少しざわついた。

そんなざわめきの中、誠吾の耳に「さすがは破壊魔ですね」と誰か他の教職員がこっそり呟く声が聞こえてきた。学園内で交際する生徒達を独自の強引な指導で幾度と無く壊してきた緑は、密かに職員の間でそんな影の名をつけられているのだ。

「分かりました。授業の方は問題は無い、ということですね。その生徒達の指導もよろしくお願いします。それとこれは私の個人的な意見なのですが……」

黒岩は眉をしかめて緑の全身に視線を走らせた。

「私から見ると柳川先生の服装は教職者としては少々過激すぎるように思えるのですがね？」

会議室の視線が一気に緑に集まる。

緑の豊かなEカップの胸を覆うスーツはいつもボディラインにピッタリと添っており、下のスカートはいつもタイトミニだ。

「もう少し若者を指導する教職者としてふさわしい服装をしていただけませんか？」

緑の左眉がピクリと小さく反応した。

「柳川先生、どうですかね？」

黒岩はすかさず畳み掛ける。

その言い方はあくまで丁寧にお願いをしている形だが、実際は有無を言わせない命令だということは会議室の職員全員が周知の事実だ。

「……わかりました。善処します」

渋々だが緑はそう言わざるを得なかった。

「結構です。では次の方にいきましょう」

そして黒岩は次の教師を指名したので緑は再び席に腰を下ろす。
隣席の誠吾が会議中ずっと何かを言いたげに何度も緑のほうをチラチラ見ていたが、緑はそれをすべて最後まで無視した。

一時間半後、やっと定例会議が終わり、やれやれと言いたげに教職員達は第一会議室を後にしはじめる。
「柳川先生！」
その波に乗って会議室から出ていこうとした緑を誠吾は呼び止めた。
緑は誠吾を見ると黙って足を止める。誠吾は急いで緑の側に近寄った。
「ちょっとお話があるのですが……？」
まだ大勢の教職員達が残る会議室を見渡すと緑は誠吾だけに聞こえる音量で言った。
「……三十分後、屋上で」
それだけを告げると緑はサッと身を翻し、会議室を出ていった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇
◆◇◆◇◆

カノンには男子校舎、女子校舎の他にもう一つ建物がある。
その建物は「中央塔」といい、男子校舎と女子校舎を繋ぐほぼ中間地点に建っている建物だ。
つい今しがたまで定例会議が行われていた第一会議室はこの中央塔の四階にある。
一階には教職員や学生が利用できる食堂や購買があり、二階が教職員室、三階が理事長室で四階から五階が会議室だ。屋上はさらにその上の六階部分に位置している。

誠吾はわざと少し遅れて一番最後に会議室を出るとそのまま屋上に向かった。
中央塔の内部は職員室や会議室が中心でこの建物にはいつも大勢の職員がいるので、この塔の屋上に生徒が上ってくることはほとんど無い。
その代わり男子、女子、どちらの校舎の屋上も常時施錠はしていないので、男子は男子校舎の屋上、女子は女子校舎の屋上で休み時間などにそれぞれたむろっているらしい。

ネクタイの結び目に指を突っ込んで襟元を大きくグィッと緩め、スーツの袖を大きく捲ると、誠吾はスーツの内ポケットから煙草を一本取り出して口に咥えた。
年季の入ったジッポーライターの蓋をカチッと鳴らし、火をつける。
段々と濃くなる赤い夕暮れ空に紫煙がゆっくりと立ち昇っていくのを見上げながら、誠吾は屋上で一人、ボーッと緑を待った。

六本目の煙草に火をつけた時、屋上の重い鉄の扉が軋んだ。
そして扉を大きく開けたせいで、一瞬だけ自分に向けて強く吹き

込んできた突風に少し驚いた様子の緑が現れる。
「……やっ矢貫先生！　こんなところで煙草なんか吸わないで下さい！」
扉を開け、誠吾の姿を見た緑は開口一番で注意を放つ。
（俺、いっつもこの女（ひと）に怒られてるよな）
誠吾は心の中だけでそう思い、苦笑した。
「なにをニヤニヤしているんですか！？　人を呼び出しておいてまったく……」
緑は文句を言いながら誠吾の側に来ると腰に手を当てた。緑お得意のポーズだ。
誠吾は今火をつけたばかりの煙草を指に挟み、緑にかからないように顔を横に向けて風下の方にゆっくりと煙を吐き出す。
「……先生、さっきなんで俺の背広引っ張ったんですか？」
「当たり前じゃないですか！　あなたあの時、黒岩理事長に歯向かうつもりだったでしょ！？」
「だって先生！　理事長のヤロー、俺の担当クラスの生徒に向かって“　危険分子　”　なんて言いやがったんですよ！？　許せますか！？」
「だからってあの時感情にまかせて怒りを爆発させていたら、あなた今頃どうなっていたか分かってるの！？」
緑は眉を吊り上げて誠吾を睨む。
「あの理事長を怒らせたらどうなるか、あなたが一番よく分かってるはずよ！？」
それを言われた誠吾は昔の自分のある失敗を思い出してグゥッと言葉に詰まった。

――　それは今から二年前、誠吾がこのカノンに赴任してきたばかりの頃、誠吾をはじめとする、その年赴任してきた教職員を迎える歓迎会が行われた席でのことだ。

元々陽気な誠吾は酒を飲むとさらにその性格に拍車がかかる。

その歓迎会の席で泥酔し、酔いに任せてある失態を演じてしまった誠吾は、次の日、黒岩から理事長室に呼び出されてその場で厳重戒告処分を受けたことがあるのだ。

「あ、あの時は先生にも本当にご迷惑をおかけしました……」

緑はフイッと顔を背けるとそのまま扉の方に体を向ける。

「とにかく、矢貫先生はもう少しその猪突猛進な性格を直して自重なさることね。じゃあ私はこれで」

緑が屋上から立ち去ろうとしたので、誠吾は慌ててまだ火をつけたばかりの長い煙草を手にしていた携帯灰皿に押し込むと緑の肩を掴んだ。

「柳川先生！」

肩を掴まれた緑は迷惑そうに振り返った。

「まだ何か？」

「せ、先生、あの、その、今日良かったら一緒に食事でも……」

「結構です！」

肩に置かれた浅黒い手を緑は強く払った。手を払われた誠吾の顔つきが急に変わる。

「キャッ　！？　」

誠吾に両手首を掴まれ、屋上扉の横の壁に強引に体を押し付けられた緑は叫んだ。

「なっ何をなさるんですか、矢貫先生！？」

誠吾は緑の顔のすぐ前にまで自分の顔を近づけた。ヘビースモーカーの誠吾の体に染み付いた煙草の香りが漂う。

「……あの生徒達に何かするつもりですか……？」

誠吾の押し殺した声に緑の背筋にゾクッとしたものが走る。

「あ、あの生徒って……？」

「俺のクラスの倉沢桃乃と、先生のクラスの西脇冬馬のことですよ」

緑はハッと息を呑んだ。

「な、なぜ先生がその子達の事を知っているの！？」

「俺、先生が正門チェックの週は早く来てるんです。先生は知らなかったでしょうけど」

そう言いながら誠吾は握り締めている両手に更に力を入れる。

「やっやめて下さいっ矢貫先生！」

「……さっきも会議で先生言ってましたよね？　“　生徒達を引き続き指導していく　”　って。また生徒の仲をぶっ壊すようなことをするつもりなんですか！？」

「わ、私は別に壊そうとなんてしてません！」

「柳川先生、他の教師の奴らが先生になんてアダ名をつけているか知ってますか！？　“　破壊魔　”　って呼んでるんですよ！？」

緑の目が驚きで一瞬大きく見開かれる。

「そんな馬鹿げた名前をつけられてるんですよ！　大体、先生はその気もないのにわざと男子生徒に親しく声をかけたり、厳しく指導をしたりとか、生徒達の仲をわざわざ壊しにいくような真似はもう

止めて下さい！　確かにここは規則で異性間交流は事細かに決められてますがお互いの校舎に入るな、とか男女が校内で顔を合わせるのは休み時間はダメで昼ならいい、とかそんなたわいもないもんでしょ？　柳川先生の指導はやり過ぎだし、何より間違ってます！」

大声で誠吾にはっきりとそう指摘され、手首を掴まれた状態の緑は黙って俯く。

「だからもうお願いですから止めて下さい……。俺、先生見ているとなんだか危なっかしくって……」

「あっ危なっかしいのはあなたのほうでしょっ！」

キッと顔を上げ、負けじと緑も大声を出した。

「さっきだって私が助けを入れなきゃどうなってたかしら！？」

「そ、それは感謝してます」

誠吾は素直に礼を言った。

「じゃもういいでしょ　！？　矢貫先生の仰りたいことは分かりましたからこの手を離して下さい！」

しかし誠吾は緑の顔を黙って見下ろしたままで、まだその手を離そうとしなかった。

「離して下さい！」

と緑がもう一度そう叫んだ次の瞬間、緑の唇を誠吾は乱暴に奪った。

「ッ！？　ンっ……！」

緑は必死に抵抗したが両手首をガッシリと抑えこまれていて身動きが取れない。

息苦しさで小さく開いた緑の唇にすかさず誠吾の舌が差し込まれた。

「んんっ……！」

口中にニコチンの苦い味が一気に流れ込んでくる。

たじろく緑の一瞬のスキをついて、誠吾は緑の舌に素早く自分の

舌を絡ませた。
その舌を自在に動かして、誠吾は緑の口中を器用に舐り続ける。
「んっ……んっんっ……」
ねっとりと絡み付くような誠吾のディープキスに緑の体の中心は痺れた。
緑の舌を散々舐った後、ようやく誠吾は口を離した。
そしてハァハァと息を切らしながら二人は互いの顔を見つめ合う。
「好きです」
誠吾は緑の手首を離さないままで告白した。
「俺、前からずっと先生のこと……」
「止めて――ッ！」
緑は絶叫した。
「あっあなたのことなんか信じられないわ！」
緑はそう叫ぶと掴まれていた両手を強引にふりほどき、逃げ出すように誠吾の側から離れた。
屋上扉が再び開けられる音が響き、誠吾が緑を引きとめようと叫ぶ。
「柳川先生！」
しかし無常にも屋上扉は大きな音と共に閉じられる。
一人残されてしまった誠吾はその扉を見つめ、黙って立ち尽くした。

大きな失意を抱えた誠吾はやがて壁に背を預けて寄りかかると、ずるずるとコンクリートの上に足を投げ出して座り込み、また内ポケットから煙草を一本取り出して火をつけた。

大きく煙を吸い込み、赤から紺色に変わりつつある夜空に向かってため息と共に吐き出す。その時、誠吾は指に挟んでいる煙草の吸い口がほんの少しだけ紅くなっていることに気がついた。

吸い口に残された置き土産を誠吾はしみじみと眺め、やがてそれをそっとまた口に咥える。

その後、屋上から夜空へと立ち昇る一筋の紫煙はしばらくの間途絶えること無く、いつまでも　ゆらゆらとたなびき続けていた。

彼が呼ばなくなった理由　【前編】

桃乃達がカノンへ入学してから二週間半が過ぎた。

そろそろ部活を決めなくっちゃ、と思いながら帰宅した桃乃は自宅の門鍵を外し、玄関前の階段を軽やかに上がる。

同じ部活に入ろうね、と沙羅と決めたのはいいのだが、お互いこれといって絶対やりたい部活があるわけではなく、特に気の多い沙羅が、

「ね、バレーとバスケだったらどっちがいい？」

「やっぱり琴っていうのもいいなぁ！」

「う～ん、でも放送部も捨てがたい……」

などと毎日意見がコロコロ変わるのでまだ決められずにいたのだ。

玄関前の階段を上り切った桃乃は、家の中に入る前にそっと冬馬の家を見る。

（冬馬、またバスケ部に入ったのかな……）

駒平の駅で「もう迎えに来ないで」と冷たく言い放ったあの日以来、冬馬は姿を見せなくなっていた。もし冬馬に会ったらあの時の言葉を取り消して謝りたかったのに、今はまだそのきっかけすら見つけることが出来ていない。

そして冬馬との間がおかしくなった原因の要も、女子校舎内で会った以降、昼食の誘いにまだ現れない。一体あの男の人と冬馬に何があったんだろう、と考えつつ桃乃は家の中に入った。

「桃乃？　お帰りなさい」

「お姉ちゃんお帰り〜」

リビングを覗いてみると千鶴と葉月がお茶の真っ最中だった。

焼きたてのスコーンのいい香りがする。

「ただいま」

「紅茶淹れておくから早く着替えてらっしゃい。ダージリンティーとバニラティー、どっちがいい？」

「ダージリンにしようかな」

「はいはい」

桃乃が制服を着替えに二階へ行ってしまうと、美味しそうにスコーンにかぶりついていた葉月がその動きを止める。

「ねぇお母さん、そういえば最近のお姉ちゃんってあんまりお母さんのお菓子食べなくなってない？　あたしの気のせい？」

「桃乃はね、少し甘いもの控えるようにしてるんだって」

「へ〜！　お姉ちゃんてばダイエットしてるんだ！」

葉月の瞳が途端にキラキラと輝きだす。

「負けてらんないわ、あたしもする！」

皿に戻したかじりかけのスコーンが、バランスを崩してコロンと横たわる。

「まぁ葉月、あなたまだ小学生なのよ？　今からヘンにダイエットなんかしたら体壊しちゃうんだからね？」

千鶴にたしなめられた葉月は頬を膨らませる。

「イヤ！　絶対するもん！　お母さん、今日の晩御飯はあたしいつもの半分でいい！」

「まぁ困った子ね……」

千鶴はしばらく思案顔をしていたがやがて優しく切り出した。

「葉月、いいこと教えてあげましょうか？　この間麻知ちゃんが言っていたんだけどね、裕人くんの好きな女の子のタイプってただ痩

せているんじゃなくて、部分部分に適度にお肉のある女の子なんですって」

「えぇっ裕人兄ちゃんが！？　それホントッ！？」

勢い込んで尋ねてくる葉月に千鶴は笑った。

「葉月は本当に裕人くんが好きなのね……」

「うん！　だってあたし将来裕人兄ちゃんのお嫁さんになるから！」

「フフッ、そうなるといいわね」

「なるもん！　まかせてといてお母さん！」

下の娘の無邪気な言葉に微笑みながらも、千鶴はふと思った。

（葉月と裕人くんはまぁありえないだろうけど、桃乃と冬馬くんてどうなのかしら……？）

もしそうなったら西脇家が親戚になるということだ。

向かいの麻知ちゃんとはとても仲がいいし、そうなったらいいのにな、と千鶴は思ったがふと自分の発想の豊かさにクスッと一人で笑う。

（いくらなんでも気が早過ぎるわね）

「お母さん？　どうしたの急に思い出し笑いなんかして？　なにに？」

「内緒！」

千鶴はそう答えるとティーサーバーに手を伸ばした。

いいタイミングで着替えた桃乃がリビングに下りてくる。

すぐに熱いダージリンが注がれたティーカップが差し出された。

「はい、桃乃」

「ありがとうお母さん」

「ねぇねぇお姉ちゃんはスコーン食べないんでしょ？」
葉月の探るような言葉に桃乃はあっさりと答える。
「食べるわよ？」
「えっ食べるの！？」
「何よ、食べちゃダメなの？」
「そういうわけじゃないけどさ、お姉ちゃんダイエットしてるんでしょ？」
「ダイエット？　そこまで真剣にはやってないってば。少し甘いもの控えているだけ。だからこのスコーンも一個だけね」
桃乃はまだホカホカと暖かいスコーンを手に取り、一口分を口に運ぶ。
「お母さん、コレとっても美味しい！」
「ほらね、葉月。確かに食べ過ぎもいけないと思うけど、何事も程々がいいのよ。分かった？」
千鶴にそう言われ、葉月は少し複雑な顔をしながら半分口をつけたスコーンにまた手を伸ばした。
「それに二人がお母さんのお菓子を食べてくれなくなったら寂しいなぁ」
「だ、大丈夫！　食べるよ食べる　！　お母さんのお菓子って本当に美味しいもん！」
慌てた葉月は大きな口でパクッとスコーンを頬張ってみせた。
その様子を見て千鶴が微笑んだ時、外からけたたましい車のクラクションが聞こえてきた。しかしただ強く鳴らすのではなく、何かに呼びかけているようなリズム音に葉月が一番に反応する。
「今の何かの合図っぽくない？」
間もなくインターフォンが鳴った。興奮した声で葉月が叫ぶ。
「ほら！　やっぱりうちだよ！」
葉月のその言葉にいつもはおっとりしている千鶴もつい感化され、

インターフォンに駆け寄った。
「はい、どちら様ですか？　……あらっ、衛人くん？」
訪問者を知った葉月が弾んだ声を出す。
「衛人兄ちゃんなの！？」
「ええ、いるわよ。今行かせるわね」
「あたしでしょ！？　行ってくる！」
椅子から立ち上がった葉月に受話器の送信口を手で押さえながら慌てて千鶴が引き止める。
「あ、ちょっと待って葉月。衛人くんが用事あるのは桃乃なんですって」
「ええ――っ！？　どうしてあたしじゃないの……」
千鶴は心底落ち込む葉月を気にかけながら桃乃を促した。
「ほら桃乃、玄関に出て」
「う、うん」

（衛兄ィが私になんの用事かな？）

桃乃が外に出てみると、玄関前には燦然と黄緑色に輝く車と、それ以上に輝く満面の笑みでその横に立っている衛人がいた。
「やぁ桃乃ちゃん！」
「衛兄ィ、この車どうしたの？」
「買ったんだ～！」
衛人は本当に心から愛しそうな目で車を見る。
「どうどう？　カッコイイでしょ？」
「うん。かっこいいオープンカーだね」
それを聞いた衛人はしたり顔で細くて長い人差し指を横に振った。
「ノンノン、桃乃ちゃんちょっと違うなぁ。オープンカーじゃなくてカブリオレと言ってくれない？」
「車のことなんてよく分かんないもん」

「ま、それもそうだ。男の車にかける壮大なロマンは女性には分からないもんだからなぁ」
　衍人はそう言うと優雅な身のこなしで助手席のドアをスマートに開ける。
「さぁどうぞお嬢様」
「な、何？」
「素敵な王子がこのグリーンの馬車でやって参りましたのでどうかしばしお付合い下さい」
「え～衍兄ィの運転で？　怖い……」
　おどけていた衍人は途端にガッカリした顔になる。
「おいおい、そりゃないだろ桃乃ちゃん！　俺、免許取ってもう丸二年経ってるんだぜ？　いつもオヤジの車運転してたんだから大丈夫だって！」
「でも……」
　渋る桃乃に、衍人は片手を顔の前に出して必死に拝む。
「ね、お願い！　ちょっとこの辺一周するだけだからさ！　この車今日納車されたばっかりなんだよ。この間から車が来たら冬馬が乗せろ乗せろってうるさくってさ。納車後の最初の同乗者が男なんて冗談じゃないって。縁起悪いどころじゃないよ。事故ったらどうすんだって。桃乃ちゃんもそう思うだろ？」
　桃乃は大真面目に語る衍人を見て吹き出した。
「ヘンな衍兄ィ～！　そんなことぐらいで事故るわけないでしょ？」
「いやいや、俺って結構そういうの信じてるんだよ。だからほら、一種のゲンかつぎみたいなもん？　俺のこの車で一番最初に助手席に座るのはやっぱり可愛い女の子じゃないとね」

「じゃあ別に私じゃなくてもいいじゃない。裕兄ィには女の人がいっぱいいるんだから」
「あの桃乃ちゃん？　その言い方、お兄さんは地味に傷つくんですけど」
「だって事実じゃない」
「そりゃあ女友達は沢山いるけどさ、実は今本命がいないんだよね……」

裕人はキーを指にかけてため息をついた。

「狙ってる女の子はいるんだけど落とすにはもうちょい時間かかりそうだしさ、冬馬は今夜帰って来たら乗せろ乗せろって騒ぐだろうし……。だから桃乃ちゃん、ここはひとつ俺を助けると思って！　ね？　ね？　お願いします！」
根負けした桃乃は仕方なさそうに笑った。
「……裕兄ィ、安全運転してよ？」
「もちろんですよ！」
裕人が再び助手席のドアを大きく開ける。
「さぁどうぞどうぞ」

階段を下りて車に乗り込もうとすると、リビングのガラス窓が物凄い速さで開いた。

「お姉ちゃんズルイ！」
「あれ、葉月ちゃん？」
急に現れた葉月に裕人は少し驚いた表情を見せる。
「もうっ裕人兄ちゃんも裕人兄ちゃんよ！　あたしというものがありながらなんであたしじゃなくてお姉ちゃんを誘うの！？　お姉ちゃんじゃなくてあたしを連れてって！」
「あ～そっか、どうしようかなぁ……」

衍人は困り顔で口に手を当てる。
「実はちょっと桃乃ちゃんに話しもあったんだよね……」
桃乃は驚いて衍人の横顔を見た。
今の今まで「話しがある」だなんて衍人は一言も言わなかったからだ。

「葉月、だってあなたこれから塾へ行く所じゃないの」
窓に近づいてきた千鶴が葉月をたしなめる。
しかし葉月の目がうっすらと涙目になっていることに誰よりもいち早く気付いた衍人は慌てて明るい声で解決案を出した。
「じゃ、じゃあさっ、今週の日曜、葉月ちゃんと二人でドライブするよ！　ね？」
「……ホント？」
「本当本当！　だから葉月ちゃん日曜空けておいてくれる？」
「うん！」
葉月は大きく頷き、向日葵のような笑顔になった。機嫌を直した葉月とは対照的に、千鶴は申し訳なさそうな顔で謝る。
「まぁ葉月の我侭で……いつもごめんなさいね、衍人くん」
「いえ、全然そんなことないですよ！　じゃ、ちょっとだけ桃乃ちゃんお借りしてこの辺をドライブしてきますんで！」

衍人は桃乃がシートに座ったのを確認すると「シートベルト締めてね」と優しく言い、助手席のドアを閉めて颯爽と運転席に乗り込んだ。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「どうどう？　桃乃ちゃん、このエンジンの回転音の上品さが分かる？　小回りも思ったより効くしさ、やっぱりヨーロッパ車には日本車にはないエレガントさがあるよね！」

浮かれている衒人はグイグイとアクセルをふかしてエンジンを回し、そのスピードのせいで助手席の桃乃は張り付いたような笑顔で少々うんざりしながら衒人の「愛車講釈話」を聞いていた。

屋根を収納してオープンにしているせいで、頬の横を風がものすごい勢いで撫でてゆく。

町内のあちこちを走りながらこの車がいかに素晴らしい性能を持っているかを熱く熱く衒人は語るのだが、車に興味の無い桃乃にとってそれはまさに馬の耳に念仏みたいなものでまったくもって無意味なことだった。

「でさ、リアウインドーの周辺にシルバーのアクセントを加えてるとこなんかすごくスタイリッシュだろ？　足回りはちょい硬めだけど立ち上がりの加速も思ったよりイケてるしさ、……桃乃ちゃん聞いてる？」

「うん、ちゃんと聞いてるよ」

得意満面の衒人の笑顔につられて桃乃もやっと本当の笑顔が出た。

「衒兄ィ、ホントに嬉しそうだね。なにせ初めて買った自分の車だもんね」

「うん、そうだよ。ほら、ウチのオヤジの車ってもろ『オジサンが乗ってる車です！』って感じの車だろ？　あれで女の子迎えに行くの恥ずかしかったんだけどもうこれからは大丈夫！　堂々と迎えに行けますよ！」

「……衒兄ィ、もしかして女の人を迎えに行くためだけにコレ買ったわけ？」

桃乃の鋭いツッコミにギクリとした衒人は運転席で背筋を伸ばした。

「ま、まさかまさか！　何を言うのさ桃乃ちゃんは！　俺、大学もちょっと遠いとこだろ？　だから通学用ですよ、通学用！」

「ふーん」

それを聞いた桃乃はシラッとした顔で前方に目線を戻す。

「あれれ！？　桃乃ちゃん全然信じてないでしょ？　ヒドイなぁ～」

「ねぇそれより衒兄ィ、この車って結構するんじゃない？　お金ってどうしたの？」

「もちろんオヤジから借りたよ。勤めるようになったら分割で返す約束なんだ」

「おじさん、出してくれなかったんだ？」

「あの堅物オヤジがそんな融通効くようなことしてくれるわけないじゃん！」

それを聞いた桃乃は衒人と冬馬の父親の姿を思い出して「そうね」と相槌を打ち、小さく笑った。

真面目で頑固、太い黒縁の眼鏡をかけた啓一郎はまさに「堅物」という形容詞がピッタリくるような人物だ。

「まぁそれでも利子をつけられなかっただけオートローンとかよりは幾分かマシだってくらいかな」

歩道橋のある大きな十字路に差し掛かると、ウィンカーを点滅させて車は右に曲がる。

「おっさすが！　これだけ大きくカーブしても地面にタイヤがしっ

かりと吸いついている感じがするよ！　桃乃ちゃんは分かる？」
「あのね、それと桁兄ィにもうひとつ聞きたいんだけど」
「なにかな？」
「さっき葉月に言ってたでしょ？　私に話しがあるって。それってなんなの？」
「あー……それね……」

桃乃は次の言葉を待ったが桁人はそのまましばらく何も言わずに車を走らせる。
桁人があまりにも何も言わないので桃乃は急かした。

「ねぇあまり良くない話なの？」
「う…ん、桃乃ちゃんにとっていいのか良くないのか俺にもちょっとまだ分かんないんだよね……」
意味不明で曖昧な桁人の返事に桃乃は顔をしかめた。
「もう、はっきり言ってよ桁兄ィ」
「うんちょっと待って、もうすぐ着くから」

車はいつのまにか急な坂道をグルグルと回りながら上っている。
小さな山なので車はすぐに頂上付近にまで着いた。

「やった、空いてる空いてる」
桁人は頂上付近の車道横にある二台しか停めることのできない小さなスペースに車を滑り込ませ、ギアをパーキングに入れた。
「ほら、見てごらん桃乃ちゃん」
桃乃はフロントガラス越しに見えるその光景に思わず声を上げた。

「ね？　ここ、ちょっと高さはイマイチだけどすごく見晴らしがいい穴場ポイントなんだよ。夜に来ると街のネオンが光ってもっと綺麗なんだよ」

「じゃあきっとここが衒兄ィが女の人を落とす場所の一つなのね？」

「大当たり！」

衒人はそうおどけた後、ふと助手席の薄着の桃乃を見て心配気な顔になった。

「桃乃ちゃん寒くない？　俺、いきなり連れだしちゃったもんね。幌閉めようか？」

「え、これ屋根あるの？」

「もちろんですよ！」

と自信満々の口調で衒人はセンターコンソールのスイッチを押した。すると車の後部からメタルトップのルーフが現れ、あっという間に上空を覆いだす。

「スゴーイ　！」

感動している桃乃の反応が嬉しかったのか、衒人は得意げな顔になる。

２０秒足らずでルーフは完全に閉じられ、車内は開放空間から密閉空間へと一気に早代わりした。

「さて、これで密室になったことだし」

衒人はそこで一旦言葉を切るとシートのバックレストを少し後ろに倒し、小さく微笑みながら桃乃を見つめた。

「じゃあその話しでもしてみましょうか？」

「ねぇ桃乃ちゃん、そんなに緊張しなくてもいいよ？　なにもここで取って食いやしないからさ」

一体何を言われるのだろうと助手席で身を固くする桃乃に、衍人が笑みを浮かべながら優しく言う。そんな衍人らしいジョークに桃乃はクスッと笑うと即座に切り返した。

「うぅん、衍兄ィなら分かんないよ！」

「おっそうきましたか！　ハハッ、参った参った！　今ので桃乃ちゃんが普段俺をどんな目で見てるかよ～く分かったよ！」

一本取られたな、と言いつつ衍人は声をあげて笑った。そしてその笑いが収まると次は考え込むような表情に変わる。

「ん～、でもそうだなぁ……、確かに桃乃ちゃんはとっても可愛い女の子だけどさ、俺にとってはあくまでも“　可愛い妹　”　って感じなんだよね。そう、葉月ちゃんと一緒でさ」

衍人はそこで一旦シートから身を起こすと、車内に流れていた音楽を消す。

「それに弟が好きな女の子取れないしね」

「エ……ッ？」

サラリと言った衍人の言葉に桃乃の胸は一瞬ドキッとした。

「桃乃ちゃんさ、本当はとっくに気付いてるんだろ？　冬馬が桃乃ちゃんのこと大好きなことさ。分かるよな、あれだけしょっちゅう冬馬の奴が分かりやすいことしてればなぁ。ねぇ？」

衍人はダッシュボードの上にあった外国産の煙草を手に取り一本口に咥えたが、桃乃の方を見て「吸わないほうがいい？」と尋ねる。
桃乃がコクリと頷いたので衍人は涼やかなその水色の箱を元の場所に戻した。
「ね、桃乃ちゃんはさ、冬馬のことどう思ってるの？」
しかし桃乃は正面を向いたまま何も答えない。
「もしかして嫌い？　もし冬馬のこと本当は嫌がってて困ってるなら、俺があいつにちゃんと言い聞かせるけど……？」
桃乃は眼差しを伏せ、正面を見たままでポツリと呟く。
「……冬馬は私のこと、本当に、す、好きなの……？」
「何言ってんの。もう好きも好き、超大好きでさ、桃乃ちゃんしか見えてない状態じゃん？」
「だって、冬馬は私のことを桃太郎って呼んでバカにしてるみたいなんだもん……」
「あぁそれね……」
衍人は小さく笑うと前髪を掻き上げた。
「俺知ってるよ？　なんであいつが桃乃ちゃんのこと、そうやって呼ぶようになったのか。これはたぶん俺しか知らないだろうなぁ」
「えっ本当!?　ねぇ教えて衍兄ィ！」
「うん、もちろん教えちゃうよ。でも俺から聞いたことは冬馬には内緒ね？　……えっと、確か一昨年だよね、ウチと桃乃ちゃん家でさ、霧里高原（きりさとこうげん）にキャンプに行ったの覚えてる？」
「う、うん」
「冬馬と桃乃ちゃんがあの時中二で葉月ちゃんが確か九歳、俺が大学入った年だったな。実のところ俺さ、本当はあのキャンプ行きたくなかったんだ。冬馬はいいけど俺もう十八だったしさ、今さら家族で仲良くキャンプなんてやってられないじゃん？」
衍人は相槌を求めるように言った。

「だから最初は行かないつもりだったんだ。でも途中で気が変わってね。俺その当時思ったんだよ。たぶんこれが家族最後のレジャーになるんだろうなってさ。冬馬だってそのうち親とレジャーや旅行になんて行きたがらなくなるだろうな、ってね」

　衒人が運転席に深く座り直した時、いつも好んで使っているフレグランスの香りがフワッと車中に広がる。

「だからここは俺が少々我慢して、西脇家最後の家族全員の思い出を作っとくべきかな、って思ったわけ。そんで結局俺も一緒に行ったわけですよ」

　衒人は「ちょっとは殊勝なとこあるだろ？」と言うと桃乃の方を見て笑う。

「で、あの高原にある川原でテント張ったじゃん？　俺達は釣り始めてさ。桃乃ちゃんと葉月ちゃんは浅瀬の方で泳ぐ、ってことになって。ね、この先覚えてる？」

　衒人は小さな微笑みの中に悪戯っぽい表情を混ぜながらそう尋ねる。

「お……覚えてるわよ！　衒兄ィと冬馬が……！」

　桃乃は真っ赤になりながら衒人を思いきり睨んだ。

「そうなんだよね、俺ら見ちゃったんだよね桃乃ちゃんのハダカ」

「裸じゃないでしょっ！？」

　完熟トマトのような顔色で桃乃は叫んだ。

「あ、失礼失礼。厳密に言えば下着姿だったね。可愛いかったな～、確か白のフリルついたブラだったよね？　真ん中にちっちゃいリボンついててさ」

「衒兄ィッ！」

桃乃の剣幕に衿人は運転席で身を竦めた。
「だ、だってあの時桃乃ちゃんいつまで経ってもテントから出てこないからさぁ、どうしたのかなと思って冬馬と覗いてみたんだよね。そしたら桃乃ちゃんちょうど着替えてたんだもん」
「だからって普通覗く！？」
「ごめん、ごめん。まぁでもあの時、もう十八だった俺は中二の女の子の下着姿なんか見ても別になんとも思わなかったんだけどさ、あの冬馬くんはちょっと違ったわけですよ」

当時のその光景を再び思い出した衿人は、こみ上げてくる笑いを堪えながら続きを話す。

「あの後の冬馬の様子、ずっとおかしかったんだぜ？　もう“心ここにあらず”って感じでボーッとしちゃってさ。釣竿に魚がかかってもあいつ全然気付かないんだ。傍で見ていてもあれはマジで面白かったよ。でね、俺思うんだ。たぶんあの時から冬馬は桃乃ちゃんを、幼馴染の女の子から一人の女性として初めて意識しはじめたんじゃないかなぁ、って」

“一人の女性として意識しはじめた”という衿人の言葉を聞いて、桃乃の頬は一気に赤くなり、同時に胸の中心を突かれたような衝撃を受ける。

「そ、そんなこと無いと思う……」
「いいや、間違いないって。ね、桃乃ちゃん、思い出してごらんよ。あいつ、あのキャンプの時までは桃乃ちゃんのことを普通に“桃乃”って呼んでいただろ？　でも俺の知る限りではあれ以降なんだ、桃乃ちゃんのこと一切名前で呼ばなくなったの」

衍人に言われて桃乃は必死に自分の記憶を手繰ってみた。
思い返してみるとそのキャンプの前までは冬馬は自分のことを普通に「桃乃」と呼んでいたような気がする。そして「桃太郎」と呼ばれ出した記憶は確かにすべてそのキャンプの後だった。

「だから冬馬は桃乃ちゃんのことバカにしてそんな風に呼んでるわけじゃないと思うよ。たぶん、あいつの一種の照れ隠しなんだとは思うんだけどね。あいつは不器用だからなぁ。要領が悪いっていうか、そういうところ全然俺に似てないんだよね。可哀想に、ウチの堅物オヤジそっくりだよ」
車中からウィンドーの外を眺めていた衍人は、山道の草むらに乗り捨てられている汚れた自転車に目を留める。
「あ、そうそう、それともう一つこっそり教えて上げられることがあるな。あいつ、クロスバイクも買っただろ？　あのリアキャリア、……あ、後ろの荷台のことね、あれ、きっと桃乃ちゃんを乗せるためだけにつけたんだと思うよ。俺、あれ買いに行く時に一緒に行ってやったんだけどさ、サイクルショップの店員達に“　せっかくの綺麗なフォルムが損なわれるから止めたほうがいい”　って何度言われてもあいつ、必要だからって言い張って頑として譲らなかったんだ」

「……！」

あの自転車にまつわる隠された事実を聞いた桃乃は、黙ったまま膝の上に置いてある自分の手をギュッと握りしめる。
「しかもあの車体の色ってオレンジだろ？　オレンジは桃乃ちゃんが昔から大好きな色だもんなぁ」
ついにこらえきれなくなり、桃乃は顔を上げ、勢い込んで衍人に訊ねた。
「ねぇ衍兄ィ、本当にそうなの！？　本当に私のために冬馬はオレ

ンジ色の自転車を選んだり、荷台をつけたりしたの！？」
「うん、そうだと思うよ。それしか考えられないじゃん。リアキャリアなんか特にさ。普通はあんなのわざわざつける必要ないからね」
「……」
それを聞いて再び俯く桃乃の反応を見た桁人がさりげなく次の秘密情報を流す。
「冬馬の奴さ、本当は別の高校に推薦の話しもあったんだ。だけど桃乃ちゃんがカノンを目指しているのを知ってあいつ、カノンを受けることにしたんだよ。知ってた？」
「ホ、ホント……！？」
「本当本当。まぁあいつも健気っていえば健気だけどさ、問題は桃乃ちゃんにその気持ちが全然伝わってなかったってことだよね。……で、お兄さんの話は以上で終了なのですが、肝心の桃乃ちゃんの気持ちはどうなのかなぁ？　ね、俺にだけコッソリ教えてくれない？」
しかし桃乃はそれには答えずに別のことを口にした。
「……実はこの間冬馬とケンカしたの……」
「あ、そうなの？　あぁ、それでか！　いや実はね、最近冬馬の奴、なんか妙にピリピリして常に考え込んだ顔してんだよね。母さんと俺、密かに心配してたんだ。そっか、桃乃ちゃんとケンカしてたからだったのか。そっかそっか」
“　妙にピリピリしている　”　という冬馬の様子を聞いて桃乃の胸が痛んだ。
「どう？　この桁人お兄さんでよかったら仲直りの橋渡しするけど？」
「うぅん、いい。自分でするから……」
「そっか、桃乃ちゃんがそうしてくれるのならもちろんその方が絶

対いいよ。でも何かあったらすぐ俺に言ってね。俺はいつでも桃乃ちゃんの味方だからさ。……あ、もうこんな時間か」

バックレストを元の定位置に戻し、手馴れた様子でギアを素早くチェンジすると衒人は車をゆっくりと発進させる。

「よし、じゃあそろそろお嬢様を邸宅へお返ししないとね」

自宅に送ってもらうまでの帰り道、再び衒人の一方的な愛車自慢が延々と始まっていたが、もう桃乃の耳には全く届いていなかった。車外を流れる景色を眺めながら桃乃は一人考え続ける。車窓の外はすでに暗くなり始めていて、頭の中で色々と考え事をするのには最適の環境だった。

（冬馬がそんなに私のことを好きだったなんて……）

衒人の声をＢＧＭに、冬馬のことだけに意識を集中して考えてみる。

こうして思い返してみると確かに今までの冬馬の行動はすべて衒人の言う通り、色々と自分を気にかけていてくれた為の行動だったのかもしれない、と今は素直に思えるようになっていた。

過去の冬馬との会話や、冬馬が今まで自分にしてくれた様々な事。それら一つ一つを思い出す度に、その思いは揺るがない確信へと変わっていく。ただ、二年前から「桃太郎」と呼ばれるようになったことが嫌でたまらないあまりに、自分自身がその事実に気がついていなかっただけだったのだ。

例え変なアダ名で自分のことを呼んでいても、いつも、どんな時でも、ずっと冬馬は自分に優しかったことに今更ながら桃乃はやっと気付いた。

(私……、今度冬馬と会ったら一体どんな顔をすればいいのかな……)

冬馬と二人できちんと話しがしたい、桃乃は外の景色を眺めながらそんなことをいつまでもグルグルと考えていた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

◆◇◆◇◆

時刻はもうすぐ夜の十一時になる。

倉沢家に桃乃を送り届けた後、すぐさま携帯で親しい女友達の一人を呼び出して二度目のドライブと洒落こんでいた衔人は上機嫌だった。

軽やかにハミングをしながら車のキーを目線の高さにまで持ち上げて足取り軽く二階へと昇る。

(そうだ　冬馬に桃乃ちゃんを車に乗せたことを話しておいたほうがいいな)

後でバレておかしな誤解をされるよりも正直に言っておいたほうがいい、と判断した衔人は自分の部屋に入る前に冬馬の部屋をノックした。

「冬馬く〜ん、ちょっといいかい？」

返事は無かった。

しかし部屋の中からは確かに人がいる気配がする。

裕人はそっと冬馬の部屋のドアを開けてみた。そして中にいた弟の姿を見て思わず叫ぶ。

「冬馬！？　お前何やってんだよ！？」

机に向かっていた為、ドアに背を向けていた冬馬は裕人の大声でようやく振り返った。

「なんだ兄貴か」

まだ制服姿の冬馬はそう言うと再び前を向いてしまった。

ヘッドフォンをかけて音楽を聴いていたせいで裕人のノックがよく聞こえなかったらしい。

裕人は慌てて室内に入ると部屋のドアを急いで閉める。

「おいっ何やってんだよ！　もしオヤジに見つかったらどうなるか分かってんのか！？」

「……ほっといてくれよ」

冬馬は椅子に座って腕組みをしたままイライラしたように裕人の方を見る。

「だってお前……あっ、それもしかしたら俺のじゃないか！？」

「前から思ってたけど兄貴のこれ、旨くねぇよなぁ。それにキツすぎ」

冬馬は裕人の部屋から勝手に持ってきた煙草を口に咥えたままフゥッと紫煙を吐く。

「それよりお前早くそれ消せって！　オヤジに見つかったらヤバイっての！」
「兄貴だって高校の時にはもう吸ってたじゃん」
「俺は高校の時は隠れて吸ってたよ！　部屋で堂々となんか吸ってなかったぞ！？」
「いいからほっといてくれって」
「お前この頃なんかイライラしてるよな……」
「だから吸ってるんだろ。吸うと少しは落ち着くんだ」

祈人は冬馬のあまりの不機嫌な様子に困惑しきっていた。
そして今日桃乃に冬馬の気持ちを勝手に伝えたことを今言っても大丈夫だろうかと一人悩み始める。

「……兄貴、考え事してるから一人にしてくんない？」

冬馬はヘッドフォンのボリュームを上げた。
ヘッドフォンから激しいロックの音が微かに漏れ聞こえてくる。
今はやはり話すべき状況ではない、と判断した祈人は、冬馬の要求通り部屋を出ていくことにした。
「冬馬、今日はそれでもう止めておけよ。スポーツマンが煙草なんか吸ってどうすんだ。それともう俺の部屋から煙草勝手に持っていくなよ。な？　分かったな？」
冬馬からの返事は無かった。
その様子を見た祈人は小さく息を吐く。

（今日の桃乃ちゃんとのドライブの話しをしたら何されるか分かんないな……）

ピリピリとした空気の中で制服姿のまま煙草をくゆらす冬馬の背中を見ながら、裕人は廊下に出ると静かにドアを閉めた。
背後でドアがそっと閉められる音がすると冬馬はまた大きく煙草の煙を吐き出す。

冬馬が煙草を吸い始めたのは半年ほど前の頃で最初はただの好奇心からだった。
裕人が好んで吸っているこの外国産煙草はかなり癖があり、最初のうちは紫煙をろくに肺に入れることも出来なかったが、度々裕人の部屋から一本、二本と煙草を勝手に取ってきてふかすうちにある程度は慣れてきていた。やがて煙草を吸うと妙に気持ちが落ち着くことに気がつき、今ではイライラした時にはこうやって煙草をふかすようになっていたのだ。
しかしここ最近、煙草を吸っても少しも気持ちが落ち着かないことに冬馬自身、とっくに気がついていた。そしてその理由も。

（七海中か……）

ヘッドフォンからは脳髄に響き渡るくらいの大音量でハードロックのサウンドがガンガンと鳴り響いている。白杜中学時代、何度か訪れたことのあるその中学を冬馬は必死で思い出していた。

「白杜のバスケ部がこっちに来て試合してた時、よくお前の試合見に行ってたんだ」

初めて教室で顔を合わせた時、要は確かにそう言っていた。
今はかなり薄れてしまっている自分の記憶から七海中で顔を知っている人間を冬馬は思いつく限り思い出してみる。
しかしいくら記憶の底をさらってみても七海中のバスケ部のレギュラーメンバーと自分と同学年のメンバー、そしてマネージャーく

らいしか思い出せなかった。
あとは最初に七海中に対抗試合に行った時に挨拶をしにきた生徒会長くらいだ。
その記憶の断片の中にはどう考えても要と会った記憶が無かった。

気がつくと煙草は咥えているすぐ側の部分まで灰になっている。
冬馬はフゥ、と最後の煙を吐き出すと傍らにあった空のコーヒー缶に吸殻を突っ込む。
そのまましばらく冬馬は考え事を続けていたがやがてヘッドフォンを外すと窓際に寄り、向かいの倉沢家の二階を眺めた。そして桃乃の部屋に灯りが点いているのを見た時、心臓の中心がぎゅっと縮まったような軽い痛みを覚える。それはあの日の朝、電車に乗って去っていた桃乃を再びカノンの通学路で見つけた時と同じ痛みだった。

あの時もう一度声をかけようとしたのを直前で止めたのは、振り向かない華奢な背中に気後れしてしまったからだ。
ペダルをひと漕ぎする度、桃乃との距離が近づく。その度に胸の痛みが増していき、結局は桃乃を避けるようにクロスバイクで追い越してしまった。声をかけずに桃乃を置き去りにしてきたあの日以来、今までのように気軽に桃乃の側に行く勇気を無くしてしまっている自分に、冬馬は焦りを感じ出していた。

（これからどうすりゃいいんだよ……）

乱暴に制服を脱ぎ捨てると桃乃の部屋の灯りから視線を逸らし、カーテンを荒々しく後ろ手で閉める。そして珍しく何も予習をせずにシャワーだけを浴び、ベッドに横たわると疲れきった顔でそのまま浅い眠りへと入っていった。

そしてあの娘はボイル海老になった

その日は朝からかなり気温が上がっていた。
職員室でバサバサと団扇を扇ぎながら、珍しく難しい顔で考え込んでいる様子の誠吾がいる。
今日で新学期が始まって三回目の金曜日。そして定例会議の日だ。
自分の担当クラスの笹目梨絵のことを今日の会議であの黒岩理事長に報告しなければならない。
梨絵になぜ体育をずっと見学しているのかをまだ聞き出していない誠吾は焦っていた。

（今日　笹目が出てくれれば問題ないんだがなぁ……）

そんな一縷の望みを胸に、誠吾は次の女子一年一組と二組の合同授業に向かう。グラウンドに着くともう女生徒達は全員集まっており、けらけらと楽しそうに騒いでいた。

「皆揃ってるかー！　じゃあ整列！」

誠吾の掛け声で女生徒達はお喋りを止め、きちんとクラス毎に三列に並ぶ。
「さぁ今日は走り高飛びをやるぞー！　お前達のピチピチパワーをこれでもかっていうぐらい目一杯見せてくれよー！」
途端に女生徒達がドッと爆笑する。
「やだー！　先生なんかエローい！」
「“　ピチピチパワー　”　だって！　死語よ死語！」
「それにさー、矢貫先生が言うとエッチっぽく聞こえない？」

女生徒達に一斉にからかわれて誠吾は頭を掻いた。
「俺が言うとそんなにやらしくなるか？」
「なるなるー！」
「セクハラ一歩手前って感じー？」
「あーそれ言える言える！　なんか妙にオジサン臭いのよね、先生はさ。まだ二十六歳なのにー！」

生徒達は口々に誠吾をからかうがその言葉には悪意はまったく感じられない。
好き勝手に色んなことを言っても、気さくなこの体育教師を慕っているのだ。

「お前らから見りゃ、どうせ俺はオジサンだよ！　じゃあ出席を取るぞ！　一組！　相田！　安西！　飯島！」
女生徒達全員の顔を見渡し、その中に梨絵の姿があることを確認した誠吾は出席を取り始めた。
「よし全員いるな。じゃあさっき俺がバーを用意しといたからそっちに移動するぞ！　駆け足！」
誠吾は首にかけている愛用の青いホイッスルを口に咥え、一定のリズムで軽快に鳴らしながら先頭に立って走り出した。
バーのある場所へ到着すると全員を体育座りさせ、本日の予定を説明する。
「いいか、今日はまず最初に背面飛びから始めるぞ。できればベリーロールまで行くのが今日の目標だ。じゃ早速一組から飛んでもらおうか」
「先生！　その前に先生がまずお手本見せてくれなくっちゃ！」
「そうよそうよ！」
女生徒達から茶々が入り、梨絵のことで頭が一杯だった誠吾は一人慌てる。
「お、おう、そうだったな。よし、じゃあ見本を見せるか。全員瞬

きしないで見ておけよ！」

誠吾は一メートルほどの高さだったバーを一気に押し上げた。

「えーっ先生そんなに高くして大丈夫　？」

「いいから見とけって！　じゃ背面で飛ぶぞ！」

そう叫ぶと誠吾はバーから充分な距離を取った。

「せんせー頑張ってー！」

女生徒の応援を背に、最初はゆっくり、そしてバーが近づくにつれドンドンとそのスピードを上げて、タン、という軽やかな音と共に誠吾はバーに向かって飛んだ。

首にかけていたホイッスルが同時にフワリと空中に舞う。その背中はバーの上を難なく超えた。

「先生スゴーイ！」

「やったぁ！」

その華麗なジャンプを見た女生徒達から大きな歓声が上がる。

マットの上から立ち上がると誠吾は女生徒達を促した。

「ま、ざっとこんなもんだ。じゃあ早速順番に飛んでみろ。踏み切る時は力強く、バーの上に落ちないように気をつけてな」

誠吾の指示で女生徒達はバーを元通りに低く下げ、順番にバーに向かって飛び始めた。誠吾はしばらくその様子を見ていたが、やがてそっとその場から離れると少し離れた木陰に座っている梨絵に近寄り、その場にしゃがむ。

「笹目……今日も見学か？」

梨絵は誠吾の顔を見た。

おとなしそうな顔をしているが芯の強そうな瞳の梨絵は、小さな声だがはっきりと答える。

「はい」

「なぁ笹目。お前一度も体育に参加してないだろ？　どうしてなんだ？」
「生理でお腹が痛いんです」
その返事を聞いた誠吾は一瞬唸り、困ったような顔をする。
「でもお前、もう三週間も経つのにずっと見学の理由はそれだろ？　俺、男だけどさ、さすがにそれはおかしいと思うぜ？」
「私、生理不順なんです」
「……ん～……」
梨絵の返事に誠吾は先ほどよりも長く唸った。
「笹目、それが本当なら病院に行ったほうがいいんじゃないのか？」
梨絵は誠吾の顔をじっと見つめる。
「先生、嘘だと思ってるんでしょ？」
「そ、そこまで言ってないけどさ……」
慌てた様子で馬鹿正直に答える誠吾を見て、固い表情だった梨絵の顔がほんの少しだけ緩んだ。
「……先生、私、妊娠してるんです」
「な、なにぃっ！？」
「嘘です」
「おっお前、教師をからかうなっ」
一瞬本気で驚いた誠吾は梨絵を叱った。
「すみません、先生」
梨絵は再び固い表情に戻るとペコッと頭を下げた。
走り高飛びをしている方角からはキャーキャーと楽しそうな声が聞こえてくる。
誠吾は再び説得を始めた。
「なぁ笹目、今日の体育に出てくれないか？」
「……」

「実はさ、もし今週も笹目が体育に出なかったら来週お前は学審会にかけられることになってるんだ」
梨絵は少し驚いた表情を見せた。肩上で切り揃えられた髪が小さく揺れる。
「学審会って『学生審問会議』のことですか？」
「あぁそうだ。指導で態度を改めない生徒に限って処罰をする、なんて建前はあるけどな、結局あの審問会に呼び出された生徒は最低でもかならず停学は食らっちまう。お前をそういう目に遭わせたくないんだよ」
それを聞いた梨絵はなぜか挑戦的な目で誠吾を見た。
「先生、なんだかんだ言って結局は私のためじゃなくて先生の保身のためなんでしょ？　自分の担当クラスから停学者が出るなんて困りますもんね」
「バカ言うな。別に俺はそんなことになっても屁とも思わねぇよ。だけどな、この学園で一度停学処分を食らうとその先は厳しくなるんだぞ？　どんなに筆記テストが出来てもまず間違い無く大学への推薦はして貰えない。それに次にまた何か問題を起こせば停学経験者はすぐにまた学審会への呼び出し、場合によっちゃ退学勧告だ」
誠吾はポンと梨絵の肩に手を置いた。
「なぁ、頼むから今日は出てくれないか。そうすればとりあえずは今日の会議でお前のことをなんとか庇えることができるんだ」
「……」
再び沈黙した梨絵は遠くを見て何かを考えているようだった。
「な？　笹目」
梨絵はそれまで合わせていた誠吾との視線を外し、小さく頷く。
「……分かりました。今日の体育出ます」
「そうか！」

その返事に安堵した誠吾は日焼けした手で梨絵の手を掴み、立たせる。
「よしっ行くぞ！」

梨絵は誠吾の後をついて歩きながら一瞬下腹部に手を当てた。
しかし前を歩いている誠吾はそんな梨絵の様子にまったく気付いていない。

「おーい、ちょっとストップ！　次は笹目が飛ぶから入れてくれな！」
今まで一度も体育に参加していなかった梨絵が来たので、女生徒達は急にザワザワと騒ぎだす。
「ねぇモモ。あの子、体が弱いわけじゃなかったのかなぁ？」
「うんそうだね……」
コッソリ話しかけてきた沙羅に相槌を打ちながら桃乃はこちらに歩いてくる梨絵を見た。気のせいか、太陽の下に出てきた梨絵の顔色はあまり優れないように見える。

「笹目、いいぞー！」

嬉しそうな大声で誠吾が梨絵を促す。
梨絵は一度走り出そうとする素振りを見せたが、急に口を片手で覆い、わずかに俯いた。やがて手を外し上を向いて大きく息を吐くと、一瞬の間を置いてバーに向かって走り出す。
バーの手前で勢い良く踏み切った梨絵の身体は宙に高く浮き、バーの上をかすることなく綺麗に飛びきった。
「よし！　クリアーだ！」
しかしそう嬉しそうに叫んだ誠吾の声に急に緊張感が走る。
「……笹目！？　おいっどうしたっ！？」
「う……うぅ……」

落下したマットの上で体を丸め、ボイルされた海老のような姿で急に苦しみだした梨絵に誠吾が駆け寄った。
「キャーッ！　血っ！？」
一人の女生徒の金切り声がグラウンドに響き渡る。
「さっ笹目ッ！　しっかりしろっ！」
誠吾は梨絵の身体を何度も揺さぶる。
走り高飛び用のくすんだ緑色のマットの上は、倒れている梨絵の下腹部あたりからじわじわと滲み出してきている鮮血で真っ赤に染まり始めていた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇
◆◇◆◇◆

その日の定例会議は定刻通りに始まった。
黒岩の会議開始の挨拶を聞きながら緑は隣の席を見る。しかしその席に着なれないスーツを着て、いつも窮屈そうに座っている誠吾の姿は無い。
「もうご存知の先生方もいらっしゃるかと思いますが、本日、一年女子の体育の授業中に事故が発生したという報告を受けております」
梨絵の事故のことを知らなかった職員達がざわめいたので、黒岩は「お静かに」と威圧感をこめた口調で場を完全に静めた。そして細めの銀縁の眼鏡を一度押し上げ、今日起きた事故の詳細をいつもの沈着冷静な声で職員達に説明し始める。
「本日、走り高飛びの授業中に一人の女生徒が腰から落ちた際激し

い出血を起こし、意識不明になったとのことですぐに救急車を手配致しました。授業を担当されていた矢貫先生はそのまま付き添いで病院に向かいました。先ほど連絡が入りましたのでもうまもなくこちらに戻ってくると思います。矢貫先生には戻り次第、ここで報告していただきます。では一年の先生方から今週の報告をお願い致します」

ゆっくりと黒岩が椅子に着席した際、いつもシンと静まり返る会議室だが今日はさらにその静寂が重く感じられた。

「で、ではまず私から……」

黒岩から一番近い席に座っていた一年物理担当の関澤寛司（せきざわかんじ）が萎縮しながらも立ち上がる。

「え～、私の担当する一年物理は特に授業の遅れもなく、生徒も皆優秀ですので滞り無く進んでおります。中には物理に非常に関心がある生徒もいて、授業が終わった後私の元に来て色々と質問してくる生徒もおり、嬉しく思っております」

「学生が勉学に熱中するということは彼らの本分でもありますからね。素晴らしいことです。関澤先生の教えもいいからでしょう」

黒岩は関澤を誉めた。

「いえいえ、とんでもありません。私の教えなど……」

関澤がそう恐縮した瞬間、第一会議室の扉がガチャリと開いた。

「……遅れて済みませんでした……」

第一会議室に現れた誠吾を黒岩がギロリと睨む。

病院から戻って会議室に直行してきた誠吾はジャージ姿のままだったのだ。

「関澤先生ありがとうございました。では今戻ってきましたので次は矢貫先生に早速報告していただきましょう」

黒岩は関澤に向かって手で座るように合図をした。誠吾の服装については今は不問にすることにしたらしい。

「さぁ矢貫先生」

黒岩に促され、誠吾は会議室に入る。そして空いている席の椅子を引き、そのままそこに立ち尽くした。

その場で沈黙を続ける誠吾のせいで、会議室内の時の流れが止まったままかのように感じる。

緑はそっと横目で誠吾の顔を見上げたが、いつもは日に焼けて血色のいいその顔に今はまったくと言っていいほど血の気が無かった。

「矢貫先生、早く報告を」

黙って突っ立ったままの誠吾に黒岩の叱責が飛ぶ。

「……りゅ、流産しました……」

会議室内で発した誠吾の第一声は少し震えていた。

「笹目梨絵は妊娠していました……。だから体育の授業にも出なかったんです……。そ、それを俺が無理に体育に参加するように言ったから笹目は……。俺が、俺が悪いんです……！」

「矢貫先生、それは矢貫先生のせいではないでしょう。その女生徒が妊娠していたことを先生は知らなかったのですから。授業に生徒達を参加させるのは教師の当然の職務です。それよりも問題はその女生徒が妊娠していたという事実です。矢貫先生、相手は誰か分かったのですか？」

「……笹目が個人的に受けている家庭教師の青年だそうです……」

黒岩の尋問は素早く、そして執拗に続く。

「女生徒のご両親のほうは？」
「……連絡を取ったら病院に駆けつけてきました…。ご両親も今回の妊娠のことはまったく知らなかったようです……」
「女生徒は今どうしていますか？」
「……まだ病院にいます……。検査のために後二、三日入院することになるかもしれません……」
「結構です。分かりました。いずれにせよ、その女生徒の体調が戻り次第、学審会にかけることにいたします」
「……やっぱり笹目を学審会にかけるんですか……？」
「当前のことです。当学園で妊娠したなどという生徒を置いておけると思いますか？　規則にのっとり学審会は行いますが、女生徒には退学していただかなければならないでしょうね」
「そ、そんな！　退学だなんて！」
誠吾は青い顔で叫んだ。
しかし黒岩はいつも通りの冷静な声で答える。
「矢貫先生、当学園はカノン慈愛学園ですよ？　カノンという名の通り、規範に沿った行動を取れない生徒はこの学園には一切必要無いのです」

「……あんたって人は……！」

椅子が大きく後ろに倒れる音がした。
倒れた椅子もそのままに誠吾はズカズカと黒岩の元へと詰め寄ると、右拳で黒岩の机の上を壊れるぐらいの勢いで叩いた。机が割れんばかりのその激しい音に黒岩を除く職員全員がビクッと体を竦める。
「なんで……どうしてそうも規則、規則でしか物事を考えられないんだ！　笹目は今回の流産で身も心も傷ついているんです！　なぜそんな可哀想な生徒をゴミでも捨てるかのように弾き出すんですか！」

「規則は重要ですよ、矢貫先生」

黒岩は今の誠吾の行動にもまったく動じないで再び眼鏡の淵を押し上げる。

「社会とはすなわち規則で成り立っている世界です。そして社会の規則はこの学園の規則よりもずっと煩雑で膨大です。ここでの規則が守られないようでは、社会に出てもまともにやっていけるわけがありません。そうは思いませんか？　矢貫先生」

「理事長ッ！　あんたの言っていることは正しいことかもしれないがそんなのはただの紙の上の絵空事と同じだ！　そんな杓子定規なやり方だけでは解決できない問題だってこの社会には一杯あるでしょう！？　それが分からないんですか！」

「……どうやらこの問題では矢貫先生と話し合ってもいつまでも平行線のようですね」

黒岩は眼鏡の淵ごしに誠吾に冷たい目線を向ける。

「もう結構です。では席におつき下さい。まだ会議は終わってませんので」

黒岩を見下ろす誠吾の両拳が震えていた。その拳を見た緑は咄嗟に立ち上がる。

「矢貫先生！　席について下さい！　次は私が報告いたします！」

しかし誠吾は緑のほうを一瞬チラッと見ただけで席につこうとはしなかった。

「……俺は……これで失礼しますっ！」

黒岩にそう怒鳴るように告げ、誠吾は足取り荒く会議室を出ていってしまった。

会議室のスリ硝子越しに足早に去っていく誠吾のシルエットが凄

いスピードで移動していく。

「矢(や)っ……」

今は会議中だということを忘れ、一瞬でも誠吾の後を追おうとした自分自身に緑は驚く。

会議室内は再び水を打ったように静かになった。

（バカ……こんなことしちゃってどうする気なのよ……）

「では柳川先生、報告をお願い致します」

呆然と立っていた緑の耳に抑揚の無い声で黒岩から報告を急かす言葉が響いてきた。

錯綜する恋模様　【前編】

誠吾が怒りに我を忘れて第一会議室を飛び出した頃、桃乃は沙羅と一緒に一年二組の教室にいた。
二人は今日の放課後、興味のある部活の見学に回っていたのだ。

「ねぇ沙羅、もうこんな時間だよ」
「そうだね、だいぶ暗くなってきたしどのクラブに入るか相談しながら帰ろっか？」
「うん」
並んで教室を出た後、廊下を歩きながら沙羅が悔しそうに言う。
「あ～自分の体が三つくらいあったらいいのになぁ」
「沙羅は入りたい部が多すぎるのよ」
「だってさ、せっかくだもん、色んなことをやってみたいじゃない？」
「でもさ、本当にそろそろ決めようよ沙羅」
桃乃は靴箱から外靴を取り出し、気の多い沙羅を促す。
「じゃあやっぱり球技関係がいいな、あたし！」
「球技？　琴はどうしたの？」
「だって今日の見学で足痺れちゃったんだもん！　テニスとかバレーとかバスケとかにしようよ！」
バスケ、と聞いて桃乃の脳裏に冬馬が浮かぶ。
衍人とのあのドライブ以降もまだ桃乃は冬馬と顔を合わせてはいなかった。

（冬馬、バスケ部に入ったのかな……）

そう思いながら沙羅と正門に向かって歩いていると、男子校舎に

隣接されている体育館の方から微かにホイッスルの音が聞こえてきた。
それに気付いた沙羅はワクワクした声で体育館を指差す。
「モモ、ちょっと外から覗いてみようよ！」
「えっダメだよっ。そっちの校舎や体育館には入っちゃいけないでしょ？」
「入らないってば。外から見るだけだもん、全然問題ないって！行こ行こ！」
沙羅は桃乃の手を取り、強引に男子用の体育館の窓まで引っ張る。
「わぁ～！　やってるやってる～！　ほら、モモも見てごらんよ！」
沙羅に何度もしつこく言われて結局桃乃もそっと体育館の中を覗いてみた。
中では体育館を半分に分けてバレー部とバスケ部で熱心に基礎体力を上げる運動をしている真っ最中だった。規則正しく鳴り続けるホイッスルの音に合わせ、バレー部は腹筋、バスケ部は腕立て伏せをしている。

（冬馬だ……！）

体育館の中に冬馬の姿を見つけた桃乃は、心の中でそう叫んだ。
背番号１４をつけた冬馬は必死に腕立て伏せをしている。額から流れ落ちる汗がコートにいくつもポタポタと落ちていき、大量の汗のせいで前髪が大きく乱れていた。
桃乃は吸い寄せられるように腕立て伏せを続けている冬馬の姿だけを目で追う。

「よ〜し腕立て終了！」
「腹筋終了！」
ホイッスルが最後に大きく鳴って止まり、バレー部とバスケ部のキャプテンの声がそれぞれ体育館に響いた。
元々地声の大きい沙羅がさらに大きなボリュームで叫ぶ。
「Ｗａｏ　！　みんな一生懸命だね！」
「シッ、沙羅！　気付かれちゃうよ！」
桃乃は慌てて沙羅をたしなめたが、一人の部員が沙羅の声に気付いた。

「あれっ？　見ろよ、あんな所から見学してる子がいるぜ？」
タオルで汗を拭いていた冬馬はそれを聞き、他の部員と同じように窓の方を見た。
その時、桃乃と冬馬の視線が完全に合う。
汗を拭く手を止めて驚いたような顔をしている冬馬から慌てて目を逸らし、桃乃はすぐにその場から逃げるように離れた。
「あれっモモ？　どうしたのー？」
正門に向かって走り出した桃乃を沙羅は急いで追う。
桃乃達が走り去って行った後の光景を見た冬馬は、片手を上げてバスケ部キャプテンの新開潤一（しんかいじゅんいち）の前に駆け寄った。

「キャプテン！」
冬馬の呼びかけに潤一が振り返る。
「どうした西脇？」
「あの、今少しだけ抜けていいですか？」
「まだストレッチと基礎練が終わったばかりだぞ？　もうバテちまったのか？」
「いえ、そうじゃないんスけど……すぐ戻ってきますから！」

「……おい西脇、そういうことは練習に入る前に済ませとけよな」
潤一はどうやら冬馬がトイレに行くと思ったようだ。
「すいませんっ！」
冬馬はそう言うや否や、稲妻のように体育館から飛び出して行った。潤一はバスケットボールを手に、その様子を見て呆れたように呟く。
「……西脇の奴、相当切羽詰ってたみたいだな……」
冬馬は体育館を飛び出すと男子校舎の玄関まで必死に駆ける。胸騒ぎがしていた。
桃乃が走り去った後すぐにどこからか要が現れ、その後を追っていった所を冬馬は見てしまったのだ。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇
◆◇◆◇◆

「モモ〜、モモってばちょっと待ってよ〜！」
沙羅は先を走る桃乃の名を呼び続ける。体育館から大きく離れると桃乃はやっと足を止めた。
「ふぅ、やっと追いついた！　ねぇモモ、どうして急に走り出したの？」
「だ、だって沙羅が大きい声出すからよっ。中の人に見つかっちゃったじゃないっ！」
「なんで？　別にいいじゃない。外から見ていただけだもん」

正門前で桃乃と沙羅がそう言い合っているところに突然要が現れる。

「やぁ」

「あっ……！」

要の姿を見て桃乃は小さく息を呑んだ。

桃乃と沙羅の前にやって来た要は二人に向かってもう一度笑いかける。

「久しぶりだね桃乃ちゃん」

「あれっモモ、男子に知り合いいたんだ？」

「あ、君の名前はなんていうの？　俺、一年四組の柴門要。この間桃乃ちゃんの彼氏候補に立候補させてもらったんだ」

「え～っ！　そうなのモモ！？」

沙羅は青みがかった瞳をクリクリと動かしながら桃乃と要を交互に見る。

「そんなの全然知らなかった～！　なんでモモ教えてくれなかったのよ？　あ、あたしは南沙羅！　モモと同じ一年二組よ。沙羅って呼んでくれて構わないから」

「じゃ俺のことも要でいいぜ。ちなみに沙羅ちゃん、君って実は結構有名人なんだよ？」

「エ、あたしが！？」

「そう。今年の新入生に背が高くてハーフの美女がいるって俺らの間でかなり噂になってるんだ」

「ホントッ！？」

沙羅は白い肌をピンク色に染めて喜んだ。

「本当本当。結構キミのこと狙ってる奴いるから気をつけたほうがいいよ？」

要はポケットに手を突っ込んだ体勢で小さく体を揺らしながら喋り続ける。
「それよりもうだいぶ暗くなってきたしさ、良かったら駅まで送ってってあげようか？　人数多い方が楽しいじゃん？」
「あたしは全然構わないけど、モモはどう？」
「私……」
桃乃は困った顔で沙羅の顔を見返した。“　柴門要には近づくな”　と言われた冬馬の言葉が頭に残っていたからだ。
要は足音を殺して桃乃の前にまでスゥッと近づくと、身をかがめてその顔を覗き込んだ。
「相変わらず警戒してんなぁ……。俺ってそんなに悪い奴に見える？　これでも紳士のつもりなんだけど？」
「そ、そういうわけじゃないけど……」
桃乃が一歩後ずさった時、男子校舎の方角から怒号が響く。

「柴門ッ！　」

聞き覚えのあるその声に桃乃が男子校舎に目をやると、バスケのユニフォームとシューズのままで息を切らした冬馬がこちらに走ってくるのが見えた。
「冬馬……！」
驚いた桃乃が口の中で呟く。冬馬は今にも掴みかからんばかりの勢いで要の前にまで一気に詰め寄った。
「お前一体どういうつもりだ！」
「あ？　どういうつもりって言われてもなぁ……。あぁ！　じゃあよ、こういうつもりだ、って言ったらお前どうする？」
要はニヤッと笑い素早く身を翻すと、桃乃の背後に回り後ろから覆い被さるようにその肩を抱いた。

「キャッ！？」
驚いた桃乃が小さく叫ぶ。
冬馬の顔色が変わったのを見て、要はまるで見せつけるように桃乃の肩をしっかりと抱き、面白そうに続けた。
「おっとストップ、ストップ！　女の子の前で乱暴なことしようとしちゃいけないなぁ。この娘がビックリして泣いちゃっても知らないぜ？」
「いいからその手を離せってんだよ！」
「おいおい西脇、それはお前に指図されることじゃないだろう？だってお前、別にこの娘の彼氏でもなんでもないんだからよ。その点、俺はこの間桃乃ちゃんに彼氏希望してるってことはもう伝えてるからな。ねっ、そうだよね、桃乃ちゃん？」
要は桃乃の肩を更に密着させるようにグイと引き寄せる。
「ほらほら、熱血少年はサッサと青春に汗を流してきてくれよ。俺はこれからこの娘達を駅まで送らなきゃならないんだ」
しかしそう言いつつも要は更に冬馬を煽る。
「……なぁ西脇、でもよ、もしお前がどうしてもやるっていうんなら今ここで相手してやってもいいぜ？　だけど一つ言っておくがな、俺は空手の有段者だ。大怪我しても構わないんならかかってきな」
要に肩を押さえられながらも桃乃は「冬馬やめて！」と叫んだ。
「そうそう、桃乃ちゃんの言う通りだ。この娘の前でぶざまな姿晒したくなかったらサッサと尻尾巻いて行っちまえよ」
「てめぇ……！」
その挑発に冬馬の体内の血液が一気に逆流を始める。我慢の限界を超えたその表情はすでに憤怒の表情に変わっていた。
桃乃が再び「ダメッ冬馬！」と叫んだのと同時に、

「ちょっとターイム！」

と沙羅が両手を広げて冬馬の前に立ち塞がる。

「もう！　こんな所でケンカなんかしたらさ、あなた達すぐに学生審問会議っていうのにかけられちゃうよ！？」

沙羅は冬馬を見上げて強い口調で続けた。

「あたし、あなたのことよく知らないけど暴力で解決するなんて野蛮だわ！　モモが要と一緒に帰ってほしくないならちゃんとモモにそう言えばいいじゃない！　そうすればモモがどうするかきちんと決めるわよ。ねっモモ？」

今この四人の中で完全に主導権を握ったのはどうやら沙羅のようだ。

「ホラ、だから要もモモを離して。あなたに送ってもらうかどうかはモモに決めてもらうことにするから！」

沙羅から催促され、要は渋々と桃乃の肩から手を離すとそのまま数歩後ろに下がった。そして今度は冬馬が桃乃の前にまでゆっくりと歩み寄る。

どんな顔で冬馬を見ていいのか分からない桃乃は伏目がちに視線を上げた。冬馬は桃乃を視線を合わせると、一呼吸置き、静かな声で伝える。

「桃乃……この間は本当に悪かった……。でもあいつと一緒に帰らないでくれ。俺が桃乃をちゃんと駅まで送るから……。頼む……」

（冬馬、今ちゃんと私の名前呼んだ……！？）

「桃太郎」ではなく、約二年ぶりにやっと自分の名前を呼ばれた桃乃は驚く。

つい今しがたまでの要に向かっての燃えるような目は今は静かで

穏やかな色に変わり、冬馬は桃乃の顔を見下ろして再度懇願した。

「頼む、桃乃……」

しばらくお互いを見つめ合っていた二人だったが、やがて桃乃が小さく「うん……」と頷いたのを見ると、沙羅は少し気の毒そうな顔をして要の方に体を向けた。

「残念だけど今日は要の負けみたいね」

要はチッと舌打ちをし悔しそうな顔をするとクルッと背中を向けた。去ろうとする要を沙羅は慌てて呼びとめる。

「あ、ちょっと待ってよ要！　どうせだからさ、あたしを送っていってくれない？」

「……はぁ　！？」

「だってなんかあたしお邪魔っぽいみたいだし……。エスコートするレディが二人から一人になっただけじゃない。ね？　いいでしょ？　帰り道で愚痴のひとつも聞いてあげるから！」

沙羅はそうまくしたてると強引に要の腕を取って引っ張る。

「ほら行こ行こ！　じゃモモ、あたしは要に送ってもらうから今日はここでバイバイ！」

「えっ沙羅　！？」

「じゃ～ね～！」

だがその要はまだ抵抗していた。

「ちょ、ちょっと待てって！　俺はそんな……」

「いいからいいから！　早く早く！」

結局沙羅は半ば引きずるようにして要を連れて行ってしまった。

正門前に静寂が訪れ、思いがけず二人きりになってしまった桃乃と冬馬は恥ずかしさからお互い視線を逸らす。地面に視線を落とした桃乃の視界に冬馬のバスケシューズが映った。

「……冬馬、この靴で外に出ちゃいけないんじゃないの？」

「あ、いけね！　靴履きかえるの忘れてた！」
冬馬はそこで初めて自分がバスケシューズを履いたままなことに気付く。
「ここで待っててくれ。部活早退してくるから」
「ダ、ダメよ冬馬！　そんなことしちゃ！」
「でもお前の友達も帰っちゃったし、こんな夜道一人で帰せねぇよ。いいから待ってろ。絶対にここにいろよ！？　絶対だぞ！？」
そうくどいくらいに念を押し、冬馬は身を翻すと男子校舎の中に戻っていってしまった。

カノンの正門前は沢山のライトが設置してあり、この場所だけは夜でもとても明るい。
一人残された桃乃は言われた通りにここでおとなしく冬馬が戻ってくるのを待つことにした。

しかし冬馬ときちんと話をしたいとあんなに思っていたのに、いざその時が近づくとどうやって話しをすればいいのか分からない。時を追うごとに増してくる緊張と不安に、桃乃の心の中心は大きく揺れだしていた。
どきどきと鳴り続ける心臓の拍動を感じながら正門の前で冬馬を待つ桃乃の視界に、中央塔の方角から歩いてきたジャージ姿の誠吾が映る。
「あ、矢貫先生！」
「ん？　倉沢じゃないか。こんなところでどうしたんだ？」
別の方角に去ろうとしていた誠吾が足を止める。
「今帰るところか？」
「はい」
「一人で帰るのか？　ここから駅までの夜道は人通り無くて危ないぞ？　倉沢、俺の車で駅まで送ってやるから一緒に行こう」
「あ、あの先生……」
「ん？　どうした？」
「こ、これから送ってもらうところなんです……」
状況を察した誠吾はニッと笑うと男子校舎を親指で指す。
「もしかしてこっちの校舎の奴にか？」
「は、はい……」

誠吾はその返事を聞くとからかうようにわざと大きな音を出して両手を叩いた。

「いやぁ、結構、結構！　若者は大いに恋をしなくっちゃな！　そうでなくっちゃ！」

その言葉で赤くなりつつも、今日の体育の事故のことで聞きたいことがあった桃乃は誠吾に尋ねる。

「あの先生、笹目さんの様子はどうだったんですか？」

「あ、あぁ……」

梨絵の名前を聞いた誠吾の顔が唐突に曇った。

そんな誠吾を見て今の陽気な態度は無理をして作っていた空元気だったことを桃乃は察する。

「……笹目はまだ検査の結果がでていないんだ。でもとりあえず命に別状は無いからお前達はなにも心配するな」

「そうですか……」

本当はもっと詳しく梨絵の様子を聞きたかったが、誠吾が男性だということもあって桃乃はそれ以上深く尋ねる事を止める。

「……皆、大変だよな色々と」

「えっそれどういう意味ですか？」

「あぁただの独り言だ。気にすんな」

誠吾は急に疲れきったように大きく息を吐き、ジャージのポケットから煙草を取り出すと噴水の石垣にドサリと腰をかける。

「じゃあ俺は倉沢の彼氏のツラでも見てから帰るとするか」

「あっあの、別に彼氏とかそういうんじゃ……」

「照れるな照れるな」

誠吾は笑いながら煙草に火をつけ、フゥッと煙を吐く。

しばらくすると男子校舎の方から軽快に駆けてくる足音が聞こえてきた。

「待ったか？」

制服に着替え、息を切らした冬馬が現れる。そしてその場に誠吾がいることに気付くと不思議そうな顔になった。

「あれ？　矢貫先生、ここで何やってんスか？」

「おぅ西脇か。倉沢を駅まで送ってやろうとしたらすげなく断られちまったところだよ。なんだ、倉沢の彼氏って西脇だったんだな」

緑が正門チェックをしていた週に朝早くこっそりとカノンに来ていたことを隠し、誠吾はわざと今初めて知ったふりをする。そして冬馬を見て笑いかけた。

「なぁ西脇……、お前、倉沢のこと大事にしてやれよ？　特にお前はそんなにでかい背丈を持ってるんだ。それと同じ位、ハートもでっかく持ってろよ」

「な、なんスか先生？　もしかして酔っ払ってるんですか！？」

誠吾は「そうだったらいいんだけどな……」と呟くと、咥え煙草のまま立ち上がった。

「あぁそれと西脇。柳川先生を毛嫌いしないでやってくれな」

「は？」

「……じゃ、俺ももう帰るわ。二人とも気をつけて帰れよ」

そして誠吾は職員専用の駐車場の方へゆっくりと歩き去って行った。

背中を丸め、どことなく哀愁を帯びたその後姿を見た冬馬が目を瞬かせる。

「矢貫先生って授業の時と普段とじゃ全然感じ違うな……。そう思わねぇ？」

「う、うん……」

とりあえずそう相槌は打ったが、それはきっと今日の体育の授業中に事故があったせいだ、と桃乃は直感していた。しかしあの事故の内容を考え、敢えて冬馬には何も言わないで黙っておくことにする。

救急車がけたたましいサイレンを鳴らしてカノンから出ていった後、笹目梨絵は妊娠しているらしいという噂はすでに今日一日で一年女子の間では公然の秘密だったのだ。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「……ったく、なんで俺があんたを送んなきゃいけないんだよ？」

カノンを出て駅までの帰り道、要は口から出る言葉はすべて不満気な言葉ばかりだった。

「まぁまぁいいからホラもっと早く歩こ！」

「俺に命令すんな」

「だってのんびり歩いていたらモモ達に追いつかれちゃうよ？　要だって今はモモ達とまた顔を合わせたくないでしょ？」

「だからってなんであんたと一緒に帰んなきゃなんねぇんだっての」

沙羅は横で文句を言い続ける要をチラチラと横目で見る。

「なんだよ、ジロジロと」

「……ふ～ん、これがきっと本当の要なのね」

「どういう意味だよ」
「だってさっきの要と今の要って全然感じが違うもん」
「あぁその通りだよ。さっきは思いっきり自分を作っていたからな」

今の要はニコリともしていない。

「……なぁ、いつもあの子と一緒に帰ってるのか？」
「うん。入学式の次の日に知り合ってからずっと」
「俺、あの子を落とすためにここんとこずっと正門のあたりで帰るの張ってたんだけどさ、全然捕まらなかったんだよな。いつもこんな時間まで残ってたのか？」
「うぅん違うよ。今日はあちこち部活の見学をしていたから遅くなったの。いつもはホームルームが終わったらすぐ帰ってたよ」
「じゃあ、俺が正門に行った時にはもう帰っていた後だったのか……。どうりで毎日張っても見つけられなかったはずだ」
「要ってば毎日こんな時間まで待ってたの？」
「ああ」
「すごいガッツだね……」

そう言いながらも沙羅はそこでさきほどふと気になったある光景を思い出す。

「ねぇねぇ要」
「なんだよ」
「あたしちょっと思ったんだけどさー、要って本当は別にモモのこと好きじゃないでしょ？」
「……なんでそう思うんだよ」
「だってさっきモモがあの男の子と帰ることになった時、要ってば舌打ちしてたじゃない。大好きな女の子に振られて舌打ちするなん

ておかしいもん」

いぶかしそうに沙羅を横目で見ていた要は一転して驚いた表情になる。

「へぇ～、あんた意外と鋭いじゃん！」

「もうなによ要ってば！　さっきは『沙羅ちゃん』なんて猫撫で声出してたくせに～！」

要はフンとそっぽを向く。

「ね、あの男の子とモモってどういう関係なの？」

「さぁな。今日俺があの子と話したの、西脇の奴があの子と一緒に登校してきたの見た日以来、まだ二回目だしな」

「なんかお互い名前を呼んでたし、昔からの知り合いっぽいよね」

「俺にとっちゃそんなことはどうでもいいことだがな」

その言い草に沙羅は小さく両肩を竦める。

「要ってさ、あのトーマっていう背の高い男の子となんかトラブルがあるの？」

「あんたに関係ないだろ」

要はこれ以上以上ないくらいの冷たい言い方で沙羅を突き放した。

しかし沙羅はそんな要の態度などまったく意に介せずに明るく答える。

「だってすっごく気になるんだもんっ！」

予想外の沙羅の反応に要は眉間に皺を寄せた。

「なんであんたが気になるんだよ？」

「うんっ、あたしさ、要のこと気に入っちゃった！　要はモモに振られちゃったみたいだし、じゃあ、あたしが要の恋人候補に立候補しちゃおっかな！」

「ハァ！？」

理解不能、と言わんばかりの要の声が夜空の下で響く。

「そこで要にお願いがひとーつ！　あたしのことはさっきみたいにちゃんと沙羅って呼んでよね！」

沙羅はそう言うと呆気に取られている要に向かって明るくウィンクをした。

沙羅と要が去り、そして誠吾の姿も完全に見えなくなった後、先に口を開いたのは冬馬だった。
「じゃ、帰るか」
「う、うん」
桃乃は小さく頷いたが、自分の発する言葉が少しぎこちないことに気付く。そのことを冬馬に悟られないようにできるだけ自然さを装って話しかけた。
「冬馬、部活早退して大丈夫だったの？」
「あぁ」
「そう。良かった。ならいいんだけど……」

しかし実際は違っていた。
勝手なことを言い出したペナルティとして、明日の朝、体育館のコート磨きを冬馬一人でやるようにキャプテンの潤一から言い渡されていたのだ。冬馬はその事実を隠し、心配顔の桃乃を安心させるために「全然大丈夫だって。気にすんな」と大きく笑ってみせる。

「それよりこの道ってよ、人通りが少ないから夜は結構危ないらしいな。変質者が出るって噂もあるらしいし気をつけろよ？」
「うん。あ、あのね冬馬……」
「ん？」
「あの……」
謝らなくちゃ、心の中ではそう思っているのだが言葉が出てこない。

「きょ、今日は自転車で来てないの？」

結局口から出てきたのはそれとはまったく関係のない話題だった。

「あぁ、昨日帰りに車の事故現場の跡を通った時、散らばっていたガラスの破片でタイヤがパンクしちまってさ。まだ修理してないから今日は電車で来たんだ」

「そ、そう」

「もしかして後ろに乗りたかったのか？」

「えっ」

あのクロスバイクにまつわる裏話を桁人から聞いている桃乃はその言葉にドキッとする。

「う、ううんっ……た、ただどうしたのかな、って思っただけ……」

「……そっか」

会話はここでしばらく途切れた。

お互いこれ以上ないくらいに意識しあっているのに、言いたいことがあるはずなのに、それぞれの胸に溜めたままで二人はひたすら黙々と歩く。

先週桁人が車の中でこっそりと教えてくれた冬馬の裏話の数々が何度も頭の中に浮かんできた。その話しを思い出す度に桃乃の胸は何かにぎゅうっと掴まれたかのように苦しくなっていく。

やがて道の先に谷内崎駅の街灯が見えてくると冬馬は急に足を止めた。いきなり立ち止まった冬馬に桃乃も足を止めて振り返る。

「どうしたの冬馬？　学校に忘れ物？」

「……いや」

「じゃ、なに？」

冬馬は一つ呼吸を置いてから言った。

「桃乃、この間はごめんな……」

その謝罪にまた胸が苦しくなる。

もうこれで何度あの夜の時を冬馬は謝ってくれているのだろう。

私はあんな冷たいことを言ってしまった事をまだきちんと謝っていないのに。

そう思い、いたたまれなくなった桃乃は急いで口を開いた。

「冬馬、私も」

「そんで、ありがとな」

「えっ……？」

今度は感謝の言葉を言われ、思わず桃乃は言葉を止める。

「じ、実は俺さ……」

冬馬は一旦足元に視線を落とした後、意を決したように再び顔を上げる。

「俺、桃乃のこと好きなんだ……！　メッチャメチャ好きなんだ！　だから桃乃があいつとじゃなく俺と帰ってくれて、今スッゲー嬉しいんだ！」

そして冬馬は一歩桃乃に近づき、緊張気味の声で言う。

「な、急で悪ィんだけど俺のことどう思ってるのか教えてくれるか……！？」

こんな場所で、しかもあまりにも突然の冬馬からの告白に桃乃は驚いて口ごもる。

「わっ、私……」

「桃乃、遠慮しないではっきり言ってくれていい。駄目でも覚悟できてる」

冬馬は真剣な表情でそう言いきった。しかしその顔を直視できな

い。

（……返事しなきゃ……！）

顔を赤らめて視線を逸らす。心臓の鼓動が激しすぎて痛いくらいだ。

衍人にすべての話を聞いてから、いや、本当はあの日の朝、クロスバイクでそのまま追い越された時の胸の痛みで、すでに自分の冬馬に対する気持ちにはとっくに気付いていた。

今の自分に必要なものはほんの一歩、前に踏み出す力。桃乃は俯いたままで精一杯の勇気を出し、自分の気持ちを伝える。

「……す、好き……よ？」

「マ、マジでッ！？」

嬉しさの余り、冬馬の声が裏返る。桃乃は小さくコクン、と頷いた。

「あの時、痛かったろ？　ごめんな」

桃乃の細い肩を冬馬はそっと掴む。

「うん……。後で見たら痣になってた……。でも、もういいの」

冬馬は済まなそうな顔でもう一度「ゴメンな」と言うと、優しく桃乃を抱きしめる。

「それより私の方こそごめんなさい…」

腕の中に抱きしめられているせいなのか、伝えたい言葉が素直に出せるようになっていた。

「なんで桃乃が謝るんだ？」

「朝、駅まで送ってくれた日…、『もう迎えに来ないで』なんて私言っちゃったから……」

「あぁそのことか……。確かにあれはちょっと堪えたけど、もうそんなことどうでもいいや！」
冬馬は明るく笑い、抱きしめている腕に力を入れる。
「なぁ桃乃」
冬馬が桃乃の柔らかい髪に顔を埋めながら囁く。
「キス、していいか……？」
「……！」
冬馬の腕の中で桃乃は息を呑む。
確かに今周りに人影はまったく無い状況だが、いきなりのことで桃乃には心の準備がまったく出来ていなかった。しかし状況は緩やかに流れてゆく。
「目閉じろ」
耳元で冬馬が再び囁く。
「ま、待って」
冬馬から身を離そうとしたが離れた瞬間にまた強く抱きしめられた。その拍子に手からスクールバッグが離れ、地面に落ちる。
「ずっとずっと好きだったんだ。昔からお前だけを見てた」
「冬馬……」
「好きだ」
強く強く、痛さを感じるわずか一歩手前の強さで抱きしめられる。
「すっげぇ好きだ」

冬馬から「好きだ」と言われる度に体から力が抜けていく。
「冬……」
「目閉じろ」
その言葉で思考までもが霧がかかっていくようにぼやけ、桃乃はおとなしく瞼を閉じ、気付くとごく自然に冬馬のキスを受け入れていた。

見えないはずの桃乃の閉じられた視界の中で冬馬の姿がぼんやりと映っている。
桃乃が爪先立ちをしなくてもいいようにその体を大きく折って、冬馬はそっと優しく背中を抱いている。

小さく震えながら体験する初めてのキス。
桃乃の心臓は壊れそうなぐらいにドキドキしていた。
やがて名残惜しそうに冬馬の唇がそっと離れる。
桃乃がゆっくりと目を開けると冬馬が再び抱きついてきた。

「あー俺、今メチャメチャ幸せッ！」

冬馬はまるで無邪気な子供のように、想いが通じた喜びを体一杯に表す。
またすっぽりと腕の中に強く抱きしめられて、桃乃はあることに気がついた。

「……冬馬の体から衍兄ィと同じ煙草の匂いがする……」

それを聞いてギクリとした冬馬は慌てて桃乃から自分の体を離した。

「あっ！　そっそれはえーと……、そうだ思い出したっ！　そういやこの制服、昨日兄貴の部屋に置きっぱなしだった！」
「それで匂いが移っちゃったのね」
「そうそう、マズくて……じゃ、じゃなくて！　ケムくて参るよ、兄貴の煙草はさ！」
「裄兄ィの吸ってる煙草って外国の煙草なんでしょ？　だからなんか独特な香りがするものね」
「そ、そうそう！」

（……もう煙草止めよう……）

なんとかその場をごまかせた冬馬は大きく胸を撫で下ろし、煙草との決別を本気で決意した。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇
◆◇◆◇◆

次の日、土曜の早朝に男子体育館の中で熱心にコートを磨く冬馬の姿があった。
その様子を影から見ている人間がいる。
「あれっキャプテン、そんなところに立って何してるんですか？　今日は朝練休みの日ですよね？」
体育館の扉を少しだけ開けて潤一が中の様子を見ていたのを、たまたま別の用事で学校に来ていた二年のバスケ部員が見つけて声を

かける。その後輩の声に潤一は振り返った。
「おう、おはよう」
「おはようっす！」
「いやな、昨日一年の西脇の奴が早退したいなんて言うからさ、ペナルティーとして今朝ここに来てコート磨きを一人でやれって言ったんだよ。でもここを最後まで一人でやるのはキツイだろうと思って俺もさっき来てみたらほら、ちょっと見てみろよ」
潤一は扉の隙間を親指でクイクイと指した。
体育館の中では嬉しくてたまらない、といった表情で冬馬が熱心にコートを磨いている。しかも時々「ヒャッホー！」などという陽気な掛け声まで出ているのだ。
「なんかメッチャ楽しそうですよね……」
潤一に言われて中を覗いた二年の部員が、潤一の言いたい事を代わりに言葉にする。
「……だろ？　西脇もそろそろ疲れてへこんでる頃かと思って来てみたんだが、なんであいつはあんなに嬉しそうにコート磨きやってんだ？」
解せない表情の潤一に二年の部員は楽天的に答える。
「なんかいい事でもあったんじゃないッスか？」
「そうなのかな……」
潤一は再び中を覗く。
「西脇冬馬、か……。あいつ、二週間前に入ったばかりの時はいつも眉間に皺寄せて気難しい顔してたくせになぁ……。今年の新入部員の中であいつの性格だけはまだよく分からんよ」
思案顔でそう呟く潤一の耳に、体育館の中から「ヒャッホー！」と叫ぶ冬馬の陽気な大声が再び聞こえてきた。

忘却と決意

冬馬がコート磨きに精を出している頃、誠吾は梨絵が昨日入院した天万台病院に再び向かっていた。

（手ぶらで行くのもなんだな……）

病院の側で営業している生花店を見つけ、一旦車を停める。店内に入ると店番をしていた十代とおぼしき少女が愛想良く誠吾を迎えた。

「いらっしゃいませ！」

「これから病院に見舞いに行くんで何か花を持っていきたいんだ。適当に選んでくれるか？」

「お見舞い用ですね、分かりました！」

長い髪を三つ編みにした少女は手慣れた様子でキビキビとした返事をする。

「あの、お部屋に花瓶はありますか？」

「花瓶？　いやちょっとそれは分かんねぇな……」

「じゃあバスケットタイプでお花作りますね」

「バスケットタイプ？」

「こんな感じになります」

少女は壁際の棚に置いてあった商品を持ってきた。

バスケットの中に粘土のようなものが詰められていてそこに花を生ける花篭タイプのようだ。

「これでも数日はお花もちますので大丈夫ですよ」

「あ、じゃあわざわざ作ってくれなくてもそれでいいよ」

「済みません！　これ他のお客様からのご注文で用意してある商品なんです！」
「あ、そうなのか。じゃあそれと同じヤツを頼むわ」
「はい！」
早速空のバスケットとリボンが白いテーブルの上に置かれる。
「あのー、お花を贈られる方が好きな花とかご存知ですか？　もし在庫があればそのお花を入れたいんですけど」
「あー、俺全然分かんねぇな……。でもそれをあげるのはちょうど君くらいの年の女の子だから君が好きな花を入れてくれよ」
「えっ私くらいの女の子に贈られるんですか？　ハイッ、分かりました！」

少女はなぜか急に嬉しそうな表情になり、テキパキとバスケットを作り出した。
色とりどりの花を美しく生け、最後に大きなピンクのリボンを持ち手の部分に絡めて作業は完了する。

「お待たせいたしました！」
誠吾は代金を払うと似合わないバスケットを抱える。
「どうもな」と言い店を出ようとすると、少女は「ありがとうございましたっ」と大きく礼をした後におかしなことを言い出した。

「上手くいくといいですね！」

「へ？」
少女の言葉に誠吾は振り返った。笑顔一杯な少女はウキウキした声を弾ませる。
「年が離れた恋愛って私憧れてるんです！　お客様はきっとこれから私ぐらいの年の女の子に告白しに行くところなんですよね？　お客様の想いが通じるように、花言葉　『愛の告白』　のモスローズ

をここに一本入れておきました！　ではまたお待ちしてまーす！」
「そ、そっか……ハハ……サンキューな……」
誠吾はひきつり笑いを浮かべ、この思い込みの激しそうな三つ編みの少女に軽く手を上げると花屋を後にした。

（想いが通じるように、か……。俺は通じなかったけどな……）

車に乗り込み、バスケットの中央に一本だけある柔らかいピンク色のバラに目をやりながら誠吾は思う。
先週の金曜日、屋上でのあの出来事。
以前、アルコールが入った状態で緑に告白のような真似事をしたことはあったが、素面の状態であれだけ本気で想いを告げたのは初めてだった。
しかし結果は緑に激しく拒絶され、終わりを迎えてしまった。
でも拒絶されるのは当たり前なんだ、と思いながら誠吾はハンドルを強く握りしめる。
アクセルペダルを踏む前に助手席に置いたバスケットに再び視線を走らせると、籠の中のモスローズがエンジンの始動で小さく震え出し始めていた。何かに脅えているようにも見えるその儚い様子に、誠吾は自分の想い人の姿を重ねる。

（……もうあの女（ひと）のことは忘れよう……。俺はそんな資格が無い人間なんだからな……）

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

梨絵が入院している部屋は四階の一番端の個室だ。バスケットを抱え、誠吾は昨日の夜も一度訪れた部屋を再びノックする。
「どうぞ」という声が聞こえたので誠吾はドアを開けた。

「あっ矢貫先生……？」

午前の光が降り注ぐ病室のベッドの上に梨絵はいた。
「よぉ、具合はどうだ」
誠吾は梨絵の側に行くとベッドの脇にあったパイプ椅子に座る。
「これ、見舞いだ」
「わぁありがとう先生！」
梨絵はベッドから起き上がり、バスケットを受け取った。
「可愛いお花ばっかり！　先生が選んだの？」
「いや、花屋の女の子に全部まかせてやってもらった」
やっぱりね、と言うと梨絵はバスケットを手に小さく笑った。
「……笹目、検査はどうだったんだ？」

梨絵は一瞬黙ったが無理に明るい表情で答える。

「はい、体の中はもう全部綺麗にしてもらったから大丈夫です。出血が少し多かったので鉄剤を何日か服用することになりました。……あと、もしかしたらこの先赤ちゃんが出来にくい体になったかもしれないって言われました」
「……そうか……」

誠吾の声が沈んだ。
「矢貫先生、先生のせいじゃないんですから気に病まないで下さいね」
「でも俺がお前を無理やり体育に参加させたせいで……」
「いえ、違います。先生は私のことを思ってあの時ああ言ってくれたんでしょ？　先生そう言ってたじゃありませんか。だから後のことは全部私が決めたことで私の責任です」
「でもな、笹目」
「いえ先生、聞いて下さい」
梨絵は誠吾の言葉を遮る。
「……先生、実はあのまま体育に参加しなくてもたぶん私流産していたんです。妊娠に気付いた時、彼と一緒に行った産婦人科の先生に切迫流産の恐れがあるから家で静養するようにって言われていたんです」
梨絵は真っ白いシーツの上に静かに視線を落とした。
「でも私はそうしなかった……。いつも通り学校に通ってました。私、妊娠に気付いてから心のどこかで思っていたんです。このまま流産すればいいのに、って……。でもそう思っていたくせに体育への参加だけは絶対にしないでおこうと思っていました。それは自分から積極的にその行為に荷担するのがイヤだったからです。あくまでも普段通りの生活をしてダメになることを望んでいたんです」
目を伏せた梨絵は寂しそうな表情で淡々と喋り続ける。
「……彼はまだ今年大学に入ったばかりなんです。彼は産んでもいいよって、大学を辞めて働くからって言ってくれたけど、彼の家庭環境とかを考えるときっと彼に責任は取れなかったと思います。でも私はたった一人で未婚の母になる勇気は無かった……。毎日どうしよう、どうしよう、と思いながら学校に通ってました……」

梨絵の目からポロポロと大粒の涙がこぼれだし、その涙はバスケットの花の上に落ちて朝露のように光る。

「先生、私あの時バーに向かって走りながら思ってたの……。『これでやっと楽になれる』って……」

「笹目……」

「ごめんなさい、先生……。わ、私っ、先生にまで迷惑をかけちゃ……って……！」

誠吾は嗚咽する梨絵の背中を安心させるように二度優しく叩いてやった。

「笹目……体大事にしろよ。後のことは俺にまかせておけ」

「は…い……」

しばらく梨絵は顔を手で覆い泣き続けていたが、やがてドアが開いて梨絵の母、笹目康江（ささめやすえ）が入ってくる。

「まぁ矢貫先生！」

康江が誠吾を見て驚いた顔をする。昨日病院から康絵に連絡を入れた誠吾は軽く頭を下げた。

「梨絵、どうしたの！？」

娘が泣いていることに気付いた康江が慌てて泣きじゃくる梨絵の側に駆け寄る。

「あの、今は笹目一人にしてやって下さい……」

誠吾はそう言うと康江に目で合図をして廊下に連れ出した。康江は周りに人気が無いことを確認するとすがるような目で尋ねる。

「矢貫先生！　梨絵は、梨絵はカノンを退学になってしまうのでしょうか　！？」

誠吾は苦しそうな表情でその問いに答えるのに一瞬躊躇する。
「それは……まだ分かりません……」
「なんとか先生のお力であの子をカノンに残して下さる事はできないのでしょうか！？」
「……俺はただの一介の教師でなんの力もありません……。ですが、今回笹目がこんなことになったのは俺にも責任があります。だから笹目のために精一杯尽力をつくします」
「どうかお願いします矢貫先生！　このままカノンを退学になってしまったらあの娘は一体どうなってしまうのでしょう！？　先生、どうか、どうか梨絵を助けてやって下さい！」
康江の言葉に誠吾は黙って頷いた。
「では俺はこれで失礼します……」
「どうかお願い致します、矢貫先生……！」
体を半分に折り、康江は深々と頭を下げた。哀れな娘の行く末を心配する必死な母親の訴えは、誠吾にとってとてつもなく大きな重圧となってのしかかる。
康江を安心させるようにもう一度大きく頷くと、誠吾は病院を後にした。駐車場から梨絵の病室を見上げた誠吾の視界に、たった今自分が置いてきた花篭が窓際に飾られているのが小さく見える。

（絶対助けてやるからな　笹目）

誠吾はそう固く決意すると重いプレッシャーを胸に足早に車に乗り込んだ。

「おっしゃ！　終わったぁ――！」
綺麗に磨きあげられた体育館の床を眺め、冬馬は満足げに額の汗を拭う。桃乃に告白して見事ＯＫの返事を貰った冬馬の気分は昨夜からハイテンションのままだ。

「お疲れさん」

潤一が体育館の中に入ってきてコートを磨き終えた冬馬に声をかける。
「あ、キャプテン！」
「ちゃんと真面目にやったみたいだな」
「はいっ！」
「よし、じゃあもうちょい付き合ってもらうか」
潤一は持参していたマイボールを潤一は冬馬の鼻先にスッと差し出した。そして素早く制服の上着を脱いでネクタイを外し、Ｙシャツの一番上のボタンも外しだす。
「どうだ西脇？　せっかくだから綺麗になったコートで　１ｏｎ１　でもやってみないか？」
「は、はいっ！」
すでにＹシャツ姿だった冬馬も慌てて同じように一番上のボタンを外した。
「じゃ俺からな」
新海潤一はキャプテンを務めているだけあってバスケ部の中で当然その実力は折り紙つきのプレーヤーである。入部早々その潤一と　１ｏｎ１　をしてもらえるチャンスに冬馬は興奮した。
潤一は持っていたボールを手から離し、軽快にドリブルを始める。

「お願いしますッ！」
冬馬がそう叫んだ瞬間、一気に潤一がゴールめがけてダッシュをする。
さすがにその動きは俊敏だ。しかしその素早い潤一の動きに冬馬はすぐに反応し、コートを強く踏み鳴らしてその行く先を阻む。
が、潤一はレッグスルーの後、クルッと背を向け身軽に半回転すると、そのままゴールめがけていきなりシュートを放った。ボールはまるで自らの意思のようにゴールのリングポストの中にあっけなく飛び込んでいく。

（やっぱすげぇ……）

まったくといっていいほど動きに無駄が無い。潤一の実力は分かっていたつもりだが、開始わずかであっさりとゴールを決められ、冬馬はあらためてそのバスケセンスに驚愕する。そんな冬馬の内心を盗み見たかのように潤一が激を入れる。
「西脇、気合入れろよ？」
「ハ、ハイッ！」
突き放されないよう冬馬は必死で喰らいつくが、点差はジリジリと離されて行く。突っ込んでくるかと思えばいきなり引き、スリーポイントラインの外から華麗にゴールを決めてくるため成す術がない。

三十分後、大きく息を切らしている冬馬を見た潤一が、ドリブルを止めて制服の上着を手に取る。
「だいぶバテてきたな。今日はこんなところで勘弁しといてやるか」
「ま、まだ大丈夫です！　お願いします！」
潤一に倍以上のポイント差をつけられている冬馬は食い下がった。

「お前なかなか負けず嫌いなんだな、西脇」
熱くなっている冬馬を見て潤一は笑いながら上着を肩にかける。はだけられたシャツの襟元の間から銀のチェーンネックレスがキラリと光った。
「でもその姿勢、バスケットマンとしては合格だ。ま、でも今日はもう止めとけ。お前、コート磨きで疲れてるはずだぜ？」
「あれくらい全然ですよ！　お願いします！」
「……なぁ西脇、お前バスケ始めて何年になるんだ？」
潤一はふと思いついた、という感じで冬馬に尋ねる。
「え？　えっと、小学五年の時からだから今六年目です」
「俺は小三の時からで十年目だ」
潤一はその場で一度だけボールをコートに強く打ちつける。
「たぶん今のお前じゃまだ俺に勝つことは出来ないな。経験と実績が違いすぎる」
決して認めたくはないがやはり潤一の言う通りだと冬馬自身も思った。
悔しそうに唇を噛む冬馬に潤一は再び笑いかける。
「でもな、今日お前とやってみてわかったよ。西脇、お前なら一年レギュラーも夢じゃないかもな」
「ほ、本当ッスか！？」
「あぁ。だが死に物狂いでやれよ？　ここで一年がレギュラーを取るなんて今まで例が無いんだ。俺以外ではな」
潤一は手にしたボールを素早くパスする。
「期待してるぞ、西脇」
「ハイッ　！」
体育館に気合の入った返事が響き渡る。潤一からの激励とボールをしっかりと受け止め、冬馬は全力で頷いた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇
◆◇◆◇◆

その頃、倉沢家では一家総出で物置の整理が始まっていた。
「あらあら、もう使わなそうな物って結構あるものね」
予想以上の沢山の不要物の数に、頬に手を当てた千鶴が驚いている。そんな妻の様子を見ながら雅治がやれやれと言いたげに呟いた。
「千鶴はなんでも仕舞いこむ悪いクセがあるからな」
「だって、また使うことあるんじゃないかと思ってついつい……」
両親と一緒に整理を手伝っていた桃乃は物置の奥から綺麗な模様がついた小さな缶を見つけた。

（わぁこの缶懐かしい……！）

缶を開けると直径四センチほどのほんのりとピンク色の石が一つ入っていた。
その石を手に取って見る。見ようによっては微妙なハート形に見えるその小さな石は桃乃の手の中でコロコロと踊った。
（これ　確か幼稚園の頃に冬馬が見つけて貰った石なのよね）

「これももういらないな？」
雅治が千鶴を呼び次の決断を促す。
「そうねぇ……」
千鶴は雅治の前にある屋外用大型バーベキューセットについて判

断を決めかねていた。
「もう今更家族でバーベキューなんてこともしないだろ？　これが一番場所を食ってるんだ。な、千鶴、これ捨てようよ？」
「そうねぇ……これ一昨年に西脇さんのお宅と一緒に行ったキャンプの時以来、全然使ってなかったものねぇ……」
「よし、じゃあ捨てるぞ」
雅治がよいしょ、と言いながらバーベキューセットを物置から出す。
その後を一緒について出た千鶴は急に何かを思いついたように嬉しそうな声を出した。
「ね、じゃあ今晩はこれを使って庭でバーベキューしましょうよ！」
「庭でバーベキュー！？」
「えぇ！　桃乃や葉月がもっと小さかった頃はよくやってたじゃないの。捨てる前に最後にもう一度使ってあげましょうよ」
「用意が面倒じゃないか。材料切ったり炭をおこしたりさ……」
「材料は私がいつも用意してるでしょ。雅治さんは炭をおこしてくれるだけでいいわよ」
「うーん……」
乗り気ではない雅治はなんとかこの面倒な事態を回避しようと娘達に同意を求める。
「なぁ桃乃、葉月、お前たち庭でバーベキューなんてしたいか？　したくないだろ？」
しかし雅治の思いとは裏腹に、「あたしやりたーい！　面白いもん！」と葉月が真っ先に手を上げる。
「桃乃はどうなんだ？」
「私はどっちでもいいけど？」
「そ、そうか……」

雅治の思惑は完全に外れてしまった。反対に賛同者が増えた嬉しさで千鶴が声を弾ませる。
「じゃ決まりね！　あっ、それじゃせっかくだからお向かいの麻知ちゃん達もお誘いしてみようかしら？」
「エエェッ！？」
「あらどうかしたの桃乃？」
「う、ううん別に！」
桃乃は慌てて手を振った。
昨夜カノンからの帰り道の途中、冬馬から好きだと告白されてキスされたことが一気に頭の中を駆け抜ける。昨日の今日で顔を合わすだけでも恥ずかしいのに、お互いの家族を囲んでバーベキューをすることになりそうな事態に桃乃は動揺した。
（あ～こんなことならどっちでもいいなんて言わないで反対しておけばよかった……！）
しかしさっきまで面倒臭そうだった雅治は冬馬の父、啓一郎と飲めるかもしれないと知って急に上機嫌になる。
「それはいいな。啓さんと飲むのも久しぶりだ」
「じゃあ私、ちょっと麻知ちゃんの家に行ってお誘いしてくるわ！」
千鶴はレースのエプロンを外すと向かいの西脇家に小走りで走っていった。
「神様、どうか裕人兄ちゃんが来ますように……！」
向かいへ出かけた千鶴の後姿を見送りながら小さな手を合わせ、葉月が祈るような声で呟いた。

「冬馬!?　いい所に帰ってきた!　あんた今日の夜、なんか用事あるの!?」

コート磨きを終え、自宅に戻ってきた冬馬に気付いた麻知子がリビングから飛んでくる。

「何だよ帰ってきていきなり」

「今晩ね、倉沢さん家の庭でバーベキューやるんだって!　それでウチも良かったら一緒にどう?　ってお誘いがきたのよ」

その瞬間、玄関先で靴を脱いでいた冬馬の体が小さく反応する。

「それで材料を用意する都合があるからさ、我が家の参加人数を千鶴ちゃんに連絡しなきゃならないのよ。冬馬はどうする?」

「い、行く行くっ!」

「肉好きのあんたなら絶対参加すると思ったわ!」

勢い込んで即答した息子の様子に噴き出すと、麻知子はすぐに倉沢家に電話をかけた。

「あ、千鶴ちゃん?　あたしよ。あのね、ウチは三名参加させていただくわ。……え?　あぁ裕人よ。今ケータイに連絡したら今日帰り遅くなるって言われたわ。また夜遊びよ、きっと。あ、それで材料の方はさ、……うん……うん……。じゃあそれは後で割り勘にしてね。絶対よ?　あ、あとお酒はウチで用意させてね。……ううん全然。ちょうど頂き物の日本酒とビールがあるのよ。……うん、六時スタートね。じゃあ後でね」

麻知子はそう喋り終えると電話を切ったが、すぐ側にまだ冬馬が立っていたので不思議そうに息子を見る。

「どうしたの冬馬?」

「俺、なんか手伝うことある?」

「あぁそうね……、でも今回は千鶴ちゃん家からのお誘いだから。材料もあちらで用意するっていうし。あ！　冬馬、あんた買い物の荷物持ちでもしたら？　七人分の材料だから結構な荷物になると思うのよね」
「分かった。今シャワー浴びて着替えたらすぐ出られる用意する」
「じゃあ母さんはもう一回千鶴ちゃんに連絡しておくわ」
「あぁ！」
冬馬は弾むような足取りで二階へと上がっていった。

（冬馬ったら昨日の夜からスゴく機嫌がいいわよね……何かあったのかしら）

ここ最近、何かに苛々していた冬馬の姿を見てきた麻知子はそう思いながら再び倉沢家に連絡を入れる。二回コールの後、すぐに千鶴が出た。
「はい倉沢です。あら、麻知ちゃん？」
「あ、千鶴ちゃん何度もごめんね。実はさ……」
麻知子は手短に用件を伝える。
「あらそうなの？　いいえ、助かるわ。買い物は桃乃に頼もうと思ってたから二人で行ってもらいましょ。じゃあ待っててね」
千鶴は受話器を置くとまた台所に戻った。三十分後、インターフォンが鳴ると千鶴はそのまま玄関に向かい、扉を開ける。

「こんちは」

玄関に立っていた冬馬を見て千鶴は微笑んだ。
「冬馬くん、わざわざ悪いわね。ちょっと待っててね。今桃乃を呼んでくるから」
千鶴は二階へ上がると桃乃の部屋をノックする。
「桃乃、ちょっといい？」

中から返事があったので千鶴はドアを開けた。机に向かって予習をしていた桃乃が振り返る。
「なに？　お母さん」
「あのね、バーベキューの材料買ってきてほしいの。お母さん、今他の準備してるし手が離せないから」
「うん、いいよ。じゃ行ってくる」
「それで冬馬くんが一緒に買い物行ってくれるんだって。今、下で待ってるわ」
「エッ！　冬馬が下にいるのっ！？」
「ええ。冬馬くんって優しいわね。荷物持ちを買ってでてくれたみたいよ。じゃお願いね」
千鶴が部屋を出ていくと桃乃は慌てて二階の洗面台に向かった。そして自分の服装を簡単にチェックした後、急いで階段へと走る。
玄関内で待っていた冬馬が降りてきた桃乃を見て「よっ」と手を上げた。側に千鶴もいるので何とか平静を装って一定のリズムで階段を降りる。
降りてきた桃乃を見て千鶴はあら、と呟いた。
「あなた達今日はお揃いの格好ね。ペアルックみたい」
「は……？　ただジーンズにTシャツっていうだけじゃない！」
時代錯誤な母の言葉に呆れと恥ずかしさが同時にこみ上げてくる。しかし千鶴は穏やかな口調で、「でもお母さんにはペアルックに見えるんだもの」と微笑んだ。
「も、もうお母さんってば……！」
このやり取り自体が恥ずかしくてたまらない。冬馬がどんな顔をしているのかが気になり、そっと玄関先を目で追った。すると冬馬は肩を震わせ、片手で口で覆って必死に笑いをこらえている。それを見てますます恥ずかしさが増した。
「さ、行ってらっしゃい。早めに準備したいから二人とも急いで帰ってきてね」
「は、はーい……」

こんなことなら今日もっと可愛い服を着ていればよかったな、と思いながら千鶴に見送られ、冬馬と近くの大型スーパーへ向かう。

「手でも繋ぐか？」

歩き出してすぐの言葉に桃乃の顔は一気に赤くなった。

「イ、イヤよ。こんな人通りの多い所で……」

「別にいいじゃん、手繋ぐくらい。冷てぇなぁ桃乃は。俺らせっかくのペアルックなのにさ」

「も、もう！　冬馬ったらわざと言ってるでしょ！？」

「でもさっきのあれはサイコーに傑作だったよ。後で思い出したらまた笑っちまいそうだ」

顔を赤らめて怒る桃乃をからかった後、冬馬は右手で眠そうに目をこする。

「……桃乃。俺さ、昨日なかなか寝付けなかったよ」

「え、どうして？」

「どうしてって……決まってんじゃん！　昨日のこともう忘れちまったのかよ！？」

冬馬は驚いた顔で素早く桃乃の方に体を向ける。

「俺ら昨日キスしたじゃん？」

「バッバカッ！　こんなとこで何言い出してんのよ！」

しかし冬馬は叱られたことなどまったく意に介していない様子で、まだ充血気味の目を何度も瞬かせる。

「……でさ、明け方にやっと寝付けたんだけど、朝起きたら昨日のこと全部夢だったんじゃねぇかと思って一人でビビッたりしてんの」

冬馬はバカみてぇだよな、と言いながらハハッと無邪気な顔で笑った。その屈託ない笑顔に胸の中心が締めつけられるような気持ち

になる。
機械的に前に足を進ませながらしばらくの間桃乃はためらっていたが、やがて勇気を出して冬馬の手にそっと自分の手を絡ませてみる。
「……こ、これでいいの？」
桃乃の手が骨ばった大きな手にあっという間に包み込まれる。
「上出来ッ！」
そう言って桃乃の手を握った幼馴染は心の底から嬉しそうな笑顔を見せた。

「土曜なのに結構空いてんじゃん」
週末昼下がりの大型スーパーは思ったより閑散としている。
「まだお昼過ぎたばっかりだもの。夕方になったらもっと混むわよ」

「へぇ、そんなもんなのか」
「んっと、まず野菜を買わなくっちゃ」
「あ、カゴ俺が持ってやるよ」
「ん、ありがと」
桃乃は冬馬にカゴを預け、早速今夜のバーベキューに必要な野菜を選び出す。熱心に野菜を手に取っては棚に戻し、また別の物を手に取る桃乃に、
「そんなのどれ取っても同じじゃねぇのか？」
と冬馬が呆れたように尋ねる。
「だってここにあるの全部が今日仕入れた物ばかりじゃないのよ？どうせお金出して買うなら新鮮なのが欲しいじゃない」
「ふぅん……」
理由に納得した冬馬は桃乃が野菜を吟味する光景を黙って眺める。
「じゃあ次はお肉ね」
「桃乃、神戸牛にしようぜ、神戸牛！　松坂でもいい！」
青果スペースから精肉スペースへ移動すると俄然、冬馬が張り切り出した。
「何言ってんの、そんなに高いお肉買わないわよ」
「頼む！」
「ダメ～！　あ、冬馬、そっちの一番上の棚にあるあのパック取ってくれる？」
「これか？」

「そう。ありがとう」
七人分の材料ともなると、購入する量もかなり多い。最上段の陳列棚に鎮座する高級牛肉にまだ未練たっぷりな様子の冬馬の腕を「ほら行くわよ」と引っ張り、桃乃はレジへと急いだ。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

◆◇◆◇◆

スーパーからの帰り道、二人は手を繋がなかった。
繋がなかった、というより繋げなかった、という方が正しかったのだが。なぜなら冬馬の両手はたっぷりの買い物袋で塞がってしまっていたのだ。
「冬馬、私ひとつ持つってば！」
「いいっての、何のためについてきたか分かんないじゃん」
冬馬は大きく身をよじり、買い物袋を持とうとする桃乃の手をかわすように歩く。
「ね、そういえば冬馬、さっき書店で何買ってたの？」
「欲しかった雑誌」
「どんな雑誌なの？」
「ん、それはちょっとな……」
答えをはぐらかされ、桃乃は「ふ～ん……」と呟くと探るような視線で冬馬の横顔をチラッと見上げる。その疑惑の視線に気付いた冬馬は焦った顔になった。
「あっお前、今エロ本かなんかだと思っただろッ！？」
「エッ！？　やっぱりそうなの！？」
「そ、そんなモン、買ってねぇよ！」

「じゃ何買ったか教えてよ」
「……それはちょっと言えない」
「ホラやっぱり！」
「だから違うってーの！」

行きと違って帰り道は口ゲンカをしながらの帰宅になった。
倉沢家の玄関に入ると千鶴が笑顔で出迎える。

「二人ともご苦労様。暑かったでしょ。冬馬くん、上がって冷たいものでもいかが？」
「あ、じゃ遠慮無く」
スニーカーを脱いで家の中に上がった冬馬に千鶴が驚いたように言う。
「あらっ冬馬くん、また背が伸びたんじゃない？　今何センチあるの？」
「今、百七十八です」
「もう裕人くんより大きいんじゃない？」
「いや、兄貴は百八十だからまだ負けてます」
「フフッ、きっとあなた達の背がそんなに高いのは啓一郎さんの血筋なんでしょうね」
冬馬と裕人の父、啓一郎の身長は息子二人よりも更に高い。
「さぁ上がって上がって。……あっそういえばリビングのテーブル、今晩の用意で埋まっちゃってるんだったわね……。じゃあ桃乃の部屋に上がってもらいましょ。桃乃、いいでしょ？」
「う、うん」
「今飲み物持っていってあげるから待ってて」

二階に上がり、桃乃の部屋に入った冬馬は物珍しそうに室内を見まわす。

「桃乃の部屋に入るのって久しぶりだな。何年ぶりだ？」
「中学入ってからはないんじゃない？」
「そんなに経ってたか？　そういえば部屋の感じもだいぶ変わったような気がするな……。女っぽいっつーか、なんか落ち着かねぇな」
やがて冬馬は机の上に広げてある物理の参考書とノートに気付き、
「予習やってたのか？」と桃乃に尋ねた。
「うん。月曜日の物理、簡単なプチテストやるみたいなの」
「分かんねぇとこあったら教えてやるよ。どっかあるか？」
「全部分かんないんだけど」
その返事を聞いた冬馬は苦笑する。
「桃乃は理数系苦手だもんな。試験前に公式を無理矢理丸暗記するパターンだろ？」
「うんそう。それに物理って元々公式の羅列ばっかりじゃないの」
「まぁな……。でも物理ってよ、俺らの身の回りでごく普通に起こってる現象を数式で表せるのが面白いなぁと思うぜ？　関澤先生の授業も分かりやすいしな。あぁ、でもあの先生は物理マニアだからちょっと立ち入ったことを聞くとすぐに話が脱線していっちまうのが玉にキズだけどさ」
その時ドアがノックされ、お盆にグラスを二つ乗せた千鶴が入ってくる。
「冬馬くんゆっくりしていってね」
「あ、はい。ありがとうございます」
千鶴が部屋を出て行くと桃乃はアイスティーのグラスの片方を冬馬に差し出した。
「はい」
「サンキュー」
「ね、冬馬。これ覚えてる？」

桃乃はさきほど物置で見つけた缶を手に取り、開けて中を見せた。
「なんだ、この石？」
「覚えてないの？」
「全然」
桃乃はもう一つのグラスを手にベッドに腰をかけた。
「それ幼稚園の時、冬馬が見つけて私にくれた石じゃない」
「そう言われるとなんとなくかすかに記憶が……っていうか、まだこんなもん大切に持ってたのか！？」
「今日、ウチの物置を片付けていたら出てきたのよ」
冬馬はピンク色の石を手に取ってしげしげと見た。
「あ～そうだそうだ、思い出した！　俺が見つけたこの石、桃乃が欲しい欲しい」って大泣きしたんだったよな」
「えぇっ、そうだっけ！？」
「そうだよ。そんで慌ててやったらお前コロッと泣き止んでさ、「とうまちゃん、ありがとう！」なんてもう笑ってんの。ありゃあ絶対嘘泣きだったな」
「そ、そうだっけ……」
「で、この石どうすんだ？」
「うん、綺麗だし、嘘泣きまでして貰った石みたいだからこのまま取っておく」
「そっか……」
何かを言いたそうだったが結局冬馬はそこで言葉を止めた。
オレンジ色のカーペットの上に直に腰を下ろした冬馬に桃乃が声をかける。
「冬馬、机の椅子に座っていいよ」
「いやここでいい」
そしてアイスティーを一気に半分ほど飲むと急に真面目な顔になって切り出した。

「桃乃。あの柴門要のことなんだけどな……」

「うん」

「よく分かんねぇんだけどさ、どうやらあいつ、俺に何か恨みがあるみたいなんだよ」

「恨み……？」

「あぁ。だからしつこくお前につきまとったりしてんだ。あいつ、そうすれば俺が頭にくることが分かってわざとやってるんだろうな」

「冬馬、あの人になにかしたことあるの？」

「それが全然心当たりがねぇんだよな……」

冬馬の手の中にあるグラスの氷が溶け、カラン、と崩れる音がする。

「あいつ、七海中出身らしいんだ。それで俺が七海にバスケの試合に行ってた時、ちょくちょく試合を見に来てたらしいんだよ。でも俺、あいつと顔合わせた記憶が一度も無いんだよな」

「じゃあどうしてなのかしらね……」

「分かんねぇ。でもこのままだとあいつまた桃乃に何かしそうだしな。だから俺、来週あいつ呼び出して問い詰めることにしたよ」

桃乃は慌てて止める。

「ケンカはダメよ、冬馬！」

「一応しない方向では考えてる」

「ダメッ！　絶対ダメだってば！　沙羅も言ってたでしょ？　学生審問会議っていうのにかけられたら大変なことになるんだから！」

強い口調で念押しすると、冬馬は「分かった」と言う代わりに違うことを尋ねてくる。

「沙羅ってあの背の高いハーフっぽい子のことか？」

「うん」

「しっかりした感じの子だったな。……そういやあの子、昨日柴門と一緒に帰ったけど大丈夫だったかなぁ」
「あの日帰ってから連絡を取ってみたんだけど、沙羅、あの人のこと気に入っちゃったみたい」
「へぇ……なんかおかしな展開になってきてんな。でももうあいつを桃乃の側には近寄らせないようにするから何も心配すんな」
そう言うと冬馬は急に立ち上がり、飲みかけのグラスを桃乃の机の上に置く。
「桃乃、そのグラスもちょっと貸してみな？」
「どうして？」
「いいから」
冬馬は桃乃が持っていたグラスも取り上げて同じように机の上に並べる。その行動の意味が分からない桃乃は、机の上に仲良く並んだ二つのグラスを不思議そうに眺めた。
次の瞬間、ベッドの上に座っていた桃乃にいきなり冬馬がガバッと覆い被さってきた。

「と、冬馬ッ！？」

ベッドに押し倒された桃乃は思わず大声を出した。
上になった冬馬は悪戯っぽく笑いながら桃乃の口に自分の人差し指を軽く押し当てる。
「……おばさんに聞こえちゃうぜ？」
「な、なにするつもり？」
「決まってんじゃん……」
冬馬はそう言うと人差し指を避け、あっという間に桃乃の唇を塞いだ。
「んっ……」
ベッドの上で桃乃はもがいたが形勢はどうみても桃乃に不利だった。

そのままの体制で冬馬は何度も桃乃にキスをし続ける。やっと唇が離れたと思えばまたすぐにキスされる。その繰り返しだった。

何度目かのキスの時に冬馬の手が桃乃の胸に触れる。

「イヤッ！　冬馬どこ触ってるのよ！」

桃乃は冬馬の腕をピシャリと叩いた。

「痛てぇなぁ……。そんなに怒んなくてもいいじゃん」

「怒るわよっ！」

「……悪ィ」

冬馬は素直に謝った。そしてボソリと今の心情を話す。

「なんかまだ夕べのこと本当かどうか信じられなくってさ……。つい確認したくなった」

「確認しすぎよ！」

「俺さ、お前と二人っきりになるとどうも自分を抑えられなくなるんだよなぁ」

「そっ、そういうのをケダモノっていうの！」

「ひっでぇなぁ、仮にも彼氏を獣扱いかよ……」

冬馬はガッカリした声を出し、桃乃の上から起き上がった。そして引っぱたかれた腕をさすりながら尋ねる。

「な、桃乃。来週からゴールデンウィークだろ？　なんか予定あんのか？」

「うん。一日の日に沙羅のお家に遊びに行く約束があるの」

「一日ならいいや。でも何があっても五日は絶対空けておいてくれよ？」

それを聞いた桃乃の心臓がドキリとする。五月五日は桃乃の誕生日なのだ。

「な？」

冬馬が笑いながら返事を促す。

「う、うん……」

そう答えた桃乃の頬がほんのりと桜色に染まった。

アイツには言わない

倉沢家と西脇家の合同バーベキューは予定時刻を前倒しにして午後六時前から始まった。鉄板の上では緑黄色野菜や牛肉が所狭しと並べられ、威勢よく油が弾ける音と豪快な白煙がダブルで競演中だ。銘酒の一升瓶から啓一郎のコップに冷酒を注ぎつつ、雅治が尋ねる。

「啓さん、最近仕事のほうはどうなんだい？」

「うーん、僕の方は何も変わり映えしないなぁ。景気もあまり関係ないしさ。ま、役所勤めなんてそんなもんだよ」

雅治と啓一郎はまずビールを一缶空けた後、今は日本酒を酌み交わしながらお互いの仕事の話に夢中だ。千鶴と麻知子はそれぞれ別ルートで仕入れた近所の噂話に花を咲かせている。

「桃乃、お前全然肉食ってないじゃん。ほら」

桃乃の紙皿の中の内容物が野菜ばかりなことに気付いた冬馬が牛肉を放りこむ。

「あ、ありがと」

周りにお互いの家族がいるせいで桃乃の態度はぎこちない。

「冬馬兄ちゃん、お姉ちゃんがお肉食べないのってダイエットしてるからだよ」

この場に裕人がいないのでどことなくつまらなそうな葉月が横から口を出す。

「桃乃、お前そんなことしてんの？」

「ち、違うったら。ちょっと食べる量をセーブしてるだけ」

その返事を聞いた冬馬は眉間に大きく皺を寄せる。
「ったく、しょうがねぇな……」
というや否や鉄板の上にあった牛肉をすべて取り、それを桃乃の皿の中に勝手に全投入した。
「ちょっ、ちょっとこんなにいらないってば！」
「いいから食え」
「なんで勝手に仕切るのよっ」
「ダイエットする必要なんて全然ねぇじゃん。それ以上痩せられたら困る」
「ねぇねぇなんでお姉ちゃんが痩せたら冬馬兄ちゃんが困るの？」
「い！？」

葉月の鋭い質問に冬馬の箸が空中で一瞬止まる。

「……そ、それはだな……、やっ、痩せすぎは健康に良くないと思うからさ。な、なぁ桃乃！？」
「わ、私に聞かないでよっ！」
そんな二人の様子をじっと葉月が食い入るように見つめる。
「なーんかおかしいなぁ……」
「な、なにがよ？」
「なんかおかしいよ、二人とも」
「い、いいから葉月も肉食べろ！」
冬馬は場をごまかすように葉月の皿にも新しく焼けた肉を入れてやった。まだ納得していない表情で箸を再び手に取った葉月はその肉を見た瞬間、文句を言う。
「もう冬馬兄ちゃん！　ホラ、この肉まだ生焼けだよー！」
「マジ！？　悪ィ悪ィ！」
「もうお姉ちゃんの面倒ばかりみてるからだよっ。ちゃんと新しいお肉で焼き直してよねっ」

「分かった分かった、責任持って焼くから機嫌直せ」
冬馬は葉月のために鉄板に新しい肉を置いてやる。そして「桃乃、それ全部食えよ？」と再度念を押した。

一時間半後、バーベキューが終了する。後片付けを終え、西脇家の面々が向かいの家に帰りはじめた。
「千鶴ちゃん今日はお誘いありがとう。楽しかったわ」
「ううん、こちらこそ」
帰り間際、冬馬が「じゃな」と声をかけてくる。桃乃も「うん」と返事をし、遠慮がちに手を振った。
すると一旦は倉沢家の玄関先まで出ていた冬馬は急に踵を返し、急ぎ足で桃乃の側に戻ってくるとその耳元に口を寄せ、「……もうダイエットなんかすんなよ？」と囁く。冬馬の低い声が直接左の鼓膜に響いてきて、桃乃の胸がドキリと小さく波打った。
「わ、分かったわよ」
その返事を聞いた冬馬は満足げにニコッと笑うと再び「じゃーな！」と言って啓一郎達と一緒に自宅に戻っていった。
心を落ち着かせるためにふうと息をつき開け放したままの玄関扉から家の中に入ると、葉月が二階から自分を呼ぶ声が聞こえてくる。

「お姉ちゃーん、ちょっとあたしの部屋に来てー！」
「どうしたの葉月ー？」
桃乃はそのまま二階の葉月の部屋に向かったが、室内を見て驚く。
「どうしたのこれ？」
なんとフローリングの床一面にビッシリと葉月の服が並べてあったのだ。
「明日あたし裕人兄ちゃんとデートじゃない？　明日はどの服にしたらいいと思う？」
「あー……そういうわけね……」

呆れつつも真剣な妹のために桃乃は明日の服を一緒に選んでやった。ようやく着ていく服が決まり、床に座り込んでいた葉月が嬉しそうに立ち上がる。

「よし！　これで明日のコーディネートは完璧！　ありがとね、お姉ちゃん！」

「いえいえ、どういたしまして。明日はいい天気みたいだからきっと楽しいドライブになるんじゃない？」

「裕人兄ちゃんとなら何をしたって楽しいんだけどね！　あ、そうだ、ねぇお姉ちゃん、それよりちょっと聞いてもいい？」

「なに？」

「やっぱりダイエットって男の人は喜ばないのかな？　冬馬兄ちゃんさっきちょっと怒ってなかった？」

「さ、さぁ？　冬馬は女の子の気持ちなんて分かんないのよ、きっと」

「でもさ、お姉ちゃんのこと心配して怒ってた感じがしたんだけど」

「そっ、そう？　葉月の気のせいじゃない？」

「そうかなぁ……」

恋愛事に関しては異常に勘の鋭い葉月の追及をかわすために桃乃は話題を逸らす。

「葉月、お風呂入るでしょ？　先に入った方がいいんじゃない？」

「うんっ先に入るー！　あたし今日早く寝なきゃいけないもんっ。明日に備えなくっちゃ！」

葉月はそう叫ぶと元気良く部屋を飛び出して行った。その姿を見送り、葉月の部屋を出て自室に戻るとベッドに腰をかけ、そっと自分の唇に人差し指を当ててみる。つい数時間前にこの場所で冬馬にされたように。

元々幼馴染で気心も知れているとはいえ、昨日冬馬からの告白をＯＫしてからはまるで水門を開け放った直後のように冬馬は一気に

心の中に入り込んできている。
自分の中の冬馬への想いが、昨日よりも確実に、そして急速に大きくなっていることに、桃乃はほんの少しだけ動揺していた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「たっだいま〜っと！」

今夜のバーベキューを欠席した裕人は今日も新車生活をたっぷりと満喫して上機嫌で帰ってきた。
「裕人！　もう十一時過ぎてるのよ！　家の前で空ぶかしは止めなさい！　ご近所迷惑でしょ！」
寝ようとしていた麻知子が玄関に出てきて裕人を叱る。
「あ、あぁ。分かったよ、母さん」
「まったく夜遊びばっかりして……」
ブツブツ文句を言う麻知子を背に、裕人はさりげなく二階へ避難した。
階段を昇り終えて自分の部屋に入ろうとすると、反対側の部屋のドアが小さく開き、その隙間から冬馬が顔を出す。

「兄貴。話しがあるんだけどいいか？」

「話しッ！？　なっ、なにかなぁ！？」

冬馬の気持ちや裏話の数々を桃乃に喋ったことがバレたと勘違いした裕人が大きく一歩後ずさる。
「いいから来てくれよ」
しつこく促され裕人は仕方なく冬馬の部屋に入った。

（あぁどうかぶん殴られませんように……）

何事にも平和主義な裕人がそう願いながら恐る恐る部屋に入ると、冬馬は素早くドアを閉めて勉強机の椅子にドカリと座った。
「な、兄貴。俺、ネックレス買いたいんだけどさ、どっかいい店教えてくんない？」
「ネックレス？」
「あぁ。俺そーいうのよく知らないからさ」
「どうすんだよ、そんなもの買って？」
「あげんだよ」

裕人の勘が即座にピン、と働く。

「もしかして桃乃ちゃんにか！？」
冬馬はちょっと照れたように「あぁ」と頷いた。同時に裕人は困惑した顔になる。
「おいおい冬馬、いきなりプレゼント攻撃か……。いや確かにその手の攻撃が思い切り通用する女の子もいるよ？　でも桃乃ちゃんはどうかなぁ……。俺はむしろ逆効果で引いちゃうような気がするんだけどなぁ」
「なんで桃乃が引くんだよ」
「だってさ、いきなりそんなのあげたって桃乃ちゃん驚くだろ？」
「だから驚かせたくてやるんだよ」
「いやだからさ、その前に物事には順序があるだろ？　いきなりプレゼントなんかしないでさ、ちゃんと自分の気持ちとか、そういう

のを伝える方が先だと俺は思うよ？」

　すると冬馬は頭の後ろで手を組み、余裕混じりの表情を浮かべる。

「俺、伝えたぜ？」

「伝えた？　桃乃ちゃんに？」

「あぁ」

「で、で、ＯＫだったわけっ？」

「ＯＫじゃなかったらプレゼントなんかするかよ」

「あ、そっか！　そうなのか……そうかそうか……！」

　すべてを理解した桁人は納得の表情で二度頷くと、冬馬の肩に片手を置く。

「よかったなぁ、冬馬！」

「サンキュー」

「今日だけ特別だ！　お祝いに一本どうだ？」

　桁人はジャケットのポケットから煙草を取り出し、冬馬に勧めた。

「いや、いい。もう煙草は止めたんだ」

「へぇ変われば変わるもんだなぁ……」

　桁人は煙草を再びポケットに戻しながらしみじみと弟の変化を噛み締める。

「じゃあ俺の知ってる店、幾つか教えるよ。ところで冬馬、お前、金の方は大丈夫なのか？」

「あぁ。俺バイトしようと思ってんだ」

「なんだ金無いのか？　なら俺が貸してやるよ」

「いや、いい。手持ちの金は多少あるんだ。でもそれって親に貰った小遣いだろ？　それじゃあ意味ないんだよ。自分で稼いだ金であいつに買ってやりたいんだ」

冬馬は今日書店で買った雑誌に目をやった。
その雑誌の表紙にはアルバイト情報誌の大きなポップ調のロゴが踊っている。

「なるほどね。感心な心がけだな。それに自分でバイトした金でプレゼント買ったこと伝えたらきっと桃乃ちゃん、すごく感激するだろうな」
「あいつにそんな事わざわざ言うかよ。俺の気が済まないからそうするだけで、んな事いちいち言ってプレゼントなんかやったら滅茶苦茶カッコ悪いし、すげぇ押し付けがましいじゃん」
「そうか、桃乃ちゃんにはバイトのことを黙ってか……偉いッ！でも冬馬、カノンってバイト関係はうるさくないのか？」
「実は届け出が必要なんだ。そんでちゃんとした理由ないとなんだかんだと色々うるせぇらしいんだよな……。だから黙ってやっちまおうと思ってる。どうせ短期間のバイトだし、たぶんバレねぇだろ」

「お前が大学生だったら家庭教師のバイトの口を色々紹介してやれるんだけどなぁ」
「いや、どっちにしても家庭教師なんて普通長期間だろ？　二、三日だけなんてムリじゃん」
「まぁなー。じゃあ冬馬、短期間でそこそこ金が入ってくるってバイトって言ったらさ……」
「肉体労働しかないんじゃねぇの？」
「なんか勿体ないよな。お前せっかく頭いいのになぁ」
「ま、でも俺基本的に体動かすの好きだからそれはいいんだ」

冬馬はアルバイト情報誌を手に取るとパラパラと中を見る。

「五日までになんとか金貯めて買いに行かないとな……」
「あれ、五日って桃乃ちゃんの誕生日だったっけ？　ちゃんと桃乃

ちゃんの予定押さえといたか？」
「その辺は抜かりねぇよ」
「お前にしてはやるじゃん！」
兄弟はお互いの顔を見てニヤッと笑う。
「そういえば兄貴、明日葉月とドライブに行くんだって？」
「あぁそうだった！　うっかり忘れるとこだったよ。それで明日の午前の予定入れてなかったんだ。助かったよ冬馬。すっぽかしたら葉月ちゃん激怒しちゃうからな」
「葉月、すっげー楽しみにしてたぜ。今日のバーベキューも兄貴来ないからつまんなそうだったしな」
「ハハッ、モテる男のつらさ、お前には分かんないだろうなぁ。なにせ年齢問わず、色んな女性に好かれちゃうもんでね」
「別に分かんなくてもいいぜ、そんなもん」
「お前は昔っから桃乃ちゃん一筋だもんなぁ。でも上手くいって本当によかったよ」
「それと兄貴、俺がバイトすることは桃乃には絶対言わないでくれよ？」
「分かってますって！　じゃおやすみ」
自室に戻った衒人は、着ていたジャケットを脱いでクリーニングブラシで丁寧に埃を払った後、クローゼットの扉を開ける。

（冬馬が桃乃ちゃんからＯＫの返事貰えたのはたぶん俺の功績だな……。ま、アイツが喜んでるところに水を差すのもなんだし、今回は裏方に徹しておいてやるか）

クローゼットにジャケットを片付けながら衒人はそう決める。
襟元のボタンを外しながらローテーブルの上に目をやると、今朝持って行くのを忘れた煙草が、封も開けられず手付かずの状態で置かれてあった。

衍人はその新品の煙草に優しい眼差しを向けるとフッと微笑を浮かべ、「俺も負けてられませんね」と陽気に呟いた。

嵐の予兆

バーベーキュの夜から二日経ち、またカノンの一週間が始まった。

冬馬はいつも通りバスケ部の朝練に汗を流し、桃乃と沙羅はこの日の朝、テニス部に入部をすることを決める。今週の後半からゴールデンウィークに入るとあって、カノンの学生達もどこか浮き足だつ一週間の始まりだった。

理事長の黒岩は毎朝七時きっかりに理事長室へ姿を現す。

この日も黒岩は定刻通りに中央塔三階の理事長室の扉を開けた。しかし開けた瞬間、普段は滅多に表情を変えない黒岩の眉が訝しげに動く。中に人がいたのだ。

「そこで何をされているのですか……？」

逆光でその人物の顔がよく見えない。

黒岩の声でオフィスデスクの前に立っていたその人物が振り返る。

「……矢貫先生でしたか」

理事長室の中にいたのはスーツを着た誠吾だった。

「お話があって来ました」

いつもは遅刻魔と呼ばれているこの男がこんな朝早くに真剣な表情で現れたのを見て、黒岩は誠吾が何の用件で来たのかを瞬時に察した。

「まぁそこにおかけ下さい」

黒岩はデスク前にある応接セットのソファに座るように勧める。

「いえ、ここで結構です」
「そうですか……」
黒岩はゆっくりと自分の椅子に座り、デスクの上に両肘をついて手を組むと自分の前に立つ誠吾を見上げる。
「……お話とは先週の事故の件ですな？」
「はい」
「やはりそうですか。しかしこの件では矢貫先生とお話しても平行線のままだと先週申し上げたはずですが？」
「理事長、先週の定例会議を途中で退席したことは謝罪します。しかし、笹目の処分にはどうか恩情をかけてやっていただけませんか。お願い致します！」
誠吾は体を二つに折って大きく頭を下げた。
予想通りの陳情に黒岩はゆっくりと大きな息を吐く。
「……矢貫先生、一つだけお分かり頂きたいのですが、私もその流産した女生徒には憐憫の情を催しております。しかし、学園に規律がある以上、そしてその規律に従っている多くの生徒達がいる以上、規律を乱す生徒に処分を下すのは理事長としての私の役目なのです」
「理事長の仰ることは俺にもよく分かります。ですが、笹目をこのまま外へ放り出す事に俺は納得できないんです！」
「矢貫先生……、あなたはなぜそこまでその笹目という女生徒のために必死になるのですか？　ご自分の担当クラスの生徒だからですか？　それとも受け持っていた授業中の事故だからですか？」
黒岩はここで一旦言葉を切った後、静かに核心に触れる。
「……あるいは一年半前のことをまだ引きずっていらっしゃるからですか……？」

誠吾の顔色が変わった。
青ざめたその顔色を見て黒岩はまた大きく息を吐いた。
「……矢貫先生、私はあの当時も申し上げたはずです。あれは矢貫先生のせいではありません。先生が笹目という女生徒をそこまで庇うのは、あなたが勝手にお持ちになっている罪悪感を、この女生徒を助けることで少しでも軽くしようと思い込んでおられるからではないですかな？」
誠吾はガックリと肩を落とした。
室内にしばしの間、静寂が訪れる。
やがて誠吾は弱々しい声で黒岩の発言を認めた。
「……そうです……その通りです……」
「矢貫先生、処分に私情を入れることは相成りません。私は私の信念に基づいてその女生徒の処遇を決定したいと思います」
黒岩のその宣告を聞いた誠吾は打ちひしがれた顔でスーツの内ポケットから一通の封書を取り出した。
封書の表書きを見た黒岩が怪訝な顔で眉をひそめる。
「……理事長、確かに理事長の仰る通り、俺は笹目を助けることで自分の中にヘドロのように溜まっているあの時の罪悪感を少しでも減らしたかったのかもしれません……」
封書を手にしたまま、誠吾は低い声で今の気持ちを吐露する。
「……ですが、俺は一昨日笹目の見舞いに行った時、あいつが泣きじゃくりながら迷惑をかけてごめんなさい、と俺に謝った震える背中や、笹目の母親が、どうか退学させないで欲しいと必死にすがってくる姿を見て俺は決心したんです。絶対に笹目を退学処分にはさ

せない、と」

誠吾は自らの手で「辞職願」と書いた封書を黒岩の前に静かに置いた。

「そしてそれが出来なければ俺はここを辞めよう、とその時決めたんです。……理事長、ここに赴任したばかりの頃、理事長には随分とご迷惑をかけて申し訳ありませんでした。そして俺は柳川先生にも迷惑をかけっぱなしでした」

誠吾は一歩後ろに下がると黒岩に向かってもう一度深く一礼をした。

「黒岩理事長、今までお世話になりました」

そして誠吾は失礼します、と言うと静かに理事長室を出ていった。

残された黒岩はたった今誠吾が置いていった辞表を手に取った。そして眼鏡を外すとそれをデスクの上に置き、長々と深い息を吐いた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

その日の昼休み、桃乃は沙羅からチクチクと責められていた。

「あ～あ、あたし、モモとは親友になれたと思ってたのになぁ……。親友に彼氏のこと教えないなんてありえないよ」

「だ、だってあの時はまだ彼じゃなかったもん……」

「それは金曜に電話で聞いたけどさ、じゃあなんで今まで全然冬馬

のこと教えてくれなかったの？」
「だ、だってそれまではただの幼馴染だったわけだし……」
「あたし前にモモに聞いたよね？　『　男子校舎に知り合いはいる？』って。そしたらモモ、『　いないよ　』って言ってたじゃないのよ～！」
「そ、それはね、わざわざ言うことでもないかな、と思って……」
「ホラ～！　そこが親友じゃないってことなのよ～！」
「分かったから、これからはちゃんと言うから……ね？」

桃乃がそう言った途端、沙羅は「ヤッター！」と大声を出しながら手を合わせて喜び、桃乃の側にズイ、と顔を寄せる。

「モモのその言葉を待ってたのよ！　じゃ早速教えてちょーだい！　ねぇねぇ、三日前の金曜の夜、冬馬はなんて告白してきたの？」
「えっ！　そ、それは言えないよ沙羅……」
「あっズルーイ！　だって今『これからはちゃんと言う』って言ったじゃないの」
「で、でも、そういうのって自分の心の中だけに仕舞っておきたいもん……」
沙羅はふーん、と言うと口を尖らせて腕組みをした。
「う～ん、まぁその気持ちも分からないでもないけど……、うーん、やっぱり分からない！　だってさ、もしあたしが要から告白されたら喜んで全部モモに話すと思うもん！」
「ねぇ沙羅、本当にあの人のこと好きになっちゃったの？」
沙羅は元気一杯で「うん！」と返事をする。
「実は要が最初モモと喋ってるの見た時はなんかお調子者っぽくてあまり好きじゃなかったんだ。でもね、あの後あたしと一緒に帰ってる間、ずーっと愛想悪かったの。そんな要の素の部分見たら急に興味湧いてきちゃったんだよね」
「沙羅って愛想悪い人がタイプなの？」

「ううん、そーじゃなくて、なんて言ったらいいのかなぁ……。要ってさ、きっと寂しがり屋だと思うんだよね。でもそれを何とか隠そうとしてわざと強がったりしてるの。そこが可愛いなぁ、と思ったわけね」

「そ、そう……」

桃乃は箸で鳥唐揚げをつかんだまま呆気に取られて沙羅の話しを聞いていた。

「でも困ったよね、モモ」

「えっ何が？」

「だってさ、モモの彼氏の冬馬と、あたしの好きな要ってなんだかすっごく仲悪そうじゃない？」

「あ！」

桃乃は思わず叫んだ。その拍子に鳥唐揚げが弁当箱の中に落下する。

「どしたのモモ？」

「そういえば冬馬言ってたの。今週中にあの柴門って人に話しをつけに行くって……」

「エエッ！？　それ危険だよモモ～！」

「沙羅もやっぱりそう思う……？」

「思う思う！　モモ、なんとかしなきゃ！」

「うん。今日の夜、冬馬にもう一度話して止めてもらうように言うわ」

「そのほうがいいよ！　もし先生にケンカしてる所なんか見つかったら停学は絶対に間違いないもん！」

しかし二人が冬馬と要の身を案じて話し合っている頃、すでに冬馬はそれを実行に移していた。

昼休みに入り、また机の上に足を投げ出して座っている要の前に冬馬が無言で近寄る。

「なんだよ」

三日前に思いきり面子を潰された要が下から冬馬を睨みつける。

「今日の放課後、屋上に来い」

冬馬はそう言い捨てると教室の外へと一人出ていってしまった。

吐き捨てたルサンチマン

毎日寒いくらいに感じている職員室内が、今日はなぜか暑く感じる。備え付けのエアコンの温度はいつもと同じ二十二℃に設定してあるのにだ。

いつもなら左隣の暑がり教師がバサバサと緑の髪型まで乱れるくらいの勢いで、団扇を扇いで風を送ってくるのに今日は朝からこの席は空っぽのままだ。

緑は嫌な予感がしていた。

先週の金曜日、定例会議を途中退席してしまった誠吾。

そして今朝の欠勤。

珍しく黒岩が朝に職員室に現れ、「矢貫先生は本日急用でお休みします。今日の一年体育は申し訳ありませんが高崎先生にお願い致します」と二年体育担当の教師に依頼していたのが気にかかっていた。

今日の授業をすべて終えた緑は職員室でしばらく考え事をしていたが、その間にも他の教師が一人帰宅し、二人帰宅し、いつのまにか誰もいなくなる。

一人になった緑は席を立ち、窓際に寄ると燃えるような夕日を眺めた。

中央塔の職員室からは男子校舎、女子校舎、両方の建物が共によく見える。もうどちらの校舎の教室にも生徒の姿は見かけられない。部活動に所属している生徒はすでに部活に行き、帰宅部の生徒はとっくに下校したのだろう。

「あら……？」

緑は男子校舎の方を見て呟く。
男子校舎の屋上に人影を見たような気がしたのだ。
胸ポケットから携帯用の眼鏡を出し、それをかけてもう一度屋上の方を見てみた。眼鏡をかけたため一気にクリアになった視界の中に二人の男子生徒の人影を確認する。

（一体あんな所で何をやっているのかしら？）

緑は教師の顔に戻ると靴音を鳴らしながら職員室を出て急いで男子校舎へと向かった。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「やっと他の奴らもいなくなったな。……で、話しってなんだよ。ここでケンカっていう話なら願ったり叶ったりなんだがな」
誰もいなくなった屋上で要は片手を目の前に出し、わざと大きな音で指の関節を鳴らしてみせた。しかしそんな要の挑発にも冬馬はまったくひるむことなく淡々と言う。
「もう桃乃に近づくな。用件はそれだけだ」
「またそれか。この間も言っただろ？　お前に指図されることじゃねぇよ」
「ところが状況が変わってな」
冬馬はスラックスのポケットに片手を突っ込んで胸を反らし、勝

ち誇ったように言う。

「桃乃は今は俺の彼女だ。だから手を出そうとしたら絶対許さねぇからな。覚えとけよ」

「お前告ったのかよ!?」

「あぁ。OKの返事貰った」

要の目が急にギラギラとした光を帯び出す。

「……どうしてお前ばかりが……!」

しかし要はその先の言葉を飲みこみ、クックッと声を抑えて笑いだした。

「へぇ～、あの子お前と付き合うことにしたのか！　じゃあ、計画変更するまでだ。今度またあの子を待ち伏せて捕まえて、そんで無理矢理ヤッちまうなんてどうだ？　なかなかスリリングな展開だろ？」

何とか冷静を保っていた冬馬の顔つきが、三日前のあの時と同じように再び変わる。

「……お前それマジで言ってるのか……!?」

「お、やるか？　俺は構わないぜ、お前が大怪我するだけだしな」

屋上でお互い一触即発の臨戦体制になった時、屋上扉が開いた。

「あら、あなた達だったの」

「先生!」

緑がいきなり現れたので冬馬と要が驚いて叫ぶ。

「こんな遅くにこんな所で何やってるの？」

「いえ、別に……」

まさに今殴り合うところでした、とは間違っても言えるわけもな

い二人は、それぞれあらぬ方向に顔を向けてそう呟く。
「さぁあなた達、いつまでもこんなところにたむろってないで帰りなさい。あらそういえば西脇くんは部活動に入ってたんじゃなかった？」
「……ハイ」
「行かなくていいの？」
「今行こうと思っていたんです」
冬馬は渋々とそう言った。しかし本当のところは要と話をつけるために今日は部活を休んでいたのだ。
「さぁ、柴門くんもここから降りなさいね。部活動以外で残っているのはもうあなたぐらいよ？」
「あそこにも誰かいますよ、先生？」
要は屋上の手摺に寄り掛かりながら男子校舎のグラウンドを指差す。
「えっ？」

緑は手摺に近寄ると要の指差す方向に目をやる。
今日の陸上部と野球部の外練習は終わったようで、もう男子グラウンドは暗くなっていた。
そのすでに誰もいないグラウンドに一人の人間が立っていて、いくつかの照明がそのシルエットをぼんやりと浮かび上がらせている。
かなり遠目だったが、その人影を見た緑は思わずあっと小さく声を出していた。

（矢貫先生だわ……！）

緑は身を翻すと小走りで階段へ向かい、勢いよく扉を開ける。
「あなた達、私は用事があるから先に行くけどすぐここから降りる

のよ？　いいわね？」
　二人の返事も聞かずに緑は階下へと駆け出して行ってしまった。
「……運のいいヤツだな、お前」
　要が憎々しげに言う。
「どういう意味だよ」
「柳川に俺ら一緒の所見られちまったんだぜ？　これで明日にでもお前がボコボコの面で来てみろよ、犯人が俺だってすぐに分かっちまうじゃねぇか」
「犯人はお前じゃなくて俺が、の間違いだろ？」
　緑が現れたことによって冷静さを取り戻した冬馬が冷たく切り返す。
「なんだと……！」
「なぁ柴門、お前俺になんの恨みがあるのか知らないけどよ、それに桃乃は何も関係ないだろう？　あいつに手を出すのはだけは止めてくれ。卑怯な真似は止めて俺に直接ぶつければいいだろうが」
「……しかしお前は昔からいけすかないヤツだぜ。いつもそうやってヒーローぶりやがって……」
「柴門。俺、あれから当時の七海中のことを色々思い出してみた。だけどどうしてもお前のことを思い出せない。お前、俺にどんな恨みがあるんだ？」
　しばらく要は黙っていたがやがてボソリと呟く。
「……椎名杏子（しいなきょうこ）って覚えてるか……？」
「椎名？」
　冬馬はその名前を頭の中に浮かべる。
「……あぁ、思い出した。七海の生徒会長だった人だろ？」
　以前、白杜中バスケ部が七海中に親善試合に行った時、当時三年

でキャプテンだった冬馬に一度挨拶にきたのが七海中で初の女性生徒会長を務めた杏子だった。その物静かでとても大人びた雰囲気に、自分と同じ年には見えないなと当時の冬馬は思っていた女生徒だ。

「……西脇、椎名がお前のこと好きだったの知ってたか？」

「俺、あの椎名って子とは一度しか顔合わせたこと無いぞ！？」

「一度会っただけでも好きになることなんかよくあるじゃねぇか」

「じゃあ椎名さんが恨みの原因なわけか」

要は悔しそうに顔を背ける。

「……俺が椎名に告ったらアイツ言ったんだ。“　私は白杜中学の西脇さんが好きなの　”　ってな」

要の声は屈辱に滲んでいた。

そして冬馬の顔を見据え、今までずっと胸に溜めてきたものを続けて一気に吐き捨てる。

「それまで女なんて遊ぶためだけに引っ掛けてた。でも椎名に出会って俺は女ってモンに初めて本気で惚れたんだ。その本気で惚れた相手に振られた気持ちがお前に分かるか！？」

要の恨みの理由を知った冬馬は呆れた口調で言った。

「なんだよ、結局お前の八つ当たりなのかよ」

そう指摘され、要は声を荒げる。

「お前に分かるわけねぇよ！　ちょっと目立つスポーツが得意だからって女にもてはやされていい気になっていたお前にはな！」

「別にいい気になんてなってねぇよ」

「カノンの合格発表で偶然お前の名前を見つけた時、俺は思った。絶対お前も俺と同じような目に遭わせてやろうってな」

「……それで桃乃に近づいたのか」

冬馬の顔が再び険しくなる。
「そう、そんであの子さ」
要は再びニヤリと笑う。
「最初は正門でお前があの担任と話していたのを見た後、あっちの方かと思ってカマかけてみたがお前全然ノッてこなかったな。だけどあの子のことをちょっと言っただけでお前の目の色が変わったのを見て、あの子がお前の弱点だってことが分かった」
「……しっかし情けねぇヤツだなお前って」
「どういう意味だ!?」
「だってそうだろうが」

冬馬はイライラした態度を露にしながら、もう片手の手も乱暴にポケットに突っ込む。

「そんなに惚れきった女ならなんで一度振られたぐらいであっさり諦めてんだよ？　こんなウジウジ下らねぇことをやってるヒマがあったらもう一度告ってみればいいじゃねぇか。俺ならそうするぜ？　結局ただの腰抜けだよな、お前って」
腰抜け、と呼ばれて要はギリギリと歯噛みする。
「悔しいか？　お望みなら何度でも言ってやるぜ、お前はただの腑抜けなんだよ」
そう言うと冬馬はその大きな手で要を指差した。
「いいか、桃乃には絶対近づくな！　今度近づいたらぶっ飛ばすからな！」
そして冬馬はクルリと背を向けると乱暴に扉を開けて校舎に戻っていった。

「畜生……っ！」

誰もいなくなった屋上で要は手摺を思いきり蹴飛ばした。手摺が

どこか哀しげにわななく音が屋上にむなしく響く。
要はやがて静かになった手摺に背中をもたせかけ、
「……カッコ悪ィな、俺……」
とやるせなさそうに呟くと、刻一刻と暗さを増してきている夜空をゆっくりと見上げた。

間違いない、あのシルエットは絶対にそうだ、そう思いながら緑は階段を駆け下りる。

いつも好んで履いているヒールの高さが今は邪魔で恨めしい。

（もう生徒もほとんどいないし……）

思いきって緑は校舎内用の靴を両方脱いで手に持ち、階段を一気に駆け下りた。

靴を履き替えて玄関を飛び出し、誠吾の姿が見える前にかけていた眼鏡を外して胸ポケットへ戻すとグラウンドへ急ぐ。息を切らせて辿り着くとグラウンドの中央で咥え煙草をしている誠吾の後ろ姿が見えた。

「矢貫先生！」

振り返った誠吾は緑を見て驚いた顔になる。

「……柳川先生……！」

「矢貫先生、今日はどうなされたんですか？」

「ハハ……、無断欠勤です」

「嘘言わないで！　理事長が今朝あなたの授業の代わりを高崎先生に頼んでいたのよ？」

緑から顔を逸らすと、誠吾は「そうだったんですか」と呟き、再び紫煙を大きくくゆらす。

「矢貫先生、こんなところで一体何をなされてたんですか？」

「ここと最後の別れを惜しんでいたところですよ」
緑の胸にまた嫌な予感が走る。
「そ、それどういう意味なんですか？」
「……俺、今朝理事長に辞表を出しました」
「……！」
的中した予感に緑は一瞬言葉を無くした。
「ど、どうして？　なぜ今カノンを辞めるんですか！？」
「先週の事故の責任を取ります」
「う、受け持ちの生徒の一人が退学になるからって、どうして矢貫先生まで辞めなくちゃいけないんですか！？　あなたの受け持つクラスはまだ他に何人も生徒がいるのよ！？　その子達を放り出して身勝手だとは思わないんですか！」
誠吾は力無く笑いながら緑の方を見た。
「……いつも痛いところを突きますよね、あなたは」
誠吾はため息と共にフゥッと大きく煙を吐く。
「たとえ俺がいなくなっても新しい先生が来れば、残った生徒達は何も変わりなく学園生活を送ることができます。でも笹目は俺が助けてやらなきゃ他に誰も頼る奴がいないんです」
「でっ、ですが、なぜあなたが辞めることになるの！？」
「……でも結局俺は笹目を助けられなかった……。柳川先生、俺は決めてたんです。笹目の退学が覆らないのなら俺はここを辞めようと」
「そ、そんな……。黒岩理事長は辞表を受け取ったのですか！？」
「ええ。その時理事長に言われましたよ。俺が笹目を必死に庇うのは俺が勝手に持っている過去の罪悪感を、笹目を助けることで軽くしようと思い込んでいるからだと」

それを聞いた緑はハッとし、かすれた声で言った。

「……それはあの時三年五組だった織田志穂さんのことね……？」

誠吾は小さく頷いた。

「そうです」

「矢貫先生……」

緑はなぜか悲痛な表情で俯く。

「……わ、私、今まで噂でしか聞いていませんでしたが、先生の口から本当のことを仰っていただけますか……？」

視界の端に誠吾がまた頷くのが見えた。

緑は振り絞るように声を出す。

なぜかその体は小さく震えはじめていた。

「……に、妊娠した織田さんが、病院に出した堕胎手続きの用紙に……、その用紙の胎児の父親欄に……、や、矢貫先生のサインがあったというのは本当なのですか……？」

誠吾は指に煙草を挟んだまま、俯く緑の姿をしばらくの間じっと見つめ、静かに言った。

「……本当です」

それを聞いた緑の両目から一気に涙が溢れてきた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

どうしても赤いボタンが押せなかった。

何度も何度も親指はそのＣａｌｌボタンに触れているのに。

男子校舎の屋上で一人携帯電話を握り締めながら、要は押せないボタンを見つめていた。

青く光る液晶ディスプレイには「シイナ　キョウコ」と表示されている。

（……これじゃあ西脇が言ったように俺は本当の腰抜けじゃねぇか……）

冬馬に指を差されて「ただの腰抜けだ」と言われた悔しさが胸に甦る。

何度目かのチャレンジでやっと要はＣａｌｌボタンを押した。

慌てて片耳に携帯を当てる。

六回目のコール音の後ブツ、という音がし、「はい」という物腰の柔らかそうな女性の声が聞こえてきた。

「し、椎名か？」

「……え？　もしかして柴門くん？」

「そ、そうだ。久しぶりだな」

「本当に久しぶりね。柴門くんって私の携帯の番号知っていたかしら？」

「あ、あぁ。ほら、椎名が生徒会の時、緊急で連絡取ることがあるかもしれないから俺の携帯番号教えてくれって言ったじゃないか。その時椎名の番号も教えてもらったんだよ。まだこの番号生きてて良かったぜ」

携帯の向こう側からクスクスと笑う声が聞こえてくる。

「そういえばしょっちゅういなくなる副会長だったものね、柴門くんは」

「まぁな……」

立っていると緊張がとれないので要は屋上のコンクリートの上に座りこんだ。

「今話しても大丈夫か？」

「えぇ、大丈夫よ」

「……元気そうだな椎名」

「えぇ柴門くんも。柴門くんカノンだったわよね。どう？　学園生活は？」

「まぁぼちぼちとやってるよ。椎名は華丘（はなおか）女子に行ったんだよな」

「えぇ。中学の時と違って女子高だから雰囲気が全然違って面白いわよ」

「そっか……」

「なにか私に用があったのかしら？」

要はごくりと唾を飲み込む。これから告げる事実を聞いた杏子の反応がどうなるのか知りたかった。

「し、椎名。俺、あの西脇冬馬と同じクラスなんだぜ？」
「えっ西脇くんってあの白杜中学の？」
「あぁ。椎名、お前西脇のこと好きだったもんな」
「え、西脇くんのことを？」
「言ってたじゃないか、昔俺に」
「あっ……」
携帯の向こう側はなぜか困った声になり、少しの間沈黙した。
「どうした椎名」
「あのね、柴門くん……。ごめんなさい、それ嘘なの」
「ハァッ！？」
思っても見ないその杏子の言葉に要は思わず携帯を持ったまま大声を出す。
「実はね、あの当時断っても断っても付き合ってくれっていう同級生が数人いて、あんまりしつこいから西脇くんのことが好きだから、ってきっぱり断ったの。そしたら皆すんなり諦めてくれて……。西脇くんとは中学が違うし、たくさんの女の子に人気があったから私が好きって言っても迷惑はかからないと思ったのよね……」
「それマジかよ……」
「それ以来、交際申し込まれてお断りする時の常套句になっちゃってたのよ。ね、柴門くん、まさか西脇くんに私が好きだったなんて言ったわけじゃないでしょう？」
「う…うん、言ってねぇよ」
要は咄嗟に嘘をついた。
「良かった。ならいいんだけど……」

安心したような声が要の耳に響く。
そしてこの時要は一つの決心をした。

「……椎名、頼みがあるんだ」
「なに？」
「これから俺の言うことをしばらく黙って聞いててくれるか？」
「いいけど……なにかしら？」
「頼むから俺が話し終えるまで何も言わないでそのまま黙って聞いててくれ」
要はそこまで言うと一度スゥ、と大きく息を吸ってから話し出した。

「俺……お前のことが本気で好きだった」

「……！」
「昔、俺が先生方から成り手のいない副会長に推薦されちまった時、俺は最初絶対に断るつもりだった。会長ならまだ受ける気も多少はあったがなにせその会長が女だっていうんだからな」
「……」
「冗談じゃねぇ、って思った。内申書が上がるのは確かにちょいと魅力だったけど女の下になんかつけるかよ、って反発した。だけど結局無理矢理やらされることになっちまった」
「……」

携帯の向こう側は言われた通りに沈黙している。
しかしあまりにも静かなのでちゃんと聞いていてくれているのだ

ろうかという不安を胸に、要は自分の気持ちを包み隠さずに語り続けた。

「でもな、椎名と一緒に生徒会を運営していく内に俺の中でお前に対する見方が変わった。お前はいつも凛として、しっかりしていて、そんで誰にでも公平で、しかも先のことまできちんと見ることのできるヤツだった。俺はそれまで女なんて皆、ただキャーキャー馬鹿みたいに騒ぐしか能の無い、頭の空っぽな生き物だと思っていた。そんな偏見を取っ払ってくれたのが椎名、お前なんだ」

「……」

「いつのまにか椎名を好きになっていた。だけど俺はそれまで遊びでしか女に声かけたことがなかったから、どうやってお前にこの気持ちを伝えたらいいのか分からなかった」

一気にここまで喋った要はフゥ、と息継ぎをする。

「……やっと一大決心をしてあの時お前に告白した。でも照れがあった俺はわざと軽い感じを装って告白しちまった。“　なぁ良かったら俺と付き合えよ、椎名？　”　ってな」

「……」

「お前の返事は“　白杜中の西脇くんが好きなの　”　だった。……俺、すげぇショックだった」

「……」

「ショックでお前のことを忘れようとした。でも忘れられなかった……。椎名、俺は今でもお前が好きだ。今日携帯に電話したのは真面目にお前に告白しようと思ったからなんだ」

「……」

「椎名、返事を聞かせてくれ。今度は嘘をつかないでお前の正直な気持ちで」

携帯の向こう側はまだ沈黙していた。
要は携帯を耳に押し当ててじっとその返事を待つ。

「……ありがとう……」

囁くような声だった。
「柴門くんが私のことをそんなに想っていてくれていたなんて全然知らなかった……。柴門くんは色んな女の子と付き合っていたみたいだったし、あの時も気軽に声をかけてきただけだと思ってたわ」

「あの当時の俺を見てたらそう思うのも無理ねぇよな……」
「柴門くん、あなたは今まで女性に持っていた偏見を無くすことができたのは私のおかげだ、って言ってくれたけど私の方こそ柴門くんに今教えられたような気がするわ」
「俺が？」
「ええ。私、柴門くんは頭も良くてなんでもできる人だと思ってたけど、同時に柴門くんの毎日の態度を見ていて軽薄な人だとも思ってた。私、そう決め付けてた。……でもね、今あなたからの真剣な告白を聞いて私あなたのことを見かけで勝手に判断していたことに気がついたの。だから私のほうこそ柴門くんにお礼を言わなくちゃ」

「おい、よしてくれよ。俺が軽薄だったことは事実なんだからよ」
要は居心地悪そうな声を出す。
「……でもごめんなさい……。あなたの気持ちに今は応えられない

わ……」
「……」

沈黙した要に、杏子は静かな声で自分の気持ちを語る。

「今気になる人がいるの。もちろん西脇くんじゃないわよ。想いはまだ伝えてないけど、いつか伝えられたらいいなと思っているわ」
「……そっか……」
「……ごめんなさい……」

これがこいつの前で張る最後の虚勢だな、と思いながら要は携帯を握り直す。

「いや、椎名が謝ることないぜ。そいつと上手くいけばいいな」
「ありがとう……。柴門くんからのこの電話で沢山の勇気を貰ったような気がするわ」
「俺の分まで頑張れよ、椎名」
「ありがとう柴門くん……」
「じゃ…な」
「えぇ。さよなら……本当にありがとう……」

ゆっくりと通話ボタンを切り、携帯電話を手にしたままで、要は冷えた灰色のコンクリートの上に仰向けに寝転んだ。

「……やっぱカッコ悪ィな俺……」

寂しそうな笑顔を浮かべ、光を失った携帯電話を目の上にかざしながら要は一人呟く。

屋上のコンクリートの上から見上げた灰色だったはずの空は、いつのまにか完全な夜空になっていた。

「……本当です」

誠吾のその言葉を聞いた緑はグラウンドで立ち尽くした。溢れ出る涙が俯く頬を次々に伝い、乾いた土へと幾つも落ちていく。

誠吾はスーツのポケットからハンカチを出すと緑にそっと差し出した。緑はそれを受け取ったが、ただ受け取っただけで涙を拭おうとはしない。

――織田志穂の事件は誠吾がカノンに赴任して半年後に起きたトラブルだった。

当時三年だった志穂が妊娠三ヶ月目に入ろうとしていることが発覚したのだ。

志穂は無論、学審会にかけられた。

しかし志穂は子供の父親の名前を言うことを頑なに拒否し、学審会が退学処分を決定する前に自ら学園を去る道を選ぼうとした。そんな志穂の身を案じた誠吾は志穂に何度も説得に行き、裏ではなんとか退学にならないで済む方法は無いかと学内を駆け回った。

黒岩にも何度も直談判に出向き、その度に煙たがられた。

そのうち、誠吾のあまりにも熱心なその姿勢に、「もしかしたら織田志穂の子供の父親は矢貫先生ではないのか」という陰口が教職員の間で盛んに叩かれるようになった。

そんな中、カノンの教職員達に信じられないような噂が一気に広まる。

志穂が病院に行き、子供を堕ろしてしまったというのだ。

しかもその際、病院に提出した堕胎手続き用紙の胎児の父親欄に、矢貫誠吾のサインがあったというのである。

緑は当時この噂を聞いて愕然とした。

なぜならそれまで緑は誠吾から様々なアプローチをされていたからだ。

その一番最初のアプローチは誠吾の歓迎会の席でのことだった。

「皆様！　本日よりこのカノンでお世話になることになりました、矢貫誠吾です！　よろしくお願いしますっ！」

当時の緑の第一印象は「顔はまぁまぁだけど頭を使うことは少々苦手そうな、典型的な熱血単純タイプの体育教師」だった。

貸し切りの座敷で宴もたけなわの頃、アルコールが回ってさらに陽気になった誠吾が緑の前にドカッと腰を下ろし、緑の手をいきなり握りしめる。

「結婚して下さい！」

手を握られいきなりのプロポーズに、緑は返事も出来ず狐につままれたような顔をした。

しかし赤ら顔の誠吾は構わずに突っ走る。

「あなたに一目惚れしました！　結婚を前提にお付合いして下さい！」

それまでザワザワと賑やかだった宴が急に静かになった。

黒岩が険しい目でこちらを見ていることに気がついた緑は慌てて言う。

「や、矢貫さん、あなたお酒入りすぎてるのね？」

「いいえ違います！　酔っ払ってはいますが俺は真剣です！　あなたが好きになりました！」

緑は本気で慌て出した。

「や、矢貫さんはまだこちらに来たばかりでご存知ないでしょうけど、この学園では職員同士の恋愛は禁止されているのよ？」

「職員同士の恋愛禁止？　ハッ、そんな下らない規則なんてクソくらえですよ！」

黒岩の眉が小刻みに痙攣し始めたのを見た数名の教師達が、手にしていた徳利や瓶ビールをかなぐり捨てて立ち上がり、さりげなく誠吾を緑の前から引き離して大事にならないようにフォローする。

「ま、ま、ま、矢貫さん、さぁさぁこちらにどうぞ、こちらに！」

――しかしその甲斐もなく、明くる日誠吾は赴任そうそう黒岩に呼び出され、理事長室で厳重戒告処分を受けてしまった過去があったのだ。

この処分を受けて以来、誠吾は緑に対してあからさまなアプロー

チをすることは無くなった。
だが、時々学園内で二人きりになると気さくに緑に話しかけたり、一緒に食事に行きましょうと誘い続けた。
カノンの規則で禁じられている以上、緑はその誘いに応じることは無かったが、軽いアプローチをされる度に決して悪い気はしていなかった。
いつしか緑も誠吾のことが本気で気になり始めたそんな頃、この織田志穂の事件が起こったのである。

「……いやはや、これでなぜあんなに矢貫先生が必死になっていたかが分かりましたな」

「しかし仮にも生徒に手を出すとはなんてことをしでかしたんでしょうな、矢貫先生は……」

「これでもう矢貫先生のクビは確実ですね」

職員達が噂する誠吾の誹謗中傷の数々は、どんなに緑が必死に耳を塞いでも容赦無く、そして尽きる事無く入りこんできた。
結局、志穂が堕胎したという噂は偽り無い事実と判明し、志穂は自主退学という扱いになり、なぜか誠吾はカノンをクビにならずそのまま学園に残った。

そして緑はその時から変わってしまった。

もう誰も信じられなかった。

学園内で笑うこともほとんど無くなった。
その日から誠吾の前ではいつも目には見えない鉄のバリケードを張り続け、誠吾が話しかけてきても冷たくあしらうようになった。
やがて学園内で付き合っている生徒達を厳しく取り締まるようになり、代償として“破壊魔”という影の蔑称がその背中につく。

つい数週間前に中央塔の屋上で誠吾から本気で告白された時も、緑はその告白を“あなたを信じられない”という言葉で思いきり跳ねつけた。
しかしそこまで全身で拒絶しているくせに、誠吾が苦境に立たされる場面に遭遇する度につい助けてしまわずにはいられなかった。

――緑はそんな自分が嫌で仕方が無かった。
それはその度に自分はまだ誠吾のことを好きなのだということに気付かされてしまうからだった。

「……それ、使ってくれませんか」

誠吾の静かな声が聞こえる。
しかし緑はまるで石になったようにその場に立ち竦むばかりだった。
誠吾は吸っていた煙草を携帯灰皿に押し込むと緑の手からハンカチを取り、そっと涙を拭いてやった。しかし拭っても拭っても緑の

涙は溢れ出てくる。

「……柳川先生、最後に俺の話しを聞いてくれますか？　多分、ただの言い訳になるとは思います。でも最後にすべてをあなたに話してから俺は行こうと思います」

緑は目を伏せたままで返事をしなかった。

誠吾はそっと緑の手を取り、ハンカチを再び握らせる。

「……お願いです、もう泣かないで下さい。俺も辛くなります……」

そう言うと誠吾は緑に背を向けた。

「……先生、……俺、人殺しなんですよ」

「エ……？」

“　人殺し　”　という衝撃的な言葉に緑は思わず涙に濡れた顔を上げた。

「もう二人の人間を殺してしまってるんです……」

誠吾は星が瞬く夜空を見上げる。

「“　人は死んだら星になる　”　っていいますよね。この夜空の中のどれか二つが俺のせいで星になったんです」

「お、仰っている意味が分かりませんわ……」

誠吾は星の一つ一つを眺めながら、今日まで隠匿されていた織田志穂の事件の真相をぽつりぽつりと語り始めた。

「……織田の子供の父親は早乙女先生だったんです……」

驚いた緑は涙声で繰り返す。

「……早乙女先生!?　一昨年急にお辞めになったあの早乙女先生ですか……!?」

一昨年、志穂が退学したすぐ後に三年音楽担当の早乙女響一（さおとめきょういち）は体を壊したという理由ですでにカノンを退職している。

「そうです……。当時、織田が頑として子供の父親の名前を言わなかったのは妻帯者だった早乙女先生を必死に庇っていたんです……。俺は当時学内で織田の処分をなんとか軽く済ませるために必死で黒岩理事長に掛け合っていました。その合間を縫って織田の見舞いにも行っていました。そんな俺の行動を見ていた織田は俺に次第に心を許すようになりました。そしてある日、織田は俺に告白したんです。子供の父親は早乙女先生だと……」

緑はハンカチを手に呆然と誠吾の広い背中を見つめる。

「俺は驚きました。そして同時に織田と生まれてくる子供が可哀想でなりませんでした。俺は早乙女先生を呼び出し、激しく責めました。なぜ認知をしてやらないのか、と。早乙女先生は苦しそうに“　認知だけはできない　”　と繰り返すばかりでした。そんな早乙女先生の態度に頭にきた俺は毎日のように早乙女先生を責め続けました……」

「矢貫先生……」

「そして俺は織田から急に呼び出されました。織田の家に行くと織田はいきなり俺の顔を引っぱたき、目に涙を浮かべながら言いました。『先生は人殺しよ！』と……。訳が分からず呆然とする俺に織

田はさらにこう言いました。今日病院で子供を堕ろしてきた、だからもうこれ以上早乙女先生を責めるのは止めて下さい、と」

知らずうちに大きなはずの誠吾の背中は小さく丸まっていた。

「織田の話しによると早乙女先生は奥さんの家に婿入りしていて、奥さんのご実家は有名な旧家なんだそうです。奥さんとの間に子供がいなかった早乙女先生は、立場上どうしても織田との間の子を認知するわけにはいかなかった。相続、遺産問題があるからなんだそうです……」

先程の煙草を押し消してからある程度の時間が経ったが、ヘビースモーカーなはずの誠吾は次の煙草を咥えようとはしない。

「でも織田はそんなこと全然気にしていなかった……。早乙女先生が認知できない理由を彼女なりにきちんと理解し、その上で自分一人でもその子を立派に育てようと決意していたんです。それを、事情を知った俺が早乙女先生を責め続けたので、織田は結局子供を堕ろしてしまったんです。早乙女先生がもう苦しまずにすむように……」

二人が立つグラウンドの照明の光が少しずつ弱々しい光へと変化しはじめている。それはあともう少しでこの場所の照明の光が完全に落とされてしまう前兆だった。

少しずつ、少しずつ、誠吾の姿が闇に溶け出していくようで、緑は言い知れぬ不安を感じ始める。

「……子供を堕ろすには堕胎手続きの用紙がいるらしいんです。その用紙には堕胎手術を受ける本人の他にその胎児の父親のサインも必要で、織田はその父親のサインを俺の名前で出したんです。“

先生が何もしなければ、あんなに早乙女先生を責めなければ、こんなことにはならなかった。だから私は堕胎の書類を矢貫先生の名前で書いた”　と織田は泣きながら言いました。そして織田は最後に俺に向かってこう叫びました。『忘れないで、先生は人殺しなのよ！』と……」

辛そうな声で呟くように語る誠吾のその声は自責の念に溢れていた。

「……それは止どめの一言でした。その後、俺はどうやって自分の家に帰ったのか覚えてません。ただ頭の中に『人殺し！』と叫んだ織田の声だけが残っていました……」

緑は今初めて知った真実に呆然としていた。
そして消え入りたいくらい恥ずかしかった。
好きな相手を信じられず、周囲の噂だけを鵜呑みにしていた自分がたまらなく恥ずかしかった。

「……早乙女先生も相当苦しんだようです。結局その後、理事長にすべてを話し退職なされました。そして俺は理事長に呼ばれ、この件は決して他言しないように言われたんです……」

誠吾は心配そうな顔で一度振り返ったが、緑の涙が止まっているのを確認し、安心した表情を見せる。

「……そして今回の笹目の件です。俺が笹目を強引に体育に参加させたせいで笹目も結果的には流産してしまいました……。腹の中の赤ん坊だって立派な一人の人間です。これで俺は二人の人間を殺し

てしまったんです」
「いえ！　それは決して矢貫先生のせいではありませんわ！」
「でも俺の中の良心が俺を許さないんです。しかも俺は笹目すらも助けることが出来なかった……。先生、俺はカノンを辞めます。今まで色々とご迷惑をおかけました……そしてありがとうございました……」
「ダメッ！　ダメよ！」

再び緑の目に涙が浮かぶ。
その涙を見た誠吾は緑の側に歩み寄ると、その肩にそっと手を置き小さく笑った。

「先生、どうかもう泣かないで下さい。そしてお願いですからあなたはもっと笑っていて下さい。俺はここに来たばかりの頃、あなたが他の教師と何かを喋りながら笑っている顔を初めて見た時、あなたに一目惚れしたんですよ」
「先生！　私、理事長に辞職願いを受理しないように言いますから考え直して！」
「……本当はもっとあなたの側にいたかった……。でもこれできっといいんです。これがきっと最善の方法なんです。柳川先生、どうかお元気で……」
誠吾は静かに緑の横をすり抜ける。
「待って！　矢貫先生ッ！」

その時グラウンドの照明がすべて落ちた。
緑が自分を呼ぶ涙声にも二度と振り返らず、誠吾は暗闇へとまぎれ、見えなくなる。
誠吾の姿を見失った緑はグラウンドに膝から崩れ落ちた。ウッウッという嗚咽が何度もその口から漏れる。

（私が……私があの人を信じようとしなかったから……）

誰もいなくなった真っ暗なグラウンドで誠吾のハンカチを握り締め、一人大きな後悔に苛まれながら緑はいつまでも身を震わせていた。

ゴールデンウィーク一日目の昼過ぎ、倉沢家の玄関先に現れた冬馬はそのままインターフォンを押す。応答は無かったが、代りにすぐドアが開き、中から桃乃が出てきた。

今日の桃乃はオレンジのホルターネックのキャミソールに同系色の半袖ニットカーディガンを羽織り、下は白のカプリパンツにミュール、という可愛らしい服装だ。

「おっ、その服いいなっ！」

開口一番の冬馬の言葉に、桃乃は顔を赤らめて胸元の辺りを慌てて手で覆い隠す。

「や、やだっ、あんまりジロジロ見ないでよ！」

「なぁなぁこの首の後ろの紐、ほどけたりしないのか？」

「しないわよ！　冬馬、引っ張らないでよ！？」

「あぁ」

と言いつつも冬馬はさりげなくその紐下の部分を触る。

「バ、バカッ、触んないでよッ！　こんな所でほどけちゃったらどうすんのよ！」

「それもそうだな。俺以外の関係ない奴に見せたくねぇし」

「冬馬も同じなのっ！」

「ケチだなぁ桃乃は……」

「そういう問題じゃないでしょっ！？」

桃乃と冬馬が何やら言い合いながら連れ立って出かけて行くのを、リビングの窓ガラスから葉月が興味津々の眼差しで見送る。

「……ねぇお母さん、お姉ちゃんと冬馬兄ちゃん、どこに行くの？」

「今日から始まる恋愛映画観に行くんですって。桃乃、前から見たがってたじゃない？　冬馬くんが一緒に行ってくれることになったみたいよ」

「ウソッ！　それって思いっきりデートじゃない！」

「えっ、そうなの？　冬馬くん優しいから、映画一緒について行ってくれたのかとお母さん思ってたけど……」

食器を片付ける手を止めて驚く千鶴に、葉月はけらけらと笑い出した。

「やっぱりお母さんって鈍いよね～。だってさ、一緒に映画を観に行くなんてまさにデートの王道だよ？　それにこの間のバーベキューの時もさ、お姉ちゃんと冬馬兄ちゃん、な～んかおかしかったんだから！」

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

映画館は今日が封切りとあって混んでいた。

「ほら、桃乃」

桃乃は冬馬がすでに用意してくれていたチケットを申し訳無さそうに受け取る。

「私が観たい映画なんだから私がお金出すって言ったのに……」

「いいんだって。初デートなのに彼女に金出させられるかよ。さ、行こうぜ」

冬馬は桃乃の手を引っ張って映画館の中へ入る。
「席はEの三十と三十一だろ……ここだな。あれっ？」
先を歩いていた冬馬は番号が該当する座席を見て少し驚いた声を出した。
「この席くっついてんだな」
冬馬の後ろから席を覗きこんだ桃乃が言う。
「これってもしかしてペアシート……？」

（さては兄貴か……）

こういう事には本当に気が回るよな、と思いつつも冬馬は内心で兄に感謝する。
今日のチケットは衒人が代りに取ってくれていたのだ。
「さ、座ろうぜ。桃乃はそっちの奥のほうな」
「どうして？」
冬馬は自分の片足を軽く一度叩く。
「俺、足はみ出しちまうから通路側の方がいい」
「あ、そうね」
ペアシートに腰を掛けた冬馬は、自分と桃乃の間に肘掛がないのがいたく気に入ったようだ。
「ここに仕切りが無いのがいいなぁ！　な？」
冬馬は大きく足を広げて座り、片足を桃乃の膝にわざとトン、と当てる。
「し、知らないっ」
桃乃は両膝をピッタリ合わせて座り、恥ずかしさを隠すためわざとつれない返事をした。
通路側の肘掛に左肘を置き、頬杖をつきながら心底つまらなそうに冬馬が呟く。
「相変わらず冷たいねぇ……」

やがて上映が開始され、ゆっくりと場内が暗くなり始めた。秒刻みで時を追うごとに、館内は漆黒の闇に包まれてゆく。

二人が観に来た【魂が魅(ひ)かれあう彼方で】という映画は、深く愛し合ったテツとヒトミという恋人同士がある事件がきっかけで離れ離れになってしまう所から始まる。

互いの安否もまったく分からないまま無情にも数年の歳月が流れ、しかしそれぞれ相手のことが忘れられない主人公達はまるで何かの運命に引き寄せられるように、同じ日に同じ思い出の場所で偶然に巡り合うというラブストーリーだった。

二人が離れ離れになる日の朝、その思い出の場所で主人公、テツは恋人のヒトミに向かって告げる台詞がこの物語の最初のクライマックスだ。

「……大丈夫、心配しないで。きっと僕らの魂はいつかまた必ず魅かれあうよ」

この時点で映画はまだ前半部分しか終わっていないのに、すでに館内のあちこちから女性の啜り泣きの声がかすかに漏れ始めている。桃乃の涙腺も、ハンカチが目元から片時も離れられないくらいに完全に開ききっていた。自分のすぐ隣で何度も涙を拭う桃乃が気になってしかたのない冬馬は、何度もその様子をチラチラと横目で眺める。

（しっかしなんでコイツってこんなに可愛いんだろうな……）

すぐ横で、その大きな瞳に一杯の涙を溜めながらスクリーンを見つめている桃乃の表情を見ているだけで鼓動が意思に反して勝手に

早まり始める。
早まる鼓動は抑え難い衝動へと変化し、その溢れ出る衝動が体中を巡り出し始めていた冬馬は無意識に人差し指で自分の足をせわしなく叩き始める。

やがてそれまで流れていた哀しげな音楽が止まり、スクリーンはテツとヒトミが最後の一夜を共にするシーンに切り替わった。きわどいベッドシーンが惜しげも無くスクリーンに大写しになり、館内にヒトミが切なく喘ぐ声が大音響で何度も響き続ける。
すぐ横に冬馬がいるせいでスクリーンを直視するのが恥ずかしくなった桃乃は、思わず軽く目を伏せた。

（……こういう時、平気な顔して観ていた方がいいのかな……）

そっと視界の端で密かに左側を見てみる。
背の高い幼馴染の整った横顔が、瞬くスクリーンの蒼い光で何度も照らされている。通路側の肘掛に片肘を置き、頬杖をついたままの冬馬は無表情でスクリーンを見つめていた。
冬馬が堂々と観ているのでなんとなく安心した桃乃はもう一度スクリーンの方に目を向けた。するとその瞬間、膝に置いていた片手がいきなり暖かくなる。

「！？」

一瞬の動揺の後、膝の上に視線を落とすと自分の左手が冬馬の右手に包まれていることを桃乃は知る。
だが、上映中なので声が出せない。驚いた声を飲みこんで通路側を見上げた。しかし冬馬は桃乃の方を見ようともせず、先程とほとんど同じポーズでスクリーンを黙って見続けている。

まだスクリーンではベッドシーンが続いていた。
相変わらず冬馬はスクリーンの方を見たままで、驚きで硬直してしまっている桃乃の手をすっぽりとその大きな手で覆い、緊張を優しく解きほぐしてやるように時々軽く指を動かして桃乃の手を何度も握り直す。
五本の長く骨ばった指が、優しく絡まってくる。
まるで今スクリーンの中でテツから愛撫を受けているヒトミのような気分になり、桃乃の胸が大きく波打ちはじめた。

「と……」

桃乃は小声で冬馬の名を呼ぼうとしたが、冬馬は一瞬だけ桃乃の方に目を向けると反対の手の人差し指を素早く自分の唇の前に立てた。
もちろん“　上映中だから静かにな　”という合図だ。
仕方なく声を飲み込んだ桃乃は再び俯く。
段々と強く熱を帯びていく自分の両頬に戸惑いながら。

やがて長く激しいベッドシーンがようやく終わり、スクリーン上は別のシーンに切り替わった。
しかし結局最後のエンドロールが流れるまで、桃乃の左手は冬馬にしっかりと握られたままだった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇
◆◇◆◇◆

「なぁ桃乃、あの映画、面白かったのか？」

映画館のすぐ近くにあるオープンカフェでアイスコーヒーを飲みながら、冬馬がたった今観てきた映画の感想を桃乃に尋ねた。注文したアイスカフェラテにストローを差しながら、感動と興奮がまだ覚めやらぬ状態の桃乃は当然、と言わんばかりに瞳を輝かせる。

「もちろんよ！　すっごく切なくて素敵なラブストーリーだったじゃない！」

「へぇ～あんなのがねぇ……。桃乃、途中から最後までずっとボロボロ泣いてたもんな」

「冬馬、面白くなかったの？」

「俺ラブストーリーとか苦手なんだよ。背筋がムズムズする。それに男であああいうのが好きなヤツなんか滅多にいないと思うぜ？」

「……ゴメンね、つきあわせちゃって」

桃乃が済まなそうな顔で謝ったので冬馬は慌てた。

「いや違うって！　そういう意味で言ったんじゃねぇぞ？　ほら、映画はちょっとあれだったけど映画館はすごく良かったしな」

「言ってる意味がよく分かんないんだけど？」

「だからさ、映画館って中が真っ暗になるじゃん？　その点が色々いいなぁと思ってさ！」

映画の途中からずっと私の手を握っていたことを言ってるんだ、と即座に桃乃は思った。

そしてあの時自分の中に湧き起こった感情を思い出し、恥ずかしくなった桃乃は冬馬をなじる。

「あっ、ああいうこと止めてよねっ！」

「なんでだよ？」

「な、なんでって……」

空のストローの袋を意味も無くいじりながら桃乃は口ごもる。

冬馬はストローを使わず口を尖らせて直接グラスからアイスコーヒーを啜った後、平然と言った。
「あれぐらい別にいいじゃん。桃乃は見てたか？　俺らの斜め前のペアシートのカップル、映画の途中から何度もキスしてたぜ？」
「え！？　私知らないよ？」
「桃乃は映画に夢中だったからな……。実は俺も密かにチャンス伺ってたんだけどさ」
「とっ、冬馬ってば映画の最中にそんなこと考えてたの！？」
「だってヒマだったんだ。映画つまんねーんだもん」
「……もう冬馬と恋愛映画観に来ない……」
「あっ嘘！　嘘！　あの映画、超面白かったぜ！？」
「またそんな嘘ばっかり言って！」
二人のテーブル近くを通りすぎようとしていた男の三人連れが桃乃の声に気付き、立ち止まる。

「……あれっ西脇！？　それに倉沢さんじゃない？」

通りがかったその面子を見て、思わず冬馬が椅子から立ち上がった。
「おっ、野々山じゃん！　横田と榎本も久しぶりだな！」
野々山智樹（ののやまともき）、横田治（よこたおさむ）、榎本章弘（えのもとあきひろ）の三人は冬馬や桃乃と同じ、白杜中学時代の同級生だ。
「あらら？」
目の前の光景を見た智樹は上品な有閑マダム口調で冬馬をからかう。
「あのー、もしかして西脇さんってばおデート中だったのでございましょうか？」
ニッと笑い、冬馬もそのノリに合わせる。

「あぁまんまとそのおデート中だぜ？」
「おぉっ！　とうとうやったのか西脇！」
「やったじゃん西脇！　苦節何年だっけ？　とにかく良かったなっ！」
治と章弘も冬馬に同時にねぎらいの言葉をかけ始める。
四人の会話の意味が分からない桃乃はポカンとしながらその光景を眺めていた。そんな桃乃の様子を見た智樹が桃乃に話しかける。
「ね、倉沢さん。西脇の奴さ、中学の時からずーっと倉沢さんのこと好きだったんだよ？」
「違うっつーの。もっと前からだよ」
心外そうな顔で冬馬がすかさず訂正をする。
「あっ悪い、そうだったのか！」
智樹は慌てて軽く謝った後、話を続けた。
「でね、倉沢さん。倉沢さんってすごく可愛いのにさ、中学時代、俺らクラスの男子が全然寄っていかなかったの、なぜか知ってた？」
しかし桃乃の返事を待たずにその回答をすぐに治が引き継ぐ。
「それさ、実はこの西脇のせいなんだ。こいつさ、修学旅行一日目の夜にね、部屋でクラスの男子全員でワイワイ騒いでいる時にいきなり言い出してんの。『俺は倉沢桃乃が好きだからお前ら余計なちょっかい出すなよ？』って。あれは驚いたよなぁ？」
治は次に章弘の方に同意を求め、その言葉に「あぁ」と深く相槌を打ちつつ、章弘がさらに詳しく当時の状況を語る。
「あの時突拍子も無くいきなり西脇があんなこと言い出したからさ、部屋中が一瞬シーンとしたよな。あれは西脇が『アイツは俺のもんだ』って俺らの前で堂々と宣言したようなもんだったからなぁ。な？」

再び智樹に解説の順番が回る。

「そうそう。でも西脇が相手じゃどっちにしろ勝ち目ないだろうし、俺らクラス男子全員、それで皆自然と倉沢さんにはノータッチになっていったんだよね。それどころか他のクラスで倉沢さんに告りそうな奴がいたらすぐに西脇に教えてやったりしてさ。なぁ西脇、友達思いな俺らに感謝してたか？」

「あぁ、勿論してたって」

「あっ、そういえばお前、まさか今もまだ倉沢さんのことをヘンな名前で呼んでるわけじゃないだろうなぁ？」

「そんなわけねぇだろ。もうちゃんと名前で呼んでるっての。ほら、デートの邪魔だからもうあっちに行った行った」

「ハハッ、西脇にとって俺らは招かれざる相手、ってとこだな」

冬馬に追いたてられ、智樹が笑いながらテーブルから一歩離れる。

「じゃ、俺達かなりお邪魔みたいだからまたな。あ、そうだ西脇。お前もうケータイ持ってんだろ？　番号とメアド教えてくれよ」

「あぁ」

少年達はお互いに携帯情報を教えあう。

「じゃ倉沢さん、お邪魔してゴメンね。またね」

「う、うん。またね」

三人が去っていってしまうと冬馬はポケットに携帯を突っ込みながら尋ねた。

「桃乃、お前ケータイまだ持ってないよな？」

「うん」

「なんで持たねぇんだよ？　お前と連絡取りたい時すげー不便なん

だよな」
「お父さんが許してくれないの」
「なんで？」
「ん、中学生がケータイで犯罪に巻き込まれた事件があったのを前にテレビで見て、それで心配だからまだダメだって」
「桃乃のおじさん、メッチャ心配性だからなぁ……」
小さい頃から雅治のことをよく知る冬馬は溜息をついた。
「おじさんの気持ちも分かるけどさ、でもそろそろ必要じゃね？」
「そうなのよね……。葉月もずっと欲しがってるんだけど、うちのお父さん、こういうことには頑固だから……。そ、それより冬馬」
「なんだ？」
「さっき野々山くん達が言ってたこと、本当なの……？」
「あぁ修学旅行の話しか？」
微塵も照れた様子の無い冬馬はへへッと明るく桃乃に笑いかける。

「マジマジ！　あの当時お前の事好きな奴も何人かいたようだしさ、そろそろクラスの奴らに一発、釘刺しとこうと前々から思ってたんだ。おかげで野々山達みたいに協力者も出来てさ、あの時あいつらに気持ちをぶちまけといて良かったよ！」

それを聞いた桃乃はグラスから手を離し、赤くなって俯く。
この背の高い幼馴染は「遠慮」という言葉なんてまったく知らないかのように、今日もグイグイと桃乃の心を押し開けてきていた。

「桃乃さ、五日は空けといてくれてるんだろ？」

家路につく二人の背中を橙色の夕日が同じ色に染めている。

「う、うん。何も予定ないけど」

つぶらな瞳で佇むピンクのミニテディベアを抱えながら桃乃は頷いた。ＵＦＯキャッチャーで冬馬が取ってくれた本日のキュートな戦利品だ。

「俺、明日から用事あるんで五日まで会えないんだけどさ、夕方五時に百合ヶ丘（ゆりがおか）公園の噴水のとこで待ってるからさ。会う時間遅くなっちまうけどゴメンな」

「ずいぶん長い用事ね。家族でどこか旅行に行くの？」

「ん？　いや違う違う。部活とか色々」

「そう……」

そう答えた桃乃の顔を見た冬馬の声が弾む。

「お！　“　ちょっと寂しいな　”　なんて思ったなっ、その顔は！」

「えっ？」

冬馬の指摘で心の奥底にある気持ちがストレートに表情に出てしまっていたことを知った桃乃は、恥ずかしさのためにわざと素っ気無い返事をする。

「べっ、別に？」

「おい、あっさり否定すんなよ……」

映画館内に引き続き、またしてもつれない返事をされた冬馬は小さく諦めの吐息を吐く。明らかに気落ちしているその口調に、素直になりきれない桃乃の胸がチクリと痛んだ。

「ホント冷てぇよなぁ。大体…」

そこまで言いかけた冬馬は前方にいる人影に気付くと急に足を止め、桃乃の右腕をグッと強く掴む。

「ど、どうしたの？　冬馬」

桃乃が声をかけても冬馬は険しい顔で前方を見たままだ。不思議に思った桃乃はその視線の先を追ってみた。

「あっあの人……！」

西脇家の塀に寄りかかっていたその人物も帰ってきた二人に気がついたようだ。

「桃乃、お前ここにいろ！」

冬馬はそう叫ぶと桃乃の腕から手を離し走り出す。

塀に背中を預けていた細身の男はジャケットの両ポケットに突っ込んでいた手を出し、駆け寄ってくる冬馬を見ると塀からゆっくりと身を起こした。

つい数週間前のカノン正門前での小競り合いのように、冬馬は声を荒げて詰め寄る。

「おい！　何しに来たんだお前!?　なんで俺の家知ってんだよ!?」

「……学校じゃなかなか言う機会が無くってな、だからお前の住所をクラス名簿で調べて来た」

夕日を真正面から浴びる立ち位置になった要は、眩しいのか伏し目がちに答える。

背後に桃乃が追いついてきた気配を感じ取った冬馬は、左腕を後

ろに下げて桃乃をガードする姿勢を取り、要を威嚇する。
「俺、言ったよな？　今度桃乃に近づいたらぶっ飛ばすぞって」
背中越しにその言葉を聞いた桃乃は驚き半分、呆れ半分で冬馬の後姿を見上げた。

（冬馬ったらやっぱりこの人を呼び出してそんな事言ったんだ……。月曜日に話した時は「分かった」って言ってたのに嘘ついたのね）

要は冬馬の方に体を向け、少しだけ頭を下げると「悪かった」と静かな声で告げる。
「済まない。全部俺の勘違いだった」
いきなり要が謝罪してきたので冬馬は呆気に取られた顔をする。
「勘違い！？」
「あぁ……」

下降気味の視線を三十度程上昇させて要はその先を話そうとしたが、冬馬の後ろに桃乃がいるのに気付くともう一度さっきよりも深く頭を下げた。

「君にもヘンな真似して悪かった。もうつきまとったりしない、約束する」
「……それ本当だろうな？」
桃乃の代わりに冬馬が返事をし、まだ疑惑の残る目で要を見る。
「あぁ、もちろんだ。それで西脇、お前にちょっと話しがあるんだけどさ……」
要はそこで一度言葉を切り、桃乃の方を気にかけながらその先を言い淀む。
冬馬は何秒か黙考していたが、やがて親指を立てて自分の家を指

した。

「……あぁ、じゃ俺ン家に入れよ」

「いいのか？」

「話しがあるんだろ？」

冬馬はそこで後ろを振り返り、心配顔の桃乃の方に視線を移すと安心させるようにニッと笑った。

「じゃ桃乃、次は五日な！」

「う、うん……」

「そんな顔すんな。大丈夫だって！」

「うん……」

「……あの子向かいに住んでたのか」

向かいの自分の家の門を開け、心配そうに冬馬の方を振り返りながら中に入っていった桃乃を見て、要が呟く。

「あぁ、幼馴染なんだ」

「ふぅーん……」

「じゃとにかく入れよ」

冬馬が玄関を開けると、出かける様子の裕人が二階から下りてきたところに出くわす。

「お、冬馬の友達か？」

衍人の声を聞いてリビングから麻知子も出てきた。
「あら、冬馬やっと帰ってきたの。柴門くん、ずっと外で冬馬が帰ってくるの待ってたのよ。中に入って待ってればって言ったんだけど、どうしても表で待つって言うから……。じゃ、今なにか飲み物持っていってあげるわね」
「あぁ。こっちだぜ」

冬馬と要が連れ立って二階に上がっていくのを見送ると、麻知子は側にいた衍人に話しかける。

「ね、衍人、今の男の子カッコイイでしょ？」
「うん。名前なんだっけ？」
「柴門要くんだって。ねぇ柴門くんってさ、なんとなく見た感じアンタに似てない？」
「確かに雰囲気はちょい似てるかもな」
要の姿を思い返し、衍人が頷く。
「その点、俺と冬馬は微妙に違うんだよなぁ。いい男に向かうベクトルの進む方向がさ」
「しかも冬馬は真面目だしね、誰かさんとは違って！」
「母さんはすぐそうやって俺をけなすんだから……」
「そうそう、それに夜遊びもしないしねー！」
「またまた……キツイな母さんは」

ここは一発大きな話題を出さないと今から夜遊びに出かけにくいと判断した衍人は、とっておきの話題を出すことにした。

「母さん、実はここだけの話しなんだけどさ」
「なによ、急に小声になって」
「……冬馬さ、桃乃ちゃんに告白したらしいよ」
「エッ!?　桃乃ちゃんに!?」

「シーッ！　母さん声がでかいよ」
麻知子は慌てて自分の口元を手で覆った。
「ゴ、ゴメン。……で、どうなったのよ？」
「桃乃ちゃんＯＫしたらしいぜ。今日二人で映画観に行ってきたみたいだよ」
「本当！？」
「本当本当。だって俺チケット取ってやったもん」
「あらまぁ……じゃあ近いうちに倉沢さんのお宅にご挨拶にいかなくっちゃ！」

麻知子の返事を聞いて衿人は呆れた声を出す。

「母さん、別に結婚するわけじゃないんだぜ？　ただ付き合うことになったぐらいでなんでわざわざ桃乃ちゃんの家に挨拶に行くんだよ？」
「だって千鶴ちゃんのお宅とはもう近所付合い長いしねぇ……」
「ちょ、ちょっと待てってば母さん！　それじゃ俺が喋ったこと冬馬にバレちゃうじゃん！　それならせめて冬馬から母さん達にその話しが出てからにしてくれよ、な？」
「……そうね。冬馬からきちんと話しがあってからの方がいいわね」

「そうそう！　じゃ、俺ちょっと出かけてくるから……。あ、晩御飯はいらないよ」
「まぁーた夜遊び！？」
「夜遊びって……俺も冬馬達が観てきた映画を観に行くんだ」
「あっ、もしかして【魂が魅かれあう彼方で】！？」
「そうそれ」
「いいな～！　私もそれ観たいのよね～」
「オヤジと行けばいいじゃん」
「あの堅物男があんな恋愛映画を一緒に観に行ってくれると思う？」

「ハハッ、天地がひっくり返ってもありえなさそうだな」
　裄人は軽い笑い声を上げながらシューズボックスから綺麗に手入れされた茶色のローファーを取り出すと、靴べらを手に取る。
「じゃちょっと出かけてくるよ」
「家の前で空ぶかしは絶対ダメだからね！」
「はいはい。了解です」
　外に出た裄人は胸ポケットからチケットを取り出し、自分も間違いなくペアシートチケットなことを確認すると満足そうに車に乗り込んだ。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇
◆◇◆◇◆

　その二十分後、夕日が斜に差し込む西脇家の二階で、自分の勘違いの顛末を要がようやく説明し終わる。
「……というわけなんだ」
　話を聞き終わった冬馬は椅子の背に大きく寄りかかり、片膝を立てて床に座っている要にあらためて確認する。
「じゃ椎名さんは別に俺のこと好きでもなんでもなかったってことなんだな？」
「そうだ。お前の名前借りただけだって言ってた。ホントに済まん」

「ったく勝手に勘違いされて、勝手に恨まれてか。いい迷惑だぜ」
「……俺は完全に悪いが、椎名に悪気は無かったんだ。それは分かってくれ」
冬馬は不機嫌な表情でしばらく黙っていたが急に椅子の向きを大きく変え、正面から要を指差した。
「柴門、念のためにもう一度確認していいか？」
「何をだ？」
「桃乃に近づいたのは俺に嫌がらせをするためだけで、お前は桃乃のことを別に好きでもなんでもないんだな？」
「ああ。その通りだ。そりゃもちろん、すごく可愛い子だとは思うぜ？　こんなことがなけりゃ普通に声かけて口説いてたかもな」
この最後の言葉に瞬時に反応した冬馬は固い視線を要に向ける。
「やっぱり気があるんじゃねぇか……」
「いやだから、それは気があるっていうか、普通に出会っていればそういうこともあったかも、っていうレベルの話しだぜ？　今は西脇の彼女なんだし、もう俺は一切手出しする気はない。本当だ」
「……信じていいな？」
「ああ、もちろんだ。……そういえばあの子、どうかしたのか？」
「何がだよ？」
「目元が泣いた後のような感じがしたからさ。ケンカでもしたのか？」
冬馬の左肩がピクリと小さく動く。

不機嫌の度合いをさらに大きく増した顔で、冬馬は一言「違う」とぶっきらぼうに答えた。

「……俺、なんかマズイ事言ったか？」

「いや」

しかし態度にはしっかりと出ていた。

椅子がギシギシと鳴り出し、冬馬はイラついた様子で貧乏ゆすりを始める。

「なぁ柴門」

「なんだ？」

「お前、この間屋上で俺の事を“　いけすかない奴だ”　って言ったよな？」

「あ、あぁ……。済まない」

「いや、構わねぇよ。俺も似たような感情をお前に持ってたからな。理由ははっきりと分からなかったんだけどさ。でもその理由が今分かったよ」

「へぇ。で、理由は何だよ？」

冬馬は短く断定的に言う。

「お前、兄貴に似てるんだ」

「兄貴？　さっき下で会ったあの人か？」

「あぁ」

「なんだ、お前実の兄貴が嫌いなのかよ」

「そういう意味じゃねぇっての！」

映画を観終わった直後に会った野々山達ですら誰も気付かなかったのに、と思いながら冬馬は仏頂面で続ける。

「なんていえばいいんだろうな……。お前、桃乃が泣いたことに気付いたろ？　あんなわずかしか顔を合わせてなくて、しかも桃乃は俺の後ろにいたのにさ。なんつーか、お前のそういう細かい事にすぐ気付く部分がさ、似てるんだよ、俺の兄貴に」
「ふぅん……」
要は曖昧な返事をした後、立て膝を崩して姿勢を変える。
「正直お前の言いたいことはよく分からないが、でも西脇は本当にあの子のことが好きなんだな。俺もそれはよく分かった」
「まぁな。昨日、今日で急に好きになったわけじゃねぇし」
「あの子のこと、いつから好きなんだ？」
「今年で十一年目だ」
「十一年！？」
「あぁ。あいつとはお互いここに引っ越して来た時からの幼馴染でさ、幼稚園から今までずっと一緒だったんだよ」
「じゃ当然初恋もあの子なんだ？」
「あぁ。プラス一目惚れ」
「……なるほど。そりゃ大したもんだ」
要はひとしきり感心した後、「本当に済まなかった」と頭を下げた。
再度の謝罪を聞いた冬馬はフゥと息を吐き、感慨深げに呟く。
「……まぁ今となってはお前に感謝しなきゃいけない面もあるんだけどな……」
「どういう意味だ？」
「本当はあの日にするつもりじゃなかったんだけどさ、お前がああやって桃乃にちょっかい出してきたから俺、焦ってすぐに桃乃に告

ったんだ。その後結局桃乃はＯＫしてくれたからさ、ある意味お前のおかげで今俺は桃乃と付き合えているんだよな」
「そう言ってもらえれば迷惑かけた俺としては少しは心が軽くなる」
「ところでそっちはどうなんだ？　その椎名さんにもう一度告ってみたのか？」
「……あぁ」
「で、どうだったんだよ」
「見事玉砕だ」
男子校舎の屋上で杏子に携帯電話で告白したあの夜のことを思い出したのか、要は少し寂しそうな顔になった。
そんな要を見た冬馬は、悪いことを聞いてしまったという表情で
「……そうか」と呟く。
「おいおい、同情はやめてくれよ？」
「いや、そういうつもりじゃないんだけどさ……」
「俺さ、今すごくスッキリしてるんだ」
要はあの屋上の時とは一変して清々しい表情で言った。
「前に椎名に告った時な、軽い調子で告って失敗したからさ、それがずっと心残りだったんだ。あの時ちゃんと真面目に告っていたらもしかしたら……っていう考えがいつまでも消えなくってな。でもこの間屋上でお前に言われてよ、思い切ってもう一度、マジで椎名に告ってそれで玉砕したから完全にふっきれたよ」
「そうか……。でもお前、あの沙羅って子に気に入られてんだろ？」
「なんで西脇が知ってるんだ？」
要がわずかに驚いた様子を見せる。
「桃乃がその沙羅って子から聞いたらしくって俺もそれで知った」
「あぁそういうことか。あいつ、すげぇ積極的でさ。話してるとペ

ース乱されっぱなしになる」
「でもしっかりした感じの子だったじゃん」
「俺はああいう常に喋り捲っていそうなタイプが一番苦手なんだよ」

厄介事を抱え込んでしまったと言わんばかりの要を見て、杏子の雰囲気を思い出した冬馬は一人納得する。

「お前、どっちかっていうと物静かなタイプが好きなんだろ？」
「あぁ」
「そんでどこか控えめでつつましくて」
「それに加えてミステリアスな雰囲気を持っていると最高だな」
「ふーん、ミステリアスねぇ……」

色鮮やかな西日が深く差し込む部屋で、ついこの間まであんなにいがみ合っていた両名はそのまま長々と話し込み、結局要が西脇家を辞したのは麻知子の強い誘いで夕食を共にした一時間後の事だった。

貴女は小さなお姫様

ゴールデンウィーク二日目。
この日、桃乃は沙羅の家を訪問していた。
沙羅の家はカノンがある谷内崎駅から電車で最終地点の中和泉にある。駅からすぐ近くの高層マンションに沙羅は母親のエリザと二人で住んでいた。父親は航海士のため、年中ほぼ不在状態らしい。

「ようこそモモ。あなたのことは沙羅からいつも聞いています。会えて嬉しいわ」

見かけは青い瞳に白い肌の外国人だが、エリザはとても流暢に日本語を喋った。
はじめまして、と桃乃も挨拶をし、沙羅がエリザを紹介する。
「モモ。ママはね、若い頃、貿易会社の通訳兼秘書の仕事をしていたの。だからこんなに日本語が上手いのよ。今は進学塾で英語の講師をしているの」
エリザは明るい若草色のソファに桃乃を案内すると自分はその正面に座る。
「モモ、英語はお得意？　沙羅のお友達ならいつでも喜んでレッスンさせていただくわ」
「ありがとうございます！」
「さぁじゃあまずお茶にしましょうか。ついさっきパイが出来上がったところだから」
「あ、じゃああたしが用意するね、ママ！」
「ありがとう沙羅。じゃあお願いね」

綺麗なガラスの器に盛られたエリザお手製のストロベリーパイを

食べながら女三人の会話は弾む。桃乃はエリザのパイを手放しで誉めた。

「このストロベリーパイ、とっても美味しい！　こんな美味しいパイ初めて食べました」

「ありがとうモモ。でもそんなに褒められるとなんだかくすぐったいわね」

エリザはそう言うと役目を終えたパイカッターをキッチンに戻すために席を立った。

「良かった！　ママのパイをモモが気に入ってくれて！　あ、でもモモのママも確かお菓子作りは上手なのよね？」

「うん。毎日のように作ってるけど、でもこんな感じのパイはまだ作ったことがないと思うわ」

キッチンから戻り、ソファに座ろうとしたエリザはそれを聞いて中腰の姿勢で動きを止める。

「モモ。よかったらこのパイのレシピをあげましょうか？」

「えっ、いいんですか？」

「えぇ。私のレシピで作るパイが広まったらこんな嬉しいことはないわ」

エリザは再び席を立つと、書棚の最上段にある数々のクリアブックから背表紙に『Ｓｗｅｅｔ』と書かれているファイルを取り、中からストロベリーパイのレシピを取りだして桃乃に手渡した。

「ありがとうございます！　お母さん喜んで作ると思います！」

「ねぇねぇモモ！　ちょっと待って！」

とそこで沙羅が桃乃に一つの提案をする。

「モモのママに作ってもらうよりモモがチャレンジすればいいんじゃない？」

「あ、そうね。最近お菓子作りなんて全然していなかったから私が

このパイ作ってみようかな」
「で！　その出来たパイ、冬馬にあげるんだよね！」
桃乃の腕をつつき、すかさず沙羅がからかった。
今の提案はこの台詞を言いたいがためだけに出したらしい。
「トゥーマ？」
二人の会話を聞いていたエリザが少しおかしなイントネーションで冬馬の名を口にする。
「ううん、ママ。『トゥーマ』じゃなくて『トウマ』よ。モモの彼氏なの。バスケットやっててね、背が高くてカッコイイんだ！」
「沙羅より高いの？」
「うん、もちろんだよママ！　背はこれぐらいだったかな？」
冬馬の背丈を沙羅は空中に手で指し示す。
「じゃあきっとトウマにとって、モモは大切なリトルプリンセスなんでしょうね」
エリザは祝福するように優しく微笑み、沙羅がその言葉に強く同意する。
「そうよさっすがママ！　まさにその通り！　傍から見てるとね、冬馬ってモモのこと“　もう好きで好きでしょうがない　”って感じなんだよねー！　この間あたしとモモが違う男の子に送ってもらおうとした時もね、冬馬がすごい勢いですっ飛んで来て、モモに“　頼むから俺と一緒に帰ってくれ　”って言ったんだよ。あれカッコよかったな～！」
「さ、沙羅、もうやめてよ……」
恥ずかしさのあまり、桃乃は小声で抗議をする。
「モモは幸せな女の子ね」
エリザはティーカップを手に再びゆったりと微笑む。
「女性はね、自分が愛するよりも男性に深く愛された方が幸せになるものなのよ」

「おぉっと見事に出ましたぁーっ！　ママの十八番の決め台詞～～っ！！」

その元気なパフォーマンスに桃乃とエリザがクスクスと笑う中、沙羅は急に真剣な声に戻るとエリザに尋ねる。

「でもねママ。女の人の方が男の人を一杯好きになる場合もあるでしょ？　その場合は幸せになれないの？」

「そうね……」

エリザは透き通った青い瞳を瞬かせて娘の質問に答える。

「幸せにならない、なんて乱暴なことは言わないけど、でもママは女の立場や経験から言えば、やっぱり男の人の愛情が強いほうが円満にいくと思うのよね」

それを聞いた沙羅のテンションが急激に落ちた。

「……う～ん……そのママの理屈じゃ、あたしの恋は思いっ切り前途多難じゃない……」

「カナメって男の子のこと？　ママ一度会ってみたいわね。今度連れていらっしゃい」

「え？　要を連れて来いって!?　ダメだよママ！　だってまだ全っ然まったくな～んにも進展してないもん！　片思いで終わる可能性も大ありなんだからウチに連れてくるなんて無理だよ～！」

エリザはティーカップをソーサーに戻すとなぜか楽しそうに話す。

「でもあなたに好きな男の子ができたことをパパが知ったら一体なんて言うかしらね？」

「そんなの決まってるじゃないママ！　パパなら大きく頭を抱えて……」

『ｕｎｂｅｌｉｅｖａｂｌｅ！』

明るい日差しで一杯なリビングに沙羅とエリザの声が反響する。

完璧な英語で綺麗にハモった母娘は同時に笑い出した。

「ちょっと沙羅、真似しないでちょうだい」
「ママこそ～！」

沙羅とエリザの楽しそうな会話のやり取りは続く。

「じゃあそう叫んだその後、パパはどうなると思う、沙羅？」
「そうだなぁ……。パパならそのままいつまでもおろおろしてそう！　で、ソファの角辺りに小指をぶつけて『Ｏｈ！　Ｍｙ　Ｇｏｄ！』って呻くの！」
「パパならしそうよね」
「だからママ。まだパパには要のこと何も話しちゃダメだからね？」

「はいはい。分かってるわ。この事はまだ二人だけの秘密にしときましょ」
沙羅とエリザはまた声を合わせて笑った。

（沙羅のお家ってあったかいな……）

ストロベリーパイのレシピを手にしながら、素敵な親子関係を築いている沙羅とエリザの母娘を桃乃はソファの上で微笑ましく眺めていた。

五月五日

五月五日。この日は桃乃の十六回目の誕生日だ。
母の千鶴は朝から上の娘のバースディケーキ作りに精を出していた。

（でも桃乃、今日家にいるのかしら……）

千鶴は二階を見上げると生地作りの手を止め、桃乃の部屋へ向かう。
「桃乃、入るわよ？」と声をかけてからノックをして部屋に入ると、クローゼットを開けていた桃乃が振り返った。
「なに？　お母さん」
Aラインのワンピースを手にしている娘の姿を見て千鶴は微笑む。
「あらあら、まるでこの間、裕人くんと出かける前の葉月みたいね」

「そ、そう？」
「今日、冬馬くんと会うんでしょ？」
「お、お母さん知ってたの？」
「お母さんは何でもお見通しよっ」
本当は葉月に教えられて知ったのに、千鶴はちゃっかりと自分の手柄にする。
「冬馬くんとお付合いしてるんでしょ？」
「……うん」
恥ずかしそうに桃乃は頷く。
「いいじゃない。お母さんは大賛成よ？　だって冬馬くんは優しくて素敵な男の子ですもの。でもお父さんは桃乃に彼が出来たって知

ったら、きっと慌てるでしょうね」
千鶴はその時の雅治の様子を勝手に想像し、一人笑う。
「……お父さん怒るかな？」
「怒りはしないわよ。ただね、ほら、男親にとって娘って特別な存在だから、そういう意味で心配するとは思うけどね」
「ふぅん……」
「桃乃、今晩は家で誕生日祝えるの？　お母さん今ケーキ作っているんだけど」
「うん。七時くらいまでには帰ってくるわ。冬馬がきっと家で誕生日祝う用意してるだろうからって……」
「冬馬くんってやっぱり優しいわね。うちに気を使ってくれてるのね。あ、その服、お母さんにも見せて」
桃乃の手からワンピースを取ると千鶴はそれを丹念に眺め出す。
「今日は何時に出かけるの？」
「冬馬が夕方まで用事があるみたいだから五時に待ち合わせ」
「あらそんなに遅いの？　でもそれじゃあ大して一緒にいられないわね」
「うん……」
桃乃は軽く俯いた。
「そうね、どうしたらいいかしら……」
千鶴は頬に手をやりながら考え込んだ。
「じゃあ桃乃。今日の桃乃の誕生祝いは八時からにしましょう。雅治さんたら今朝　、頑張って早く帰ってくるなんて言ってたけど、どうせ七時になんて絶対帰ってこられないわ。だから八時までに帰ってらっしゃい」
「うん、分かったわお母さん」
桃乃は恥じらいながらも微笑んだ。千鶴が冬馬と付き合うことに全面的に賛成してくれたことが嬉しかったのだ。

「今日着ていく服、これに決めちゃったの？」
「うぅん、まだだけど」
「じゃあお母さんに選ばせて！」
張りきってクローゼットの中の服をチェックしはじめようとする千鶴を桃乃は必死に押し留める。
「い、いいってばお母さん！　だってお母さんの選ぶ服って決まってフリフリの服なんだもん！」
しかし千鶴は全然気にする素振りも無く、「いいからお母さんに任せて！」と言いながら意気揚々とクローゼットの扉をさらに左右に大きく開け放った。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

その日の夕方、桃乃の家の前に一台の車が急ブレーキ気味の音を響かせて慌しく停車した。
急いだ様子で運転席から降りてきた衿人は倉沢家のインターフォンを押す。
「はい、どちら様ですか？」
インターフォンに出たのは千鶴だ。
「あっ衿人です！　あのっ、桃乃ちゃんはもう出かけちゃいましたかっ！？」
時刻は四時半をとうに過ぎている。
「あら衿人くん？　えぇ桃乃なら少し前に出かけたわ。冬馬くんと約束あるんですって」
「あ～間に合わなかったかぁ……」

「どうかしたの？」
「いえ、いいんです、じゃまた！」
「桁人くん？」
身を翻し、桁人はまた車に乗り込むとエンジン音を鳴らして去って行ってしまった。
「一体どうしたのかしらね……」
千鶴は受話器を置くとおっとりとした声でそう呟いたが、オーブンで焼いているケーキのことを思い出してまたいそいそとキッチンの中に戻っていった。

車は百合ヶ丘公園を目指して疾走する。
公園の駐車場に車を停めた桁人は、冬馬から聞いた噴水の場所へ小走りで向かった。
今日は祝日でまだ完全に日も暮れていない時刻なので、公園内には大勢の人がいる。

（桃乃ちゃん　どこかな……）

桁人は噴水の近くにいるはずの桃乃を探す。しかし噴水の場所には姿が確認出来なかった。
グルリと周囲を見回した桁人の目に、タイル舗装された道の上で何やら取り込み中のグループが映る。

（あ、いた！　……あれ？）

やっと桃乃の姿を見つけた桁人は怪訝そうな顔をして足を止めた。
桃乃の両横を二人の若い男が取り巻いていたのだ。　男達は代わる代わる桃乃に声をかけている。
「よかったら俺らとこれから遊びにいかない？」

「なぁなぁ行こうよ？　俺らさ、けっこー面白い所色々知ってんだよね」

（なんだ　ナンパされてんのか）

桃乃の置かれている状況を飲み込んだ桁人は苦笑した。

「い、行きません！」

男達に挟まれて桃乃は脅えているようだった。右側の男が素早く桃乃の腕を押さえ込む。

「そんな冷たいこと言わないでさ」

「やだっ、離して！」

「おい、そんな大声出さないでくれよ、俺らまるで無理矢理あんたを誘ってるみたいじゃん？」

「思いっきり無理矢理じゃん」

「あ？」

背後から声をかけられた男達が振り返る。

「あっ桁兄ィ！」

桃乃がホッとしたように叫ぶ。

「な、なんだよ、お前？」

長身の桁人に上から見下ろされて多少気後れしながらも、左側の男が肩を揺すりながら虚勢を張ってきた。

「俺はこの娘のお迎え役ですが？」

桁人は目の前の二人の男の顔をそれぞれサラリと見比べると、穏やかな微笑みの中に優越感をたっぷり混ぜた表情で言う。

「う〜ん……キミ達のその顔じゃあ、この娘とは全然釣り合いが取れないなぁ。悪いけどさ、他を当たってくれよ？」

二人組は憎々しげに舌打ちをしながら、「やっぱり男待ちだったのかよ」と負け犬にありがちな捨て台詞を吐いて去っていった。

「桃乃ちゃん、大丈夫？」

衍人は喉元を押さえている桃乃を見て心配そうに言った。

「怖かった……強引にどこかに連れていかれるかと思った……」

「そうだね。良かったよ、間に合って」

「……でも衍兄ィ、なんでこんな所にいるの？」

「あぁ、そうだそうだ！」

用件を思い出した衍人は途端にまた慌てだす。

「実はついさっき、俺の携帯に冬馬から連絡あってさ」

「冬馬から？」

「うん、五時に冬馬とここで会う約束してたんだろ？　あいつさ、ちょっと用事が長引いて間に合いそうにないんだって。だから桃乃ちゃんにそれを伝えて、ついでに自分が行くまで桃乃ちゃんと一緒にいてくれって言われたんだよ。公園で桃乃ちゃんを一人で待たせておいたら心配だからって。でも冬馬の心配、見事に当たったね」

「冬馬、なんの用事で遅れるの？」

「あぁそれはさ……」

と衍人は続きを言いかけたが、一旦言葉を切り、手の中にあった愛車のマークが彫られたキーリングを人差し指にかけて遠心力でクルリと回す。いくつかの鍵がついた束が互いにぶつかり、しゃらん、と音を立てた。

「……知りたい？」

「う、うん。知りたいっ」

「よし！　百聞は一見にしかずだ、じゃこれから行こう」

「行くってどこへ？」

「もちろん冬馬くんがいるところへですよ！」
子供が悪戯を企むような幼い笑顔を見せ、裕人は「おいで」と言うと駐車場に向かって歩き出す。
急いでその後を追うと、先を行く銀のキーリングが桃乃を誘うように、しゃらん、とまた小さく鳴った。

「しっかしウチの冬馬くんにも参りますよ」

桃乃を助手席に乗せ、赤光が充満するトンネルの中をスローペース気味に運転しながら裄人が愚痴り出す。

「いきなり携帯に電話よこしてきてさ、“　兄貴っ！　悪いけど桃乃のとこに行ってくれ！　”　だよ？　俺、デートに向かう途中だったのにさ」

「ええっ！？　じゃあ裄兄ィ、デートをすっぽかしてきちゃったの！？」

「まさか！　連絡取って時間をずらしてもらったよ。でもこの埋め合わせ、後で高くつきそうで怖いけどね」

「大変だね、裄兄ィも」

ため息をつく裄人の姿に桃乃は同情の視線を送った。

「もしかしてその相手って、この間　“　まだ落とすのに時間かかる　”　って言ってた女の人？」

「よくそんなこと覚えてるね！　桃乃ちゃんは記憶力がいいんだなぁ」

前方に固定していた目線を一瞬だけ助手席に切り替え、裄人は感心した面持ちで言う。

「でも残念！　その娘じゃないですよ」

「……裄兄ィ……」

視線の種類を“　同情　”から“　軽蔑　”に変更し、桃乃は運転席の主を見上げた。

「なに？」

「好きな人がいるのになんでそうやって他の女の人と簡単にデートできるの？」
「……ん～……、そう正面切って問われちゃうと返す言葉が無いんだけどさ……」
背筋を正し、裕人はハンドルを握り直す。そして前方に視線を向けたままで答えた。

「……たぶん俺、本気で女の子を好きになったことがないからだと思うんだ」

驚いた桃乃は裕人の横顔を見上げる。
「エッ！？　じゃ裕兄ィは別に好きじゃないのに色んな女の人と付き合ってるの！？」
「いやいや違う違う！　もちろん今まで付き合った女の子達は皆好きだったよ？　だけどさ俺、“　どうしてもこの娘じゃなきゃダメだ　”　って思える娘とまだ出会ったことがないんだ。だから今みたいに色んな女の子とたくさん付き合えるんだと思う」
「ふぅん……」

そんな曖昧な返事をした後、ほんのわずかの間だけ車内は静かになった。
助手席の窓から後方に流れ続ける赤い光を眺めていた桃乃はここである事実に気付く。

「裕兄ィ、この方角ってカノンと反対方向じゃない？」
「カノン？」
裕人は不思議そうな顔で逆に問い返す。
「なんで桃乃ちゃんの高校になんか行くんだい？」

「だって冬馬は今日部活でしょ？」
「部活？　……あぁそっか……なるほど、部活ね……」
口元に手をやり桁人はそう呟く。しかし車の進路にも速度にもどちらにも変化は起きない。
「えっ違うの？」
「うん、とりあえず行き先は俺に任せておいてくれないかな？　あっそれよりさ、この間のアレ、どうだった？」
「アレって？」
「ホラ、【　魂が魅かれあう彼方で　】さ」
「あぁあの映画！？」

つい数日前に観たその映画の感動がまだ冷め切っていない桃乃は、声を弾ませて即答する。

「すっごく良かった！　ラストが特に！」
「ラストってあのシーンだろ？　あの廃墟の跡地に一人で佇んでいるヒトミのすぐ後ろに、いつのまにかテツがそっと立っていてさ、ヒトミの名前を呼んで言うんだよな」
桁人は軽く咳払いをすると、クライマックスシーンのテツの台詞を器用に真似る。

『　――　ほら　僕の言った通りだろう……？　僕達の魂は必ずまたここで魅かれあうって　』

口調も声色も主人公のテツにあまりにも良く似ていたので、桃乃は思わずはしゃいだ声を上げた。

「わぁっ衿兄ィ、すっごく似てる〜！　衿兄ィもあの映画見たの？」

「うん、桃乃ちゃん達が見に行った日と同じ日にね。ペアシートだったろ？」

「じゃ、あのチケットって、もしかして衿兄ィが……」

「そう、俺が取ったよ。冬馬は部活で毎日帰り遅いしさ、チケットを代わりに取るの頼まれたんだ。俺もあの映画を観に行くつもりだったからまとめてご用意させていただきました。良かったでしょ？　映画も座席（シート）も」

そして桃乃の頬が赤らんだのを見て衿人はフフッと笑う。

「あれ？　もしかして冬馬の奴、映画の最中になんかイタズラでもしてきた？　いきなり触ってきたとかさ」

「……！」

「あらら、その顔は図星みたいだね。ハハッ、しょうがないなぁ、冬馬くんは」

車はトンネルを抜け、上空に空が戻る。

少しずつだが夕暮れ空は夜空に切り替わり始めていた。

「で、その時怒ったのかい、桃乃ちゃんは？」

「うぅん……。だ、だって上映中だったし」

「あぁそうだよね。“　止めて　”　なんて言えないか。映画館の暗闇ってかなり使えるからなぁ……。冬馬の奴、そこまで計算してたのかな。どう思う、桃乃ちゃん？」

「し、知らないっ」

「でもさ桃乃ちゃん、できれば冬馬のちょっとぐらいのイタズラは寛大な心で許してあげてくれると兄としても嬉しいな。なんせやっと桃乃ちゃんとお付き合いできるようになってさ、あいつとにかく嬉しくてしょうがないんだよ。不器用で今まで自分の気持ちを上手く伝えられなかった分、ここぞとばかりに一気に大解放しているん

じゃないかな」

　桁人は笑いながらそう言った後、珍しく少しだけ真剣な表情を見せた。

「でさ、さっきの話にちょっと戻るんだけど」

「さっきの話って？」

「【　魂が魅かれあう彼方で　】のこと。あの映画のテツとヒトミもさ、お互いに“　この人じゃなきゃ絶対ダメなんだ　”　っていう関係だっただろ？　俺もいつかああいう恋愛をしてみたいよ。残念ながら俺、そこまで大切に思える女の子にはまだ出会ったことがないんだよね」

　桁人は上着から煙草を出したが、桃乃を見て思い出したようにまたポケットの中にそれを戻す。

「ね、桃乃ちゃんはどう？　冬馬は桃乃ちゃんの中でテツの位置にいるかい？」

「えっ……？」

　いきなりのその質問に桃乃は答えられなかった。戸惑うその様子を見て桁人はまた優しく微笑む。

「……さすがにまだそこまではいってないか。でもね桃乃ちゃん。冬馬にとって、桃乃ちゃんは思いっきりヒトミだよ。いや、もしかしたらそれ以上の存在かもしれないな」

　しばらく車は市内を走り続け、車内には二度目の静寂が訪れてい

た。

桃乃は今の裕人の問いを何度も胸の中で反芻する。

（……私にとっての冬馬の位置……？）

しかし考えは上手くまとまらなかった。

やがて車はある場所からは死角になってこちらが見えにくい場所に隠れるように静かに停まる。

「ほら、あそこ見てごらん」

裕人が指差す方角を見た桃乃はその光景に驚きの声を上げた。

幹線道路の一部を大幅に壊して「工事中」の黄色のランプが何度も点滅している。

赤いコーンが行儀よく一列に並び煌々と輝くその様は、テリトリー内に外部者の侵入を頑なに拒む、作業現場からの強い意思表示だ。

至る所で激しいドリル音が響き、電気仕掛けのマネキン人形が赤く光る警告灯を無表情で左右に振り続けている。

作業着に身を包んだ男達は、ある者は声を嗄らして叫び、ある者は土を掘り起こし、ある者は重機の操作と、それぞれが全神経を集中させて作業に没頭していた。

「冬馬……！」

ウィンドウ越しに見た光景に、桃乃は車内で小さく叫んだ。

街外れの工事現場の一角に冬馬はいた。

上の作業着を脱ぎ、黒のランニング姿で真剣な表情で荷押し車を

押している。
荷車の中身は大小様々の砕かれたコンクリートの破片が山のように積まれていた。
冬馬の顔にはあちこちに土埃が付き、おそらく元は白色だったはずの軍手も今は炭のように真っ黒だ。

「ガラ拾いっていうらしいよ、あれ」

ハンドルに深く覆い被さり、桃乃と同じように外の光景を見ていた桁人が説明する。
「ガラ拾い……？」
「うん。“　ガラ　”　ってああやって削りだしたコンクリートのことなんだって。冬馬が言ってた」
「冬馬はなぜこんな事をしているの？」
「だって今日桃乃ちゃんの誕生日だろ？　あいつさ、親に貰った小遣いじゃなくて自分で稼いだ金で桃乃ちゃんの誕生日プレゼント買いたいって思ったらしくってさ、この連休中ずっとこの短期バイトに明け暮れてたんだ」
「……！」
桁人の説明に桃乃は絶句する。
「数日間だけの条件で探していたから、なかなかバイト先を見つけられなかったようだけどね。そんでさ、こういう肉体作業のアルバイトって高校生でもＯＫのところが多いらしいんだけど、大抵が高三からなんだって。だから困った冬馬は俺になんて言ったと思う？
“　兄貴頼む！　名前貸してくれ！　”　って頼み込んできたんだ」
その時の事を思い出し、桁人は小さく笑う。

「あいつも相当切羽詰まってたんだろうね。でも結局ここの現場作業のアルバイトで使ってもらえることになったらしいよ」
「じゃ、じゃあ冬馬は連休中、ずっとこのアルバイトをしてたの……？」
「うんそうだよ。部活が終ったら即行でここに通ってたみたいだね。だからここんとこ家に帰ってきて飯食ったら、早々に部屋に引っ込んで死んだようになって寝てたよ」
「……私には部活の用があるって……」
「そりゃ言えないよ。黙ってハイクオリティなプレゼントを買って桃乃ちゃんを驚かすつもりなんだからさ」
断続的に続いていた耳をつんざくような削岩機の音がやっと止んだ。
「今日はバイト最終日で桃乃ちゃんとの約束もあるから三時であがるはずだったんだって。でも工事が大幅に遅れててなかなかあがれなくてさ、気付いたらもう四時を過ぎてたらしいよ。それで俺の携帯に焦って連絡してきたんだよ」
「……そ、そうだったの……」
「あ、冬馬なんか言われてるぞ」
衍人の声で桃乃は急いで冬馬の方を見た。
黄色のヘルメットをかぶった現場監督らしき中年の人物に向かって何度か頷くと、冬馬は一礼をして軍手を外した。
「終わったみたいだな。後は日当貰うだけか」
しかし冬馬はそのまま工事現場の脇に建ててある仮設事務所の方には行かず、工事現場の隅に走るとポケットに突っ込んでいた携帯を取り出した。

数十秒後、裕人の携帯が鳴り出す。携帯のディスプレイには「冬馬」と表示されていた。

「ようやく来ましたか。桃乃ちゃん、ちょっと声出さないでいてね」

裕人はそう桃乃に伝え、携帯を片耳に当てる。

「冬馬か？　終わったか？　あぁ、今桃乃ちゃんと一緒にいる。うん、今車の中にいるよ。俺は外で煙草タイム中。……ん？　あぁ、安心しろ、バイトの事は何も言ってないよ。……えっ？　……俺の用事？　あぁ、大丈夫だ。相手の子に時間ずらしてもらったから心配するな。そうだ、それとお前の心配、当たってたよ。俺が百合ヶ丘に行ったらさ、桃乃ちゃん、男二人にナンパされてる真っ最中だったよ。そいつらに強引にどこかに連れていかれるところだった」

桃乃は焦り気味の表情で電話をかけている冬馬の横顔を見つめる。視界の中央にあるその横顔は微かに揺らぎ、ぼんやりと滲み始めていた。

「……あぁ大丈夫だって。その前にそいつら追っ払ったから。……うん、……うん。分かった。そうだな。お前焦んないで顔くらいちゃんと洗ってからこいよ？　……うん。……あぁそうなのか。じゃあそうしろよ。すぐ済むだろ？　……うん、分かった。携帯に連絡くれたらさ、桃乃ちゃんを百合ヶ丘に連れていくから。……あぁ、じゃな」

裕人は携帯を切ると愉快そうに桃乃に告げる。

「桃乃ちゃんがナンパされて危なかったこと話したら、冬馬の奴、すごく焦ってたよ！」

しかしこの裕人の言葉は、ほとんど桃乃の耳には入っていなかっ

た。仮設事務所に一目散に走っていく冬馬の姿だけをひたすら目で追う。そんな桃乃の心の揺れを把握しているにもかかわらず、裕人はさりげない口調で先を続けた。

「冬馬さ、事務所にあるシャワー室で泥を落として、桃乃ちゃんのプレゼント買ったらすぐ向かうって。どれ買うかもう決めてるみたいだから一時間もかかんないと思うってさ」

冬馬に関してのすべての情報を言い終わると裕人は車内のデジタル時計に目をやった。

時刻は五時四十分を表示している。

身じろぎもせずに、ウィンドウ越しからずっと仮設事務所を見つめている桃乃を見た裕人の唇の両端が小さく上がった。

「……さてさて、どうですか桃乃ちゃん？　冬馬は少しはテツに近づいたかな？」

車のエンジンキーを回しながら涙目の桃乃の顔を覗きこみ、裕人は意味深に微笑んだ。

冬馬から再び衿人の携帯電話に連絡が入った時、時刻は六時半を過ぎていた。

「あぁ冬馬か。準備ＯＫか？　じゃあ今から桃乃ちゃんを連れて行くよ。……そうだな、今ちょうど近くを走っているから、たぶん十分以内にはそっちに着けると思う。……あぁ、分かった」

そう告げると車外で煙草を吸っていた衿人は携帯電話を切り、周囲に目をやる。

「……なーんて言って、本当はとっくに現場でスタンバイ中なんだけどね」

桃乃と百合ヶ丘公園の駐車場で待機していた衿人は、携帯をジャケットのポケットに戻すと、運転席のドアを開けて中にいた桃乃に声を掛ける。

「じゃ桃乃ちゃん、冬馬から連絡来たから、あと五分くらいしたら行っていいからね。あっ、そうだ。それとさっきも話したけどさ、くれぐれも冬馬のバイトのことを知ってる素振りを見せちゃダメだよ？　あいつ、今回のバイトのことを桃乃ちゃんに言う気は全然無いみたいなんだ。実は俺、冬馬に固く口止めされてるしね。だから俺の身の安全のためにも、桃乃ちゃんはこの事を一切何も知らないことにしといてほしいんだよ。いい？　できる？」

「……分かった……」

「あらら？　桃乃ちゃんなんかテンション低いなぁ。その顔、これから彼氏に逢いに行く女の子の表情じゃないですよ？」

「だって……あんなとこ見ちゃったら私……」
「あ、もしかして胸がいっぱいなんだ？」
顔を伏せたままで桃乃は小さく頷いた。
「うん、気持ちはよく分かるけど、でも感動するのはちょっと待ってやってよ。冬馬のためにもね。あいつ、桃乃ちゃんを驚かせるためにあんなに頑張ってたんだからさ。ね？」
桃乃はもう一度コクン、と頷く。
再び運転席に乗り込んだ桁人は車のエンジンをかけるとハンドルを握り、前方の灯りを眺めながらしみじみと言う。

「俺、冬馬が羨ましいよ」

「……どうして？」
「ハハッ、どうして　？　ときましたか！」

その素直な問いに、（やっぱり桃乃ちゃんはまだ分かってないな）と思いながらも、桁人は優しくその理由を説明しはじめた。

「あのさ桃乃ちゃん、この世界には何十億っていう数の人類がいるだろ？」
「う、うん」
「だけどそれだけ多くの人類がこの地球上にいてもさ、限られた人生の中で何もかも忘れてしまうくらい無我夢中になれる相手をその中から見つけ出す事って、実はかなり至難の技だと俺は思っているんだよね。でもさ、冬馬は桃乃ちゃんっていう、ここまで一生懸命に好きになれる女の子にこんなに早く巡り会えて、しかも今はめでたく両思いになったから、桁人お兄さんはとっても羨ましいわけですよ」

運転席の上でフゥ、と青い吐息が漏れる。

「あーあ、俺って勉強面だけじゃなくて、とうとう恋愛面でもあいつに抜かされちゃったんだなぁ……兄の立場としては少々悔しいですよ」

祈人は無念そうな声でそう言い終わるとハンドルをピンと人差し指で弾き、再び時刻を確認した。

「……もうそろそろいいか……。よしっ、じゃあピンチヒッターの騎士（ナイト）の役目はこれでおしまい！　さ、冬馬待ってるよ、行っておいで。あ、あと十六歳のお誕生日おめでとう」

「ありがとう、祈兄ィ……！」

桃乃は祈人の車から急いで降りると一度も振り返らずに真っ直ぐに噴水の方角に走って行った。

走り去ってゆく桃乃の背中を車内から見送り、本日一番の功労者は安堵の息を吐く。

「……さて、今度はこちらの番ですね」

携帯で女友達にこれから迎えに行くと連絡した後、祈人は軽やかに車をスタートさせた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

◆◇◆◇◆

空に夜の帳が降りた。

百合ヶ丘公園にも様々な光が溢れ出し、公園内中央に作られた、ライトアップされた噴水が橙色の光を纏い出す。

夕食時の時間帯のせいか、公園内は今はまばらな数しか人影がいない。噴水の近くのベンチに腰をかけていた冬馬は走ってきた桃乃の姿を見つけ、自分も慌てて立ち上がり駆け寄った。

「悪ィ桃乃！　こんなに遅くなっちまって！」

冬馬が片手で拝むようにして謝る。反対の手には水色の小さな紙袋が握られていた。

「……ううん、いいの……。よ、用事があったんでしょ？」

自分を待っている冬馬の姿を見た瞬間からこんなに胸が苦しいのに、喋るとさらに桃乃の胸の苦しさは増してゆく。

「マジでごめん！　でももう桃乃を家に送らなきゃいけない時間だな……」

「あのね、今日お母さんに八時までに帰ってくればいい、って言われてるの」

「マジ!?　それじゃあと一時間くらいは話せるな！　どっかで暖かいもんでも飲むか？」

「ううん。ここでいいよ」

「よし、じゃあもっと上の方に行こうぜ！」

冬馬は桃乃の手を取り噴水の奥にある階段を昇った。水色の袋がユラユラと楽しそうに揺れている。

丘の部分に上がり、綺麗に刈られた芝生の上に二人は腰を下ろした。この公園自体が高台の上に作られているので、眼下には二人が住む街の夜景が煌いている。

「ほら桃乃。これ誕生日プレゼントだ。誕生日おめでとう。先に一コ上になっちまったな」

十二月生まれの冬馬は桃乃に水色の紙袋を渡す。

「ありがとう……」

桃乃は胸一杯の感謝でそのプレゼントを受け取った。

「開けてもいい？」

「あぁ」

紙袋と同じ水色の包みを中から取り出すと桃乃はそれを丁寧に開ける。

やがて「カワイイ……」という嬉しそうな声がその口から漏れた。

プレゼントの中身はシルバーのネックレスだった。

その真ん中には小さな二つのハートが絡まりあってついている。

「ほら、桃乃見てみろよ」

冬馬は自分のシャツの上を少しはだけて桃乃に自分の胸元を見せる。そこには桃乃と同じ型のネックレスがつけられていた。

「俺の方にはそのハートマークの飾りついてないけどな」

と言いながら冬馬ははだけたシャツを元に戻す。

「俺知らなかったんだけどさ、カノンじゃ指輪や装飾品って禁止されてるんだって？　でもネックレスならシャツ脱がなきゃ分からないからこっそりつけてる奴、結構多いらしいぜ。ウチのキャプテンから聞いたんだ。でさ、キャプテンも彼女とお揃いのネックレスつけてるらしくって、それ聞いてプレゼントはこれにしようと思った

んだ。俺、桃乃には今まで大したもんをやったことなかったからなぁ。あんな石コロぐらいでさ」

冬馬はそう言うと満足そうに笑った。そしてそのまま夜空を見上げる。

「な、桃乃。覚えてるか？　昔この公園に星空観察に来ただろ？」

「……うん。小学生の時よね。シリウスがすごくきれいに光ってたのを覚えてる」

「確かあれ、四年の時で理科の野外授業じゃなかったか？　天体望遠鏡や双眼鏡を先生が持ってきて、真冬の時期だったからすっげー寒くてさ。桃乃、鼻の頭やほっぺを真っ赤にして夜空を見てたよな」

そう言われて当時のある光景が懐かしくも不思議な記憶とともに甦る。

小学四年の野外星空観察。

白い息を吐きながら青白く輝くシリウスを見上げていた桃乃の前に冬馬が駆け寄ってきた。

「ほら桃乃。これつけてろ」

当時十歳の冬馬が自分が巻いてきていたマフラーを外し、同じく十歳の桃乃に差し出す。

「え？」

「顔、真っ赤だぞ。お前すぐに風邪引くからな。ほら」

「うぅん、いいよ。それ冬馬ちゃんのマフラーなんだから……」

そう言われた冬馬は急にムッとした表情になり、遠慮する桃乃の首に生成り色のマフラーを強引にグルグルと巻きつけた。

「いいからつけてろって！　それと俺の事を“　冬馬ちゃん　”って呼ぶのはもう止めろよな！」

そう乱暴に言い放つと、冬馬は他の男子と共にさらに公園の上に登って行ってしまった。

階段を駆け上がっていく冬馬の後姿を、マフラーにくるまれた桃乃は戸惑いながら見送る。

今まで“　桃乃ちゃん　”と呼んでいたのに、この星空観察の夜を境に冬馬は桃乃を呼び捨てにするようになった。そしてもう自分の事を“　冬馬ちゃん　”と呼ぶなと言ってきたこの夜の事は、襟元に巻きつけられたマフラーの暖かい感触と相まって、五年以上経った今でも桃乃の記憶の中に不思議な感覚としてぼんやりと残っていた。

「桃乃、それ、俺がつけてやるよ」

冬馬の言葉で過去の回想が中断され、桃乃はハッと我に返る。

手の中にあった水色のギフトボックスから大きな手がネックレスを掴み取った。

冬馬は身を寄せて桃乃の首に手を回す。

反射的に一瞬桃乃は身を硬くした。

顔の横を両腕で覆われ、冬馬の大きい手の感触が体越しに伝わってくる。すぐ目の前のその広い胸を見るともうお互い十歳の小さな子供ではないことを桃乃は改めて感じていた。

「この金具ちっちゃくて付けずらいな……」

――胸が痛かった。

冬馬が何かを言うたびに、押し潰されるように、締め付けられるように、桃乃の胸は痛む。

このプレゼントを買う為に冬馬がどれだけ努力したかを知っている桃乃は、真下で揺れるネックレスを見るともう何も声が出せなくなっていた。

「よし、ついた！」

冬馬が嬉しそうな声を出す。しかし俯いたままの桃乃を見て急に声のトーンが落ちた。

「桃乃、これ気に入らなかったか……？」

桃乃は黙って冬馬の両手を取った。

そしてその掌をそっと自分の方に向ける。

その手はところどころに豆が出来ていて、中には切れて血が滲んだ跡もあった。

「……これどうしたの……？」

「あぁこれか？　バスケの練習でキャプテンにめっちゃしごかれてさ。でも全然大したことないよ」

掌を隠すように下に戻しながら冬馬はさりげなく嘘をつく。
ついに我慢し切れなくなった桃乃の肩が小さく震え出した。
「……冬馬の……」
「ん？　なッ！？　な、なにお前泣いてんだよっ！？」

桃乃の両目からは感動でポロポロと涙がこぼれ始めていた。

「冬馬の嘘つき……！」
桃乃はそう言いながら冬馬の胸にトン、と体をもたせかけた。
「嘘つきって……だからなんで泣いてるんだよ！？」
「私……、私、分かったの……！」
「あ？　分かったって何がだよ？」

桃乃は泣きながらその先を口にした。

――　もうなにもかも分かっていたつもりだったのに、あらためて桃乃は気付く。

風邪を引かないようにマフラーを貸してくれたあの時だけではなく、いつも冬馬は自分の事を気に掛けていてくれたことを。
例えぶっきらぼうでも、少々押し付けがましくても、いつもこの幼馴染は、自分だけにとても優しかったことを。

冬馬の胸に体を預け、しばらく桃乃は声を出さずに泣き続けた。

「なぁ桃乃、今のどういう意味だよ？」

しかし桃乃はただ泣き続けるだけで、その問いには答えない。

桃乃が泣いている意味が全く分からない冬馬は、困惑した顔で震えるその背中をただ抱いていてやることしかできなかった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

◆◇◆◇◆

その日の深夜零時を過ぎた頃、帰宅した裄人にまた部屋のドアを開けて冬馬が呼びとめる。

冬馬の部屋の中に入った裄人は上着を脱いで手に持ちながら心配そうに弟を見た。

「まだ起きてたのか冬馬。お前今日バイトで疲れてるだろ？」

「帰って来てからちょっと仮眠とったんだ。それより兄貴今日サンキューな」

「あぁいいよいいよ。気にするな」

「相手の人、怒ってなかったか？」

裄人は余裕の表情で笑う。

「大丈夫、大丈夫！　女性の扱いには長けてるから俺。それに実際桃乃ちゃん危ない目に遭ってたからさ、やっぱり俺が行って良かったよ」
「兄貴、そいつらどんなヤツだったんだ？」
「もう覚えてないな。顔も全然イケてなかったしさ。それに桃乃ちゃんも脅えてたし」
「……俺そこにいたら絶対そいつらぶん殴ってた」
「ハハッお前ならそうだろうな。俺は平和主義者だから彼らには穏便に引きとってもらったけど」
「あ、あとさ……」
「ん？」
冬馬は衒人から視線を外し、言いにくそうに尋ねる。
「……お、俺が行くまで兄貴達どこに行ってたんだ？」
「どこに、って、公園付近を軽くドライブしていたよ。それがどうかしたか？」
「で、桃乃と何喋ってたんだよ？」
「何って、別にとりとめもない話題ばかりだったよ？　学校のこととかさ」
視線を外したままで冬馬の質問は続く。
「……桃乃は俺と付き合うことになったこと、兄貴に何か言ってたか？」
「んー、その話はあまりしなかったなぁ。お前と付き合うことになったばかりだし、桃乃ちゃんも恥ずかしかったんじゃないか？」
「……ふぅん」
冬馬は落胆した声を出さないよう必死に平静を装った。
「あ、それと俺のバイトのことは言ってないよな？」

「あぁもちろんだよ。だってこの間お前と約束したじゃないか」

ポリグラフにかけても恐らく針は微塵も触れないのではないだろうかというぐらいの完璧さで、桁人は巧みに嘘をつく。

「それよりどうだ、桃乃ちゃんはネックレス喜んでくれたか？」

その話題が出て冬馬の顔が再び困惑気味の表情に変わった。

「あぁ、一応喜んでたみたいなんだけどさ……、でもなんか桃乃の様子がおかしかったんだ」

「へぇ、どんな風だったんだ？」

本当は心当たりがあるくせにわざと桁人はそう尋ねる。

「それがアイツ途中でいきなり泣き出してさ、俺に“　嘘つき”　とか、“　冬馬は私にとってテツなんだって分かった”　とか言うんだ。俺、桃乃がなに言ってんだかサッパリ分かんなくってさ」

するとそれを聞いた桁人は驚いた表情で二、三度瞬きをする。

「へぇ……そうか……、桃乃ちゃんがそう言ったか……」

そう感慨深げに呟くと桁人はニコッと大きく微笑み、祝福代わりに冬馬の背中を左手で勢いよく叩いてやった。

「いやぁ～おめでとさんっ！」

「痛てッ！」

右手を後ろに回し、叩かれた背中をさすりながら冬馬が顔をしかめる。

「な、なんだよ兄貴！　いきなりぶっ叩きやがって！　それどうい

う意味だよ!?」
「えーとですね、冬馬くん、君はもう一度　【　魂が魅かれあう彼方で　】　を一人で観に行ったほうがいいな。以上です！」
そんな心優しくも少々不親切なアドバイスを残し、自分の部屋に戻ろうとした衒人の背中越しに唖然とした声で呟く冬馬の独り言が聞こえてくる。
「……やべぇ……兄貴の言ってる意味も全然分かんねぇよ……」
衒人はこみあげてくる笑いのために震えそうになる声を必死に絞り、「おやすみ」とだけ答えると廊下に出る。そしてその笑いを噛み殺す代わりに小さく両肩を揺らしつつ、静かに自室に戻っていった。

破られた規則　【前編】

長い連休も終わり、休みを満喫した生徒や教師達が再びカノンへと戻ってくる。

早朝七時。

この日の天候はなみなみと真水が入ったバケツを盛大にひっくり返したかのような大雨だったが、黒岩は定刻通りのこの時間に理事長室のドアを開けた。

しかし中に一歩足を踏み入れた瞬間、眉間にわずかな立て皺を寄せて目を凝らす。

先々週の時と同じように、またしてもデスク前に人影を確認したのだ。

「お前か……」

黒岩の声に振り返ったのは緑だった。

「おはようございます、黒岩理事長」

「おはよう」

十日前の朝、誠吾が単身でここへ現れた時とよく似たこの光景に、黒岩はかすかなデジャ・ヴを覚えながらも緑を応接セットのソファへ座るように促す。

「いえ、ここで結構です」

戻ってきたその返答までもが誠吾の時とまったく同じな事に、黒岩の既視感が益々肥大してゆく。

「そうか……じゃあここで聞こう」

黒岩は自分のデスクに座った。
「なんの話しだ?」
「これを受け取って下さい」
緑が差し出したものは「辞職願」と書かれた封書だった。
目の前の光景全てが十日前のあの状況を逸れるところなく忠実になぞり続けている展開に、黒岩の背筋にゾクリと冷たいものが走る。
「こ、これはどういう意味だ?」
「どういう意味も何もありません。カノンを辞めます。今までお世話になりました」
緑は軽く一礼をすると理事長室を出ようとした。
「待ちなさい、緑!」
歩き出していた靴音がピタリと止まった。
強い口調で呼びとめられた緑は振り返ると黒岩を睨み、声を荒げる。
「黒岩理事長! あなたは仰いましたよね? カノンの中では必ず“ 理事長 ”と呼ぶように、と! そう仰ったあなたがなぜ私のことを緑と呼ぶのですか!?」
鋭い声で指摘され、普段は無表情な黒岩の表情がほんのわずかだけ歪んだ。
「理事長はどんな時もご自分の決めた規則に従うのでしょう!? あなたは今その規則を自ら破ったのですよ!」

「……原因は矢貫先生か……？」

黒岩はボソリと誠吾の名前を口に出す。

緑は誠吾の名前が出ると落ち着きを取り戻し、静かな声に戻った。

「そうです。私はあの人を勝手に誤解し、勝手に遠ざけていました。でも理事長が口止めしていた本当の事実を私は知ったんです」

「……それは早乙女先生の件だな……？」

緑が頷くのを見ると黒岩は銀縁の眼鏡を外して軽く目を閉じ、眉間を指で押さえた。

そしてしばらく間を置いた後、低い声で問う。

「……緑、お前あの男が好きなのか？」

緑は黒岩の前ではっきりと誠吾への想いを肯定した。

「はい」

「……ここを辞めてどうするつもりだ？」

「黒岩理事長、私は今までこのカノンの、いえ理事長、あなたの規則に従ってきました。理事長の規則はいつも正しく、絶対なものだと思っていました。しかし、今は違います」

緑は黒岩を見据えて続ける。

「ですが理事長の考え全てを否定しているわけではありません。若く、この社会をまだ理解しきっていない生徒達に、正しい方向を指し示す程度の規則は必要だと思います。でもあの人が理事長に言ったように、一辺倒で杓子定規なやり方だけでは解決できない問題は、この社会にも、そしてもちろんこのカノンの中にも存在すると私も

思います」
「…………」
緑にそう告げられた黒岩は無表情に戻り、沈黙する。
「私、あの人がここを去ってから今まで色々考えました。そしてあの人が自分の良心に従いこのカノンを去ったように、私も教師の立場を捨てて女の立場を取ろうと決めたんです」
「……考え直す気はないのか……？」

「ありません」

緑はきっぱりとそう宣言すると踵を返し、理事長室の扉を開けた。
「理事長、お世話になりました。今日は最後まで授業を受け持ちますので代わりの先生を頼まなくても結構です。では失礼します」
黒岩は何も言わずに、緑が退室するのをその場から見送った。
廊下を歩き去ってゆく高らかな靴音は段々と小さくなり、窓ガラスを叩きつける強い雨音だけが広い理事長室内に留まる。

黒岩は強く目をつぶり、椅子の背もたれに身を投げ出すようによりかかった。そして誠吾が去って行った時よりも重く深い息を長々と吐く。
眉間から手を離し、反対の手に持っていた眼鏡をデスクの上にゆっくりと置いた時、金属のフレームがデスクと触れ合う冷たい音が黒岩の鼓膜に寂しく響いた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇
◆◇◆◇◆

定例会議の日を除き、特別な用事が無い限り必ず午後六時まで理事長室にいる黒岩は、珍しく五時前にカノンを後にする。
外は相変わらず叩きつけるようなどしゃぶりの雨だった。
黒岩はタクシーを拾い乗り込むと、一枚のメモを見て自宅とは違う住所を告げる。
フロントガラスを滝のように流れる雨を見ながら黒岩は真っ直ぐに背筋を伸ばし、微動だにせずに後部座席に身を置いていた。

やがてタクシーは比較的まだ築の新しそうな二階建てアパートの前に着く。
その作りから見て１ＤＫか２ＤＫのみの一人暮し対象の建物の前で、タクシーの運転手にきっちりの乗車料金を支払うと黒岩はその中へと入った。
上下階しかないアパートなので当然エレベーターは無い。
階段で二階に上がり、ドアに＜２０５＞とナンバーが打たれた部屋をノックする。

数秒後、応答無しでいきなりドアが開いた。
咥え煙草で出てきた人物は目の前に佇む黒岩の姿を見ると相当に驚いた様子を見せる。

「黒岩理事長ッ！？　ど、どうして俺の家に！？」

誠吾の口の端からまだ火のついていない煙草が音もなく落ちた。
「今お邪魔してもよろしいですかな……？」

「あっ、どっ、どうぞ！」
玄関先に落ちた煙草を慌てて拾い上げ、誠吾はこの突然の来訪者を部屋の中へと通す。
黒岩は誠吾が勧めた座布団の上に座ると、湿り気を帯びたベージュのレインコートを裏返して畳み、脇に置いた。
「今日はすごい雨ですな」
「はっはい！　あっあの理事長、インスタントコーヒーしかないんですけどいいですか？」
「あぁどうぞおかまいなく、矢貫先生」
誠吾がインスタントコーヒーを淹れている間、黒岩は誠吾の部屋の中をゆっくりと見回した。
男の一人暮しらしく、適度に乱雑な室内に、テーブルの上にあるガラスの灰皿が吸殻で山盛りになっている。そのニコチンの残骸を見た黒岩が一言苦言を呈した。
「矢貫先生は少し煙草をお控えになったほうがよろしいですな。お吸いになる本数があまりにも多すぎるような気がするのですが」
大きさも形も揃っていない二つのマグカップにインスタントコーヒーを淹れ、その一つを黒岩の前に置きながら誠吾が決まり悪そうに言葉を濁す。
「俺、ヘビースモーカーなもんで……」
「今日はアポも取らないでいきなり訪ねてきてしまってすみませんでした」
黒岩は自分の非礼を丁寧に詫びた。
「いえ……何か俺に用でしょうか？」
「ええ」
黒岩は大きく息を吐く。

「……実は今朝、緑が辞表を出してきました」

「え？　緑って……もしかして柳川先生のことですか？」

「そうです」

「柳川先生がなぜ辞表を……」

そう言いかけた誠吾はハッとあることに気付き、勢い込んで尋ねる。

「いっ、今なんで理事長は柳川先生のことを“　緑　”って呼んだんですか！？」

黒岩は誠吾と視線を合わせると静かに言った。

「……緑は私の姪なんですよ」

「め、姪！？」

「そうです。私の妹の一人娘です」

「柳川先生が理事長の姪……」

呆然とした様子で誠吾は呟く。まだその言葉の意味を完全には理解し切っていないようだ。

「柳川というのは緑の父方の姓なのです。私の妹の夫、つまり緑の父親は緑がまだ小学生の時に病気で亡くなってしまいましてね……。それ以来、私はあの子の父親代わりとして色々と手助けしてきたのです。おかしな話かもしれませんが、小さい頃からあの子の面倒をずっと見てきているせいで、今では私は緑の本当の父親のような気分でいるのですよ」

誠吾はこの衝撃の事実を口をあんぐりと開けて聞いていた。
黒岩はフゥとため息をつき、続きを語り始める。

「……その後、私は成長して教職の資格を取った緑をカノンに呼び、英語担当の教師にしたのです。カノンでの緑は規則に忠実で私の言うことに今まで一度も異を唱えたことはありませんでした。しかし……」

黒岩はそこで一旦言葉を切り、正座をしている誠吾に足を崩すように言った。

「あなたが現れて緑は変わってしまった……」

黒岩はかすかに寂しそうな表情を見せる。
「矢貫先生、あなたはご自分の歓迎会の時に緑に結婚してくれ、と迫りましたよね？」
「は、はい」

誠吾は正座のままで話しを聞き続けている。

「あの時からですよ、緑が変わったのは……。しかしカノンの規則で教職員間の恋愛は禁止しています。私はカノンの理事長として当時あなたにはもちろん、緑にも厳しく指導しました。しかし緑を幼い頃からずっと見てきている私には分かったのです。緑が矢貫先生のことを好いていることを」

黒岩はそう言うと大きなマグカップを手に取り、かなり濃い目のインスタントコーヒーをブラックのままで一口飲んだ。
「しかしあの厳重戒告以来、矢貫先生は緑に表立って何もしなくな

りましたし、私としてももうそれ以上何もすることができなくなりました。ですが、緑があなたに惹かれ始めているのは事実でした……」

窓の外で大きな雷が何度も不気味に鳴る音が響く。

「……そこにあの早乙女先生の事件が起きました。当時は私も他の教職員の方達と同じように矢貫先生が織田志穂の子供の父親かと思ったこともありました。しかし早乙女先生の告白で真実が分かり、すべてが解決しました。そして私はあなたにこの件を絶対口外しないように念を押しましたね？」

「は、はい」

と再び誠吾は頷く。

「それは退職、という形で責任を取られた早乙女先生をこれ以上晒し者にする必要は無い、と判断したのと、もう一つは私の身勝手な気持ちからでした……。当時、職員の間では織田志穂が病院に出した堕胎用紙に矢貫先生の名前があったという噂で持ちきりでした。この時私はふと思ったのです。ここで矢貫先生に真相の口止めをし、噂をそのままにしておけば、緑の矢貫先生への気持ちが冷めるのではないかと……」

黒岩は中身が冷めはじめているマグカップに視線を落とす。

かすかに手が震えたのか、カップの水面に揺らめきながら映るその顔は罪の意識で大きく歪んでいるように見えた。

「その後、緑は矢貫先生のサインの噂は本当か、と私に訊きにきました。実際それは事実でしたし、私は“　そうだ　”　と答えました。しかしその後の真実を敢えて緑には教えませんでした。緑には恋愛などにうつつを抜かさず、いずれは私の後を引き継ぐ教職者としてカノンで生徒をしっかりと指導してもらいたかった……。そ

して私の思惑通り、緑の気持ちはあなたから離れていったように見えました。でもそれは違ったのです」

「ち、違ったってどういうことですか……？」

「緑はそれでもずっとあなたのことが好きだったようです。ただ私が織田志穂の子供の父親を矢貫先生だと思い込ませたことによって、自分の気持ちを封じ込めていただけだったのです。今朝、緑は辞職願いの届けを私に渡しながら言いました。矢貫先生が自分の良心に従い、このカノンを去ったように、私も教師の立場を捨てて女の立場を取る、とね」

「柳川先生が理事長にそんなことを言ったんですか！？」

「えぇ……。私は理事長という職に対し、不適格者だったのかもしれません。生徒や教師には自ら決めた規則を押し付け、それでいて自分はその規則を自分の都合の良いように利用していたのですから……」

そう言い終わると黒岩は薄っぺらい座布団の上で居住まいを正す。

「……矢貫先生、ひとつだけお聞きしてもよろしいですかな？」

「はっ、はい」

同じく居住まいを正しながら誠吾は緊張した声を出した。

「あなたはまだ緑のことが好きなのですか？」

なぜか誠吾は俯き、その返事をためらった。

そんな誠吾を見た黒岩がやんわりと諭す。

「矢貫先生。あなたの緑に対する今のお気持ちだけを素直にお話して下さればよいのですよ。先生がお持ちになっている良心の痛みや罪悪感などは一切加えずに、です」

それを聞いた誠吾はスッと顔を上げ、すぐに答えを口にする。

「好きです」

「そうですか……」

黒岩は静かに呟き、視線を下に落とす。

カップの水面に再び大きな乱れは起こらなかった。

破られた規則　【後編】

静まり返った室内の中で雷音と激しい雨音だけが響き渡る。
短い沈黙の後、黒岩が次の言葉を発した。

「……矢貫先生、笹目梨絵の処分の件ですが十四日間の停学処分に致します。学審会にかけた後ですがね」

「ほ、本当ですか、理事長!?」
誠吾が信じられない、というように叫ぶ。
「えぇ。二週間は少々長い停学とお感じになるかもしれませんが、本人の体調の面を考えればちょうど良いでしょう」
黒岩はゆっくりと噛み締めるように言葉を繋ぐ。
「矢貫先生、定例会議であなたが私の机を叩き、“　規則でしか物事を考えられないのか　”　と仰った言葉は本当は内心とても堪えていたのですよ」
「もっ申し訳ありません!」
誠吾が慌てて頭を下げた。
「いえ、矢貫先生が謝ることではありません。確かにそれは事実だったのですから。今回あなたや緑がカノンから去っていこうとしているこの現状を見て、私は規則というもの自体にあまりにも頼り過ぎ、そして重きを置き過ぎていたことが分かったのです」

黒岩は座布団から下り、再びレインコートを手に取った。

「先生、今夜この後は何かご予定はありますか?」
「い、いえ。何もないですが」
「では少々お時間を頂いて私に付き合っていただいてもよろしいで

すかな？」
「はっ、はい」
「では参りましょう。支度をなさって下さい」
黒岩は部屋から誠吾を連れ出すと外で再びタクシーを停め、乗り込む。
タクシーは雨の降りしきる街を三十分程走った後、指定された場所で停まった。
「一緒にいらして下さい」
黒岩はタクシーをそのまま玄関先に待機させると、誠吾を引き連れてその建物の中に入る。
「矢貫先生、申し訳ありませんがもう少々そちらに下がっていただけますか？　あなたが部屋のモニターに映ってしまいますので」
誠吾が監視カメラのファインダーに入らないよう、斜め後方に立つように指示した黒岩は、インターフォンのボタンを押して部屋の主を呼び出す。　数秒後に応答があり、監視カメラが作動し始める音がした。
「緑、私だ」
インターフォンに向かって黒岩が答える。
「……伯父さん……」
「話があって来た。開けてくれるかい？」
少しの沈黙の後、「どうぞ」という声がしてインターフォンは切れた。同時に自動ドアのロックが外れ、ドアは静かに横に開く。
黒岩は後ろを振り返り、誠吾を促した。
「さぁ、では行って来て下さい」

「おっ、俺だけですか！？　あの理事長は……？」
「私はここで失礼します」
「えぇっ！？　で、でも俺が一人で行っても……」
「矢貫先生、あなたは先ほど私に仰いましたよね。緑のことが好きだと。緑も同じ気持ちです。今まで私はカノン理事長の立場からあなたと緑の仲を認めない立場を貫いてきました。しかし今の私は緑の父親代理としての立場であなたをここにお連れしたのです。ですから……」
「で、でも……」

ここで黒岩は初めて軽く微笑み、緑の部屋番号を伝えると誠吾をドアの内部側へ立たせた。

「矢貫先生、あなたは本日まで有給休暇扱いにしております。ですから明日からまたカノンへ来て下さい。それと遅刻は絶対にしないように。そろそろ遅刻魔の汚名は返上して下さい」
黒岩はゆっくりと一歩後ろへ下がる。
「緑にもこの事を伝えておいて下さい。あなた達の辞職願はもう焼却処分しました。では……」
ガラス扉が音も無く再び閉じられ、待機させていたタクシーに足早に乗り込み、黒岩は去っていく。

（理事長……）

雨の中、赤く光る二つのテールランプに向かって誠吾は頭を下げ、その場で深く一礼をした。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

緑はオートロックを解除すると、静かにモニターボタンを押して通話を切る。小型画面に映っていた黒岩の顔が即座に消えた。

（今日の辞表を受け取れないとでも言いにきたのかしら……？）

しかしカノンを辞めるという緑の意思は固く、揺らぐことはなかった。

あの時誠吾と最後に話した情景を思い出すだけで目に涙が浮かびそうになる。

自分がカノンを辞めても何も状況は変わらないかもしれない。

あの人はもう私を受け入れてくれないかもしれない。

そんな不安に脅えながらも緑はカノンを辞めることを決断し、そしてカノンを辞めた今、一日も早く誠吾の元に行こうと決意していた。

先程とは少し違ったトーンで来客を知らせる音が鳴る。

緑は玄関に向かい、一旦視線をドアノブに落とすと鍵を外してドアを開けた。視線を正面に戻し、廊下に立っている人物を見た緑は驚きで口に手を当てて小さく叫ぶ。

「矢貫先生ッ！？」

「ど、どうもこんばんは……」

誠吾は大きな体を小さくしながら照れ臭そうに挨拶をする。

「どうして矢貫先生がここに！？　黒岩理事長はどうなされたのですか！？」
「り、理事長はお帰りになられました」
「なぜ！？」
「そっ、それが話すと少し長くなるんですが……」

そこで緑は自分達が話している場所が玄関先だということを思い出す。

いきなり誠吾が現れたことで思わず取り乱してしまった自分を恥らいながら、緑は「とりあえず中にお入りください」と促した。

部屋の中は女性の部屋とは思えないほど無駄な物が何一つ無く、そのシンプルさにこの部屋の持ち主の性格が表れていた。緑がコーヒーを淹れている間、手持ち無沙汰になってしまった誠吾はそんな部屋をどことなく遠慮しながらも物珍しそうに見回す。

「どうぞ」

緑は湯気のゆらめく暖かいコーヒーカップとソーサーを誠吾の前に置いた。
「あ、いただきます」
日頃インスタント物しか飲んでいない誠吾にとって、ドリップしたコーヒーはとても美味しく感じられた。
「これすごく旨いです！」
「矢貫先生はいつもインスタントばかりお飲みになってらっしゃいますものね」
緑はそう言いながら小さく笑った。
久々に緑の笑顔を目の当たりにした誠吾は、無意識に正直な気持ちを口にする。
「俺、先生が笑うところ久しぶりに見ましたよ」

緑はそれを聞くと少し寂しそうな声で顔を逸らした。
「もう先生と呼ぶのは止めて下さい。実は私、今日……」
「辞職願を出したんですよね？」
驚いた緑は逸らしていた顔を再び誠吾に向ける。
「なぜ矢貫先生がそれをご存知なの！？」
「黒岩理事長から聞きました」
「えっ……理事長から……？」

「あなたは黒岩理事長の姪っ子さんなんだそうですね」
カップとソーサーが不自然にぶつかる音がした。
自分と黒岩だけしか知らない、隠していた事実を誠吾が知っていることに驚いた緑が息を呑む。
「さっき、俺の家に突然理事長が来ましてね、俺にそのことを話されたんです」
「な、なぜ……！？」
しかし誠吾はそれには答えず、次の決定事項を伝えた。
「そして笹目は二週間の停学処分になるそうです」
「停学？　退学じゃないのですか？」
「はい」
「まさかあの理事長が……一体どうして……？」

「あなたのためですよ」
「私のため……？」
「理事長は仰ってました。“　自分は緑の父親代わりだ　”　と」
「……」
「理事長は俺とあなたがカノンに戻ってくることを希望されてます。俺達の辞職願は焼いてしまったそうです」

誠吾は暖かいカップをソーサーの上に戻し、黒岩が言った言葉をできるだけ正確に伝える。

「俺をここへ連れてきた後、理事長はお帰りになられました。そして俺に言ったんです。今まで自分はカノンの理事長の立場からあなたと俺の仲を認めない立場を貫いてきた、しかし今はあなたの父親代理としての立場で俺をここに連れてきた、と」

「伯父さんが……そんなことを……？」

「柳川先生。俺は今回あの人がカノンの理事長としてではなく、あなたという一人の女性の父親代理として、俺に自分の気持ちを隠すことなく話して下さったことに感動しました。それに笹目が退学処分にならない以上、俺がカノンを辞める理由はもうありません。理事長から戻れと言われた以上、俺は明日から戻ろうと思います」

「本当ですか！？　本当にカノンへ戻られるのですか！？」

「はい。俺は今まで理事長のことを、ご自分の決めた規則の枠内でないと何も出来ない冷徹な人間だと思っていました。しかし、理事長は規則の枠外を超えてまでも誰よりもあなたのことを大切に思う方でした。充分すぎるほどそれが分かったんです」

誠吾は緑の方へ大きく体を向け、ゆっくりとソファから立ち上がる。

「でもこれで笹目がカノンに残ることができても、俺の抱えた罪がすべて消えるわけではありません。ですが……、ですが俺は、この先それを背負ったまま、前を見て生きていこうと思います」

日に焼けた右手が緑の前に差し出される。

「柳川先生、戻りましょう。俺と一緒に」

高熱に浮かされたかのように呆然と自分の手を見つめる緑を見下ろし、誠吾は三度目の告白をした。

「あなたが好きです。いえ、愛しています」

「……矢貫先生……」

乾ききっていた心の砂漠にその言葉は急速な勢いで染み込んでゆく。

緑の両目からあの夜の時のように涙が溢れ出した。

目の前に差し出された手にかすかに震える自分の手を重ねると、浅黒い手はたちまちのうちに緑の手を握り締め、力強く引き寄せる。

「お、お願い、もう二度と私を置いていこうとしないで……！」

それより先は口にすることが出来なかった。

誠吾は引き寄せた緑の細い腰を力強く抱き締め、顔を上に向けさせると返事の代わりにゆっくりと唇を重ねる。

一切の余計な装飾のないこの部屋で物音までもが消えた。

やがて口付けを終えた後、溢れてくる緑の涙を誠吾は指で丁寧に拭い、場の空気を変えるためにわざと陽気な口調で言う。

「あの、頼みますからもう泣かないでくれませんか？　俺、この間も言いましたよね？　あなたはもっと笑っていて下さいって！」

しっとりと濡れた長い睫を瞬かせた後、愛しい相手の要求通りに緑は涙顔で精一杯微笑んだ。

「こうですか？」

その濡れた笑顔を見た誠吾は「いいですね」と頷く。

一瞬の間の後、二人はお互いの顔を見合わせて小さく笑いあった。

同じ目線の二人

カノンの年間行事予定の中で、五月は比較的大きなイベントのない月だ。その中で唯一、校外で行う“　グリーン・スケッチ　”は、今月の最大行事でもある。

その名の通り目の前の自然をスケッチするという、教科で分類すれば美術が該当するこの行事は、学年毎に日にちをずらして毎年行われているものだ。

本日は一年生が参加する日で、桃乃と沙羅は女子クラス一組と二組合同のバスで隣同士に座り、お喋りに興じていた。

「モモ、あれからママのストロベリーパイ作ってみた？」

「うぅん、まだ。沙羅のママにレシピを貰った後に作ってみようかなって思ったんだけど、お母さんが喜んじゃってもう先に一度作られちゃったの」

「美味しかったー？」

「うん。でも沙羅のママの味にはまだちょっと及ばなかったかな」

「ママはあのパイの達人だからね～。で、モモはいつチャレンジしてみるの？」

「う～んどうしよう、この間食べちゃったばっかりだからなぁ……」

「モモが食べるんじゃなくて、冬馬にあげればいいじゃない？」

と沙羅は桃乃の腕を突つく。

「……なんか最近の沙羅って冬馬のことばかり言うよね……」

「だってさ、モモと冬馬が今どこまで進んでいるのか気になるんだもんっ」

「ど、どこまでって……」

座席シートの上で桃乃は小さくたじろぐ。

「まぁ当然キスぐらいまではもうしてると思うんだけど、その先はー？」
「さっ、沙羅ってば！」
慌てて桃乃は周囲を見回す。
「これだけ周りがうるさかったらあたし達の会話なんか聞こえてないってば。現にあたし、いつもより小声で喋ってるでしょ？」
確かに女子ばかり満載のこのバスは、周囲のやかましいほどの嬌声がサラウンド効果をプラスして見事な大音響を奏でている。
「でもさ、冬馬って本当にカッコイイよね。背はあんなに高いし、スポーツマンだし。顔だってもちろんいいもん。あとは性格がよければパーフェクトじゃない？　冬馬ってどういう性格なの？」
「冬馬の性格？」
桃乃は少しの間考え込む。
「うーん簡単に言うとね、とっても単純で、すっごく強引で、しかもケダ…」
うっかり『ケダモノ』と言いそうになった桃乃は慌てて口をつぐみ、残りの言葉を飲み込んだ。
「ケダ？　それ何？　なんかの造語？」
「なんでもないっ！」
「……？」
沙羅は青みがかった瞳を数度瞬きさせた後、妙に自信ありげな態度で大きく胸を反らす。
「でもねっモモ！　あたしこの間冬馬を見て思ったんだけどさ、奥手でおとなしいモモにはね、ああいう冬馬みたいなちょっと強引なタイプが絶対お似合いだと思うよ！！」
「さっ沙羅！　声が元に戻ってるってば！」

車中で沙羅の一方的な恋愛話を繰り広げつつ、やがてバスはカノンから約五十キロほど離れた森林公園に無事到着する。
バスを降りた生徒達は全員森林公園前の広場に集合し、一年担当教師代表となった誠吾が、生徒達の前で各注意事項を簡潔に説明した。
「注意事項はそんなとこだ！　じゃあ皆ここからボードを一枚ずつ持ってけな！　昼になったら各自で勝手に飯にしていいぞ！　絵を描く道具はちゃんと持ってきてるな？　二時半になったら、またここに集合だ！」
「時間は厳守！　絶対に遅れないでね！」
用意した画材の入ったダンボール箱の前で緑も最後の指示を出す。
一年美術担当の塚本信也（つかもとのぶや）もここぞとばかりに自分をアピールすることに余念が無い。
「皆～！　今日の画材のアクリル絵の具、使い方がよく分からなかったらいつでも僕に聞いてくれよぉ～！」
「よしっ、じゃあ解散！」
誠吾の号令で生徒達はそれぞれイラストボードを片手に公園内に散りはじめた。
「モモ、ボード持てる？」
「うんなんとか……。このボード大きいよね。持つの大変」
片手に昼食の入ったバッグを持っているため、空いたもう片方の手だけでＡ２のボードを小脇に抱え、画材道具も持たなければならない。小柄な桃乃には少々大変そうだ。
「じゃ早速景色いい場所探しに行こうか！」
沙羅が元気一杯な大声を出すとふいに後ろから声がかかる。
「おう、一緒に行こうぜ！」

桃乃と沙羅が振り返るとそこには冬馬と要が立っていた。
沙羅は目の前に現れた冬馬を見て叫ぶ。

「あ――っ！　噂をすれば冬馬だぁっ！」

「おま、デカい声だな……！」
まだ一度しか面識が無いにもかかわらず、大声でいきなり呼び捨てにされた冬馬は面食らっている。「冬馬っ、この間一度会ってるけど自己紹介がまだだったわね！　南沙羅よっ、よろしくね！　あたしのことは絶対に沙羅って呼んでよね！　ＯＫ？」
「お、おう……よろしくな……」
沙羅からほとばしるパワーにまだ気圧されている冬馬に向かって、要がこっそりと囁く。

「……な、こいつ相手にするとペース狂うだろ？」

「あれっ？　冬馬と要って仲悪かったんじゃなかったっけ？」
以前とは違う男二人の様子を不思議に思った沙羅がそう尋ねた。
「まぁあれから色々あってな……」
「そうそう。女には関係ない話だよな、柴門」
「へぇー、じゃあもう完全に仲直りしたんだ？」
「ま、そんなことはいいじゃん！　ここじゃ昼休みか、こんな行事の時じゃないと男女一緒になることがないからさ、せっかくだから四人一緒に行動しようぜ？　桃乃、それに沙羅」
早速希望通りに冬馬に名前で呼ばれた沙羅は、嬉しそうに右手に持っていたバッグを高々と掲げて呼応する。
「うんっ！　行こ行こ！　モモも勿論ＯＫでしょ？」
「うん」
「倉沢さん」
要が桃乃に顔を向ける。

「西脇なんか昨日からすごく楽しみにしてたみたいだぜ？」
「そ、そう……なんだ」
どう返答していいのか分からずに桃乃が曖昧な返事をしたところに、ダンボール箱を抱えた誠吾が通りがかった。誠吾はニヤニヤと笑いながら固まっている四人に向かって「おーい、西脇と柴門！」と声をかける。
「なんスか、先生？」
返事をしたのは冬馬で、要は無言で視線だけを面倒臭そうに誠吾に向けた。
「お前達、そのまま倉沢と南を草陰に連れこんで変な真似をしようとするなよ？」
その誠吾の物言いに両名はカチンときたらしい。

「しないッスよ！！」
「……誰がするか」

それぞれの性格が如実に出た二人の台詞に、桃乃と沙羅は思わず笑い出す。
「それなら結構結構！　男女交際は清く正しく健全にな！　我がカノンのモットーだ！」
誠吾は高笑いをしながら余った画材の入った箱を抱え、バスの方へ去ってゆく。
「ったく、有給を目一杯使って帰ってきてからなんか妙に張りきってるよな、矢貫先生」
「まぁまぁ冬馬、気にしない気にしない！　それより皆で張り切ってスケッチ場所を探しに行こうよ！」
沙羅の主導で四人は公園内に足を踏み入れる。

「桃乃、ほら、それ貸せ」

歩き出してまもなく、桃乃のボードを冬馬が横からヒョイと取り上げた。そして自分のボードとまとめて持つ。
「あ、ありがと」
「これでそっちの手空いたな」
冬馬はニッと笑うと、空いた桃乃の手を上から包み込むようにさりげなく握る。すぐ前を沙羅と要が歩いているこの状況で手を繋ぐという、冬馬のこの大胆な行動に桃乃の顔は瞬時に赤くなった。

「と、冬馬っ……！」

桃乃は小声で牽制したが、冬馬はどこ吹く風といった様子で、「スキンシップ、スキンシップ」と軽やかに答え、さらにしっかりと手を掴む。
「どしたの、モモ？」
沙羅が急に振り返る。
「なっ、なんでもないよっ？」
引きつりそうになる顔を平常モードに強制固定しつつ、桃乃はそう答えた。沙羅が振り返るよりも一瞬早く冬馬の手を振り払ったので、二人が手を繋いでいたところは間一髪のところで見つからなかったのだ。
「ふ～ん……」
沙羅はそう言いながら再び前方に体を向けようとしたが、その直前でいつのまにか特大ボードから解放されて身軽になっている桃乃に気付く。

「モモ、ボード持ってもらったの！？　うわぁ～冬馬って優し～！」

羨望の声は木立の奥に吸い込まれていった。
そして沙羅は何かを言いたげな視線をすぐ隣を歩いている人物に

向けて頻繁に送り出す。自分に向けられたそのあからさまな熱視線に、当然の事ながら要もすぐに気が付いた。
「な、なんだよ？」
「あのさー、あたしの記憶に間違いがなければ、要って確か紳士なんだよね？」
要は一瞬ひるんだ様子を見せた。
「お前、よくそんな事覚えてんな……」
「記憶力にはかなり自信あるほうなんだよね、あたし」

カノン正門前で初めて出会った時に、要が口にした紳士発言をまだ覚えていた沙羅は、尚もこの件に関して追求の姿勢を見せる。

「仮にもジェントルマンを名乗ったことがあるなら、普通こういう時はさー」
「分かったよ！　代わりに持てばいいんだろ、持てば！」
ここはおとなしく要求を呑んだ方が賢明と判断したのか、要は足を止めて会話を切り上げると沙羅の画材を取り上げた。
「やったぁ～！　ありがと要～！」

（俺、やっぱりコイツが苦手だ……）

要は内心でそう思いながら自分と同じ目線を持つ、背の高い沙羅をちらりと見る。
そして喜ぶ沙羅を横目に渋々と二つのボードを小脇に抱えると、再び冬馬に「な？」と同意を求めた。
今の二人のやり取りを黙って見ていた冬馬も小さく頷き、わずかに同情を含ませた声で「そうだな」と答える。
「ねぇねぇ要。なに？　今の冬馬に言った“　な？　”　って？」
「なんでもないっての」

「ダメ！　気になるから教えてよ！」
「いいから行くぞ」
要は大きな歩幅でさっさと先に歩き出した。
「あ！　待ってよ要ー！」
沙羅が慌ててその後を追いかける。そして隣の位置にまで追いつくと、
「ねぇもったいぶらないで教えてよ！」
と食い下がった。
「何をだ」
「だから、さっきの“　な？　”の意味！」
「別に深い意味は無い」
「ウソ！　ケチケチしないで教えてってば！」
「俺は元々倹約家だ」
「ちがーう！　そういう意味じゃなくてー！」
約七メートル先を揉めながら並んで歩くほぼ同じ背丈の要と沙羅。

（もしかしたらあの二人って結構お似合いかも……）

桃乃が二人に対してそう思った時、冬馬が「あいつら、何ケンカしてんだ」と呟きながらまた桃乃の手を握る。相変わらずのその強引ぶりに桃乃は小声で文句を口にした。
「と、冬馬っ、沙羅たちに見られちゃうってば……！」
「別に見られたっていいじゃん。なんで隠そうとするんだよ？」
「だ、だって恥ずかしいもんっ」
「恥ずかしがることじゃねぇだろ？　反対にあいつらに見せつけてやろうぜ！」

振りほどけないほどに強く手を握られ、せっかくおさまりかけていた頬の熱がまた一気に急上昇する。
とんでもないことを気軽に言い出すこの幼馴染の笑顔が憎らしい

ほど爽やかなのが、さらに桃乃の頬を紅潮させていた。

伝えられない本音

「ここ、いいんじゃない？」

沙羅が足を止めた場所は、遥か遠くにぼやけた稜線が見える広い平原だった。

森林公園のほぼ最奥部に位置するこの大きな平原はひたすら何も無い広大な景色で、遠くには野生植物が咲き乱れている。一面に生える短い雑草たちがそよ風で揺れるその様は、鮮やかなグリーンの絨毯が優雅になびいているように見えた。

「しかし俺ら結構歩いたな。帰りにバスの所まで戻るの大変だぜ？」

沙羅に続いて足を止めた要は、肩越しに今まで歩いて来た林道を振り返る。

「でもその分、他の生徒も全然いなくっていいじゃない！　この場所貸切りしたみたいで気分いいもん！」

「貸切ってなんだ。ここは宴会場か」

そんな要の冷静な突っ込みも、相手が沙羅では意味を成さないどころか逆に援護しているようなものだ。

「あっ要、それってナイスアイディア！　今日はあたし達四人が初めて一緒に行動した記念すべき日だもんねっ、お弁当もあるしさ、お昼はここで宴会しようよっ、大宴会！」

「……もう勝手にしてくれ」

ここまでの道すがら、はしゃぐ沙羅のマシンガントークに長時間エンエンと付き合わされ、すでに精神的にかなりのダメージを負わされている要はグッタリとした様子で顔を伏せる。

そして沙羅が提案したこのスケッチの候補場所に、一番最初に同

意したのは冬馬だった。
「そうだな、ここだと描き易いな。半分は緑でバーッと塗って上にチョイチョイと花みたいなモン描けばいいしさ。沙羅の言う通り、ここにしようぜ！」
「……冬馬、全然絵描く気ないでしょ」
隣にいた桃乃は呆れた口調で言う。
「当たり前じゃん！　大体、なんで高校に入ってまでこんな小学生みたいな写生大会があるんだっての。そっちの方が純粋にスゴいだろ」
「でもさ、冬馬はその写生大会のおかげでこうやってモモといられるんだよ？」
沙羅の指摘に「あ、そうだな」と冬馬はあっさり納得する。その返答のあまりの速さに沙羅は我慢しきれずに声を上げて笑った。
「さっすが冬馬！　モモが単純って言ってただけあるね！」
「なんだよ桃乃、沙羅にそんなこと言ってんのかよ？」

冬馬はいささか気分を害したようだ。沙羅は「うん！」と頷くと明るく先を続ける。

「あのね、あたしが“　冬馬ってどういう性格？　”　ってモモに聞いたの！　そしたらモモは、単純でー、強引　でー、そんでもって“　ケダ　”　なんだって言ってたよ！」
「ケダ？　なんだそれ？」
「さっ沙羅ってばっ！」
桃乃は慌てて沙羅の口を封じた。
「桃乃、なんだよ、ケダって」
「さっ、時間が無くなっちゃうから早く描こっ！　ほら沙羅！」
桃乃は冬馬の質問を無視し、沙羅の手を取って平原に座ろうとする。

「その前に皆ちょっといいか？　俺にいい提案があるんだけどさ」

冬馬は小脇に抱えていた二組のボードを草原の上に置いた。

「な、桃乃と沙羅はいつも学内で一緒にいるんだろ？　だからさ、今日は天気もいいし、せっかくだから男女に分かれて絵描かないか？」

間髪いれずにプッと噴き出す声がする。

「冬馬って本当に分かりやすい人だね～！」

その提案を聞いた沙羅が再び大笑いをはじめる。

「それってさ結局、“　モモと俺を二人っきりにしろ　”　ってことなんでしょ？」

「へぇ、沙羅って頭の回転速いんだな」

笑い声はさらに大きくなった。

「あたしがスゴイんじゃないの！　だから冬馬が単純すぎるんだって！」

笑いすぎて沙羅の目尻には涙が浮かんでおり、話題に中心になっている桃乃は恥ずかしさで声も出せない。しかし一方の冬馬は恥ずかしそうな様子などまったく見せず、要にも同意を求める。

「な、いい案だと思わないか、柴門？」

「あぁ、了解した」

要は一旦草むらに置いた自分と沙羅のボードを再び手にする。

「じゃあ西脇と倉沢さんはここに残れよ。俺らはもう少し向こうの方に行く。昼は一緒に食うんだろ？」

「そうだな、じゃあ時間決めるか。今十時だろ……、十二時半にそのでかい石の所に集合でどうだ？」

「ＯＫ。じゃ俺とあんたはあっちの方に行こうぜ」

と要は沙羅を促す。
「か～な～め～……！」
急に機嫌が悪くなった沙羅はふくれっ面で要に詰め寄った。
「いい加減にちゃんとあたしの名前呼んでよ！　なによ、さっきから“　あんた　”　とか“　お前　”　とか！」
「はいはい……」
かったるそうに要はそう返答して背を向けると、またしても一人で先に歩き出す。
「あー！　だから待ってってばー！　紳士なんでしょー！？　なら女の子にはもっと優しくしなさいよーっ！」
数百メートル先でも余裕で聞き取れそうな甲高い声で叫びながら、沙羅も両脇の長い髪を揺らして駆け出して行った。
要と沙羅がいなくなると冬馬はドカッと平原の上に腰を下ろし、嬉しくてたまらなそうな声で言う。
「やっと邪魔者追っ払えたな！　な、桃乃？」
顔を赤らめながらも、桃乃は冬馬の隣におとなしくペタンと座った。
「で、どうする？　やっぱ先にスキンシップだよな？」
「……ッ！」
顔の血流の流れが一気に早くなる。この言葉で即座に桃乃の警戒レベルは二秒でＭＡＸに達した。
「なっ、なにがスキンシップよっ！　えっ、絵を描くに決まってるでしょ！？」
瞬時に警戒体制を敷いたせいか、すんなりと言葉が出てこない。
「だってよ、今せっかく誰もいないんだぜ？　後で誰か他の奴らがここまで来たらまた桃乃はいちいち気にしそうじゃん？」
「ちょっ……！　冬馬、私の話聞いてるっ！？」
「聞いてるって。だから桃乃はまず先に絵を片付けて、後でゆっくりスキンシップがいいんだろ？」
「違うってばっ！」

あぁ、と言うと冬馬は自分の膝を叩く。
「そういや、桃乃はお楽しみは後に取っとくタイプだったよな。給食でお前の好きなフルーツサラダが出るとさ、必ず一番最後に食ってたもんなぁ。でも俺の場合は分かるだろ？　好きなもんが出たら真っ先に食っちゃいたいタイプだからさ、やっぱスキンシップが先がいい……」
「だからスキンシップはいらないってば！」
一瞬、冬馬の呼吸音が消えたような気がした。
「……桃乃、やっぱり俺と付き合うのは嫌か？」
あれほど冬馬の表情からこぼれていた笑顔が今は完全に消えている。
「なぁ、もしかして触られたりするの、すげー嫌だったりしてた？」
「な、なんで急にそんなこと言い出すの？」
「……」
冬馬は無言のまま、今までの強引さからは考えられないくらいに遠慮がちな仕草で、桃乃の白い喉元に向かって手を伸ばす。
首筋に冬馬の指先が触れた時、勝手に体がビクッと反応し、桃乃はわずかに身を反らしてしまった。
「やっぱりつけてねぇ……」
顔を曇らせ、冬馬は低い声で呟いた。
長く、骨ばった指先はほんの少しだけ桃乃のカッターシャツの襟元を左右に押し広げている。
そのわずかな隙間から見えるのは華奢な鎖骨だけだった。
「もしかしてあの後一度もつけてないのか？」

そう寂しげに言うと冬馬はそっと指先を離す。
プレゼントしたネックレスのことを言ってるんだ、と気付いた桃乃は、何度も首を振って答えた。
「ううん！　つけてるっ！」
「……じゃあなんで今つけてないんだよ？」
「だ、だって、学校であのネックレスをつけているのをもし見つかったら没収されちゃうもん！　そんなの絶対に嫌だから！　だってあんなに冬馬が頑張っ……」
うっかり“　頑張って働いて　”という言葉を言いかけた桃乃は、不自然に言葉を切り、言い直す。
工事現場のアルバイトの件は衍人との約束で口には出来ない。
「せ、せっかく冬馬に貰ったプレゼントを没収されて返してもらえなくなったら嫌だから……」

「そっか」

そう呟くと冬馬は笑った。
しかしその笑顔は先ほどまでのものとは違い、どことなく寂しげなのが桃乃には気になった。
傷つけてしまったかも、と心配になった桃乃は念を押すように繰り返す。
「ホントだよ？　ホントにそう思ったからつけてなかったの」
「あぁ分かった。じゃ、面倒だけど絵でも書くか」
「ごめんね冬馬……」
「謝るなよ、別に全然気にしてねぇし。ほら、桃乃も準備しろ。パパッと終わらせて昼寝しようぜ」
横で冬馬がスケッチの準備をし出すのを桃乃は痛む胸を抱えながら眺める。

単純な性格の冬馬だからこそ、桃乃にはよく分かっていた。
例え“　没収されるのが嫌だったから　”　という理由がまったく嘘偽りないものであっても、それでも今自分の首元にネックレスが無かったことが、たぶん冬馬にとっては十分すぎるほどの傷つく理由になっていることを。

話題を変えるべきか、それともう一度自分の気持ちを伝えるべきか、桃乃は悩む。
しかしあまり何度も同じ事を言うと余計に言い訳がましく聞こえそうな気もしていて、口に出すことをためらってしまった。
そんな桃乃の気持ちを察したのか、冬馬は「あ、そうだ」と言うとスケッチの準備をしていた手を止め、よりにもよって桃乃が一番触れられたくない話題を出してくる。

「ところで桃乃、さっき沙羅が言ってた『俺がケダ』ってどういう意味だよ？」

またしても心臓が跳ね上がる。
「しっ、知らない……！」
「知らないわけねぇじゃん。自分で言ったんだろ？」
「も、もう忘れちゃったよ。バスの中で話してた事だし……」
「嘘言え。　バスの中ならついさっきの事じゃん？　絶対言わせてみせるからな」

乾いた絵筆を指の間に挟み、白い筆先を桃乃に向けながら冬馬はそう宣言する。
その様子はもういつもの冬馬に戻っており、桃乃はホッと胸を撫

で下ろすと自分もようやくスケッチの準備を始めた。

「これぐらい離れればもういいだろ」
「そうだね！」

要と沙羅が足を止める。桃乃と冬馬の姿は今は遠くに離れ、小さな二つの影にしか見えない。
「でも要ってばずいぶん素直に冬馬の提案をＯＫしたよね。要もモモと冬馬の仲を応援してるの？」
「いや、西脇に借りを作っちまってるからな。だからあいつと倉沢さんを二人きりにさせるために俺があんたのおもりを引き受けたんだ。これも罪滅ぼしの一つってとこだ」
「へぇ……って、ちょっと待って！　おもりってなによ、おもりって！」
鼓膜直撃のその音量に要は顔をしかめた。
「おい、頼むからもう少し声のボリューム落とせよ。そんなにデカい声ださなくても十分聞こえるって」
しかし沙羅はもう一つの別の理由で怒り心頭状態なので、その頼みを聞く気はまったくない。
「要っ！　それとあたしの名前、ちゃんと呼んでってさっきから言ってるでしょ！？　そう、それにどうしてモモを苗字で呼んでるの？　この間は“　桃乃ちゃん　”　って呼んでたじゃない」
要は黙ってイラストボードを沙羅に押し付けると、そのまま地面に腰を落とす。
「……あの時帰り道で言っただろ、あれは営業だったって。あの時の俺はどうかしてた」

「確かにね。今の要と全然キャラが違ってたし！」
ボードを受け取った沙羅も要の左側にストンと座る。
「あの時は自分が見えなくなってた。今にして思うと何かに取り憑かれてたようだったな」
「えぇっ、取り憑かれた！？　なんか怖いなぁ、そんな言葉聞くと……。実はあたし、幽霊とか怪談話とか大の苦手なんだよね……」
と言いながら沙羅は自分の両腕を何度もさする。
「何してんだ？」
「要の背後に今すっごく怖い悪霊がいるって想像したら鳥肌立ってきちゃった」
「勝手に想像すんな」
不愉快そうにそう言い放った要は、やがて沙羅の背後にいぶかしげな視線を漂わせて「おい…」と呟く。
「なに？」
「俺じゃなくてお前の後ろにいる」
「な、なにが！？」
「お前の背後に歪んだ顔をした青白い男の霊が見……」
「きゃあああああ――！！」
ちょっとからかっただけのつもりが、またしても超高音の絶叫声をもろに鼓膜に食らい、要は慌てて自分の両耳を手で塞いだ。
「怪音波発生装置か、お前はっ……」
「やだやだ――っ！　怖い――っ！！」
背後に怨霊がいる、と脅かされた沙羅はものすごい勢いで要の首にしがみつく。
「おっ、おい！　何すんだお前！」
自分に抱きついてきた沙羅に驚いた要は、両耳を押さえていた手を離し、焦り顔で叫んだ。
「怖い――！　要、取って！　早く取ってってばっ！」

「虫じゃあるまいし取れるかっ！」
　要の首にしっかりと巻きつけられた沙羅の白い腕は悲鳴と共にぐいぐいと締め付けをエスカレートしていく。要の顔が少々赤いのは抱きつかれているせいか、それとも窒息しそうなためか、まったく判別がつかない状態だ。
「お、お前、俺を殺す気か……！」
「だって悪霊が――っ！」
「いねぇよ、そんなもん！　冗談だ冗談！」
「じょ、冗談？」
　それを聞いた沙羅はやっと両腕の力を緩める。
「要！　それっていくらジョークでも悪趣味すぎ……っ！？」
　しがみついていた腕をほどいて要に抗議しようとしたその声が急に途切れる。
　すぐ目の前、今にも触れそうなぐらいの至近距離に要の顔があったせいだ。こんな近くで初めて要を見た沙羅の顔がカァッと赤くなる。
「……頼むからこの距離で叫ぶのだけは止めてくれよ？　次は間違いなく鼓膜が破れる」
　すぐ間近で聞いているせいか、要の声は今までと違って聞こえ、それが余計に沙羅の動揺を誘った。
「ごごごめんねっ！」
　沙羅はあたふたと身を離し、要はたった今強烈に締め上げられた首元をいたわるようにさすった。
「あんた、女の割にすげぇ力あるんだな。なんか筋トレでもやってんの？」
「ううん、特にやってないよ？　毎日寝る前に簡単なエクササイズはしてるけどね」
「エクササイズ？」

「うん、あたし小学生の頃テニススクールに通っていたことがあったんだけど、その時のコーチが言ってたの。女の子は将来のために大胸筋を鍛えておきなさい、って。大胸筋を鍛えるってことはどういうことか分かる、要？」

本当は分かっていたが、その回答を口にしたくない要は敢えて知らないふりをする。

「さぁな」

「じゃあ教えてあげる！　あのね、大胸筋を鍛えるとバストアップするんだって！　こうやってやるんだよ！」

嬉々としながら沙羅は自分が日々行っているエクササイズを座ったままで実践してみせる。

「本当は寝てやるんだけど、まず両手にバーベルを持って手を横に広げてね、こうやって胸の前でクロスさせるの。で、またゆっくり元に戻して……の繰り返しなんだ。それにね、このエクササイズをすると年をとった後もバストの形をキレイに保てるんだって！　だからあたし、頑張っちゃってるんだ！」

「……本来はそういう目的で鍛えるものじゃないけどな……」

沙羅を横目で見ながらボソリと要は呟く。

「あ――っ！」

「……うるせぇな。今度はなんだよ？」

「要、今あたしの胸見たでしょ！？」

「みっ、見てねぇよっ！」

「ううん、絶対見た！　今チラッてこの辺を見た！　間違いなく視線が落ちたよ！」

「きょっ、興味ねぇよっ、お前の胸なんて！」

必死で完全否定しつつも、実際は指摘通りに一瞬だけ沙羅の胸元に視線を下げてしまった自覚のある要の様子は、どもりがちで明らかにおかしい。

「やっぱり要ってムッツリタイプだったんだね！　要の性格ならたぶんそうじゃないかとはなんとなく思ってたけど！」
迷宮入り寸前の謎がようやく解けた名探偵のような重厚な仕草で、沙羅はふむふむと何度も頷く。
「だっ、だから勝手に決めつけんなっての！」
なんとかこの話題を強制終了させるべく、要は水入れを掴むと勢いよく立ち上がる。

「おい、時間無くなるぞ！　帰りまでに絵が出来てなかったら補習になるんだからな！？」
「あ、そうだねっ。じゃあさっきボードを持ってくれたお礼にあたしが水汲んでくるよ！　それ貸して！」
沙羅は要の水入れを素早く取りあげると「じゃ行ってくるね！」と叫び、少し離れた水飲み場に向かって風のように走り去っていった。
やれやれと溜息をつき、その場に取り残された要は草原に両足を投げ出して目の前に広がる草原風景をぼんやりと眺めた。そして頭の中でどの辺りを描くかの検討を始める。
やがて二つの水入れを抱えた沙羅が小走りで戻ってきた。

「はい！」

水入れの一つを差し出され、「サンキュ」とだけ礼を言うと、要はそれを受け取った。
「あれ要、まだ描き始めていなかったの？」
要のイラストボードはさながら降り積もったばかりの雪原のようにまだ真っ白な状態だ。
「あ！　もしかしてあたしが帰ってくるのを待っててくれたとか？」
「……違う。どの辺りを描くかを考えてただけだ」

「よーし！　じゃあはりきって描こっ！」
つくづくおめでたい思考のヤツだ、と思いながら要は鉛筆を握る。

それからしばらくの間、二人は目の前の風景を黙々とラフスケッチすることに専念する。
沙羅の絵を描く目は真剣だが、要は淡々と鉛筆を動かしてはいるものの、その態度にはあまり真剣味が感じられない。
やがて先にアクリル絵の具に手を出したのは要で、少し遅れて沙羅も後に続く。樹脂パレットに絵の具を出した沙羅は、その顔に意外そうな色を浮かべた。
「あれ？　ねぇ要、このアクリル絵の具ってイヤな匂いあまりしないね」
「アクリルは油絵の具と違って乾きを早めるために薄めてあるし、有毒な溶剤を使ってないからだろ」
「へぇ～要よく知ってるね、そんなことまでさ」
「何言ってんだ。美術の教科書にちゃんと書いてあるだろ」
「あ、そうなんだ？　あたし、美術の時って教科書あまり見てないからなぁ」

要は沙羅のイラストボードを一瞥する。

「……その絵を見たらなんとなく分かるけどな」
「あっ、ひどーい！　要、あたしの絵が下手だっていうの！？」
「悪ィけどお世辞にも上手いとは到底言えない。もっと右脳を使って描けよ」
キョトンとした顔で沙羅が復唱する。
「ウノー？」
「あぁ、絵を描くならもっと右脳の空間認識を活性化させてこの光景を立体的に眺めてみろよ。絵を描くってことは、描きたいものを

右脳にイメージで焼き付けてさらにそれを膨らませていくってことだろ」

自分の絵の拙さを理論的に責められて沙羅はむくれた。

「うー……な、なにさー、カッコイイことばかり言っちゃって。じゃあそういう要の絵はどうなのよ？」

沙羅は要の方に身を乗り出し、描いている絵を覗きこんだ。

「……Ｗａｏ……すごい上手……！」

要の絵の出来映えに沙羅は絶句した。

繊細なタッチで描かれた要の絵はまだ彩色初期の段階だが、まさに目の前の風景をそっくりと写し取ったようだった。

「要！　この絵売れるよ！」

「売れるかよ、こんなもん」

「売れるってば！　昔パパと行った画廊でこんな感じの絵あったもの！　要って絵が上手なんだね！」

“　パパ　”　という言葉に、要は今思いついたことを沙羅に尋ねてみる。

「そういえばあんたの親ってさ、どっちが外国人なわけ？」

「ママだよ。イギリス人なの。で、パパが日本人」

「ふ～ん……オヤジさんって何やってんの？」

「航海士だよ」

「へぇ、航海士か。どこの学校出てるんだ？」

「えっ学校！？」

「そう。航海士ならどっかの海洋学校出てるよな？」

沙羅はなぜかその返事に詰まった。

「え、えっとそれは……うーんとどこだったかなぁ……」

沙羅は必死に思い出そうと、眉根を寄せている。

「忘れたんなら別にいいぜ。特別興味があったわけじゃないしな」
「う、うんっ。なんか度忘れしちゃったみたい！」
そう答えた沙羅を要はじっと見つめる。その視線は静かで、そしてすべてを見透かすような視線だった。
「な、なに？」
「……別に」
要はそう呟くと彩色作業に戻った。
自分に向けられたその最後の視線が気になったのか、沙羅は落ち着かない様子を見せる。空気の気配でその様子を察知した要は手元のボードを見たままで口を開いた。
「この辺に住んでたんなら、もしかして国際日本海洋学校じゃないか？」
沙羅は顔を上げ、弾んだ声を出す。
「あーそうそう！　思い出した、それそれっ！　さすが要！　色んな事に詳しいんだね！」
「……」
要は一瞬だけ沙羅を見ると、またボードに視線を戻す。
「オヤジが航海士なんて嘘だろ」

「どっ、どうしてそんなこと言うの!?」
　すると要はボードに視線を落としたままで答える。
「そんな海洋学校なんて無い」
　沙羅の顔色が変わる。
「ひっどい要！　そんな嘘ついて！」
「先に嘘ついたのそっちじゃん」
「あ……」
　要にそう指摘されて沙羅は視線を落とし、黙り込んだ。
「おい、そんな困った顔するなよ。別に俺にはなんの関係もないし、俺に本当の事を言わなくてもいいけどさ、もしかして倉沢さんにもこの嘘ついてるわけ？」
　困った顔のままで沙羅は小さく頷く。　そんな落ち込む様子を初めて見た要はとりあえずフォローに回った。
「あのさ、嘘つくならもっときちんと背景を作って嘘ついたほうがいいぜ？　今回みたいに父親が航海士って言うのならせめてどの海洋学校出身かぐらいまでは決めておけよ」
　要はそうアドバイスすると再び絵を描き出す。沙羅は絵筆を止めたままで呟いた。
「ねぇ要……。モモ、あたしが嘘ついてること知ったらショック受けるかな……？」
「さぁな。俺、倉沢さんじゃねぇし」
「あたしね、この間モモに“　親友なのに隠し事してた”　っ

て文句言ったんだ。それなのに、あたしが嘘ついてたの知ったらモモはきっとショックだよね……」
「あぁ、それならショックかもな」
要はオリエンタルグリーンの絵の具をパレットに足しながら沙羅の質問を適当に受け流す。
「やっぱりそうだよね……」
しかし横で沙羅が本気で考え込んでいるのを見て要はその動きを止めた。
「……今もしかして倉沢さんにカミングアウトしようか考えてる最中か？」
沙羅は心底驚いたように叫ぶ。
「要ってすごい！　エスパーみたい！　なんであたしの考えていること分かるの！？」
「今までの話しの流れからいったら普通誰でも分かるっての」
「うん決めた！　あたし、やっぱりモモに言うことにする！　だってモモはカノンで初めてのベストフレンドだし、この間は家にも遊びに来てくれたし……！　実はずっとモモにこの嘘ついていたの気になってたの。でもなかなか言い出すキッカケがつかめなかったんだよね。ありがとね、要の言葉で決心ついた！」
「おいおい、決心って……そんなにヘビーな話なわけ？」
「うーん、ヘビーかどうか分からないけどモモみたいに普通のアットホームな家庭で育った子にはちょっと理解しずらい話しかなー、と思って」
「へぇ……」
それを聞いて急に要の好奇心がうずいた。
「な、やっぱりその話し俺にも教えてくれないか？」
「うん、いいよ！　あたし要のこと大好きだし、やっぱり好きな人には自分のことを包み隠さず知っておいてもらいたいし！」
沙羅がいきなりまた告白めいたことを言い出したので要は慌てて

顔を逸らした。

「あのね要、あたしのパパね、航海士じゃなくて社長さんなの。『サウス・トレーディング』って貿易会社の。知ってる？」

「聞いたことあるような気もするな。社名の由来は苗字からか？」

「うん、そう。ちなみにパパは二代目社長なんだけどね」

「ふぅん、じゃ、あんたは大会社の社長令嬢ってことを隠していたわけだ」

「うぅん。違うよ」

沙羅は絵筆を再び取り、絵を描きながら続きを話し出す。

「あたし、厳密に言えば今は南沙羅じゃないしね」

「それどういう意味だ？」

「パパとママって結婚してあたしを産んだ後、まもなく離婚しちゃったんだよね」

沙羅の絵筆は言葉と共に淀みなく動き続ける。

「パパのお父さん、つまりあたしにとっては一応お爺さんになるんだけど、そのお爺さんがサウス・トレーディングっていう貿易会社を興したの。パパがまだ専務だった頃、その会社で働いていたのがママ。で、二人はその内愛し合うようになって、やがてママはあたしを身ごもったらしいの。でも周りの人が、特にそのお爺さんが、パパ達の結婚を絶対に認めなかったんだって。でもパパは強引にママと籍を入れて結婚しちゃったの。そしてあたしが産まれたんだ」

要も同じように絵筆を動かしながら黙って沙羅の話しを聞いている。

「だからあたし、パパ達が離婚した後もそのまま南の姓を名乗れて

るんだよね。もしママが未婚であたしを産んでいたら、たぶんあたしの名前は『Ｓａｒａｈ（サラ）・Ｏｌｉｖｅｒ（オリヴァー）』になっていたと思う」

「なんで親は離婚したんだ？」

「お爺さんがパパを勘当しようとしたから。本当は当時パパの結婚相手はもう決められていたんだって。でもパパはそんな決められた結婚よりママを選んだの。そしたらお爺さんはパパを勘当して会社からも追い出す、と言ったの。パパはそれでもいい、と突っぱねたけど、それを抑えたのがママだったんだ。ママは“　実の親子が争うのはもうこれ以上見たくないから”　って言ってパパと離婚することを選んだの。“　私には沙羅がいるから大丈夫。だからあなたは立派に会社の跡を継いで新しい家庭を築いて下さい”　って言ったんだって」

沙羅は汚れた絵筆を水で洗い、次の彩色に取り掛かる。

「パパは最初断固それを拒否したんだって。でもママの決心が変わらないことを知って、最終的にはママと離婚することに合意したの。これがあたしの生い立ちの経緯」

「……確かに少々ヘビーな話しだな」

そう呟く要に沙羅は明るく笑った。

「でもね、身を引いたママも偉いけどパパも凄いんだよ！　ママと離婚してその後会社に戻ったパパは結局その決められた人との結婚を断って、今でもずっと独身のままなんだよ！　前に会った時にパパ、言ってたわ。“　愛しているのは生涯ずっとママ一人だけだ”　って」

「両親、再婚はしないのか？」

「うん。その辺は子供のあたしにはよく分からない。パパは今は社

長になったけど、まだお爺さんが会長として会社にいるしね。だから出来ないのかも」

「ふぅん……」

「それであたし、パパとは会えるのはせいぜい年に三、四回なの。パパの仕事がすっごく忙しいせいもあるんだけどね。でもこんなことといきなりモモに言うのも気が引けて、つい、いつも他の人にも話してきたように“　航海士してる　”　なんて嘘言っちゃったんだよね……」

「でもよ、今あんたの話を聞いた限りじゃ別にあんたの両親は憎しみあって別れたわけでもないみたいだし、倉沢さんがそれで引いたりするようなことはないと思うぜ？　嘘をついたことが気になっているんだったら思いきって話したほうがいいんじゃないか？」

沙羅はいつもの沙羅らしく、「うん、そうする！」と元気良く答える。

「あ、後ね、あたしにとってこの“　沙羅　”　って名前ってとっても大切なんだ。この名前をつけてくれたのってパパなの。だからね要、ちゃんとあたしの名前呼んでよ。それに男の人に呼ばれるとなんだかパパに呼ばれてるような気になれるんだよね！」

「……それでそんなに名前を呼ぶことにこだわってたのか。なるほどな。しかしそんなこと聞いちまったらますます呼びづらい」

「ダ～メ！　こういうことは最初が肝心なの！　後回しにすればするほどドンドン気恥ずかしくなっていっちゃうもんだよ？　さっきの冬馬みたいに最初にパッと言っちゃった方が言いやすいんだから！　じゃ要、早速練習ね！　ホラ、沙羅って呼んでみてよ！　ほらほら！」

要は少し沈黙した後、自分の絵筆を乱暴に水入れに放りこんだ。

「……ま、それはまた今度な」

「もう、要ったら～！」
沙羅は悔しそうに大きく頬をふくらます。

（面白いヤツだな、コイツ）

からかうと自分が予想した通りの反応を次々に取るので、要は内心で密かに面白がり始めていた。
しかしガッツのある沙羅はまだ諦めずに食い下がる。
「いいからさっさと呼びなさいよ～！　“　さ　”　と　“　ら　”のたった二文字だよ？　ほら！」
「あぁ、また後でな」
「か～な～め～！」
要はハハッと笑いながら沙羅の絵筆を取り上げる。
そして「少し手伝ってやるよ」と言いながら勝手に沙羅の絵に修正を加え始めた。

本当は分かってた

「なぁ桃乃、いい加減に教えてくれって。気になって絵に集中できないじゃん？」
「何言ってるの。どうせ冬馬は真面目に描く気なんてないじゃない」
二人は絵の製作に取り掛かりつつも、先ほどの「ケダ」の意味についてまだ無益な押し問答を続けていた。
「これだけ問い詰めても口を割らないってことは相当な悪口なんだな」
「そっ、そんなことなっ……きゃっ！？」
草原に桃乃の焦り声が響く。
西の方角からかなり強めの突風が吹き、両膝を軽く曲げて座っていた桃乃のチェックスカートが風の悪戯でフワッと大きく捲くれあがったのだ。
「お、ラッキー！」
「とっ、冬馬！　今見えたの！？」
桃乃は恥じらいで頬を染めながら慌ててスカートを押さえる。
「いや実はギリギリで見えなかった。かなり際どいとこまでいったんだけどなぁ。惜しかったぜ」
下着を見られたのかと思った桃乃はそれを聞いてホッと胸を撫で下ろす。
「しかしほっそい脚だよなぁ。ちゃんと食ってんのか？」
紺のハイソックスから太ももものラインにかけて不躾な視線が飛ぶ。
桃乃はボードをピッタリと膝の上に乗せて前かがみになり、その

視線をブロックするのに必死だ。

「じろじろ見ないでよっ」

「まさかまだダイエットなんかしてるわけじゃないだろうな？」

「し、してないってば」

「ならいいけどよ」

２Ｂの鉛筆を手に取り、冬馬は諭すように言う。

「いいか、桃乃は充分に細いんだからヘンなことすんな。それにダイエットするとまず胸の肉から落ちてくるって言うだろ？」

「えぇっ、そんな理由で私にダイエットするなって言ってたの！？」

「ちっ、違うって！」

冬馬は慌てて手を振った。

「どっちかっていうと胸は無いよりあるほうがいいような気がしたからさ、つい、言ってみただけだって！」

「……ふ～ん」

ふつふつとこみ上げる怒りを抑えつつ、桃乃は顔を背ける。

「じゃ、冬馬は柳川先生みたいに胸が大きくてスタイル抜群の人がタイプなのね」

カノンに登校した二日目の朝、緑が冬馬の胸をネイルで軽く突いたシーンを思い出した桃乃は、軽いやきもちからわざとそんな言い方をしてしまった。

「何言ってんだよ！　俺のタイプは桃乃で、お前以外絶対にありえないの！」

分かってねぇなぁ、と呟くと冬馬はボードに向かって適当に絵を描き始め、ラフスケッチもそこそこにアクリル絵の具に手を出す。

「えっもうそれで下書き終わりなの！？」

「あぁもういいや。面倒だ」

「しょうがないわね……。美術赤点になっても知らないからね？」

桃乃は親切心からそう注意をしたが、冬馬は黙ってパレットに絵の具を次々に出し続けている。

「……冬馬、ごめんね」

「なんで謝るんだよ」

「だって冬馬ちょっと怒ってるもん」

「別に怒ってねぇよ。ただ、桃乃はなんにも分かってないんだなぁと思っただけさ」

軽い苛立ちのせいか、ギュッと力をこめて冬馬は絵の具の蓋をきつく締めた。

「私が分かってないってどういうこと？」

冬馬は持っていた絵の具をすべて箱に押し込むと桃乃の方に顔を向ける。

「……桃乃、初めて俺らが出会った時のこと覚えてるか？」

「うん覚えてるよ。この街に引っ越してきた時、先に引越し終わってた冬馬の家に私達が挨拶に行った時でしょ？」

「覚えてたか。俺さ、幼稚園の頃の記憶はもうだいぶ薄れちまってるけど、桃乃と出会った時の記憶は今でも鮮明に覚えてる。おじさんとおばさんが俺ん家に来てさ、おばさんはまだほんの赤ん坊の葉月を抱いてたな。そんでおばさんの後ろに隠れながらお前がおどおどとこっち見てて、俺とお前の目が合ってさ」

「私小さい頃引っ込み思案だったから……」

「あの時、お前の顔見た瞬間一目惚れしたんだぜ、俺」

「えっ、そうなの！？」

「あぁ。桃乃が初恋なんだ、俺のな」
そして冬馬はいきなり大声を出した。

「で！　それからずーっとお前のことが好きなんだっ！　分かったか！」

そう叫ぶと冬馬は視線をボードに戻し、ザカザカと大胆に絵筆を走らせてボードの下半分を黄緑一色に塗り潰し始める。桃乃は今初めて知ったその事実に驚いて、ただただ呆然と冬馬の横顔を見つめていた。

（冬馬……そんな前からずっとずっと私のことを好きだったの……？）

適当に絵筆を流して彩色をしていた冬馬は、やがて桃乃が自分の横顔を見上げていることに気付いた。
「だからさ、柳川先生がタイプじゃないかとか、頼むからそういう訳分かんねぇ事を言わないでくれよ。俺はお前しか見てないんだからさ」
「う、うん」
桃乃は頬を染め、素直に頷いた。
しかし冬馬は少しも嬉しそうな顔をせず、代わりにフゥとため息をつくと低い声でボソリと尋ねる。
「……なぁ、桃乃の初恋の相手って誰なんだよ？」
「わ、私の！？」
「俺じゃないよな？」

探るような冬馬の視線を避け、桃乃は目線を下に落とす。冬馬はそんな桃乃を見ながら思いきったように言った。

「当ててやろうか？　……兄貴だろ？」

「……！」

桃乃の体がピクンと小刻みに揺れ、反応する。

その反応を見た冬馬は膝の上のボードを脇に投げるように置き、手を頭の後ろに組んでドサリと草原に寝転がった。

「やっぱそうか……」

「む、昔のことだってば！」

「……いつ頃から好きだったんだ？」

「しょ、小学校に入ってしばらくしてから…かな。裕兄ィはもう中学に行ってた頃」

「ふぅん……」

「ほ、ほら、裕兄ィって優しかったから……。もちろん今も優しいけど」

「……俺、本当はなんとなく分かってたんだ、桃乃が兄貴のことを好きだったってさ」

冬馬は寝転んだままで空を見上げ、ゆっくりと流れる綿雲の群れを眺める。

「桃乃は俺やクラスの男子なんかまるで眼中に無さそうだったもんな。なのに兄貴と話してる時、いつもお前すごく嬉しそうなんだ。そうだ、今の葉月にそっくりだったぜ」

「……」
幼い頃、裕人と話している時の胸の高揚感や、姿を見ただけで嬉しかった気持ち。
そんな当時の自分と妹の葉月の姿を重ね合わせ、その通りだと思った桃乃は黙り込む。
冬馬は上空の雲から視線を外さず、ためらいがちに聞いた。
「……お前、もしかして今も兄貴の事……」
「違うってばッ！」
寝転ぶ冬馬に向かって桃乃は大声で否定する。
「今言ったでしょ？　昔のことだって！　確かに裕兄ィの事は好きだったけど、私中学入ってすぐにそんな気持ち無くなったもん」
「なんでだよ？」
「裕兄ィが色んな女の人といっぱい付き合っているのを毎日見てたらなんとなく冷めちゃったの」
「ふぅん……」
「昔のことだからね？」
「あぁ」
しかし冬馬は空を見上げたままだ。
「冬馬、ショックだった……？」
すぐ横で吐息が一つこぼれる。
「分かってたんだけどな……、分かってたけど、実際にこうやって桃乃の口から聞いちまうとやっぱダメージでかい」
「冬馬……」

冬馬の瞳に抜けるような色の青空が映りこんでいた。
本来なら爽やかなはずのその色は、今の冬馬の瞳に映ると悲しみの色に変わってしまっているようで、桃乃の胸は切なくなる。

ちゃんと言わなくっちゃ、と桃乃は決意する。
さっきは言いそびれてしまった今の自分の気持ち。冬馬に抱いている想い。
そして自分にとって一番大切な人は誰なのかを。
桃乃は一呼吸置くとボードから手を離し、そっと草の上に置く。

「冬馬、あのね」

オレンジのクロスバイクの後ろに乗り、広い背中を見上げながら感じたあの時の風。
カノンの帰り道に抱きしめられ、震えながら交わした初めてのキス。
ふいに手を握られ、ドキドキしながら見た恋愛映画。
そしてあんな過酷なアルバイトをしてまでプレゼントしてくれたあのネックレス――。

走馬灯のようによぎるそれらのシーンは、月日で数えるとまだほんの一ヶ月とわずかのことなのに、もうずっとずっと前の出来事のような気がしていた。

「私が今一番好きなのは冬馬だからっ……」

座ったまま体の向きを変え、そう伝える。
やっと素直に、そして本心から自分の気持ちを言えたせいか、胸がスッと軽くなった。
冬馬から告白され、「私も好き」と答えた時より、今は数倍も、

数十倍も、この幼馴染のことを好きになっている。日を追うごとに、そしてこうして側で時を重ねるごとに、自分の中で冬馬への想いが揺らぐことの無いものに変わっているのを桃乃は今はっきりと自覚していた。

冬馬はこの告白を聞いた途端、生気を取り戻した目を輝かせてガバッと上半身を起こす。

「桃乃が俺に“　好き　”って言ってくれたの、やっとこれで二回目だなっ！」

そう叫ぶ表情には満面の笑顔が戻っていた。

喜び勇んだ冬馬はそのまま桃乃の手を取り、その体をグイと引き寄せる。

瞬時にこの先自分の身に起こる展開を察知した桃乃は、慌てて冬馬の体を押し返し必死に抵抗した。

「ダ、ダメッ冬馬！　こっこんな所で！　誰かに見られたらどうするの！」

「誰も見てないって。柴門達もあんなに遠くにいるしさ」

「ヤダ！　ダメッ！」

「いいから暴れんなっての」

この二人の場合、男と女だけではなく体格も違いすぎる。

結局小さな抵抗はものの数十秒で組み伏せられ、二人きりの平原で強引に抱きしめられた。

冬馬の顔がゆっくりと近づき、反射的に桃乃は強く瞼を閉じる。

「……んっ……」

新緑の微風が触れ合っている二人の黒髪を優しく揺らす。

この瞬間、周囲の時がすべて止まったような錯覚すらした。

「桃乃……」

一度軽く唇を離した冬馬が桃乃の名を呼ぶ。

目を開けようと薄く視界を開くと「まだだ」という声が聞こえ、再び唇が押し当てられる。

冬馬の唇から漏れる熱い息を感じ、桃乃の心臓の鼓動はこめかみに響くぐらいの強さで、熱く脈打ち始めた。

「んんっ……」

まだかすかに抵抗していた力がここで完全に抜ける。

おとなしくなった桃乃を冬馬は愛おしそうにさらにきつく抱きしめた。

触れ合う唇がお互いの体温と鼓動を敏感に感じ取る。

長い長い二度目のキスからやっと解放された桃乃はその感覚に痺れていた。

「おい桃乃？」

唇を離した後もまだ呆然としている桃乃に、心配した冬馬が顔を覗き込んで呼びかける。

その声でやっと我に返った桃乃は顔を赤らめながら冬馬をなじった。

「も、もうっ、本当に冬馬はいつもいつも強引なんだからっ！」

「これぐらい全然いいじゃん。今俺ら付き合ってるんだぜ？　この間だって桃乃に何も出来なかったんだしさ」

「この間って……？」

「桃乃の誕生日の日だよ。俺さ、あの時最低でもキスの一つは絶対

してやるって思ってたんだけどさ、お前、公園の上に行ったら泣いてばっかで全然そんなことできるような雰囲気じゃなかっただろ」
「あ、あれは、だって……！」
あの夜、冬馬の胸で大泣きした自分の行動を思い出し、桃乃は恥ずかしさで俯く。
「そういや、なんであの時あんなに泣いたんだよ」
「な、なんでって……」
あのアルバイトの件は絶対に言うことは出来ない。
「だってすごく嬉しかったの、あのプレゼント」
「そう言う割りにつけてないのな」
「だっ、だからそれは没収されたくないからって言ったでしょ？」
冬馬はまた草原に寝転がった。
目の覚めるような青い色が再びその瞳の中に宿る。
「……没収されてもいいからつけててほしかった」
その言葉は鋭利なナイフのように桃乃の胸に突き刺さる。
「今、俺の事を好きだって言ってくれたけどさ、たぶん俺と桃乃ってお互いを好きな温度が全然違うんだろうな。いつも俺一人が空回りしてる感じがする」
「ううん、そんなことない！　ただ私は冬馬とはもうちょっとゆっくりお付合いしたいな、って思ってるだけだよ」
その桃乃の言葉を聞いた冬馬の顔がまたわずかに曇った。
「……兄貴の事を完全に忘れるまで、か……？」

メビウスの輪のようにループするこの話題。
「だからそういう意味じゃないってば！」
もう一度桃乃は大声でそれを否定した。
「あのね、私達確かに小さい頃からの幼馴染だけど、お付合いはまだ始まったばかりでしょ？　なのに冬馬ってば私の気持ちなんて全然考えないで、いつも今みたいに強引なんだもんっ。それがイヤなだけなのっ！」
「……俺、強引か？」
「すっごく強引！」
「ふぅん……」

きっぱりとそう断言され、冬馬は自分の今まで取ってきた行動を思い返して見る。

「桃乃、それってようするに“　すぐに獣になるな”　ってことなの……」
そこで冬馬は何かに気付いたらしく、あっ、と叫ぶと、片肘をついて半分ほど身を起こす。
「さっきの『ケダ』ってよ、もしかして“　獣”　ってことか！？」
「そう」
コクリと頷いた桃乃を見て、失意の冬馬は草原にバッタリと大の字に倒れ込む。
「おい、また俺をケモノ扱いかよ……。勘弁してくれって……」
冬馬の憮然とした表情とは反対に、桃乃はくすくすと楽しそうに笑いだした。
参ったな、と呟きながらも、冬馬はその笑顔に完全に視線を奪われている。

「冬馬」

笑い終えた桃乃は片手を冬馬の胸の上にそっと乗せた。

トクントクンと一定な鼓動が右の手のひら全体に静かに伝わってくる。

「あのネックレス、明日からちゃんとつけるから。でも没収されないように気をつけるね」

「……あぁ」

自分の胸に置かれた桃乃の手を包み込むように握りしめ、冬馬はそう答えると安心したように微笑んだ。

突きつけられた難題

「おい裕人ーッ　！」

宰条大学のキャンパスを悠々と歩いていた裕人に、同じ学部で悪友の加賀美孝太郎がかなりの慌てた様子で駆け寄る。

「どうした孝太郎、そんなに焦って？」

六月下旬の初夏の風を身に浴び、裕人は涼しい顔で足を止めた。

ようやく追いついた孝太郎は息を切らしながら早口で捲くし立てる。

「おいヤベーよ！　今度の合コン、流れちまうかもしれないぜ！？」

それを聞いた裕人はこれ以上ないくらいの爽やかな笑顔で微笑んだ。そして身長差を活かし、百六十六センチの小柄な孝太郎の首に素早く片腕を巻きつける。もちろん顔は依然として微笑んだままだ。

「ぐはっ！　ゆっ裕人、何すんだよ！？」

「おいおい、ひどいな孝ちゃ～ん！　今回は君が手配してるんだろ？　合コン隊長の名が泣いちゃうよ？」

「バッバカッ！　何言ってんだよ！　合コンが流れそうなの、お前のせいなんだぞ！？」

裕人に後ろから抱え込まれた形になった孝太郎はジタバタともがきながらも必死で叫ぶ。

「俺の？」

驚いた裕人がロックしていた腕を離す。

軽い酸欠不足に陥っていた孝太郎は慌てて何度も深呼吸をし、新鮮な空気を肺の隅々にまでたっぷりとまんべんなく送り込んだ。

「ゴホッ……、ったく自分は合コン王（キング）のくせによく言うぜっ。しかし相変わらず女が絡むと容赦ないよなぁ衒人は」
「それより孝太郎、俺のせいってどういうことだよ？」
「それがさ、今回の合コン、女の子の手配しているの桜子なんだよ」
「えっ、それマジ！？」
衒人の声のトーンが変わる。
「マジだよ。お前が昔あっさりと振っちゃったあの桜子さ」
衒人は「参ったなぁ……」と言うと頭に手をやる。

安部桜子（あべさくらこ）は宰条大学の英文科二年に籍を置く学生で、以前、衒人も参加した合コンで知り合った女性だ。
その合コンで衒人をいたく気に入った桜子は猛烈なアプローチをしたのだが、それまで美人の誘いを断ったことのない衒人がなぜかその時は桜子の誘いをつれなく断ってしまっていたのだ。

「あいつさ、合コンのメンバーの中に衒人がいるって知ったら、急に“　気が乗らないから止めようかしら　”　なんて言い出してきてんだよ。どうする？」
「どうするったって……」
「なぁ、なんとか合コンやれるようにお前が桜子を説得してくれよ」
「俺が！？」
焦った衒人は半歩後ろに下がる。
「無理無理ッ！　クラッシュして黒煙が燻っている車に大量の純正オイルを浴びせかけるようなもんだよ！」
「ハハッ、なら豪快な火柱が立ってちょっとしたキャンプファイヤー状態になるだろうな。衒人、なんなら俺、お前らの側でマイムマイムでも踊ってやろうか？」
「茶化してる場合かよ、考太郎……」

消沈する衒人を十五センチ下から見上げ、考太郎は幼児のように

口を尖らす。

「でもよ、どっちにしたってこのままじゃ女の子集まんないぜ？　お前ほどじゃないにしても桜子の顔の広さは衍人もよく知ってるだろ？　俺が声かけた他の奴らもすげぇ楽しみにしてるんだ。だからここはひとつ、お前が桜子のご機嫌とってさ、なんとか合コンできるようにしてくれよ？」

「う～ん……」

衍人は唸りながら腕組をし、本音を吐露する。

「俺、あの人苦手なんだよな……」

「分かるぜ衍人。美人だけど性格超キッツイからなー桜子は……。でもよ、俺達はお前と違って、久々の女の子達との魅惑の一時を一日千秋の思いで待ちわびているんだ。だからとにかく頼むわ。第二の方で桜子を待たせているからさ、今すぐ行って説得してきてくれよ、な？」

「……ん～……」

やがて観念したような小さなため息が孝太郎の耳に届く。

「……まぁとりあえず話してみるよ」

「よしっ、よく言ったぁ！　桜子に引っぱたかれそうになっても、お前は逃げ足速いから大丈夫だ！　もし万一の時は俺がお前の骨を拾ってやる！　だから安心して特攻して来い！」

「お前、人事だと思って好き勝手なこと言うなよ……」

「でも衍人、お前も今回の合コンに相当賭けてんだろ？　桜子の火炎地獄から無事に生還できたらよ、その後に待っているのは夢の桃源郷だぜ！　なっ！？」

孝太郎なりに考えた必死の励ましも、今の衍人にとってはまったくの逆効果だ。

段々と気が滅入ってきた裄人は片手で顔半分を覆う。
「孝太郎、もし話が流れても恨まないでくれよ……？」
「いや、お前ならやれるッ！　俺は信じてるぞ！　いつもの必殺絶妙トークで一発ビシッと決めてこいッ！　頑張れ裄人ーッ！」
「じゃあ行ってくるよ……」
孝太郎の励ましを背に裄人は嫌な予感を抱えつつ、学内にあるパーラー、第二カフェへと足を向けた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

宰条大学の第二カフェは天井が低めの作りなので、中に入った裄人は一層背が高く見える。
ウッド調のカフェ内には明るい木漏れ日が窓枠からふんだんに降り注ぎ、まるでスポットライトのように裄人の顔を照らしていた。
各テーブルでお茶をしていた女性達は誰もがお喋りを中断して、自分達の側を通り過ぎる裄人に見惚れている。
「あ、これ君の？」
テーブル脇に落ちていたハンカチに気付いた裄人は足を止め、それを拾い上げると近くにいた女性に差し出した。
「は、はい！　ありがとうございます！」

ポーッと頬を染めてハンカチを受け取った女性に「どういたしまして」と優しく微笑みかけるとさらに先を進む。やがてカフェの一番奥でエスプレッソを飲んでいる一人の女性の姿を見つけた裕人は、その側にスッと近寄った。

「……あら、お久しぶり」

かなり短めのショートカットで気の強そうな女性が冷たい声をかけてきた。

「ども、桜子さん」

裕人は多少引きつりながらもにこやかに顔に笑みを浮かべ、挨拶をする。

「今見てたけどあんたって相変わらず女にだけは愛想がいいわよね」

さっそくの容赦ない言葉だ。その隅々にまでに棘がある。

「そんな……。落ちていたハンカチを拾って渡しただけだよ」

この南極ばりの極寒な雰囲気をなんとか緩和しようと、裕人は精一杯優しく切り出した。

「あの、実は桜子さんに話があるんだけど……」

「あら、あなたが私に？　何かの間違いじゃないの？」

その言い方はまだ意地悪さがかなりの幅をきかせている。

「またまた桜子さん、俺を苛めないでよ」

「あら苛めたのはあなたの方でしょ？　この私を振るなんて失礼な真似をしたの、あなたが初めてなんだから」

「ハハ……敵わないな桜子さんには……」

「衍人、最初に言っとくけど今回の合コンは無しよ」

冷たく、しかし威厳を感じさせる声が響く。まるで女王のような声だ。

桜子は小さなカップを手に、衍人を弄ぶようにニヤッと笑った。

「あんたの恋愛成就のお手伝いをするなんて真っ平ごめんだからね」

「桜子さん、俺以外にも参加する奴いるし、皆すごく楽しみにしてるんだよ。そこをなんとかお願いできないかな?」

桜子はフン、と言わんばかりに顔を斜めに向ける。

「嫌よ。大体あんたの魂胆、とっくに分かってんのよ?」

「俺の魂胆?」

「ウッキーの欧州文化概論……」

桜子が言い放ったこの言葉に衍人は内心でギクリとする。

“　ウッキー　”　とは宰条大学で教鞭をふるう、浮田教授の学生間ニックネームだ。

「衍人。あんた、確かこのゼミ取ってるわよね」

「う、うん」

「あんたの今回のターゲットはこの特殊ゼミで一緒の真里菜でしょ。どう?」

「あ……」

桜子にピタリと当てられて衍人は言葉に詰まった。

「やっぱりね。おかしいと思ったのよ。あの孝太郎がさ、今回の女性メンバーに、秘書課の楠木真里菜(くすのきまりな)も絶対呼んでくれってうるさかったからね。問い詰めたら男のメンバーに衍人がいるって聞いてさ、それでピンときたのよ」

「さすがです、桜子さん……」

「まずはそこに座りなさい。そうやって上から見下ろされてると気

分悪いわ」

桜子は視線で自分の目の前の椅子を指した。

衍人がおとなしく座ると桜子は急に冷たい表情を緩めてフフッと笑い出す。

「……でも交換条件次第では女の子集めてもいいわよ？　もちろん真里菜も呼ぶわ」

「えっ本当に？」

「えぇ。この桜子さんに二言は無いわ」

桜子はもう一度フッと笑い、衍人に向かって流し目線を送った。

そのねぶるような妖しい視線に、現在、女豹に捕らえられた哀れな小動物の位置にいる衍人は硬い椅子の上で身を竦ませる。

「で、その交換条件とはなんでしょうか……？」

「いい！？　私の交換条件はただ一つッ！」

桜子はその強烈な目力で衍人を射る。

「衍人、あんたには弟いるのよね？　その弟を一緒に連れてきなさいっ！」

「えっ！　弟を！？」

「そ。あんたの弟ならきっと可愛いでしょ？　私、最近年下にも興味出てきてんのよ。あんたが弟を連れてくるって約束するのなら、女の子は責任持って集めるわ。どう？」

「ど、どうってそれは困るよ！　弟にだって都合あるしさ。それに俺の弟には今カワイイ彼女ができたばかりなんだ」

「彼女がいたって別にいいわよ。二股三股かけてる奴なんか一杯いるじゃないの。衍人、あんたを筆頭にね」

「ちょっと待ってよ桜子さん！　それは誤解だよ！　俺は彼女が出来たらその子としか付き合わないよ？　色んな子と遊んでるのは彼女がいない時だよ」
「なんですって！？」
その衿人の台詞を聞いた桜子の右眉が、即座に斜め四十五度に吊り上がる。
「衿人、あんた私を振った時、確か彼女いなかったわよね！？　じゃ何ッ？　私はあんたの遊び相手の価値も無かったと、そう言いたいわけねッ！？」
ニスが綺麗に塗られた樫の木のテーブルが小さく震えた。憤った桜子がその表面を激しく両手で叩いて立ち上がったせいだ。
今にも自分に掴みかかりそうな桜子の前で絶妙トークを繰り出す暇も与えられない衿人は、焦りつつも必死にフォローを開始する。
「いやいやいや！　そういうことじゃない、そういうことじゃないんだよ桜子さん！　確かに桜子さんはすごく美人だと思うし、素敵な人だと思うよ？　ただ……」
「ただ！？」
「お、俺のストライクゾーンではなかったというか、その……」
「つまり、私はあんたの好みのタイプではなかったっていうことね！？」
「……う、うん。まぁ平たく言うとそういう感じかな……？」
桜子は苛立ちを露骨に表情に出し、再び椅子に腰をかけると足を高く組み変える。
「そうよねっ、衿人って髪が長くっておとなしそうなタイプの女がお好みだもんね！　真里菜もそうだしさ！」
「少し落ち着いてよ、桜子さん……」

桜子は横に顔を背けたが、視線はしっかりと憎い相手を捉えたままだ。

「でも裕人、いくらあんたでも真里菜はそう簡単に落ちないと思うわよ？　噂で聞いたんだけど、真里菜って典型的な箱入り娘でさ、中学から高校まで一貫して女の園で過ごして来たせいで男の免疫ゼロみたい。だからガードの固さは鉄壁らしいわ」

「あぁそうなんだ……。なるほどね……」

今までの自分のアプローチに対しての真里菜の反応の数々を思い出して、裕人は一人納得する。

「じゃ、私は用があるからこれで失礼するわ。あんたが弟を連れてくるって約束するなら、合コンはめでたく開催よ。ダメなら今回はお流れ。決心ついたら早めに連絡ちょうだい。あ、それとここのお勘定お願いね」

桜子は伝票を裕人の前にパサッと放り投げるように置くと、さっさとカフェを出ていった。

「……例えるなら“　行くも地獄、戻るも地獄　”ってとこだな……」

カフェに残された裕人は張り詰めていた緊張を解くと、テーブルの上の伝票を手に取りながら大きくため息をついた。

迫られる決断

その日、裕人はいつもより早く帰宅した。そのおかげで帰宅早々に麻知子から、

「あらあら、ずいぶんお早いお帰りね！　明日は空から槍でも降ってきちゃうんじゃないかしらぁー？」

と皮肉が混じった嫌味の洗礼を受ける。だが、本日の桜子との交渉でダメージを受けている裕人に反論する気力は残されていなかった。

「あぁ母さんの言う通り、たぶん明日はこの世の終わりだよ」

と答えて自分の部屋に戻った裕人はそこである事実に気付く。

（　分かった　俺なんで桜子さんが苦手なのか　）

桜子の少々きつめの性格やベリーショートの髪型が、母の麻知子にどことなく似ているせいで無意識に恋愛対象から外し、敬遠していたのだ。

（　冬馬を合コンに参加させろ、か……）

裕人はベッドに寝転がり、突然我が身に突きつけられたこの難題を解決する妙案は無いかと模索し始めた。

今回の合コンがご破算になれば、真里菜を狙っている自分はもちろん、女性陣との楽しい一時を待ち焦がれている孝太郎達も皆一様にガッカリするだろう。

――そうかといって冬馬を誘い出す上手い口実も思いつかない。

しかも今の冬馬には桃乃という彼女もいる。二人の今までの経緯を知っている身としては、できれば冬馬を合コンには出したくなかった。

それにこんなことを頼んでも冬馬も多分承知しないだろうということは、今までの桃乃への並々ならぬ想いを見てきている衒人には充分過ぎるほどよく分かっている。

（どうしたもんかなぁ……）

窓の外に広がる藍色の空を眺め、色々と考えている内にうたた寝をしてしまっていたらしい。

誰かがそっと自分の肩をゆさぶっていることに気付いた衒人は目を開けた。

「起きたか兄貴」

薄暗い室内に部活を終えて家に戻ってきたばかりの冬馬が立っている。

「メシだから兄貴を呼んで来いって言われたんだ。兄貴疲れているみたいだから寝かせとこうかとも思ったけどさ。電気つけるぜ？」

「あ、あぁ」

部屋の照明が冬馬の手でつけられる。

暗闇に慣れきっていた視界を上空から光の洪水が襲い、衒人は片手を顔の前にかざすと眩しそうに瞬きを繰り返した。

「でも珍しいな、兄貴がこんな時間に家にいるなんてさ」

「お前まで母さんみたいな事言うなよ。帰ってきて考え事してたら

眠っちまったみたいだな」
「今日は兄貴の好物ばかりテーブルに並んでるぜ？　久しぶりに兄貴が早く帰ってきたから、母さん張りきったのかもな」
それだけを伝えると、冬馬は部屋を出て行く。
衍人もすぐにベッドから立ち上がったが、そのまま一階には下りずに冬馬の部屋へ足を踏み入れた。
「どうした兄貴？　俺もメシ食いに下りるぜ？」
室内に入ってきた兄に、冬馬は背負っていたスクールバッグを下ろしながら振り返る。

「冬馬ッ！　済まないがお願いがあるっ！」

――衍人が選んだ戦法は弟の温情を期待した泣き落としスタイルだった。
思いつめた顔で両手を合わせ、悲痛な声を出す。

「な、なんだよ急に！？」
いきなり自分を拝み出した兄を見て、冬馬はかなり驚いた様子だ。
「頼むッ！　悪いが何も言わずに来週俺の大学仲間でやる合コンに出てほしいんだ！」
「合コン？　俺が？」
「あぁ、実は相手の女の子達がどうしても俺の弟が見たいってきかないんだ。で、連れてこないなら合コン取り止めるって言い出してさ。合コンが中止になると、俺もそうだけど仲間も皆ガッカリするし、正直なところ、両方からの板挟みですごく困ってるんだよ。だからここは一つ、俺を助けると思って！　頼む、冬馬！」

部屋の中に一つ、パシンと柏手を打つ音が景気良く鳴り響く。
明神さながらに恭しく拝まれた冬馬はしばらく動きを止めて沈黙した。そしてその数十秒後、制服のジャケットを脱いで椅子の背に

かけ、ブルーのネクタイを外しながら口を開く。

「……別に出るだけでいいんなら、それに出てもいいんだけどさ。兄貴には最近色々と世話になってるし、兄貴が俺に頼み事するなんて滅多にないしな」

「マジで！？」

思っても見なかった色好いその返答に桁人の声が弾む。

「でも兄貴。今の俺には桃乃がいる」

冬馬は言葉の一つ一つにはっきりと自らの意思をこめる。

「兄貴、俺のポリシーの一つに“　自分がされて嫌なことは自分も絶対にしない”っていうのがあるんだ。もし、桃乃が誰かに頼まれて仕方なくでも合コンに出たとしたら、俺はやっぱりそれは絶対に嫌だし、許さないと思う。兄貴を助けてやりたいのは山々だけど、だから俺は行くわけにはいかない。悪ィ、兄貴。役に立てなくて」

結局ほぼ予想通りだった弟の答えに桁人は力なく微笑んだ。

「そうか……。いや、無理な事を言い出した俺が悪いんだよ。済まなかったな……」

「元気出せよ兄貴！」

冬馬は力づけるように桁人の左肩を強めに叩く。

「今回が最後の合コンってわけじゃないんだろ？　兄貴ならまたいくらでもそんなモン出るチャンスあるんだろうし、そんなに落ち込むなって！　さ、メシ食いに行こうぜ！」

冬馬は先に一階に下りて行き、一人残った桁人はその場でしばし

思案に暮れる。そして冬馬の後を追って部屋を出て行く間際、独り言を呟いた。

「……仲間に責められるのを覚悟して潔くすべてを諦めるか、それとも奸計を巡らせて何とか冬馬を担ぎ出すか……。いずれにしてもどちらかを選ばないとなぁ……」

部屋の照明が静かに落ちる。

蒼ざめた室内の中で、迷う裄人の残した言葉が漂いながらゆっくりと消えていった。

四人の約束

カノン周辺の新緑もますます色鮮やかになってきた七月第一週、金曜の昼休み。

「あ～早く夏休みにならねぇかなぁ」

中央塔中庭の大木に寄り掛かりながら冬馬がぼやいた。右隣に座っている要がすぐに「同感だ」と相槌を打ち、

「でもそんなに待ち遠しい予定があるのか？」

と尋ねる。

すると冬馬はニッと笑うと反対隣に座っている桃乃を親指で指した。

「いや別に大きな予定はないけどよ、夏休みになったら桃乃と目一杯一緒にいられるからさ！」

「あ～らら、またまた冬馬のノロケが始まっちゃったみたいよ～？」

沙羅が呆れたように言い、桃乃は頬を朱に染めてその場で小さくなる。

中庭に降り注ぐ初夏の日差しが眩しい。

五月中旬に行われた「グリーン・スケッチ」で行動を共にして以来、昼休みはこの場所で四人一緒に昼食を取るようになっていた。

「今さらだが、お前って本当に倉沢さんが好きなんだな」

「ホントホント！　あたし、男の子にこんなに好かれるモモが羨ましいよ！」

恥ずかしがる桃乃とまったく照れない冬馬を交互に見ながら、要と沙羅が感想を漏らす。

「ハハッ悪ィ悪ィ、ついまた本音が出ちまったなっ」
「冬馬はいつでも本音が出すぎなのよねっ」
「それでいつもその場の空気が読めてないのが特徴だ」
「Ｗａｏ！　要、良い事言う～！それ冬馬を表すのにピッタリの表現だよ！　ね、モモもそう思わない？」
「……うん、同感」
「おい、桃乃までなんだよ！？」

笑い声が一気に湧き起こった。
その声が収まると沙羅が目の前の冬馬と要を見てしみじみと言い出す。

「でもあたしね、ここに入学する前はカノンの男の子達とこんなに仲良くなれるとは正直予想していなかったよ」
「まぁな、ここは校舎もグラウンドも完全分離だし男女の交流に厳しいからな」
目にかかる前髪を要が邪魔そうにかきあげる。
「しかもよ、ここの男女交流の規則って下らないことばかり細かく取り決めてあるんだよな。休み時間に互いの校舎に行くのは禁止で昼休みのみＯＫとかよ。あとノートの貸し借りも確か駄目だったな。意味分かんねぇよ」
「でもさ、今こうやって四人でお昼にここでランチ食べるの、すっごく楽しいよねっ？」
「そうだな！」
「もうっ！　今のは冬馬に聞いてないんだけど！？」
要に相槌を求めたのに、先に冬馬に返事をされてしまい、少々むくれた沙羅が突っ込む。
「それに冬馬は単にモモに会えるから楽しいんでしょー？」
「分かってんじゃん！」
パック牛乳のストローの袋を破りながら冬馬は清々しい顔で答え

る。まったく動じる事のないその様子に沙羅は肩をすくめ、完全に降参しました、というジェスチャーを出した。
「“　恋の病につける薬なし　”　とは昔の人はよく言ったものだよね～。……それにしても冬馬、今日はいつにも増して随分ご機嫌じゃない？」
「相変わらず鋭いな沙羅は」
ストローを口に咥えているせいで返ってきたその声は少々くぐもっている。
「うん、だって妙にテンション高いんだもん。なんかいい事あったの？」
「ここに来る前に保健室に寄ってから来たんだ。で、保健室に身長測定器あるだろ？　それで身長測ったらさ、背が伸びていたんだよ」
「へ～、何センチになってたの？」
「やっと百八十のライン到達だよ。あともう一息だ」
「あと一息？」
「あ、いや、なんでもねぇ。こっちの事」
冬馬は少し慌てたように沙羅に向かって手を振った。
「それより冬馬、保健室に用事って何だったの？」
そう尋ねた桃乃の表情には少し心配げな色が浮かんでいた。
「ん？　いや大した用事じゃないんだ。さっきの体育、サッカーだったんだけどさ、ちょっと腕にかすり傷出来たからバンドエイドもらいにいっただけさ」
冬馬は左肘を桃乃に向けて見せる。バンドエイドで覆い切れていない、赤く擦れた傷口が痛々しい。
桃乃はそっとその部分に軽く手を触れた。
「……痛くないの？」
「全然」
そのやり取りを乙女モードに入った沙羅が目をきらきらさせながら見つめ、はしゃいだ声を上げる。
「Ｗａｏ！　モモは冬馬の背が伸びたことより、なんで保健室に行

ったかの方が気になったんだ？　さすが彼女になった女の子は気の付くポイントが違うねー！」
　その沙羅の指摘に冬馬まで顔をほころばせ、同じように目を輝かせる。どうやら伝染したようだ。
「なるほどな！　桃乃は俺が心配だったってことか！」
「良かったね冬馬！　それって愛だよ、愛！」
「そうだよな、これって愛だよな！」
「ちょっ、ちょっと……！」
　と赤くなる桃乃。

（しっかしこいつら三人を見てると本当に飽きねぇな）

　目の前に展開される三者三様の光景に、要は笑い声を殺すのに必死だ。

「それで冬馬、今週末はモモとどこにデートに行くの？」

　新たに湧いて出た次なる好奇心に、再び目を輝かせた沙羅が胸の前で手を組み合わせる。これは毎週金曜日に必ず沙羅が冬馬に尋ねる、もはや恒例と化しつつある質問だ。
「お前毎週同じ事聞いてくるよな」
　と半分苦笑しながらも冬馬はその問いにすぐに答えた。
「土曜は牟部（むべ）神社の祭りに行くぜ。な、桃乃？」
「あーっいいなぁ！　そっか、明日は七夕だもんねっ」
「ねぇ沙羅も一緒に行かない？」
　と桃乃が誘う。
「えぇっ！？　いいよいいよ！　デートのお邪魔になっちゃうもん！　ねーっ、冬馬？」
「いや、別に構わないぜ？」
　飲み終えた牛乳パックを潰していた冬馬はあっさりと答える。ま

ったくの予想外だったその言葉に、沙羅はポカンと口を開けた。
「うわぁ～……」
「なんだよ沙羅？」
「だって冬馬がそんな事言うなんて信じられないよ！　絶対モモと二人きりになりたがると思ったのに！　一体どういう風の吹き回し！？　何か悪いものでも食べた！？」
「食べてねぇよ」
遠慮のない沙羅のストレートな疑問に冬馬は再び苦笑する。
「実はこの間桃乃と話してたんだけどさ、俺らってまだプライベートで遊んだことないだろ？　だからちょうどいい機会だと思ってさ。だから要も来いよ。明日の夜、都合つくか？」
要は少し考える素振りを見せる。
「明日か……。一応空いてるけどな」
「じゃあ決まりだな」

「あっ、ちょっと待って冬馬！」

沙羅が慌てて手を上げる。
「ごめん！　実はあたし明日予定あるんだ。久しぶりにパパとデートなんだよね。でも牟部神社の七夕祭りって確か明後日もあるよね？　みんな日曜日はダメなの？」
すると桃乃が申し訳無さそうに言う。
「ごめんね沙羅。私、日曜は予定があるの」
「モモ、どっかに行くの？」
「うん。日曜は日帰りでお母さんの実家に行かなくちゃいけないの。お爺ちゃんの七回忌で」
「そっかぁー……」
「あ、日曜なら俺も予定があるからパスだ」
と要も口を挟む。
「え、要も日曜ダメなの？　うーん……。じゃすっごく残念だけど、

あたし今回は諦めるよ！　土曜は三人で楽しんできたら？」
「いや、それなら俺も遠慮しとく。二人で楽しんでこいよ」
沙羅と要にそう言われ、冬馬は考え込んだ。
「今回はダメか……。じゃあよ、比良敷（ひらしき）の花火大会はどうだ？」
沙羅がパチンと指を鳴らす。
「あっ、冬馬それナイスアイディア！　あの花火大会っていつだっけ？」
「八月に入ってすぐじゃなかったか？」
「確か土曜日だったよね？」
「じゃ、今度こそ決まりだな。要、そこの予定空けておいてくれよ？」
「あぁ分かった」
要が参加する事になり、沙羅のテンションがますます上がった。
「やった～！　あたし絶対その日は浴衣着ていこうっと！　モモも着るでしょ？」
「うん。楽しみだね、沙羅」
「ホントだね！　でもモモはまず明日に全力投球しなくっちゃ！　明日も浴衣着ていくんでしょ？」
「うん。そのつもりだけど」
「そうだよね～」
と言いながら沙羅はエヘヘと笑い、意味ありげな視線を冬馬に送る。
「ねっ、冬馬！　明日、モモの浴衣姿を見るの、すごく楽しみでしょっ？」
「あぁ。明日が待ち遠しいよ」
照れない男は未だ健在だ。
「あはは、相変わらず正直だよねっ冬馬は！　ねっモモッ、こうなったら明日はヘアスタイルにもメイクにもしっかり気合入れてさ、

冬馬を思いっきり悩殺しちゃうといいよ！」
「のっ、悩殺って……」
「いいね悩殺！　俺、明日すげー楽しみにしてるぜ桃乃！」
「バ、バカじゃないの！？　悩殺なんてするわけないでしょっ！」

（こいつらのやり取り見てるとマジで面白い。インスピレーションが刺激されるな）

冬馬と沙羅にからかわれ、真っ赤になって否定している桃乃の正面で、要は声を殺して笑う。そして脳内にいくつか浮かんできた今の詞のフレーズを忘れないよう、次々に海馬の中に叩き込みだしていた。

笹に願いを　＜1＞

七月七日、夏の宵。

水平線めがけて滝のように流れる銀河を挟み、織姫と牽牛が逢瀬すると伝えられる七夕の夜だ。しかし新暦のこの日では、織姫星ベガはまだ東の空の半分ほどの位置で、牽牛星アルタイルにいたってはまだ東の空に昇って間もない。

そんな少々見栄えの劣る夜空の代役を務めるかのように、牟部神社の境内では様々な色が満ち溢れていた。

所狭しと軒を連ねる露店。

その先に吊り下げられた色鮮やかな提灯や小型電飾が、祭りに訪れた人々の好奇を誘う。

そんな眩い光が照らす石畳の上を楽しげに行き交う群集の中に、桃乃と冬馬も完全に溶け込んでいた。

桃乃の右手は冬馬の左手の中だ。しっかりと握られている。

――カラ、コロと軽やかな音。

赤い漆塗りの下駄は石畳の上で上品な音を奏でる。

その音が耳に届く度、普段着慣れていない浴衣を着ているせいもあって、桃乃の心は落ち着かない。

「桃乃、金魚すくいでもやるか？」

夜店の一つで冬馬が足を止める。

「ううん、いいよ。だって金魚取っても家に水槽ないもの」

「じゃあクレープ食うか？」

すると桃乃は困り顔で左手で握っているビニールの袋を、ほんの少しだけ上に掲げる。
「だって冬馬もうこんなに買ってくれてるじゃない。私こんなに食べきれないよ？」
その中にはわた飴、ベビーカステラ、リンゴ飴などの食べ物勢に加え、冬馬が射的で取った真っ白なネコのヌイグルミが袋から顔だけを覗かせ、すました顔で二人に同行していた。

「食いきれないなら葉月にやれよ。あいつなら喜んで食うだろ」

冬馬は笑いながら桃乃の手を引き、二人はさらに奥に進む。
やがて目の前に広がった光景に桃乃が思わず「綺麗！」と声を上げた。
境内の一番奥まった場所を中心に沢山の笹竹が用意され、色とりどりの願いをこめた短冊が吊り下げられている。それらがさわさわと夜風にはためいているその光景は、どことなく幻想的な雰囲気すら醸し出していた。

「しかしすごい数だな」

そう言いながら笹竹の群れを眺めていた冬馬は、上の方で風になびいていたある短冊にふと目を留める。手を伸ばし、枝をしならせてその短冊を強引に手元に引き寄せると、しばらくの間それをじっと見つめていた。
「なにが書いてあるの？」
下駄の先を斜めにして爪先立ちになり、冬馬のTシャツの袖に掴まると横から覗き込む。
幼い子供が書いたのであろう、たどたどしい文字の一部が視界に入ってきた。天の川に向けたその願いを、桃乃は声に出して読み出す。

「えっと、“　ぼくはおおきくなったら…」

しかしまだ桃乃が読んでいる途中なのに、冬馬は掴んでいた短冊から手を離してしまった。しなっていた枝が戻る反動で、短冊は元あった高さにあっけなく急上昇してゆく。

「あ！」

慌てて上を見上げたが、たくさんの笹の葉に隠れて桃乃の位置からその短冊は見えなくなってしまった。

「もう、私まだ読んでなかったのに……。あれになんてお願いが書いてあったの？」

しかし冬馬はその質問には答えず、いきなり別の提案をしてきた。

「俺らも短冊書いていこうぜ？」

「え？」

「桃乃だって願い事の一つくらいあるだろ？」

「うーん……、でもほら、見て？」

桃乃は境内の右隅にある社務所を指差した。

「申し訳ありませんがこちらで用意した短冊はもう残りわずかです！」

と何度も叫んでいる声が聞こえ、そこには大勢の人が群がっている。

「あんなに混んでいるし、用意した短冊もあとわずかですって言ってるもの。小さい子もまだ並んでるし、譲ってあげなきゃ」

冬馬は残念そうな唸り声を上げた。

「短冊無いのかよ……。こんなことなら用意してくりゃよかったな」

「そんなに叶えて欲しい願い事があったの？」

「まぁな。俺の最終野望みたいなもんだ」

そう言うと冬馬は腕時計に目をやる。
「もうこんな時間か……。そろそろ帰るか？　あまり遅くなるとおじさんとおばさん心配しちまうだろうからさ」
「う、うん」
でも本当はまだ帰りたくなかった。
しかし家の心配をしてくれている冬馬に、自分の気持ちを言い出せない。
「足、痛くないか？」
神社の鳥居を出たところで浴衣姿に下駄履きの桃乃を冬馬が気遣う。
はぐれないように、という名目で繋いでいる手にわずかに力をこめられ、鼓動が早まる。
「うん、大丈夫」
「まだ歩けるんならこっちだ」
冬馬が桃乃の手を引く。冬馬が進もうとしている道は二人の家に戻る道をわずかに逸れるルートだった。
「えっ、どこに行くの？」
振り返り、冬馬が笑う。
「ちょっとだけ遠回りして帰ろうぜ？」
頬が染まる。
すぐにその言葉の意味を理解した桃乃は小さく頷いた。
少しでも長く一緒にいたいのは同じ気持ちだった。
「比良敷の川沿いの道を通るか」
この街で一番大きい河川、比良敷川の側を二人は手を繋ぎながら歩く。
川の上流から吹いてくる夜風が心地良い。

「楽しみだよな、今度ここの花火を見に来るのさ」
歩くペースを桃乃に合わせ、冬馬はゆったりと歩を進める。
「沙羅なんかすげぇテンション上がってたじゃん？　絶対あれは要も来ることになったからだぜ」
桃乃は「そうだね」と同意し、小さく笑う。
「でもさ、あいつら、結構似合いだと思わないか？」
「うん、二人とも性格が全然違うから初めは合わなそうな気がしたんだけど、今は私もそう思う」
「要が沙羅に振り回されちまうんだよな。でも最近じゃあいつも慣れたのか、沙羅に冷静にツッコんでる時があるじゃん」
「でも沙羅にはあまり通じてないような感じだけど……」
「あぁ、それは言えてる」

川べりをゆっくりと歩く二人はやがて花火を打ち上げる中州のポイントに差し掛かる。

「桃乃は去年見に来たのか？　比良敷の花火」
「うん。見に行ったよ」
「誰とだよ？」
「クラスの女の子達と。総勢六人で」
「いいよなぁ……、俺も一緒に見に行きたかった」
「冬馬、去年見てないの？」
「あぁ。俺部活があったし」
その返事に桃乃は心の中でそっと思う。

（　じゃあ冬馬は知らないんだ、あの花火の噂のこと　）

――　去年、この街の夜空に四百メートル級の大輪の華が咲いた。

それは比良敷の花火大会のクライマックスに華々しく打ち上げられた新作花火。

“　ロマンスフラワー　”　だ。

この新作花火が観衆に披露された明くる日、各新聞では夜空に咲いた満開の様子を一面で大々的に掲載し、その規模と美しさは大いに話題を呼んだ。

そして夏も終わり、この花火の話題が人々の脳裏から消え去ろうとする頃、大勢の観客の心に残したあの夜の感動が形を変えて新たな都市伝説として甦る。それは、

“　ロマンスフラワーを恋人同士で見に行くと、その二人は将来結ばれる　”

というものだった。

（今年は冬馬と一緒にこの花火を見るんだ……）

今度は頬だけではなく、顔全体が熱くなってくるのを感じる。

桃乃は顔の火照りを落ち着かせようと胸元に手を当て、冬馬に気付かれないように何度も小さく深呼吸を繰り返した。

「そうだ桃乃。俺、お前と付き合ってる事、この間親に言ったよ」

空に滲むように浮かぶ細い三日月を見上げながら冬馬が口を開く。

ドキリと波打つ胸を抱えて隣を見上げると、川べりを吹く夜風が冬馬の前髪を静かに揺らしていた。

「おじさんとおばさん、なんて言ってた……？」

「それが拍子抜けするぐらいあっさりとしてんだ。母さんからは“　いい娘なんだから絶対大切にしなさいよ　”　って言われて、

オヤジは一言“そうか”って言われただけだった」
「そうなの……。良かった」
「桃乃は俺と付き合っていること言ってるのか……？」
「うん。でも話す前にお母さんに先に見抜かれちゃったの。それでお母さんからお父さんに話したみたい」
今度は冬馬の顔が心なしかわずかに強張る。
「そ、それでおじさん、なんか言ってたか……？」
「ううん、特に何も。今日も冬馬とお祭りに行く時にお父さん家にいたんだけど、何も言われなかったし」
「そっかぁ……」
冬馬は心の底からホッと息をつく。
「実は付き合い反対されたらどうしようかと思ってたんだよな……」
「全然大丈夫だよ？　お母さんなんかすっごく喜んでるし」
「俺の母さんもだ。こういう時、親同士が知り合いっていうのいいよな」
「そうだね」
密かに気になっていた相手の親の反応をそれぞれ知り、安堵した二人の顔に自然と笑みがこぼれた。

比良敷川沿いの道から、住宅街へと続く道に入った二人はどちらからともなく足を止める。

「懐かしいね、冬馬」

薄いピンク色の壁に【　星の子幼稚園　】と刻まれた建物を桃乃が見上げる。ここは幼い頃二人が通っていた幼稚園だ。

「卒園してもう十年か？　早いもんだよな」

この時間には珍しく、園内にはまだいくつかの明かりがついていた。冬馬が門の前から園内を覗きこむ。

「おい桃乃。もしかしてあそこにいるの、ヨーコ先生じゃないか？」

「えっ？　あ、本当！　ヨーコ先生だ！」

入り口ホールで一人の小柄な年配の女性が腰をかがめて何かをしている。

「何してるんだろうね？」

「なんか片付けているみたいだな。こんな時間まで大変だな……。挨拶するか？」

「うん、行こっ」

カラコロと下駄を鳴らし、玄関先に駆け寄ると桃乃は入り口のガラス戸を開け、中に向かって呼びかける。

「ヨーコ先生！」

中にいた女性が振り返る。

現在はこの幼稚園で園長をしている三橋曜子（みはしようこ）は、作業をしていた手を止め、よいしょ、と言う掛け声と共に膝を庇うようにゆっくり

と立ち上がった。
「あら……あなたた達は誰だったかしら？　私の名前を知っているということはここの卒園生ね？」
「先生、俺らのこと忘れちゃった？　倉沢桃乃に西脇冬馬だけど。俺らは途中で入ったし、もう十年も前のことだから覚えてるわけないか」
「あらあら！」
顔に少しずつ深い皺を刻み始めた曜子は桃乃と冬馬の顔をまじまじと見つめる。
「倉沢桃乃ちゃんに西脇冬馬くんね。えぇえぇ、もちろん覚えてますよ？　確か二人は同じ時期に揃って引越してきて、ここに年長さんで途中入園してきたんですよね。あの当時私があなた達の入園面接をしたのよ。覚えている？」
「そうだったっけ？　俺、全然覚えてねぇや。桃乃、覚えてるか？」
「ううん私も……。ごめんなさい、ヨーコ先生」
そんな二人の返事にまた曜子は「あらあら」と言いながら微笑んだ。
「冷たいわね、と言いたいところですけど、でも私も今のあなた達を見て最初は全然分かりませんでしたから強い事は言えませんね。さ、二人ともよかったらこっちにお入りなさい」

曜子の勧めで桃乃と冬馬は靴を脱ぎ、来客用のスリッパに履き替えると玄関先のホールにいた曜子の側へ行く。目の前に並んだ二人を見上げ、流れ去った月日を感じた曜子は嘆息した。

「本当に大きくなりましたね二人とも……。私の中ではあなた達はずっと小さな幼稚園児のままでしたから。でもよく見ると二人とも小さい頃の面影、ちゃんと残ってますよ」
「面影って、先生、マジで俺らの子供の頃のことちゃんと覚えてんの？」

曜子は「えぇ」と答えると悠然と微笑む。
「若いあなた達にはまだ分からないかもしれませんが、人はね、老いてくるとつい最近の事はすぐに忘れてしまうのに、なぜか過去の事を鮮明に思い出せるようになるものなんですよ。不思議なことにね」
「へぇ……」
と冬馬は感嘆の声を漏らした。
「それより先生、こんな時間まで何やってんの？」
「それがね、昨日園から帰るときに老眼鏡を忘れてしまって、さっき取りに来たんです。やっぱりこのまま月曜まで眼鏡が無いと不便でね」
「先生、もう老眼鏡かけてんの！？」
冬馬はかなり驚いたようだ。
「そうよ。あなた達がそうやって成長していく分、私はおばあちゃんになっていくんですもの」
曜子は上品に微笑んだ。目尻の皺が一層深くなる。
「それよりあなた達、牟部神社のお祭りに行った帰りかしら？」
「はい」
「先生、鋭いじゃん！」
曜子は目を細め、桃乃を眺める。
「それぐらい分かりますよ。だって桃乃ちゃんは浴衣を着ているしね。その萌黄色の浴衣、とっても可愛いですね。赤い帯も映えているし、髪も綺麗にまとめてとてもよく似合ってますよ。それであなた達、神社でお願い事をしてきたの？」
「それがさ、先生。すっげぇ混んでて出来なかったんだよ。俺、願い事あったのにさ」
口を尖らし、言いつけるような口調で冬馬は言う。
「あらそれは残念でしたね……」

冬馬の訴えを聞いた曜子は少しの間思案した後、ホールの窓ガラスに歩み寄り、二人を手招きする。
「ほら二人ともちょっとここから園庭を見てご覧なさい」
曜子に言われた通り、桃乃と冬馬も窓ガラスに近づいた。
透き通ったガラスから眺めた園庭に、たくさんの笹竹が立ち並んでいる。
「一日早かったのですが、昨日ここでも園児達と七夕をしたんです。どう、二人とも良かったらここで願掛けをしていきませんか？」

「マジ、先生っ！？　いいの！？」

歓喜の声を上げる冬馬に曜子はゆっくりと頷く。
「えぇもちろんよ。あなた達は卒園生だしね」
「ラッキー！　先生、短冊ある！？」
「えぇ。ほらその右の棚にある青い箱にまだ少し残ってるから使ってちょうだい。ペンはそっちの部屋の机にありますよ」
「了解！」
冬馬はホールの棚にあった紙箱から緑色の短冊を一枚取ると、さっさと隣の事務局に入っていってしまった。
「あらまぁ、何かよっぽどお願いしたいことがあったみたいね？」
曜子は慈愛に満ちた笑顔を桃乃に向ける。
「すみません、先生……。ご迷惑かけて」
「まぁ桃乃ちゃん、まるで冬馬くんのお母さんみたいですね。それより桃乃ちゃんはお願い事しなくていいのですか？」
「はい。私はいいです」
曜子が許可してくれたとはいえ、園児達の為に用意した笹竹に短冊を吊るすことに若干の抵抗があった桃乃はその勧めを断った。
「あらそう？　遠慮しなくていいんですよ？」
再度曜子が桃乃を促す。
その時、早速短冊に願い事を書き終わった冬馬が事務局の部屋か

ら飛び出してきた。
「先生、じゃあ吊るしてくるぜ？」
「えぇ、えぇ、どうぞ」
冬馬が握り締めている短冊に桃乃は目を向ける。しかしその視線に気付いた冬馬は裏返しに持ち直してしまった。
願い事を自分に見せないようにしているように感じた桃乃は直接尋ねてみる。
「冬馬、何をお願いしたの？」
「……機密事項なんで言えない」
真面目な顔で答える冬馬に曜子は笑う。
「だってどうせ月曜に片付ける時に私、見ちゃいますよ？」
「あぁ、ヨーコ先生なら別に見られてもいいんだ」

冬馬は「じゃ、つけてくる」と言うと玄関からスニーカーを取り、廊下の途中にあるガラス戸から園庭に出て行った。窓から冬馬が短冊をつけている様子を見ていた桃乃に曜子が優しく語り掛ける。

「桃乃ちゃん、冬馬くんが笹に何をお願いしたのか知りたくありませんか？」
「えぇ知りたいですけど……私には教えてくれなかったし」
「私はなんとなく分かりましたけど、でも確信が持てないのでこっそり見ちゃいましょうか？」
「えっどうやってですか？」
「任せてちょうだい」
曜子はフフッと笑うと事務局の部屋へ入っていく。出てきた時、その手には一本の長い蛍光灯が握られていた。そして冬馬が園庭から戻ってくるとまた手招きをして呼び寄せる。
「ねぇ冬馬くん。一つお願いしてもいいかしら？」
「なに？」
「二階の廊下のライトが切れちゃっているの。あなた背が高いし、

この新しいのに付け替えてくれないかしら？」
「そんなことならお安い御用！」
冬馬は曜子から剥き出しの蛍光灯を受け取ると二段とびで二階へと上がって行った。
「さ、桃乃ちゃん、いらっしゃい。ここにサンダルがあるからこれを使って」
廊下のガラス戸を開けながら曜子が急かす。
桃乃はパタパタとスリッパを鳴らして駆け寄ると、曜子と一緒に園庭に出た。
「確か冬馬くんがつけていたのってこの笹竹でしたね」
「はい」
「あらあら、あんな高いところにつけて……。さすが背が高いだけありますね」
笹竹のかなり上部の方でひらひらと揺れている緑の短冊を二人は見上げる。
「もうこんなに暗いですし、背の低い私たちではちょっと見えないですね。じゃあ……」
ゆっくりと園庭内を見回した曜子は、用具を入れてある物置からビニール傘を取ってくる。そして柄の方を上にして笹竹を引っ掛け、よいしょ、と言いながら手前に引っ張った。
緑の短冊に書かれた冬馬の願い事が桃乃の前にゆっくりと下りてくる。

「あ……！」

それを読んだ桃乃の呼吸が一瞬止まった。
「ほら、やっぱり私の思った通りの事が書いてありましたね」
曜子は満足そうに頷いた。その拍子に傘の柄から竹がするりと逃げ、さわさわと音を鳴らしながら短冊は天の川の方角に瞬く間に帰ってゆく。

それでも名残惜しそうにまだ上を見上げて動かない桃乃に曜子が声をかける。

「ねぇ桃乃ちゃん」

「はい？」

「桃乃ちゃんは覚えているかしら？　あなたがお誕生会で話した自分の将来の夢のこと」

「私の将来の夢……」

記憶の底をかき混ぜ、曜子から言われたキーワードを掬い出してみる。それをうまく掬い出すことには成功したが、なぜか桃乃は赤くなった。

「お、覚えてます……」

「私も覚えてましたよ。大抵の園児達は、その当時流行っている悪役と戦うヒーローや、魔法を使う女の子になりたいって言う子が多いんだけど、でも中にはとっても現実的な夢を語るおませさんもいるんですよね。あの時の桃乃ちゃんみたいに」

曜子の最後の言葉に桃乃はますます赤面した。

「でね、桃乃ちゃんは知らなかっただろうけど、その後面白い後日談があったのよ？」

「後日談……ですか？」

「えぇ。皆でお誕生会をする前に、その月にお誕生日を迎える主役の子どもたちと私たち教師だけで先に体育館で一度リハーサルをしたでしょう？　桃乃ちゃんのお誕生会であなたの将来の夢を聞いた冬馬くんはね、自分の誕生会のリハーサルの時に、ひな壇の上で私たちにこう言ったんですよ」

幼い子供に童話を読み聞かせているような優しい声が、桃乃の元に静かに届く。

「“ぼくはももちゃんをお嫁さんにしたいです”って」

笹に願いを　＜3＞

最初は頬だけの火照りだった。
しかしその熱は急速に桃乃の全身を覆い出す。心臓が痛いくらいに高鳴り始め、桃乃は手にしていた巾着の紐を思わず強く握り締めた。

――わたしはおおきくなったらかわいいおよめさんになりたいです――

当時五歳の引っ込み思案だった桃乃がお誕生会で話した夢。
それが消え入りそうな声で勇気を振り絞りやっと答えることのできた、ささやかな夢だった。
「で、でもヨーコ先生っ、確か冬馬はお誕生会の時にそんなこと言わなかったです！　確かあの時、“　ロケットのパイロットになりたい”　って……！」
勢い込んでそう断定する桃乃に、曜子は当時の内部事情を分かりやすいようにかいつまんで聞かせる。
「実はそれね、私たちでそう言うように変えさせてしまったんです」
「え？」
「だって皆の前で発表するのは“　おおきくなったらなりたいもの”　だったでしょう？“　桃乃ちゃんをお嫁さんにしたい”　じゃ、意味合いが少し違ってましたから……」
階段を降りてくる冬馬の足音がまだ聞こえないことを確認し、曜子は続きを話す。

「でもね、この件はその後私たちの中で行われた反省会で随分議論になったんです。将来の夢を語るという意味合いが少しずれてたからと言って、私たち大人が勝手に冬馬くんの意見を修正させたのは間違いだったのではなかったのかとね……。あの当時の冬馬くんには申し訳ないことをしてしまいました。幼いながらもあの時の冬馬くんは自分の発言を変えられる事に最後まで納得していないようでしたから……。だから今夜桃乃ちゃんにこの事を話せて本当に良かったです」

――先ほど頬から始まり、体の表面をくまなく覆った熱が更に体内で温度を上げる。

内から湧き出る衝動をもう抑え切れなかった。

「あのっヨーコ先生っ！」
「はい？」
「やっぱり私にも短冊下さい！」
「えぇどうぞ、どうぞ」
曜子はここまでの展開をすべて見通していたかのように、老眼鏡の奥の目を糸のように細めた。
「でもそろそろ足止めも限界でしょうから、急いで書いておしまいなさいね」
「はい！」

曜子に促され、箱から橙色の短冊を一枚貰い、急いで願い事を書きつける。
再び園庭に出ると笹竹に向かって精一杯両手を伸ばし、できるだけ緑色の短冊の側に近くなるよう、その近くの枝に橙色の短冊を吊

るした。
急いでホールに戻った時、二階へ続く階段の奥から駆け下りてくる足音が聞こえる。

「なぁ先生ー！」

冬馬が不思議そうな顔で蛍光灯を片手に二階から降りてきた。
「蛍光灯切れてるとこってどこだよ？　二階の廊下、全部ちゃんと点いたぜ？　他の場所かと思って教室とかトイレまで見たけど、そっちも全部点いたしさ」
「あらあら、じゃあ私の勘違いかしら？　嫌ですね、年を取るとなんでも忘れっぽくなって。じゃあそれは仕舞ってきましょう」
「おいおい先生、しっかりしてくれよ？」
「ふふっ、そうね。まだ呆けるにはちょっと早すぎるものね。冬馬くん、どうもありがとう。ご足労をかけてしまったわね」
冬馬から未使用の蛍光灯を受け取り、曜子は事務局の部屋へと入っていく。その小さな背中を見つめながら桃乃は曜子の計らいに感謝した。

（きっとヨーコ先生は私に今の話を聞かせるために、切れていない蛍光灯を冬馬に取り替えに行かせたんだ……）

桃乃は冬馬をそっと見上げる。そして囁くような声で言った。

「……冬馬、帰ろうか？」

「ん？　あぁそうだな。なんだかんだで結構時間経っちまったな。そろそろ帰るか。じゃ、先生！　俺らそろそろ帰るわ。短冊サンキ

ユー！」
「いえいえどういたしまして。またいつでも顔を見せにいらっしゃいね。待ってますよ」
「はい。ありがとうございました、ヨーコ先生」

園の笹竹は柵越しに伸びて歩道にはみ出していた。その笹の葉が揺れ合う音と曜子に見送られ、二人は星の子幼稚園を後にする。

「……しかしヨーコ先生も年取ったよなー。俺、地味にショックだったよ。なんか月日の無常さを感じるよな」
月明かりの道を並んで歩き出してまもなく、冬馬はやるせなさそうな声でそう呟いた。
「ん……」
桃乃はそれだけ答えると冬馬の手に自分の手を絡ませる。
すると電池が切れた玩具のようにピタリと冬馬の足が止まった。
「どうしたの、冬馬？」
「い、いや、桃乃の方から手を握ってきたの初めてだったからちょっとビビッた」
そう答え、片手で口を覆った冬馬の顔は青い月明かりの下でわずかに動揺しているようにみえる。
桃乃は握り締めた大きな手をさらに精一杯の力でギュッと握る。

「冬馬、大好きだよ」

この告白にますます冬馬の動揺は大きくなる。
かすかに開いていた指の隙間から本音がこぼれ落ちた。

「……マジですっげぇ嬉しい……」

感動で周囲がまったく見えなくなった冬馬は住宅街の通りでいきなり桃乃を抱き寄せる。

「冬馬、人が……」

見てる、と桃乃は言おうとしたが、夜遅くの住宅街のこの路地に二人以外の人影はいなかった。

もしかするとどこかの家の中から見られているかも、という考えも脳裏をよぎったが、感情が昂ぶっている今、そんなことはとても瑣末なことに思えた。

桃乃は目を閉じ、素直に身を預ける。

その胸の中を冬馬への想いで一杯にして――。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

――二人が住宅街の一角で唇を重ねている頃、曜子は再び園庭に出て笹竹を見上げていた。

「お式には私も呼んでもらえるかしら……？」

そう呟く老眼鏡の奥の目が柔和な色を帯びている。

もう一度曜子は笹竹につけられた緑と橙色の短冊を見上げた。

【桃乃を嫁さんにできますように】

【冬馬のお嫁さんになれますように】

夜空を流れる天の川に向けて願いをこめた二つの短冊は、夏の夜風に吹かれていつまでも仲良くひらひらと揺れ続けていた。

濡れた生徒手帳

牟部神社の七夕祭りから一夜明けた日曜日。
時刻はもうすぐ午後十時になろうとしているが、夜だというのに外の空気は依然蒸し暑い。

母方の祖父の七回忌に列席した桃乃は、家族と一緒にようやく我が家へと戻ってきた。
長距離の運転を往復一人でし終えた雅治は疲労困憊、といった様子だ。

「今日は疲れたな……」

声にまで疲れが滲み出ている。そんな雅治に、「お疲れ様。お風呂にゆっくり浸かって疲れを取ってちょうだい」と千鶴がねぎらいの言葉をかけた。
しかし雅治が「あぁ」と返事をする間もなく、
「あたし、今日はお父さんより先に一番にお風呂入りたーい！　今日すごく暑かったから、汗でベトベトで気持ち悪いの！」
と葉月が最初の入浴権を主張する。
「いいでしょ、お父さん？」
「あぁいいぞ、もうこんな時間だしな。じゃ先に入りなさい」
疲れた表情を緩ませて雅治は葉月の頭を撫でた。愛娘の頼みにはとことん弱い父親だ。
「ありがと、お父さん！　あ、それともあたしと一緒に入る？」
「そうするか？」
「もうっそんなの冗談に決まってるでしょ！　お父さんのエッチー！」

「こら、もう夜も遅いんだからそんな大声を出すんじゃない、葉月」
「だって冗談の通じないお父さんが悪いんだよー！」
雅治と葉月はそんな賑やかな会話を交わしながら家の中へと入ってゆく。

「ねぇ桃乃？」

後部座席に半身を乗り入れていた千鶴が車中からを娘を呼んだ。
雅治と葉月に続いて家の中に入ろうとしていた桃乃は足を止める。
「なに？　お母さん」
「これ麻知ちゃんのお家にもあげようと思うんだけど……」

車中から出てきた千鶴の手にはカゴが握られている。その中には千鶴の実家の庭にある木にたわわになっていた、取れたての瑞々しいサクランボが光っていた。

「おすそ分け？　今年のお婆ちゃん家のサクランボ美味しかったもんね」
「でしょ？　じゃこれ桃乃お願いね」
千鶴は微笑みながら桃乃の手にカゴを手渡した。
「え、私が持っていくの？」
「あら、だってもしかしたら冬馬くんの顔を見られるかもしれないわよ？」
千鶴は語尾を上げて楽しげに言う。
「お、お母さん……」
ほんのりと頬を染めて桃乃は口をつぐんでしまった。
「ふふっ、ごめんね、からかって。でもそれを届けてきてくれない？　お母さん急いでお風呂の用意しなくっちゃいけないし」
「……うん、分かった。じゃ届けてくる」
「お願いね」

カゴを手に、桃乃は向かいの西脇家に向かった。知らず知らずのうちに胸が湧き躍ってくるのを感じる。

冬馬、一階に下りて来てくれるかな、と思いながら桃乃が低い鉄製の門を押して中に入ろうとすると、突然後ろから若い女の声がかかる。

「あなた、ここの家の子？」

振り返るとそこには桜子が立っていた。

白のチューブトップにブライトイエローのパーカーをラフに羽織り、フリンジ裾のデニムパンツを穿きこなしている。しかしスレンダーな体型の為、肌の露出度の割りにあまりセクシーさは感じられない。

「いえ、違いますけど……」

戸惑いながらも桃乃は答える。

「あ、違うの？　でもここのお宅に用事あるんでしょ？」

「はい。これを届けに……」

「ふぅ～ん」

桜子は桃乃が持っているサクランボをチラッと一瞥する。そして自分のハンドバッグからゴソゴソと何かを取り出した。

「じゃ、悪いんだけどこれも一緒に届けてくれない？　冬馬くんにね」

桜子がハンドバックから取り出したのは生徒手帳だった。鮮やかな青色のそれは、間違いなくカノンの生徒手帳だ。

「私、今日冬馬くんと合コンしたんだけどさ、冬馬くんからこれ見せてもらった後、そのまま返すの忘れちゃったのよ。ついでだからお願いしてもいいでしょ？」

一瞬、その意味が理解出来なかった。

やがて脳細胞が活動を再開し、じわじわと状況を把握し出す。しかしそれでもまだ信じられない桃乃は、逆に桜子に訊き返した。

「合コン…に行ったんですか、冬馬が……？」

「えぇそうよ？」

桜子はそこで何かに気付いたらしく目を見開いた。

「分かった！　あなたが桃乃って子ね？」

「ど、どうして私の名前を知っているんですか？」

桜子は上目遣いで意味深に笑う。その身にまとう空気には勝者と強者のオーラが強く漂っている。

「あなた冬馬くんの彼女なんでしょ？　冬馬くんから聞いたわ。ねっ、冬馬くんてすっごく可愛いわね～。私いっぺんで気に入っちゃったわ！」

こんなに蒸し暑い夜なのに、桃乃の首筋に寒気が走った。桜子の話はまだ続く。

「それでね、今度二人で遊ぼうか、って話にもなったのよ？」

「う、嘘よ……」

桃乃は否定した。しかし否定したその声はかすれている。

「残念だけど嘘じゃないわよ？」

桜子は青い生徒手帳を、桃乃の目の前で大きくひらひらと揺らした。そして自信満々の様子で言い返す。

「そうそう、冬馬くんと裕人って二人とも十二月に生まれたから、

名前にそれぞれ季節にちなんだ字を入れて付けられたんですってね。冬馬くんは“　冬　”　の字で、裕人の場合は最初はあの字じゃなくて、白雪の“　雪　”　の字と北斗七星の“　斗　”　で雪斗って付けられるはずだったって。でも裕人の場合は字画が悪かったから結局今の字になったって、冬馬くんが教えてくれたわよ？」

「……！」

桃乃はショックで言葉が出てこなかった。

桜子が今話した、冬馬と裕人の名前の由来は事実なことを知っていたからだ。

西脇家の門前で凍りつく桃乃に、桜子は最後にわざとこう付け加える。

「あのさ、私は冬馬くんに彼女がいても全然気にしないから！　あ、でももしかしてあなたが気にしちゃうかしら？　ねぇ、冬馬くんにまたぜひ遊びましょうね、ってちゃんと言っておいてよねっ。じゃ、これ頼むわね！」

サクランボのカゴの上にカノンの生徒手帳が無造作に置かれる。

この事実を直視したくない桃乃は悲しそうな表情で小さく俯き、カゴの上の青い手帳からそっと目を背けた。

「じゃあね！」

自分の話で表情が曇った桃乃の顔を確認した桜子は満足そうな顔で去って行った。

桜子が視界から消えると、桃乃はカゴの上の生徒手帳を静かに手に取った。しばらくの間、その表紙をただじっと眺める。

――　やがて青い手帳の上に小さな雫が一粒落ちた。

桃乃の頬から流れ落ちた涙の雫は丸い透明な玉になり、生徒手帳の上を転がりだす。

一粒の雫はやがて手帳の名前欄で止まり、脅えるように小さく揺れた。

その部分には紛れもなく冬馬独特の少し角張った字で、『西脇冬馬』とはっきり書かれてあるのが涙に濡れる桃乃の瞳に哀しく映っていた。

かからない暗示

――嘘……！

――そんなの嘘に決まってる……！

胸の中心で渦巻く、黒い濁流。
これまでに体験したことの無い、鈍い痛みを伴ったその未知の感情が、桃乃の中で禍々しい黒い渦を生み出している。

体験したことの無い感情だが、それは良くない感情だと本能で分かった。
だから自分に暗示をかける。
心の中で繰り返し続ける。
まるで何かの呪文のように。

――冬馬が合コンに行ったなんて絶対嘘に決まってる――

しかし暗示はかからない。
手の中にある、涙でわずかに濡れたこの生徒手帳がそれを許そうとはしない。
このまま家に逃げ帰ってしまいたかった。
しかしその前にやらなければいけないことがある。
桃乃は胸の前に抱えていたカゴの柄を強く握り締めた。この感情に呑み込まれないように。

西脇家の門を開け、玄関先に立つ。
オレンジのライトを背にひっそりと佇む、玄関先にある買ってきたばかりらしい小さな観葉植物の鉢植え。そのすぐ横でさざ波立つ気持ちを何とか抑えながら、桃乃はインターフォンを押した。

「はい？」

声の主は麻知子だ。
冬馬ではなかったことに安堵しながら、「夜分遅くにすみません」と挨拶をする。
「あら桃乃ちゃんね！？　ちょっと待ってて！」
声で桃乃とすぐに分かった麻知子が玄関のドアを開けて出迎えてくれた。

（　どうか、冬馬が気付いて出てきませんように……！　）

つい先ほどとはまったく逆の事を願っている。
そんな自分に気付き、その事実に胸が潰れそうに痛んだ。
早く、早く家に帰りたい――。
そう必死に願いながら桃乃はカゴを差し出す。

「あ、あの、これ、お婆ちゃんの家の庭で取れたサクランボなんです。とっても甘いのでお裾分けしようと思って持ってきました」
「まぁ、ピカピカして美味しそうね！　どうもありがとう！」
麻知子は「千鶴ちゃんにも明日お礼言いにいかなくっちゃね」と言い足し、桃乃からカゴを受け取った。

そして今は自分の息子の彼女でもある桃乃を、家の中に招こうと熱心に誘い出す。

「ね、桃乃ちゃん、頂き物なんだけどとっても美味しいお菓子があるの。よかったら上がって食べていかない？」

「い、いえ、もう遅いですから……！」

冬馬と顔を会わせたくない桃乃は必死に断った。

しかしそんな気持ちなど麻知子は知る由もない。ニコッと笑うと腰に手を当て、暢気に言う。

「あら遠慮しないでいいのよ、ウチは全然構わないんだから！　それに冬馬もさっきまでどこかに出かけていたみたいだけどもう帰ってきてるしね」

「えっ……？」

まるで尖った錐で鳩尾を垂直に突かれたような。

そんなえぐるような鋭い痛みが体を貫く。

やはり冬馬が合コンに行ったのは事実だった――。

聞きたくなかった。

知りたくなかった事実に体が小刻みに震えてきそうになる。

これ以上喋るとまた涙が溢れてきそうだった。

下唇を小さく噛み締め、桃乃は深く俯く。

「桃乃ちゃん……？　どうかした？」

桃乃の様子がおかしいことにやっと麻知子が気付く。
「なんでもありません」とだけ答えると、桃乃は冬馬の生徒手帳を差し出した。

「……それとこれ、冬馬に渡して下さい」

喉の奥から押し出すように声を出す。無理をして出したその声はボイスチェンジャーを通した他人の声のように聞こえた。
「あら、これ冬馬の手帳なの？」
「はい……」
桃乃を元気付けるためか、麻知子は殊更に明るい調子で言う。
「やぁね、冬馬ったら！　桃乃ちゃんのお家にお邪魔した時に忘れてきちゃったのね？　ごめんね、そそっかしい息子で！」
「い、いいえ違います……」
桃乃は落ち込んだ表情でさらに目線を足元にまで落とした。
明らかにおかしい桃乃の様子に、どちらかというと短絡的な思考の麻知子は一つの最悪な結論を導き出す。

（　まっまさか冬馬、桃乃ちゃんに無理やり乱暴したんじゃ……？　）

これは息子に確かめてみなければならない。
二階に向けて大声が飛ぶ。

「冬馬っ！　桃乃ちゃんが来てるわよっ！」

真知子のいきなりのこの行動に桃乃は息を呑んだ。弾かれたよう

に顔を上げる。
「わ、私これで失礼します！」
「あ！　ちょっと待って桃乃ちゃん！」
焦った麻知子が呼び止める。
しかし桃乃は身を翻すとドアを開けて逃げるように外に出ていってしまった。
同時に二階からダダダダとすごい勢いで階段を踏み鳴らす音が聞こえてくる。

「冬馬っ！」

一階に駆け下りてきた冬馬に、麻知子は語気荒く詰め寄った。
「あんたはなんて事をしでかしてくれたのよ！　母さんこの間言ったでしょ！？　いい娘だから大切にしなさいって！　何やってんのよ、このバカ息子っ！！」
「なっ、なんのことだよ！？」
今にも自分の胸倉を掴み上げそうな勢いで詰め寄る母親に冬馬は唖然としている。
「あんた、桃乃ちゃんを襲ったんでしょっ！？」
「いぃっ！？」

麻知子のこの発言に冬馬は度肝を抜かれたようだ。

「おっ、襲ってねぇよ！」
「だってあんたを呼んだら桃乃ちゃん、逃げるように帰っちゃったわよ！？」
「桃乃が？　なんでだよ？」
「そんなの母さんに分かるわけないでしょ！　いいからとにかく桃乃ちゃんを追いなさい！　そして謝んなさい！　ほら早くっ！」
「わ、分かった！」

麻知子に急かされ状況がよく分からないながらも、スニーカーの踵を踏んだままで冬馬は玄関から飛び出した。
外に出た冬馬の視界に、自宅の玄関までの階段を昇り切った桃乃の後ろ姿が映る。

「桃乃っ！」

夜空の下に冬馬の声が響き、その呼び声で落雷にあったかのように桃乃はビクッと体を震わせて足を止めた。
冬馬は自分の家の門に手をつきそれを軽々と飛び越えると、倉沢家の門も同じように飛び越える。

「そこから先に来ないでっ！」

玄関までの数段の階段を上がろうとした冬馬を、振り返った桃乃が激しく拒絶する。
冬馬は怪訝そうな顔をしたが、とりあえずその場所で足を止めた。
つま先を地面に叩きつけてスニーカーを履きながら尋ねる。
「どうしたんだ？　なんで逃げるんだよ？」
「……」
桃乃は顔を背け、再び唇を噛む。

――信じたい。

こうやって冬馬の顔を見てしまうとその思いが強く湧き上がってきた。
そう、何か理由があったのかもしれない。
一刻も早くあの生徒手帳の呪縛から解き放たれたかった。
きちんと訳を聞いてみよう。
苦しさを堪えながらそう決めた桃乃に冬馬は重ねて尋ねてくる。
「なぁ、黙ってちゃ分かんねぇだろ？」

「……冬馬、今日どこに行ってたの？」

言葉に出したその声は、マイナスの感情を必死に押し留めているせいで、かなり素っ気無いものになっていた。たぶん冬馬の耳にはとてつもなく冷たく聞こえていることだろう。
「今日？」
冬馬はそう言うと少し考え込んだ。
「いや、別にどこにも行ってないぜ？　家でずっと期末の勉強してた」

「……嘘……ッ！」

声に感情が戻ってしまった。
圧縮していた負の感情がこの返事で一気に解凍し、噴出する。
それは留まるところを知らぬ勢いで体内のあらゆる箇所に次々と溢れ出し、各部位で異常をもたらし始めた。
「嘘言わないでよッ！」
そう叫んだ後、目の奥がじんと熱くなる。

――冬馬、どうして嘘をつくの？

――ねぇどうしてそんなに涼しい顔で答えられるの？

桃乃には分からなかった。

階段の下から桃乃を見上げた冬馬は「あぁそうだ！」と言いながらあらためて報告し直す。

「悪ィ、嘘だった！　そういえばレンタルビデオ店に行ったな」

「……」

重ねた嘘の返事に桃乃は完全に黙り込んだ。

その沈黙が冬馬にはいたたまれなかったようだ。

「……あー、そのー……。なんだ、バレちまってるのか……」

ついに冬馬は覚悟を決めたようにパシッと両方の掌を合わせる。

「……悪ィ！　ちょっとパッケージを手に取ってみたらついつい魔が刺しちまって……。分かった！　じゃ観ないからさ！　観ないで返すって！　約束するよ！」

「……何のこと……？」

「へ？」

冬馬はキョトンとした顔で拝んでいた手を離す。

「俺が今日、兄貴の会員証を使ってＡＶを借りてきたことを見抜いたんじゃないのか？」

「……最低」

桃乃はそう呟くとフイと横を向き、冬馬は照れ笑いを浮かべる。

「なーんだ、違うのかよ。言わなきゃ良かったなー。な、桃乃、やっぱり観たらダメか？」
もう一度桃乃が「……最低」と呟いた。
こう言われっぱなしではさすがに冬馬も面白くない。
「そこまで言うことないじゃん？　ＡＶくらい健全な男なら誰だって観てるぜ？　大体さ……！？」
冬馬はぎょっとしたように驚きで目を見開くと、素っ頓狂な声を上げる。
「もっ、桃乃、お前なんで泣いてるんだよ！？　たっ、たかがＡＶじゃん！？」
今にもこぼれそうなぐらいの涙を溜めながら桃乃は叫んだ。
「やっぱり冬馬は嘘つきよっ！」

――嘘には二つの種類がある。

自分を守るためにつく嘘と、他の誰かを守るためにつく嘘。
冬馬が誕生日の時についた嘘は私を守るための嘘。
バイトで傷だらけになったあの両手を見て、私が心を痛めないように。
しかし今ついた嘘は自分を守る嘘だ――。
桃乃はそう思った。

「嘘なんかついてないって！　一体俺がなんの嘘をついてるってい

うんだよ！？」
不可解な桃乃の態度に冬馬の声にも苛立ちが出始めてきていた。
一方、桃乃はもう自分の感情を抑えられない。
冬馬に向けて止めの言葉を放つ。

「今日冬馬は合コンに行ってきたんでしょ！？　私知ってるのよっ！」

「合コン？」
冬馬は鸚鵡返しにそう答えた。
が、その顔にわずかだが一瞬驚きの色が走る。
単純な性格の冬馬だからこそ分かる、その小さな動揺。
それを幼馴染の桃乃が見逃すわけは無かった。
こぼれ落ちそうな涙を抑えるために一度軽く息を吸った後、すべての感情をこの言葉に込め、最後に撃ち放つ。

「冬馬なんか大っ嫌い！」

「まっ、待てって！」
慌てた声が桃乃を必死で引き止めようとする。
「落ち着け桃乃！　お前何か誤解してるって！　冷静に話し合おうぜ！？」
冬馬が階段に足をかけたのを見て、桃乃は大きく後ずさり、玄関の扉に手をかける。
「いい！　冬馬の言い訳なんて聞きたくない！」
「おい！　だから待てって桃乃！　話を聞けって！」

「嫌ッ！」

必死に引き止める言葉を振り切り、桃乃は家の中に逃げ込んだ。扉を閉めて中に入った瞬間、堰を切ったようにこらえていた涙が溢れてくる。

（冬馬なんか……冬馬なんか……！）

このままだと嗚咽まで漏れてきそうで、涙を拭い廊下を駆け抜けた桃乃は、そのままバスルームの中へと飛び込んでいった。

波紋と思い出

――このお湯の中に身体がすべて溶けてしまえばいいのに――

そうすればこの苦しさから開放される。

暖かいお湯に喉元まで浸かりながら桃乃は痛切に思った。

「もうっなんでお姉ちゃんが先に入っちゃってるのよー！　あたしが一番のはずだったのにぃー！」

バスルームの外で葉月が騒いでいる。

それを千鶴がなだめている声がバスルーム内にもかすかに聞こえてきていた。

葉月には申し訳ないが、順番を差し置いてでも強引にバスルームに飛び込んだのは、泣いてしまったことを家族に知られないためだった。

入った時はまだ七分目程度だった湯張りも終了し、足元でゴボゴボとうるさかったバスタブが急に沈黙する。

ゆらゆらとかすかに揺れる湯面。

シンと静まったバスタブの中で、桃乃はぼんやりとそれを眺めた。

静寂が一秒間だけ乱れる。

かすかな水音と共に波紋が一つ、ゆっくりと広がった。
光の無い瞳で音がした方向に目を向ける。
それは蛇口から少しずつ漏れ出した水滴が、一粒の雫となって落ちた音だった。

ゆっくりとだが休む間もなく、蛇口は次の波紋を作るための水滴を生産し始めている。
伸びるように少しずつ膨らんでゆく水滴。
やがてそれは涙型の雫になり、重力の法則に習って再び落下する。

再び小さな水音。

滴り落ちる水滴が作る二つ目の波紋は、桃乃のすぐ側にまで押し寄せてくる。
三つ目の波紋。
四つ目の波紋。
それは飽きる事無く、繰り返される。
広がりつつ輪を描く、水の紋様をいくつ眺め続けただろう。
いつしかその水音は、現在から過去へと、冬馬との思い出を回想してゆくきっかけになっていた。

――ピチャン。

（　桃乃は浴衣が似合うよなぁ　　っつーか、なんでも似合うと思うけどさ　）

昨夜、牟部神社の七夕祭りに行く途中に言われた言葉。
嬉しそうに言われ、返す言葉が見つからなかった。
星の子幼稚園で冬馬が天の川に向けた願い事。
あの緑色の短冊が風に揺れていたのを見たのはつい昨日のことなのに。

――ピチャン。

（　俺さ　本当は何となく分かってたんだ　桃乃が兄貴の事を好きだったことさ　）

そう、冬馬は知っていた。
知っていながらも、ずっと、ずっと、私を想い続けていてくれた。
私が桁兄ィを好きだった頃、冬馬はその間一体どんな気持ちでいたんだろう――。
そう考えるだけで、辛くて、苦しくて、切なくて、また泣きたくなる。

――ピチャン。

（あぁこれか？　バスケの練習でキャプテンにめっちゃしごかれてさ。でも全然大したことないよ）

優しい嘘だった。

傷だらけの両手を見て、私が心を痛めないようにするためについた嘘。

そしてこの時つかれた嘘で勝手に決めつけてしまっていた。

“　冬馬が嘘をつく時は、他の誰かを守る時なんだ”と――。

――ピチャン。

（ずっとずっとずっと昔から好きだったんだ　お前だけを見てた）

いきなりの冬馬からの告白。

“　幼馴染”という枠を超えて、一人の異性として意識し出したあの夜。

背だけではなく、腕や胸、肩幅、筋力。

部活の途中で早退した冬馬の体から発せられる汗の匂い。
抱きしめられた時、冬馬の体と自分の体の歴然とした違いに初めて気付いたのがこの時だった。
ずっとずっと好きだったって言ってくれたのに――。
またあの目には見えない黒い濁流が、心の中で轟音をとどろかす。

――ピチャン。

（なぁ桃太郎　お前なに朝からそんなに浮かれているわけ？）

つい最近まで呼ばれていたこの仇名。
理由を知るまでは嫌で嫌でしょうがなかった。
でも、“　たぶんあいつの一種の照れ隠しなんだと思うよ　”
と衒人から教えられた今では、逆に愛おしささえ感じていたのに。

そして回想は一気に小学生時代への過去へと飛ぶ。
初めて“　桃乃　”　と名前を呼び捨てにされた、あの日へと。

（いいからつけてろって！　桃乃、それと俺の事を冬馬ちゃんって呼ぶのはもう止めろよな！）

小学四年の時に参加した屋外授業、野外星空観察　。
この日以降、冬馬は桃乃を呼び捨てにするようになり、桃乃が「冬馬ちゃん」と呼ぶと聞こえていないふりをするようになった。
星空観察の夜のことを思い出したせいで、この当時に体験したもう一つのある記憶が、ぼんやりと整理しがたい形で心の奥に留まっていることに気付く。

――この不思議な記憶は一体なんの記憶だろう……？

桃乃は考えた。
そしてその記憶を呼び覚ます手助けをしてくれたのは、蛇口からしたたり落ちる何度目かの水音だった。

――ピチャン。

（……お前だよ！）

幼い冬馬の叫ぶような声。

――思い出した。

あれは星空観察の後、すぐに行われた社会科見学。
某菓子メーカーの製造工場へ行った帰りのバスでのことだ。

暖房がほどよく効いたバスの中は児童らのはしゃぐ声で一杯だった。
その中でも特に騒がしかったのが、一番後部の座席一列を占めている男子グループで、その中には冬馬がいた。
始めはふざけあって爆笑を繰り返していた彼らだったが、いつのまにか話題は、
「好きな女子は誰か」
の一大告白合戦へと切り替わっていく。

別クラスに好きな女子がいる男子は意中の名前をあっさりと告白し、クラス内に好きな女子がいる男子は、小声、もしくは耳打ちで仲間に順送りで伝える。その度に後部座席からは「それマジかよー！」などと盛り上がる歓声が湧いていた。

しかし先ほどまで一緒に騒いでいた冬馬は、この話題になった途端に口をつぐんだ。

「冬馬、お前は？」
「好きな奴いないのかよ？」
と仲間にいくら催促されてもそっぽを向き、とうとう最後まで一言も発しなかった。

桃乃はこのグループの少し前の席に座っていたので、彼らのこのやり取りは聞こうとしなくてもすべて耳に届いていた。

社会見学を終え、バスを降りて家路についていた桃乃を冬馬が追いかけてくる。

「桃乃ー！」

この日はかなりの冷え込みだった。

冬馬が吐いた息は真っ白に染まり、後方へと流れた後、空へ向かって霧散する。

「あ、冬馬ちゃん」

振り返った後、またうっかりとそう呼んでしまった桃乃は慌てて口に手を当てたがもう遅い。

冬馬は途端にムスッとした表情になる。

「……一緒に帰ろうぜ」

まだ不機嫌な表情を残したままで冬馬は言った。

「う、うん」

この頃はほぼ同じ背丈だった二人は並んで歩き出す。

歩き出してすぐに冬馬は手に持っていた袋を桃乃に差し出した。

「ほら、これやるよ。桃乃、これ好きだよな？」

それは見学の最後に全児童に配られたお土産袋で、中には工場で直生産されたホワイトクッキーが詰められていた。

このクッキーを冬馬も好きなことを知っていた桃乃は遠慮して首を横に振る。

「いいよ、私も貰ったんだから」

「いいからやるって」

「ううん、いいってば」

せっかくの好意を断られ、冬馬は渋々と手にした袋を下ろす。

二人の間に少々気まずい空気が流れ、桃乃は急いで話題を変えた。

「きょ、今日の工場見学面白かったよね？」

「……まーな」

「ほら、このホワイトクッキーの一つ一つに機械で袋をかぶせるところなんか見ていて飽きなかったよ、私」

「俺それ見てないぞ？」

「だって冬馬ちゃ……とっ冬馬のグループって、ちゃんと決められたルート通りに進まないであちこちに勝手に移動してたでしょ？だからだよ」

「勝手に行動してたんじゃないって。探検してたんだよ、探検！」

十歳の冬馬は誇らしげに胸を張る。物は言いようだ。

「でもすぐにいなくなるから先生、困ってたよ？　さっきの帰りのバスの中だって一番うるさかったから何回も注意されてたじゃない」

バスの話題が出て冬馬の表情が変わった。

「……桃乃、お前、帰りのバスは俺らの近くに座ってたよな？」

「うん」

「俺らの話、聞いてたのか？」

いつの間にか冬馬の表情が幼いながらも真剣なものになっている。

「聞いてたっていうより聞こえてきちゃうの。すっごく大きな声で騒いでるんだもん」

「最後の話は聞いてたか？」

「最後の話って？」

「……誰が好きかって話さ」

「聞いてたけど……でも冬馬は言ってなかったよね？」

「あぁ」
「どうして？」
その問いに冬馬の表情が一気に固くなる。
両の拳がぐっと握られた事に桃乃は気付かなかった。
「……本当に分かんないのかよ！？」
そう呟く冬馬の声が熱を帯びていた。

――あまりにも無神経だったと今では思う。

それはまだ何も自覚していなかったからこそ聞けた、あまりにも無邪気で、そして残酷な問いだった。

「うん、分かんない。誰なの？」

幼かった桃乃は気軽に尋ねた。
そう声に出した時、大きく白い息が舞い上がり、冬馬の表情が一瞬見えなくなる。
その白い水蒸気の壁が冬の大気に溶けこんで完全に消えた時、

「……お前だよっ！」

冬馬は吐き捨てるように言った。
目に宿る強い光。何事にも臆さない純粋な光。
冬馬から発するそれに、桃乃は正面から捉えられた。
え、と口が開きかけた時、胸元に土産袋が強引に押し付けられる。
寒風が吹きすさぶ中、手袋もつけずに菓子袋を持ったままだった

冬馬の手はひんやりと冷え切っていた。

「やるっ！」

そう言い放つと冬馬はその場に桃乃を残し、走り去ってしまった。
どんどんと小さくなってゆく冬馬の背中。もう追いかけても追いつけそうになかった。
押し付けられ、反射的に受け取った袋がカサリと音を立てて我に返る。
ようやく桃乃は自分が冬馬から告白されたことに気がついた。
冬馬に好かれていたことにまったく気付いていなかった桃乃にとって、それは思っても見なかった事だった。

仲の良い幼馴染。

冬馬との関係はただそれだけだと思っていた。
鉛色の空から綿毛のような雪が降リ始める。
黒髪に白い綿毛を少しずつ積もらせ佇みながら、十歳の幼い桃乃は悩んだ。

（だって私が好きなのは……）

その後に来る名前は冬馬では無い。
しかもその人物は冬馬の五歳上の兄。
明日、冬馬になんて言えばいいんだろうと小さな胸を痛めながら桃乃は一人、家路を辿った。

しかしそんな憂鬱な気持ちはまったくの杞憂で終わる。

次の日に顔を合わせた冬馬は、いつものように「おーすっ！」と明るく挨拶をし、前日に告白をしたことなどまるで無かったかのような態度だった。桃乃の返事を尋ねてくることもなく、そしてそれ以降、二度と告白してくる事も無かった。

中学に入ってからは“　桃太郎　”と呼ばれ出した事もあって、冬馬が自分の事を好きだったのは小学生のあの時期だけだと桃乃は思っていたのだ。

でも実際は違った。

グリーン・スケッチで冬馬が語った自分の胸の内。

あの社会科見学日の告白からではなく、初めて出会った時から今までずっと、冬馬が見ていたのは桃乃だけだった。

その事が嬉しくて、だけど裏切られた今は同じくらいの悲しみも生み出している。

桃乃は身を乗り出し、ずれていた混合水栓のハンドルを“　止　”の位置にきっちりと合わせた。

水滴が止まる。そして回想も止まる。

両手をくぼませてそっとお湯をすくった。

手の中で揺れる小さな水面を見つめる。

――　きっとバチが当たったんだ

冬馬はこんなに想ってくれていたのに、それにまったく気付かなくて、
たくさん優しくしてくれたのに、そのありがたさなどつい最近まで微塵も分かっていなかった。
きっとこれは、今まで冬馬を何度も傷つけてきたことに対する罰なんだ――。

（それでね、今度二人で遊ぼうか、って話にもなったのよ？）

先ほど自分に対して向けられた、自信に溢れた桜子の言動が甦る。
あんな綺麗な女の人から誘われれば断る理由なんかきっとない。
だから冬馬は合コンにも行ったし、あの人と遊ぶ約束もしたんだ――。

そう考えた桃乃の胸をまた鋭い痛みが襲う。
その拍子に手が小さく震え、透明なお湯は指の隙間から零れ落ちていった。

何も無くなった手の中。

今はわずかに濡れているだけの両の掌。

好きだと言ってくれた冬馬の想いも、この零れ落ちていったお湯のようにあっという間に消えて無くなっていくのかもしれない――。

暖かいお湯の中にいるのに心が冷え冷えとしてくるのを感じた桃乃はもう一度お湯をすくった。
今度はそれを顔にぱしゃりと叩きつける。
そしてもう一度。
またもう一度。
桃乃は何度も何度もそれを繰り返す。
涙の筋が綺麗に洗い流されるまで。

◇　◆　◇

長い入浴が終わり、ふくれていた葉月に「ごめんね」とだけ謝ると、桃乃は部屋へと早々に引きこもる。
窓辺に近づくとカーテンを閉める前に窓を少しだけ開けた。
先ほどよりほんのわずかだけ涼しくなった夜風が、待ちかねていたように室内に入り込んでくる。

ちょうどその時、向かいの二階の一室にも明かりがついた。
向かいの部屋はもうカーテンを閉めていたのでシルエットのみが映る。
冬馬だ、と思った瞬間、後ろ手でカーテンを勢いよく閉めていた。
そして同時にライトも消してしまう。

胸が痛い。
立っているのが苦しいほどの、ギリギリと締め付けられるような感覚。
何かから逃れるかのようにベッドにもぐりこむと、薄手の羽毛布団をすっぽりと頭までかぶった。
やがて水鳥の羽を内包した寝具は徐々に桃乃の体温を吸収し、ほんのりと暖みを増してゆく。

ここは穏やかで、そして静かだ。
光の届かない、柔らかい暗闇で手足を抱え込み、胎児のような姿勢でゆっくりと目を閉じる。

――今日のことが全部夢だったらいいのに――

ほんの一時の間だけでもすべてを忘れようと、桃乃は浅い眠りにつく。
しかし、羽で作られた暖かい場所からかすかに漏れる嗚咽が収まったのは、それから一時間以上も経った後の事だった。

沙漠とネオン　【　前編　】

所変わり、ここは歓楽街の外れにあるイタリア料理店の前。本日、宰条大学の有志による合コンの二次会が行われた会場だ。
店の中から歩道に出た孝太郎は、夜空を見上げその場で大きな伸びをする。

「今日は飲んだなぁ……！」

今にも降りだしそうな空模様だったが、なんとかここまで持ってくれた。
重く立ち込めた暗雲の隙間から時折わずかに顔を覗かせる、儚く霞む丸い月。孝太郎が一番好きな形状の月だ。
天を仰ぎ見ると、そんな月と煌くネオン郡が猥雑な下界から共に眺められた。
日頃の行いがいいせいかもなぁ、などと調子のいいことを考える孝太郎の元に、合コンに参加していた他の男性メンバーの一人がやってきて声をかける。

「おい孝太郎！　早く来いよ、次行くぞ、次っ！」

「あ、悪い。俺パス」
孝太郎は顔の前で片手を立て、あっさりと断る。
「うぉい！　なんだよ、まさかお前来ないつもりか！？　宴会部長のお前が来なかったらこの後どうやって盛り上がるんだよ！？」
アルコールの大量摂取で少々赤ら顔にはなってはいたが、孝太郎はサイドの髪を後ろにかきあげ、至極大真面目な顔で答える。
「どうやら今日は飲み過ぎた。このまま次に行くと俺は間違いなく

猛獣化するぞ。それでもいいのか？」
「あぁ、構わん！　いいから来い！　もしお前が鬼畜と化して女を襲いそうになっても俺が止める！　命をかけて止めてやる！　それにお前今回は幹事だろ！？　桜子は途中で帰っちまうし、幹事が両方いなくなるなんてありかよ！」
「ま、ありはありじゃないか？」
「責任感ねぇー！」
　押し問答をしていた相手がそう叫んだ時、他のメンバーが店の入り口付近に心細そうに立っている真里菜を指差した。

「あの娘……、楠木さんだっけ？　あの娘は来るのか？」

　アイボリーのサマーワンピースが涼しげで小柄な体によく似合っている。
「あぁ、真里菜ちゃんか？　いや、彼女はこれで帰るよ。桁人が送ってやるみたいだ」
「なにぃぃぃー！　っつー事は、桁人も次に来ないのかっ！？　あいつがいなかったら誰が俺達のアシストしてくれんだよ！？」
　夜の帳を切り裂く仲間の雄叫びに、呆れた孝太郎は小さく溜息をついた。
「お前らな、いい加減にそうやってなんでもかんでも桁人に頼るのは止めろよ。あいつはお前らの世話役じゃないんだぞ？」
「何言ってんだよ孝太郎！　お前だって今まで散々桁人にアシストしてきて貰ってるだろ！？　桁人が来ないのならお前だけでも絶対に連れていくぞっ！　いいなっ！？」
　しかし血を吐くような仲間の必死の願いも、今の孝太郎の耳にはまったく届いていない。

「いや今日はマジ無理」

と軽く片手を振る。

本日の合コンの真の目的はとっくに達成したので、今回に限りこの後の展開は正直もうどうでも良かったのだ。

（とりあえず第一段階は成功したな）

喚く仲間を尻目に店先で一人佇んでいる真里菜に目をやると、ちょうど店の奥から衒人が出てくる所だった。たまたまの偶然か、真里菜のサマーワンピースとよく似た色のカジュアルシャツを着ている。その衒人が真里菜に話しかけているその様子を孝太郎は無言で眺めた。

「じゃ、真里菜ちゃん、俺、車取って来るからここで待っててね」

衒人の言葉に真里菜は一度頷いたが、すぐに申し訳無さそうな表情になる。

「あ、あの西脇さん。本当にお言葉に甘えていいんですか？　だってこの後、まだ皆さんはどこかにいらっしゃるんですよね？」

「うん、でも真里菜ちゃんをこんな時間に一人で帰すわけにはいかないし、俺は全然構わないよ。じゃすぐに戻るからね」

衒人は身を翻し、軽やかな足取りでレンガ敷きの歩道を駆け抜けていった。

この二人の一部始終を黙って見ていた孝太郎にまたメンバー達が次々に絡みだす。

「なんだよ衛人の奴、車で来てたのかよ!?　だからあいつ今日は全然飲んでなかったのか！　策士過ぎるぜ！」
「それより孝太郎、考え直してくれって！　次の店ではお前の力がいるっ！　例のあの唄を頼むぜ！」
「おーそうそう！　お前があれを唄うとよ、女にまったく縁の無い、切ない男の哀愁みたいな空気がじんわりと漂ってさ、女の子のハートを直に揺さぶるからな！」
「……おいお前ら」

あまりの言われように仏頂面で孝太郎は腕を組んだ。

「黙って聞いてりゃ、どういう意味だよそれは？　それじゃまるで俺がモテない男そのものみたいじゃんか」
「おぉスマン！　言い方が悪かった！　いわゆる母性をキュンとくすぐるっつーの？　とにかく効くんだよ、お前のあの唄はさ！」
「だから今日はパスだって言ってんだろ」
「この冷血男め！　あっ分かったぞ!?　おい孝太郎！　お前、衛人が帰るから二次会に来ないんだろ!?　お前ら本当はデキてんじゃねぇのか？　禁断の恋かぁ？」
「アホか」
いい加減に酔っ払いの相手をするのがバカらしくなってきた孝太郎は、場を切り上げるために偽りの本音を漏らすことにする。
「分かった。じゃあ本音をぶっちゃける。実はここだけの話だけどさ……」
すぐ側にいる女性陣に聞こえないよう声を潜める。
「……気に入った娘が一人もいなかったんだよ」
「だからっつって一人でアバヨはねぇだろ!?」
「そうだ！　いいから黙って付き合え!!」

「それコータロー！！　コータロー！！」

男性メンバーによる熱狂的な“　孝太郎カモンコール　”が始まった。

いつもの孝太郎なら宴会部長の名に恥じないよう即座に場に迎合し、「おっしゃあー！　行ったるかぁ！」と叫んでいるところだが、今夜の自分にはまだやらなければならないことが残っている。

「済まない、同志たちよ！　諸君らの健闘を心より祈る！」

シューズの踵を合わせて敬礼し、直立不動の体勢を取った孝太郎は、熱いコールを寄こす男性メンバー達に激励の言葉を贈った。途端に酔った男達の口から即座に噴出する、怨嗟の大合唱。

「友情ナッシングかよー！」
「敵前逃亡は重罪だぞー！」
「孝太郎ッ、お前の血は何色だぁぁーっ！」

ブーイングの嵐を軽く受け流し、「またな」と告げると孝太郎はメンバーに背を向けて足早に歩き出す。もうその表情はいつもおちゃらけている普段の孝太郎ではなかった。

時間がない。

裕人がここに戻って来るまでのこの数分間がラストチャンスだ。

今回の合コンは自分が計画したのにもかかわらず、桜子にゴネられたせいで結局は裕人の手をわずわらせる事になってしまった。

本当は嫌だったろうに、わざわざ顔を出してくれた裕人の弟にも迷惑をかけた。

だからここが最後のチャンスだ。最後くらいは俺があいつを援護

してやりたい。
孝太郎は固い意志を胸に店先で佇む真里菜の元へと近づく。

――　桁人にしては今回の娘は随分ゆっくりと攻めているな、と最初は思っていた。

だがそれは意図的に桁人が長期戦に持ち込もうとしているのではなく、真里菜にどうやって対応していいのか決めあぐねている、という事実に気付く。
あの桁人がだ。
それは孝太郎が初めて見た親友の姿だった。
ある日、孝太郎は何気なく尋ねてみる。

「なぁ桁人。お前さ、もしかしてあの楠木って娘にマジで惚れたんじゃないのか？」

茶化して尋ねたその問いに、いつもの桁人なら「そうかもな」と軽く合わせてくるはずだった。
しかし桁人は困惑した表情で、
「う…ん、どうなんだろう、自分でもよく分からないんだ」
と返してきた。
そして星の数ほどもいると揶揄されていた、たくさんのガールフレンド達との遊びも先月から激減している。そんな桁人の様子をすぐ側でつぶさに見てきた孝太郎はやがて決意した。

俺が合コンを企画して、裕人の為に楠木真里菜をなんとしてでも呼び出そう――、と。

◇　◆　◇

「まぁーりーなーちゃんっ！」

背後からいきなり孝太郎に声を掛けられ、「ひゃっ！？」と小さく叫ぶと真里菜はぴょん、と前に飛び退った。そのユーモラスな動きに、先日偶然通りがかったペットショップのウィンドウ先で見た、珍種の小型動物を思い出す。

（なんつったけな、あのちっこい動物。確か中東が原産地だったような……）

その動物の名前を思い出そうと孝太郎は考え込む。

「あ、あの……なんでしょうか、加賀美さん？」

視線を宙に漂わせ、孝太郎が黙り込んだのでおずおずと真里菜が答えた。

「あっ、ゴメン。あのさ……」

と続きをいいかけた孝太郎だったが、また目の前の真里菜を見て言葉を止める。

男性にじっと見つめられる経験に慣れていない真里菜はますます不安げな顔になった。

「……真里菜ちゃんて身長何センチ？」

唐突に出たその質問にまだ警戒のオーラを出しつつも、律儀な真里菜は「ひゃ、百五十三センチです」と答える。
「百五十三！？」
孝太郎は嬉しそうな声を出した。
「前から小さい娘だなぁと思ってたけどさ、君といると俺、自分がすごく背が高くなったような気になれるよ！」

真里菜に対し微妙に失礼な発言だが、“　一番欲しいものは？”　と聞かれて迷う事無く「身長」と答える孝太郎にとって、それは掛け値なしの本音だった。

「あの、私、以前に加賀美さんとお会いしたことありましたか？」
“　前から　”　と言われた真里菜が反応する。
「あ、そっか」
孝太郎は本題に行く前に軽い雑談から会話をスタートさせることにした。
「いや、直接は無いけどさ、学内で君の事をたまに見かけたことあったんだ」
そうだったんですか、と真里菜が答える。
「あのさ、真里菜ちゃんって今日が初めての合コンだったんだろ？」
「はい。そうです」
「実は今回俺が幹事だったから気になってさ。どうだった？　面白くなかった？」
「いっ、いえ！」
真里菜は慌てたようにふるふると首を横に振った。
小柄な動きは、ペットショップの店先にいたその小動物にやはりどことなく似ている。
「私、合コンというものに初めて出たのですがとても面白かったです。皆さん本当にお優しい方ばかりで……」

ウェーブのかかった茶色の長い髪もその動きに合わせてふわふわと揺れた。

こういう場合、男の優しさはあくまで表面的なもので、その奥深くには下心エキスというものががたっぷりと染みこんでいる場合がほとんどだ。だが純情な真里菜にこちら側の内部事情をわざわざ暴露する必要性も見当たらない。

本当に箱入り娘なんだなぁ、と感心しながらも、孝太郎はもちろんそれを表情には出さなかった。

「それを聞いて俺も一安心だ！　あ、これから裕人に送ってもらうんだろ？」

「はい。でも……」

再び真里菜の表情が曇った。

「私、本当に西脇さんのお言葉に甘えて送っていただいてもいいでしょうか……？」

「あぁ、いいんだって。裕人の方からそう言ったんだろ？　だったら遠慮する必要なんかまったくナッシングだぜ？」

孝太郎が太鼓判を押したせいで真里菜の曇っていた表情が少し和らいだ。

伏し目がちだった長い睫が大きく上向く。

「あ、あの……、西脇さんってとってもお優しい方ですよね」

悪くないその反応に孝太郎の顔から笑みがこぼれる。

「だろっ！？」

「一緒にいらしていた弟さんに合わせてお酒も飲んでらっしゃいませんでしたし、何より気配りがすごいです。私にも、周りの方にも」

「あぁ、酒の方はあいつ車で来ているから最初から飲む気は無かったみたいだけどな。でも真里菜ちゃんの言う通り、あいつの気配り

の細やかさは確かにすごいよ。なんたって、別名、サード・アイだからな」

「サード・アイ……？」

真里菜が首をかしげる。

「あぁ。三つの目を持つ男、って意味さ。マジであいつの頭の後ろにはもう一つ目がついてるんじゃないかって思うことがあるよ」

孝太郎は衍人が走り去った方角に視線を移す。しかしその姿はとっくに見えなくなっていた。

駐車場の方向に顔を向けた孝太郎の鼓膜に、真里菜の言いにくそうな声が届いたのはその時だ。

「……あ、あの、それと西脇さんって“　合コン王　”　っていう別名もお持ちなんですよね……？」

「……誰が言ってた、それ？」

真里菜が口にしたその問いに、孝太郎の表情が途端に険しくなる。
それまでにこやかに話しかけてきていた相手が急に硬い声と表情を見せたので、真里菜はためらいがちにその名を答えた。
「さ、桜子さんです」

（　チッ、やっぱり桜子か……　）

孝太郎は苦々しさを噛み締めながら内心で舌打ちをする。ほろ酔い気分が急速に冷めていくのを感じた。
冬馬を今回の合コンに参加させたので、こちら側の交換条件であった真里菜を桜子は約束通り連れてきたが、どうやらその前に裄人に関する様々なマイナス情報を吹き込んでおいたらしい。
どうしても真里菜を合コンに参加させるため、顔の広い桜子に女子の仕切りを任せたのが現時点では完全に裏目に出てしまっている。

「あぁ、確かにあいつのもう一つの仇名はそれだよ」

顔を伏せた真里菜を見つめ、孝太郎は大きく息を吐いた後、その噂をあっさりと認めた。だがその後に「でもな」と言葉を続ける。

「その仇名の由来が面白いんだ。もちろんかなりの数の合コンに出たせいでついた仇名なのは間違いない。でもそれは裕人が自分から合コンに参加しまくったからじゃないんだぜ？」

「えっ、そうなんですか……？」

桜子から聞かされていた内容と違っていたため、真里菜は少し驚いた表情を見せる。

「あぁ」

気負ったせいでその肯定の返事は不自然なぐらいの強さになる。

「合コンがある度に“　頼むから是非出てくれ！　”　って拝まれて、何度も出ているうちについたんだ。それもさ、その熱烈コールをしょっちゅう送るのは女の子達じゃない。裕人を誘うのは俺らからさ」

「男性の方……から？」

不思議そうに大きく顔を上げた真里菜の髪がまたふわりと揺れる。

「そう。ちょっと解せないだろ？　裕人みたいな色男を呼ぶのは俺らにとってはデメリットの方が大きいからな。気に入った娘がいても裕人になびく可能性がデカくなっちまう」

その時、イタリア料理店の右隣で営業中の飲食店の格子戸がガラガラと開いた。

「ありあとやしたー！」

中から出てきた客の背を押すように店員のお礼の掛け声が飛ぶ。

何気なくその光景に目をやった孝太郎はそのまま軽い調子でサラリと告げる。

「俺らの立場なんて、言うなればそこの刻みキャベツみたいなもんでさ」

「えっ？」

真里菜は孝太郎の視線の先を振り返った。そこには、

『トンカツ専門店　石黒亭（せっこくてい）』

と書かれてある立体看板があり、煌々とライトが灯っている。

店先に張られている和紙の張り紙には達筆な朱の筆文字で、“当店一押し！　スペシャル・ロースカツ”　と書かれていた。

「もちろん裕人はメインのあれだ」

張り紙を指差し、孝太郎が続ける。

「真里菜ちゃん、トンカツ屋に行くのは皆美味いトンカツを食いたいからでさ、添え物の刻みキャベツを目当てに行く奴は普通いないだろ？　しかも場合によっちゃ、大してろくに食われないで、哀れにも厨房にそのまま下げられちまうこともあるしな。いい所は全部メインの奴が総取りだ」

神妙な顔で聞いている真里菜に、孝太郎は「だけどな」と力強くつけ加える。

「それでも俺らはあいつを呼ぶ」

また格子戸がガラリと大きく開いた。

満腹そうな顔をした中年の二人連れが談笑しながら夜の街に消えてゆく。

「なぜかは真里菜ちゃんも今日の裕人を見ていてよく分かっただろ？　俺らのメインディッシュはすごい気配りのできる大した奴でね。実は俺さ、今こうやって真里菜ちゃんの前でベラベラ喋っているけ

ど、気に入った娘の前に行くと途端に緊張して上手く喋れなくなるクセがあるんだ。……意外だろ？」
「は、はいっ」
「真里菜ちゃん、肯定早過ぎ」
「す、すみません！」
「いやいや、正直でいいけどさ」

間髪入れずに返ってきた真里菜の素直な返事に、孝太郎はフッと表情を緩めた。

「でもそういう時にさ、裕人はスッと側に現れて、俺とその娘の会話が弾むように色々と話題を振ってくれるんだ。なんとなく想像できるだろ？」
「えぇ、分かります。とても」
今夜合コンの席で裕人から受けた気配りを思い出し、心からの同意をこめて真里菜は深く頷く。
「それに俺だけじゃない。あいつはいつも自分を後回しにして、参加している男のメンバー全員にそうやってフォローして回る。まったく、よくあれだけ瞬時に状況を把握できるよなって俺らはいつも言ってる。だからついた仇名が“　サードアイ　”　で、合コンに引っ張りだこになるから“　合コン王　”。俺達みんな、あいつには世話になりっぱなしなんだよ」

一つ手前の交差点で裕人の車が赤信号で停止したのを確認した孝太郎は、人前では久しく見せなかった大真面目な顔で最後の押しに入る。

「真里菜ちゃん、桜子に何を言われたのかは知らないけどさ、あいつは確かにモテるし、色んな女の子とちょくちょく遊んできたのも本当だ。でも裕人は好きな子と両思いになったらその子としか付き

合わなくなる。それは親友の俺が断言する」

停まっていたヘッドライトの群れが動き出した。

残された時間はあとわずか。これが最後の言葉になるだろう。

「だから頼む。噂になんて囚われないで、ちゃんと君自身の目であいつを見て、判断してくれ。そして衒人との事、真剣に考えてくれないか？　あいつが今好きなのは君なんだ」

「え……？」

パァァッと真里菜の頬が桜色に染まった。

その反応に、明らかにこの娘は衒人に惹かれ出してるな、と確信した孝太郎の口がつい軽くなってしまった。

「あいつはマジでいい奴だよ。だって俺も衒人に抱かれたいって思うことあるもんなぁ……」

それを聞いた真里菜の顔色が桜色から蒼白に切り替わる。

「か、加賀美さんてそういうご趣味だったんですか……？」

「へ！？」

脅える真里菜の様子に、今の自分の台詞を回顧した孝太郎の顔からも血の気が失せる。

「ちっ、違うって！　うっかり言い忘れたけどさ、今のは“　もし俺が女だったら”　って仮定の話だって！」

慌てた孝太郎は一歩近づいたが、青ざめた真里菜はその分きっちりと距離を取る。

「あぁっ、頼むからそんなに引かないでくれよ真里菜ちゃーん！」

そこへハザードランプを点灯させて衒人の車が歩道に止まる。運転席から降り、孝太郎と真里菜の側にやってきた衒人が不思議そうに尋ねる。

「お待たせ……あれ、どうした、二人とも？　顔が真っ青だぞ？」
顔を大きく引きつらせながら孝太郎は冷や汗を腕で拭った。
「ははは、何でもないって！　ちょっと俺と真里菜ちゃんの間で多少の齟齬があっただけだ。じゃ、じゃあな裕人！」
「あ、孝太郎。お前、次も行くのか？」
「いや、俺も今回パスした。かなり酔っ払ったし、ターゲットも定められなかったしな」
「なんだ、じゃあ乗ってけよ。送るよ」
「いいって。お前そんな事してる場合じゃないだろ」

孝太郎はさりげなく横目で真里菜を指す。しかし裕人は退かなかった。

「いや、乗ってけ。そんなに酔ってるなら心配だ」
「お前な……」
孝太郎はつくづく呆れたように目の前の親友を見上げる。
「少しは今の置かれている状況考えろよ」
「いいから乗れって。どうせ通り道だ」
「いいって」
「なんだよ、遠慮するなって。らしくないぞ」
「でもよ……」
「いいから乗れ」
強いその口調に結局孝太郎は折れた。
「……はい、では送っていただきます」
「よし。さ、真里菜ちゃんも乗ってね」
「は、はい」

孝太郎が裕人の車に歩み寄るとすかさず背後から声が飛ぶ。

「あ、孝太郎。お前、今日は後ろな！」
「分かってるって！」
振り返ると孝太郎は親指を立てて笑顔を見せた。

◇◆◇

――運転中、衒人は車内で音楽をかけることが多い。
そのジャンルもポップなものからジャズ、クラシックまで多彩だ。
しかし、渋滞気味のネオン街を走る車内の中で流れている今夜の曲は少々毛色が違っていた。
音源は車内のスピーカーからではなく、なぜか後部座席。
ジャンルは童謡。しかも生独唱だ。

衒人は小さく嘆息し、ミラー越しに後部座席でほろ酔い気分の孝太郎をチラリと眺める。
そこにはご機嫌な様子でいぶし銀に熱唱する孝太郎がいた。
流れ続けるエンドレスメドレー。曲は「月の沙漠」。
もうこれで通算五回目のリプレイだ。

「ごめんね真理奈ちゃん。うるさいだろ？　孝太郎は酒が入るとこの歌を口ずさむ癖があるんだ。酔っ払ってるから許してやってよ」
「い、いえ、うるさくなんか……」

申し訳無さそうに自分を見る衒人に、真里菜は小さくかぶりを振った。
“　ちゃんと君自身の目で見てくれ　”　と孝太郎に言われた通

り、素直に運転席に視線を送ると、整った癒し系の笑顔と目が合い、意思に反してほんのりと頬が染まる。

「……そ、それにこの歌、懐かしいです。小学校の時に習いました」

それを聞いた孝太郎は一旦唄うのを止める。

「優しいなぁ真里菜ちゃ～ん！　この曲、俺の十八番の一曲なんだよ～ん！」

おどけた声が車内に響く。先ほどまでの真面目さはどこへやら、だ。

赤信号で停まった時にさすがに衍人が心配そうに後ろを振り返る。

「孝太郎、大丈夫か？　お前、今日は少しおかしいぞ？」

「そりゃあ浮かれもするさ。何せ今日はめでたい日だからなぁ」

「めでたい？　お前の誕生日ついこの間だったよな？」

「俺じゃなくてお前だよ、お・ま・え」

「俺？」

信号が青に変わり、衍人は前に向き直る。

ルームミラーに再び映ったその表情は戸惑っているようだ。

そろそろ本気で退散しようと決めた孝太郎は、運転席のヘッドレストに手をかけて座席から身を起こした。

「衍人、停めてくれ。俺、ここで降りるわ」

「ここでか？　まだもう少し先だろ、お前の家」

「少し夜風に当たって帰りたいんだ。お前の言う通り、ちょいと酔っ払いすぎた」

「……おい大丈夫か？　だからアパートまで送るって。明日の新聞の見出しにお前の名が載るなんて羽目になったら困る」

「この季節なら行き倒れたって凍死しないって」

「そういう問題じゃないだろ」
「それにもしかしたらカワイイ女の子が見かねて介抱してくれちゃって、そこから恋の華咲く展開になるかもしれないしさぁ」
暢気な孝太郎のその言い草に、ますます衍人は態度を硬化させる。
「凍死しなくたって道端で寝込んで車にでも轢かれたらどうするんだよ。雨も降りそうだし、いいから乗ってろって」
孝太郎は少しの間沈黙した。やがてポツリと呟く。

「……バカだなぁ」

ギアを切り替えながら衍人は呆れた口調で応酬する。
「バカはお前だよ。ったく酔っ払いと真面目な会話するだけムダだな」
「ハハッそういう事だ」

真里菜は助手席で身動きもほとんどせず、今の二人の会話を黙って聞いていた。
そして何かを考えるように膝元に視線を落としている。

「……なぁ衍人」

窓枠のわずかなスペースに肘を乗せ、孝太郎はウィンドウ越しに夜空を見上げた。
淡く、白い満月が静かに追ってきている。
「なんだ?」
「お前はもう少し自分の事を一番に考えるクセをつけろよ」
「どういう意味だよそれ?」
「そのままの意味だ」

「意味が分からないよ」
「……ま、いいや。それがお前のいいところだ」

再び夜空を見上げると、霞む月をが孝太郎の中にある古い記憶を手繰り寄せてくる。
幼い頃に見ていた童謡番組でよく流れていた「月の沙漠」のワンシーンだ。

金銀の鞍に揃いの白装束の衣装をつけた王子と姫。
二人を乗せた二頭の駱駝が月下の沙漠を渡ってゆく。
そのシルエットが子供心にとても幻想的で、今でもこうして記憶の中に残り続けていた。

確かに時代も情景もまったく違う。

前にいる二人が身を預けている乗り物は駱駝ではないし、あのシーンのように、紺碧の夜空に朧月のみがぽっかりと浮かぶ光景はネオンが溢れるここでは拝めない。
だが。
視線を前部座席に移す。
アイボリーの細めのシャツを着ている袴人に同じ色のサマーワンピースを着ている真里菜。
その並んだ後姿が、今の孝太郎には月の沙漠の情景と重なって見えていた。

――どうかこいつらがあの王子とお姫さんになるように――

窓枠にもたれて頬杖をつき、孝太郎は「月の沙漠」を四番から唄いだす。
酔いは醒め始めてきていた。
だが酔ったふりを続けながら孝太郎は朗々と唄う。

どうか親友のこの恋が上手くいくように。
丸い月がじんわりと滲む夜空を眺めながら孝太郎は強く思う。
後部座席から流れるそんな密かな願いをこめた曲は、再び車内を静かに満たしていった。

三人を乗せた車は孝太郎のアパート近くの歩道沿いに滑り込むように止まる。
孝太郎が車から降りてしまう前に、裕人は後部座席へ早めの釘を刺した。

「孝太郎、寝る前に必ず水飲めよ？　コップに二杯以上だ、忘れるな」

注意を受けた孝太郎は呆れたように大きく肩を竦める。
「お前ってまるで俺の奥さんみたいだよな！　お前がいてくれれば、俺、一生独身でもいいかも！」
「だから茶化すなっての。心配してるんだぞ？」
「ハハッ、悪ィ悪ィ！　あ、それと先に帰ったお前の弟くんによーく礼を言っといてくれな？　弟くんのおかげで無事に今日の合コンが出来たんだからさ」
「あぁ伝えとくよ」
「頼むぜ！　桜子にも相当絡まれてたし、弟くんには悪いことをしちまったからなぁ。今度なんか奢ってやらないとな」
そう言うと孝太郎は助手席のヘッドレストに手をかける。

「真里菜ちゃーん！　俺のせいで家に戻るの少し遅くなってごめんな！」

「い、いいえ、そんな事ないです！　でも加賀美さん、今日は早く寝て下さいね？」
助手席から振り返りそう答えた真里菜の表情には、つい先ほどま

であった孝太郎に対しての警戒色がほぼ無くなっている。
「やっさしいねー真里菜ちゃーん！　……でさ、さっき君にもう一つ言い忘れてたことがあるんだ。すぐに済むからちょっとだけ降りてもらっていーい？」
「えっ？　はっ、はい。分かりました」
「サンキュ！　というわけで悪い、裕人！　一分だけ真里菜ちゃん借りるぜ？　さぁさぁ真里菜ちゃん、降りて降りて！」
孝太郎に強引に促され、真里菜はおとなしく車を降りた。

「こっちこっち！」

話す内容が裕人に聞こえないように、孝太郎は少し離れた電話ボックス前に真里菜を呼び込んだ。そしてわざと第一声は重々しい声で伝える。
「……いいか、よーく聞けよ真里菜ちゃん？」
「はっ、はいっ！」
「あいつがかなりのお勧め物件なのはもう分かっただろ？　トイレ・バスは完全分離、しかも駅近でオートロックも完備ときてる優良物件だ！　保証人はこの俺が喜んでなるからさっ、安心して身一つでどーんと入居しちゃいなよ！　きっとバラ色の快適ライフが待ってると思うぜ？」

先ほどのトンカツ屋の例え話を思い出し、真里菜がクスリと笑う。

「ふふっ、加賀美さんって面白い例えをなさる方ですよね」
「まぁね！　でも周りには、お前の言ってる意味分かんねー！　ってよく言われるよ。俺はすげーいい例えだと思って言ってるんだけどさ」
孝太郎は口の端をかすかに上げて照れたように笑うと、半ばゴリ押しに近い最終確認をする。

「で、で、どうだい！？　俺、入居保証人にならせてもらえる！？」
「……え、えっと……」
返答を急かされた真里菜は次の言葉を言い淀む。
「じゃっ、じゃあまずはお試し入居でもいいからさっ！　現在こちらの物件は絶賛トライアル期間中ですよ！？　周囲の的外れな騒音なんか気にすんな！　いざ部屋ん中に入っちまえば室内が快適すぎてそんなもん聞こえなくなるって！　だから頭でグチャグチャ考えるより、ここは一先ず試してみようぜ！　な！？」
「……」
孝太郎の再三のゴリ押しに真里菜は頬を染め、ほんのわずかだけ目を伏せた。
しかしそれは返答に困ってではなく、小さく頷いたためだ。
「はい。これから西脇さんのこと、私の目だけでちゃんと見てみようと思います」
「よっしゃあーっ！」
見事、月下氷人の大役を果たしきった孝太郎は大声で叫び、腰の前でガッツポーズをする。
そして真里菜の両肩をガッシリと掴んだ。

「じゃっ桁人の事はよろしく頼むぜっ、ピグミちゃん！」

驚いた真里菜がポカンと口を開ける。
「え、それって私の事ですか？」
「あぁ、たった今思い出したんだ！　正式名称は“　ピグミージェルボア　”！　トビネズミ科の小動物でピョンピョンとノミみたいに跳ねてさ、すっげー可愛いんだぜ！？　今日から真里菜ちゃんの仇名はそれでいくよ！　変な仇名が桁人だけじゃ不公平だからな！　じゃっお休みピグミちゃん！」

肩に置いた両手を離し、孝太郎は最後にもう一度グッと小さくガッツポーズをすると、アパートの右端にある錆びた鉄製の階段を鳴らして自分の部屋へと帰っていった。
真里菜は穏やかな微笑を浮かべてその後ろ姿を見送った後、衍人の待つ車内へと戻る。

「大丈夫？　なんか孝太郎の叫び声が聞こえたけど……」

心配そうに尋ねてくる衍人に、迷いが完全に吹っ切れた真里菜は明るく答えた。
「はい、大丈夫ですっ」
「そう？　ならいいけど……」
腑に落ちない表情で運転席に座り直した衍人の様子に、真里菜は明るい表情のままでクスクスと笑い出す。
「ん？　どうかした？」
「西脇さん、これから私の仇名はピグミになりました」
「ピグミ？　何だいそれ？」
「加賀美さんが今決めて下さったんです。トビネズミ科の小動物なんだそうです。それが私によく似てるって」

「なっ……！」

衍人は一瞬、言葉を失う。
「あいつ、わざわざ真里菜ちゃんを降ろしてそんな失礼な事を言ったのか！？　ったく、しょうがない奴だな……。ごめんね、明日叱っておくよ」
「いえ、いいんです！　すごくいい方ですね、加賀美さんって」
「そ、そう？」
「はい！」
この時真里菜は孝太郎の他にもう一人の人物の名も挙げたかった

が、その男性がすぐ目の前にいるので、それは口に出さなかった。

◇◆◇

「ごめん、ちょっと寄り道しちゃったから真里菜ちゃんの家に着くの、三十分くらい遅くなりそうだ」

衍人は助手席で行儀よく座っている真理奈に帰宅時間の変更を告げる。

「家の方、大丈夫？　門限とか無い？」

「いえ、大丈夫です。今日は家に両親がいませんので」

「エッ！？」

動揺がハンドルに直に伝わったらしい。アスファルトに刻んでいるタイヤのラインがガードレール側に微妙にブレた。

「ど、どうかしました？」

「い、いや…、なんでもないよ」

動揺が身体の表面に滲み出さないよう、フロントガラスに視線を戻す。

今日のところはこのまま真里菜を自宅に送り届けるつもりだったが予想外の事態だ。

この先の行動を大幅変更すべきかどうか。

綿密、且つ精細なシミュレーションを脳内で行った結果、弾き出された予想勝率は五分五分。衍人にしてはかなり低い確率だ。

（でも今日強引に事を運ぼうとして元も子も無くなるのもマズイしな……）

真里菜が箱入り娘で今まで男性と接する機会があまり無かった事を桜子から聞いていたため、今日は特にソフトな対応を心がけたつもりだ。その甲斐もあり、初めての合コンで緊張しているせいもあったのだろうが、最初は自分にたいしてどことなく警戒していたような真里菜も、途中からは笑顔を見せてくれるようにまでなった。

希望的観測が多少入ってしまっているのは否めないが、今日の合コンで真理奈の自分への反応は決してマイナスなものではなかったと裕人は思う。前進こそすれ、少なくても後退はしていないはずだ。

しかしせっかく好感触を持たれ始めたばかりなのに、ここでそれを水泡に帰すような迂闊な真似は出来ない。

――しかし親が不在という、千載一遇に近いこのチャンスをみすみす見逃してもいいのか？

裕人は悩み続ける。

ハンドルを握りながら一瞬だけチラリと隣を見ると、綺麗に手入れされた茶色のウェーブの髪に、薄化粧の真理奈の横顔が流れるネオンに照らされている。ホントに可愛いなぁ、と思いながら裕人の気持ちはまだ決まらない。

街の中心地を抜け、郊外に入るとようやく渋滞から解放された。

とりあえず真里菜の家の方角に向かいつつも、車は最終目的地が定まらないままで、ただひたすらに走り続ける。

フロントガラスにポツリ、と一滴の雫が落ちてきた。
とうとう雨が降り出してきたらしい。
しかし降り始めの雨はまだ気が向いた時だけにしか落ちて来ない。
本降りになるまでもう少し時間がかかりそうだ。

「雨が降ってきたね、真里菜ちゃ…」

そう言いかけた助手席の方へ顔を向けた桁人の時間が一瞬凍りついたように止まる。
本日の合コンでもいつも通りあちこちの座席へホストのように渡り歩いた桁人だが、常に真里菜の動向は気にかけていた。確か真里菜が最初の乾杯の時に口にしていたのはノンアルコールビールで、しかも二杯目からはソフトドリンクに変えていたはずだ。それなのに。

いつの間にか真里菜は助手席でグッスリと眠り込んでいた。

その寝顔を桁人は静かに見つめる。
あどけない顔ですやすやと眠るその姿はとても愛らしかったが、同時に複雑な気分にもさせられた。

（アルコールのせいで眠ってしまったんじゃないなら……）

こうして二人きりの状態で男の車に乗せられているのに、こうもグッスリと眠り込むことができるのは、“　余程信用された　”のか、それとも真里菜にとっての自分は、“　意識外の存在　”だからなのか。

――もし後者だったら。

力なくハンドルを握り直し、裕人は大きくため息をついた。

割れないタマゴ　【　後編　】

“　バスケットに盛られた生のタマゴを想像しろ
そいつを一つも割ることのないように気を配って走れ
そうすればお前の隣にいるお嬢さんはいつまでも眠り姫でいられるはずだ　”

昔どこかで聞いた、“　助手席で眠っている女性を起こさずに運転する心得　”　を思い出した。

心得に忠実に。

隣で安らかに眠る真里菜を起こさないようにカーコンポから流れていた音楽を消し、裕人は運転に集中する。車内に鎮座している架空のタマゴ達がピクリとも動かないぐらいの慎重さで。

少しずつ、少しずつ、フロントガラスに小さな雨粒が増えてゆく。
雨脚が強くなってきたがまだ車の行き先は決まっていない。
耳を澄ますと助手席からかすかに聞こえる、規則正しい寝息。
そっと視線を送るとなだらかな胸部がスローモーションのようにゆっくりと上下していた。
そのどこまでも無防備な寝姿に、抵抗しがたい誘惑が頭の中で囁いて、心までをも掻き乱す。

――目覚めた時、もしそこが見たことも無い部屋だったら、彼女はなんて言うだろう――

そんな問いを自分に投げかけてみる。

真里菜の性格ならたぶん怒ることはないだろう。

ただ、その瞳に静かに悲しみの色が浮かんだ場面を想像すると、桁人の決心は鈍った。

「……俺ってこんなに優柔不断だったっけ……」

未だ結論が出せていない自分に納得がいかず、思わずそんな呟きが漏れる。

その声で真里菜が小さく身動きをした。しかしまだ目は覚まさない。

薄着で眠るその体に何かかけてやりたかったが、あいにく今日はジャケットを着ていない。

車内にタオルケットの代わりになるようなものも無かった。

スポーツタオルでも積んでおけば良かったな、と桁人は後悔する。

フゥと溜息をつき、再び思考に意識を戻した。

自分が真里菜に対してここまで優柔不断になっている理由。本当は分かっていた。

――俺はこの娘に振られるのが怖いんだ

もちろん女性に振られた経験の一つや二つはある。
だが、振られるのが怖い、というのは初めて体験する感情だった。

今年の春に楠木真里菜と浮田教授のゼミで一緒になった。
一目で気に入った。
それからは会う度にアプローチをかけ続けた。
だがガードが固く、なかなか実は結ばなかった。
何事にもスマートに、そして効率的に行動するのが信条のいつもの自分なら、とっくに真里菜に見切りをつけていたはずだ。
しかしなぜか今回は諦めたくなかった。だから誘い続けた。
そこへ孝太郎から合コンの誘いがかかり、そこに真里菜も呼ぶと言われた時、これに賭けよう、と衍人は思った。

だが――。

現実は時として無情だ。
この状況でこれだけ無防備に眠ることが出来るということは、やはり自分は“　意識外の存在　”　なのだろう。
余程信用された、ということはまずありえない。
今まで真里菜が自分との間に有刺鉄線のように張っていた硬い空気の壁が、このわずか数時間の合コンだけで完全に消え去ったとは考えづらかった。

（　実質振られたようなもんなのかな……　）

だがそれでも真里菜をこうしてそっと眠らせたまま、簡単に帰ることの出来ない遠い場所にまで連れ去ってしまいたい、という思いを止められない。

俺ってこんなに未練がましい所があったんだ、とまたあらたな自分の一面を発見した時、携帯が鳴った。

シャツのポケットから急いで携帯を取り出す。

マナーモードにしていたので真里菜を起こさずに済んだ。ディスプレイは母、麻知子からの呼び出しを伝えている。

一旦車を街路樹の下に停め、真里菜を起こさないように静かに車外に出ると携帯を耳に当てた。

「あ、裕人？」

麻知子の声が聞こえてくる。

こうして麻知子からたまに連絡が入ることはあるが、それは大抵夕方までで、夜はほとんど鳴ることがない。「まーた夜遊び！？」と嫌味は言うが、裕人のプライベートな時間を邪魔しないよう麻知子なりに気を遣っているのだ。

その麻知子からこうして連絡が来ているということは緊急の用件だ、と裕人は直感する。

「どうした母さん。なにかあった？」

「あんた、今すぐに帰って来られる？」

携帯電話を通してでも麻知子の切羽詰った様子が分かる。

「すぐは無理だよ」

「そう……。でも今日は帰ってくるのよね？」

まだこの先の展開を決断出来ていなかった裕人は言葉を詰まらせ

る。
「そ、それはまだ分からないけ…」
「冬馬が怒ってるのよ」
祈人の言葉を遮り、麻知子はまずその一言から用件を切り出す。
「エッ!?」
「どうしてかは分からないんだけど……。さっき桃乃ちゃんが来てね、なんだか様子がおかしかったから冬馬を呼んだのよ。でも桃乃ちゃんが逃げ帰っちゃったから後を追わせたんだけど、その後二人の間で何かあったみたいでさ。冬馬が家に戻ってきた後、あんたは今日何時に帰ってくるのかって怖い顔で聞いてきたのよ。それで“　今日は聞いてないわよ　”　って言ったら、黙ってそのまま二階に閉じこもっちゃったの。だからあんたが何か理由を知ってるのかなって思ってさ……」
全身から血の気が引いていくのを感じた。
街路樹の葉の間をすり抜けてきた気まぐれな雨粒が一滴、左の頬に付着して我に返る。
「もしもし祈人?　聞いてる?」
「あ、うん、聞いてるよ」
「もしかしてあんたが何か冬馬を怒らせるようなことをしたの?」
「い、いや……。ごめん、母さん。運転中だからもう切るよ」
麻知子の問いには答えずに祈人は一方的に電話を切った。

（　冬馬が怒ってる、か……　）

携帯を手に衛人はしばらく考え込む。

そして考えがまとまると頬についた水滴を手で拭い、またそっと運転席のドアを開けて乗り込んだ。

進路の決まった車はゆっくりとUターンし、雨の中を再び静かに走り出す。

――　最終的に衛人が選んだルートは、真理奈の家に一番早く辿り着けるルートだった。

◇　◆　◇

「ご、ごめんなさい……！　私、眠っちゃって……！」

真里菜が目を覚ましたのは、自宅までもうあとわずかで着く、という所でだった。

わざわざ家まで送ってもらっているのに眠り込んでしまった自分の失態に、真里菜は赤い顔で何度も頭を下げる。

「いいんだよ。女性は睡眠をたっぷり取らないとね。よく眠れた？」

「ほっ本当にすみません！　西脇さんの運転って静かなのでつい……ゆっ、揺りかごに乗っているみたいな気持ちになって……」

真里菜のその返答に衛人は微笑んだ。
どうやらタマゴは一つも割らずにここまで辿りつけたようだ。

「じゃあ真里菜ちゃん。戸締りには気をつけてね」
小雨模様の中、真里菜の家の玄関先に車を停めると衛人は一旦車から降りて助手席のドアを開けてやる。
「はい。送ってくれてありがとうございました」
車を降り、衛人を見上げた真里菜の顔に雨粒が当たりだした。
「あっほら、濡れちゃうよ？　雨、強くなってきたから早く中に入って」
助手席のドアを閉め、衛人が急かす。
しかし真里菜は家の中に入ろうとしない。
「西脇さん……」
「ん？」
真里菜はどこか潤むような瞳でか細く尋ねる。

「あ、あの……またお会いすることは出来ますか……？」

思っても見なかった真里菜からの誘いに衛人は驚く。
「もっもちろんだよ！　だって同じ大学じゃないか。それにゼミでも毎週会ってるだろ？　でっでも良かったら今度一緒に緑がいっぱいの高原にドライブでもしない？　マイナスイオンを体内に取り込みにさ！　健康にいいよ？　あっ、それに美容にも！」
声が勝手に弾むのを、分かっていても止められなかった。
真夏に咲く向日葵のように可愛らしい笑顔がそんな衛人に向けられる。
「はいっ！　ぜひ連れて行って下さい！」

一瞬、呼吸の仕方を忘れた。

胸がドキリと震え、酸素の代わりに別の何かがたっぷりと肺の中に流れ込んでくる。

その淵一杯までなみなみに満たされたような暖かい感覚。心が大きく和んでゆくのを感じる。

これも今まで一度も体験したことの無い感情だった。

――あぁそうか　きっと俺はこの娘の事が本気で好きなんだ

そう自分の気持ちに改めて気付いた時、今日はこのまま送ってきて正解だったと心から思えた。

「真里菜ちゃん、明日また連絡するよ。じゃあお休み」

「はい。お休みなさい、西脇さん」

真里菜が家の中に入ったのを見届けた後、まるでこれからの不吉な将来を暗示するかのように雨脚は強まりだした。先ほどまで乾いていた道路は一面にコールタールをべったりと塗りつけたように、たちまち真っ黒に染まってゆく。

車内に戻った裕人はしっとりと濡れた前髪を片手で大きく後ろに掻きあげ、車を発進させる。

雨はますます強く降り始め、それに合わせるように裕人の表情も

徐々に硬さを増し始めた。

焦りを振り切るように車の加速をさらに上げる。

雨天時には慎重な運転を心がけている衒人だが、今はそんな事を言っている状況ではない。

ギアを素早くトップに入れた。

しかしシフトチェンジがスムーズにいかず、ギアの歯が苦しげに鳴る。動揺がここにも現れていた。

普段は衒人の耳にあんなに小気味良く響く、エンジンが高速回転で唸る快音も、今は自分を余計に焦らせる要因にしかなっていない。

「……前門の虎、後門の狼だって分かっていたくせに俺って奴は……。これは久しぶりに本気で覚悟決めないとマズイですね……」

疾走するタイヤが路上に溜まる雨を豪快に蹴散らす。

衒人は真剣な面持ちでそう独り言を呟くとアクセルを何度も強く踏みしめた。

明かされたカラクリ

静まり返る深夜の住宅街。
聞こえるのはアスファルトに次々とその身を投げ続けている激しい雨音だけだ。

そこへ負けじとばかりに、けたたましい排気音が騒々しく割り込む。
気が焦っているせいでついエンジンを止める直前に空ぶかしをしてしまい、衍人は慌ててアクセルを緩めた。麻知子がまだ起きていたら雷を落とされること必至だ。
真里菜の家が自宅と完全に反対方向だったため、すでに深夜零時を回ってしまっている。車庫に車を入れ終わり二階を見上げると、冬馬の部屋にはまだ明かりが点いていた。

（絶対俺を待ってるんだろうな……）

体全体に容赦なく無数の雨粒が襲い掛かる中、衍人は重い足取りで玄関先に向かう。
静かに鍵を開けて中に入ると、一階はすでに真っ暗になっている。啓一郎と麻知子はもう寝てしまったらしい。
足音を立てないようにそっと二階へ上がり、冬馬の部屋の前に立つ。気分はまさにこれから業火真っ只中の戦場へと特攻する、悲壮な戦士の心境だ。
深呼吸をひとつした後、ドアを二度小さくノックする。

応答は無かった。

衍人はそのまま思い切ってドアを開ける。
しかし開けた直後にその端正な顔に緊張が走った。
片膝を立てて机の上にどっかりと座りこみ、凄まじい形相でこちらを睨んでいる冬馬の姿が目に飛び込んで来たせいだ。

「やっと帰ってきたか、兄貴……ッ！」

物凄いプレッシャーだ。この部屋だけ空気の重力が明らかに違う。
思わず一歩後退しそうなぐらいのその強烈な威圧感に衍人は気圧された。

「た、ただいま……」

「いいからそこに座れよ」
ベッドの上を顎でしゃくり、冬馬は横柄に命令する。
弟にそんな態度を取られているにもかかわらず、衍人はドアを後ろ手で閉めると言われた通りにベッドの上に腰をかける。そしてその従順なる者の口からまず最初に出てきたのは謝罪の言葉だった。
「済まない、冬馬……」

「済まんじゃ分かんねぇよッ！」

バシッ、と激しい音が響く。
苛つきが最高潮に達した冬馬が、立てていた自分の右膝を広げた掌で力任せに叩いた音だ。
上昇しっぱなしの冬馬のボルテージにブレーキをかけようと、裕人は小声でなだめた。
「お、おい冬馬……もう少し声落とせって……。オヤジと母さんが起きちゃうよ……」
「知るかよっ！」
だがすでに怒りの暴走列車と化している冬馬は止まらない。
「兄貴っ、今日合コンだったんだろっ！？」
「あ、あぁ……」
「この間一緒に出てくれ、って俺に頼んだヤツだな！？」
「そ、そうだよ」
そのあまりの激怒ぶりに裕人はゴクリと喉を鳴らした。
もう一度激しく膝頭が打ち鳴らされる音が響き、冬馬は更に声を荒げる。
「なぁ兄貴っ、俺はあの時断ったよなッ！？」
狼の怒りの遠吠えに窓枠がビリリと震える。
我慢、及び忍耐のボーダーラインなんてものはとうの昔に超えていた。ノルアドレナリンが大量に分泌され、冬馬は憤激する。
「なのにっ、なんで俺がその合コンに出てることになってんだよ！？」

この咆哮の後、怒り狂った狼は眉間に大きく立て皺を寄せ、鋭い眼光を衍人に放つ。
体を貫通しそうなぐらいのそれを真正面から受け、もう冬馬が大声を出すことをなだめる余裕など衍人には無かった。それどころか逆にその怒声につられ、言い訳をする声も自然と大きくなる。

「替え玉だよ！！」

ついにカラクリが明かされる。
「お前が来ないと合コンが出来ないから替え玉使ったんだっ！」
「替え玉！？　どういう事だよそれ！？」
「じっ実はさ……」
覚悟を決めた衍人は生乾きの髪をかきあげ、声量を元に戻して静かに告白した。

「……お前の友達の柴門要くん、いるだろ？　その要くんにお願いして冬馬のフリして合コンに出てもらったんだ」

自分の想像出切る範疇の遥か斜め上をいった衍人のその答え。
冬馬は怒りを忘れて呆気に取られた。
「な、なんで要が出てくるんだ！？　それにどうして兄貴は要の事を知ってんだよ！？」

立て続けに質問を浴びせられ、桁人は所在無げに両手を組み合わせる。

「いつだっけ、GWの頃だったかな、要くんがお前に会いにウチに来たことあったろ？　俺、その時に玄関先でチラッと要くんを見たことあってさ、それで今回の替え玉計画を思いついたんだよ。要くんはマスクもいいし、俺に雰囲気も似てるしさ、彼なら弟だって言っても絶対バレないなと思って……」

「どうやって要と連絡取ったんだよ！？」

「お前の部屋からクラス名簿探した。で、要くんに会って訳を話したら、快く替え玉を了承してくれたよ。“　冬馬には大きな借りがあるから返したい　”　って言ってた」

「……俺に借り……、要がそう言ったのか……」

冬馬はそう呟くと重い表情で黙り込む。

「それで今朝お前の机から生徒手帳持ち出して要くんに持たせたんだよ。証拠代わりにさ。そんで俺らの昔の話とか、名前の由来とか、幾つかの幼少エピソードを要くんに教えて、万一にもバレないように準備万端で今回の合コンに臨んだ、という訳です……」

――桁人が張り巡らせた姦計。それは替え玉作戦だった。

今回のカラクリの説明は終わったが、冬馬はまだ黙りこくっている。

すると恐る恐る、という様子で桁人が口を開いた。

「あ、あのー冬馬くん？」

「あ？」

「一応、要くんにも口止めしておいたんだけど、どうしてこんなに早くバレちゃったのかな……？」

「……十時頃、桃乃がここに来て訳分かんねぇことを言ったんだ」
ここで今が深夜だということをやっと思い出したのか、今度はできるだけ怒りを抑えた声で冬馬が答える。
「兄貴が要に貸したその生徒手帳をなぜか桃乃が届けに来たんだよ。そんであいつ、俺が合コンに出たって決め付けてきてさ」
「桃乃ちゃんが手帳を……？」
そう反復はしたが、その話を聞いた瞬間に今回のアクシデントの全貌が桁人には見えた。

（きっと桃乃ちゃんに手帳を渡したのは桜子さんだ……）

一次会で要の側から片時も離れずに、盛んに話しかけていた桜子の姿が目の前にちらつく。そしてその手の中には要から取り上げた生徒手帳があった。
「じゃっ、じゃあ、桃乃ちゃんは思い切り誤解しちゃってるんだ……？」
「あぁ。あいつ、思いっきり誤解してるよ。俺がいくら説明しようとしたってまったく聞こうともしないで勝手に自分ちに逃げこんじまった」
「そうだったのか……。本当に済まない冬馬……。この件は責任もって俺が対処するから許してくれ」

「……いや、もういい」

冬馬はもう一度頭を下げた兄に向かって冷たい視線を向ける。
「話は分かった。俺もう寝るから出てってくれよ」

「冬馬、俺、明日の朝一番で桃乃ちゃんにこの事を説明しにいくから」
しかし冬馬は素っ気無く言い放つ。
「いや余計なことはしないでくれ」
「でも今回は俺が全面的に悪いから…」

「いいって言ってんだろッ!?」

冬馬は裕人の顔を見据え、今度は一転して怒気をはらんだ声でもう一度同じ台詞を吐き捨てる。
「冬…」
「もういいから早く出てってくれよ!!」
部屋の照明が消され、枕元のベッドライトが灯る。
「……わ、分かったよ、お休み……」
裕人はそう挨拶をしたが返事は当然のごとく返っては来なかった。

◆◇◆

（　冬馬があんなに怒ってるの見たの久しぶりだな……　）

裕人は自室に戻ると煙草に火をつけ、片手に小型灰皿を持つと窓

枠に寄りかかる。
いつしか外は豪雨に近いぐらいの雨模様になっていた。先ほどよりもさらに勢いを増した雨が窓ガラスをひっきりなしに叩き、雨の筋が幾つもの不規則な曲線をガラスの表面に描く。
窓の外に目をやると、向かいの倉沢家が視界に入った。カーテンの中央部分がわずかに開いているが、桃乃の部屋はすでに暗くなっている。

とにかく、このままにしておくわけにはいかない。

弟の置かれている現在の状況を聞いた今、どうにかしなければという焦りだけが、澱のように体内に溜まってゆく。
火をつけた煙草を口に咥えるのも忘れ、指の間に挟んだままで衍人は思考を巡らし続ける。
気付くと煙草はフィルターのすぐ近くまで灰になっていた。
今にも重みで崩れそうなその灰をそっと灰皿に落としたその時、考えは固まった。

冬馬には「何もするな」と言われたが、やはり自分が動くべきだ。動かなければいけない――。

吸い損ねた煙草を灰皿に押し付けると、二本目の煙草にゆっくりと火をつける。
紫煙をくゆらし、その立ち上る先を見つめながら衍人はそう心に決めた。

そしてそれぞれの一夜が明けた。
昨夜遅くから降り出した雨は、まだ勢いを衰えさせること無く今も降り続いている。

ベッドの上で目覚めた桃乃の気分は相変わらず深く沈んでいた。
胸の中心にはいまだに淀んだ濁流が渦巻いている。
ショックが体を駆け抜け、昨夜はただただ滂沱の涙を流しただけの桃乃だったが、今朝になって分かったことが一つだけあった。

それは自分の中に今ある、この歪んだ黒い感情は“　嫉妬　”なのだということだ。
少しでも気を抜くと、桜子が昨夜目にしたようなあの勝ち誇った顔で冬馬の隣にベッタリとしなだれかかり、楽しげに談笑しているシーンを想像してしまう。
しかも桃乃の想像の世界では、冬馬もとても嬉しそうに桜子と話をしているのだ。

起き上がる気力が湧いてこない。
淡い小花模様が散りばめられた壁紙から白いクロス貼りの天井へと視線を移す。
真っ白なクロスをずっと眺め続けていると、意識だけに感覚が集中し始めているのが分かった。

――海溝に身を落としたらきっとこんな感じなのかもしれない
――

ふと、クリアになった思考の中でそう思った。
身体は今も暗い海の底に向かって沈み続けている。逃れることは不可能だ。
昨夜はこれ以上落ちないぐらいの深さにまで身も心も沈んだつもりなのに、淀んだ嫉妬の感情は過重な錨（いかり）と化して、桃乃を果てしない海底へと今も引き込み続けていた。
鮮やかなエメラルドグリーンの透き通った海面はどんどんと頭上から遠ざかり、上方では無数の水泡がきらめく。しかし錨はその鈍く光る黒い身から冷たい鉄の鎖を伸ばし、桃乃の身体を容赦なくがんじがらめに縛り付け、決して離そうとはしない。

その事に言い知れぬ恐怖を感じた桃乃は、ベッドから体を引き剥がすように身を起こす。
このまま嫉妬の感情に心を歪ませ続ければ、手を伸ばしても二度と這い上がれなくなるくらいの暗い海溝に感情のすべてが飲み込まれてしまうような気がした。
その恐怖から逃げ出すように身支度を済ませ、朝食にもほとんど手をつけずに学校へと向かう。

「行ってきます」

普通を装って家を出ると、傘をさして雨が降りしきる外へと一歩踏み出す。
その瞬間に「おはよう」という声が聞こえた。
玄関先に止まっていた車の窓ガラスが開き、運転席から顔を覗か

せた人物を見た桃乃は驚きで軽く息を呑む。

「裕兄ィ……！」

「これから学校だろ？　雨も降っているし、送っていくよ」

「……」

昨夜の事があり、素直に返事が出来なかった。桜子の口ぶりで、裕人と桜子が知り合いなのは分かっていたからだ。

「今、桃乃ちゃんを迎えに行こうと思ってたんだ。話があるから乗って。急がないと追いつけない」

車内から覗く裕人の顔はいつもの柔らかさが少し欠けているように見える。

「追いつけないって……？」

「冬馬にだよ。あいつ朝練があるからもう家を出ているんだ。早くしないと車とはいえ間に合わないかもしれない。さ、早く乗って」

しかし桃乃は助手席のドアに手をかけようとはしなかった。ためらいながら小声で答える。

「ど、どうして冬馬を追いかけなくちゃいけないの？」

「いいから早く！」

車に乗ろうとはしない桃乃に、裕人は強い口調で急かす。

「桃乃ちゃん、冬馬は昨日の合コンに行ってないんだ！」

「エッ……！？」

「詳しいことは車で話すから早く！！」

ようやく桃乃を乗せることが出来た車はタイヤを鳴らして急発進する。

「それで昨日の合コンのことなんだけどさ…」

衍人は運転に集中しながらも車内で今回の事の顛末について詳しく話し出した。説明を聞き終わった桃乃の顔色が完全に変わる。
「……じゃ、じゃあ冬馬は本当に合コンに出てなかったの……？」
「あぁそうだよ。それに実は俺、替え玉トリックを思いつく前にダメ元で合コンに出てくれないかって冬馬に直接頼んでもいるんだ。でもあいつの返事はノーだった。あいつ、その時言ってたよ。兄貴には色々世話になってるし、頼み事を聞いてやりたいけどそれはやっぱり無理だって」

信号が黄色から赤に変わろうとしているにもかかわらず、車は交差点を突き抜ける。
いつもの衍人らしからぬその強引な運転に、今語られていることは間違いの無い真実なのだということが強く伝わってくる。

「あいつ、“　俺には桃乃がいるから　”　ってきっぱりと断ったんだ。しかも、“　兄貴、役に立てなくてゴメンな　”　って俺に謝ってさ……。だから冬馬は桃乃ちゃんに謝らなくちゃいけないようなことは何一つしていないんだ。悪いのは全部俺なんだよ」
「……わ、私……」
昨夜、自分が冬馬の前で取った態度を思い返し、桃乃の声が震える。
「私、冬馬に謝らなくっちゃ……！」
「うん、急ぐよ」
間に合えばいいけど、と衍人はハンドルを切りながら呟く。

やがて車はカノンの通学路に入った。
かかげられている傘の位置が高い人物ばかりを目で追い続けたが、冬馬らしき人影は見つからない。
「桃乃ちゃん、この先カノンに行くにはもうこの道しかないよね？」

「うん。あとはこの坂道だけ……」
正門が見えてきた。
「どうやら間に合わなかったみたいだな」
たった一言のその言葉がとてつもない重さをはらんで桃乃を押し潰そうとする。
「あ、待って！　いた！！」
裕人が叫ぶ。
スクールバッグを背負い、先を歩いている冬馬の後姿がグレーの傘の隙間から見えた。
「まずいな、あいつもう学校の中に入っちゃうよ」
冬馬の足を止めるため、短いクラクションが通学路を貫く。
そのけたたましい音に冬馬は肩越しに軽く後ろを振り返ったが、すぐに前に向き直ると逆に歩く速度を早め、そのまま正門をくぐり抜けて行ってしまった。
「あーあ、気がつかなかったかぁ……」
ため息をつけない車は、代わりにゆるゆると速度を落とす。
「でもあいつ、一瞬だけどこっちを見たような気がしたんだけどなぁ……。桃乃ちゃんもそう思わなかった？」
桃乃はその問いに返事が出来なかった。
冬馬が振り返った時、自分と目が合ったような気がしたのだ。
ううん、きっと冬馬は私に気付かなかったんだ、と何度も思い込もうとしたが、胸の中がざわざわと不穏な物音を立て始めている。
そんな冷たい予感に脅える桃乃に裕人が気遣いの言葉を掛けた。
「あれっ、桃乃ちゃん大丈夫？　顔色悪いよ。もしかしてここまで飛ばしすぎたから酔っちゃったかい？」

「ううん、大丈夫」
一言だけそう答えると桃乃はシートベルトを外す。
しかし不安な気持ちが心だけではなく、体までも前のめりにさせていた。両脇の黒髪がサラサラと肩から滑り落ちて不安げな横顔を覆い隠す。
「あいつまだ怒ってんのかなぁ……」
衒人の独り言に桃乃は素早く顔を上げた。
「冬馬、怒ってたの……？」
「うん。あんなに怒ってる冬馬見たの久しぶりでさ……。そんで昨日の夜、桃乃ちゃんに責任持って事情説明に行くからって言ったら余計なことしなくていい、って怒鳴られたんだ。でも俺、いてもたってもいられなくてこうして桃乃ちゃんに全部話しちゃったんだけど……」
車は正門から駅の方角に方向転換し、一度停止する。
「桃乃ちゃん、確かこの学校って校舎が男女に別れていて勝手に行っちゃいけないんだよね？」
「うん」
「じゃあ今日は冬馬と学校で会うチャンスはもう無いの？」
「今日は無理だと思う……」
桃乃は気落ちした様子でうなだれる。
雨が降れば中庭でランチが出来ない。だから冬馬とも会えない。
しかし、か細い声でそう答えた桃乃にはある予感がしていた。
それは“　雨が降っているから　”　という天候条件ではなく、今日がもし晴れていたとしても、冬馬はたぶん中庭に来てはくれないだろう、という哀しい予感だった。
「そっか今日は無理か……」

衍人は車内に充満している重苦しい空気を拡散させるように大きく息を吐き出す。
「でも考えてみれば今日会えなくて逆に良かったかもしれないな。ね、桃乃ちゃん、ちょっと俺個人の意見を聞いてくれるかい？」
桃乃が小さく頷いたのを見た衍人はハンドルから手を離す。
「あのさ、二、三日くらい冬馬をこのままそっとしておかない？あいつもかなり頭に血が上ってたから少し冷却期間を与えてやった方がいいような気がするん…」
「嫌っ！　私っ、早く冬馬に謝りたいっ！」
最後まで聞かず、桃乃は衍人の提案を激しく拒絶する。
「……そうだよね、桃乃ちゃんはそれじゃ納得できないよね。分かるよ……」
一応提案はしてみたものの、返ってくる拒否反応を察していた衍人は優しい眼差しで力なく笑った。そして意を決したように言う。
「桃乃ちゃん、今晩、家（うち）においで」
「今晩……？」
「うん。カノンってもうすぐ期末考査なんだろ？　冬馬も最近六時くらいに帰ってきているからさ、それぐらいの時間においで。あいつと話が出来るように俺が上手く場を作るよ」
「ホント！？」
「うん。俺、今日は夜にバイトがあるからずっと同席は出来ないけど、下に母さん達がいるから荒れる事にはならないと思うし……」
桃乃の顔に明るさが戻った。

今夜冬馬に会える――。
その喜びで不安の大部分が消し飛んでゆく。

「本当にごめん、桃乃ちゃん」
真顔で桁人が謝罪する。
「全部俺の責任だ。この償いはきっとするからね」
「ううん、桁兄ィだけのせいじゃないよ……」
桃乃は小さくかぶりを振った。
「送ってくれてありがと。今日六時に絶対に行くから」
「うん、待ってるよ」

しかし持ち直した感情もほんの一時だけだった。
桁人の車を降り、正門へ向かう間に後悔の念が再び湧き起こりはじめる。
傘の先から次々に落ちる雨だれと傘の表面を震わす雨音が、より一層気分を重くさせていた。

戻れるものなら昨日の夜にすぐにでも戻りたい――。

心の底から強くそう思う。
そして冬馬の事を信じられずに一方的に責めた、昨夜の自分を消し去りたかった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4883x/

トライアングル・スクランブル

2012年1月11日06時56分発行